

学生便覧・講義概要

Annual Bulletin
2018

芸術科／専攻科

音楽専攻

演劇専攻

Toho Gakuen College of Drama and Music

桐朋学園芸術短期大学

便 覧	
2018行事予定	1
桐朋学園芸術短期大学の沿革	4
学校法人桐朋学園の機構	4
建学の精神・教育目標	5
1. 建学の精神・教育目的	5
2. 音楽専攻の教育	5
3. 演劇専攻の教育	7
I. 教育課程	10
1. 教育課程	10
2. 単位	10
3. 学修の評価	10
4. 卒業の要件	11
5. 履修登録から単位認定まで	11
6. 教育職員免許状「音楽」の取得について	17
7. 長期履修制度（芸術科音楽専攻）について	19
8. 科目等履修生について	19
9. 研究生について	20
10. 海外研修旅行について	20
11. 学生による授業評価について	21
II. 学生生活全般	22
1. 学生生活	22
2. 課外活動	25
3. 証明書・諸届	26
4. 学費	28
5. 福利厚生	28
6. 学内諸施設, 機関の案内	33
7. 学園生活の安全と環境の向上のために	37
III. 卒業後の進路について	38
1. 企業への就職について	38
2. 進学・編入学について	38
3. 音楽専攻 卒業後の進路について	39
4. 演劇専攻 卒業後の進路について	39
IV. 学則・諸規則	40
桐朋学園芸術短期大学学則	40
学位規程	47
桐朋学園芸術短期大学学生懲戒規程	48
図書館利用規程（抄）	49
科目等履修生規程	50
科目等履修生（高大連携）規程	51
単位互換履修生規程	52
音楽専攻研究生規程（科目等履修生に準ずる）	53
演劇専攻研究生規程（科目等履修生に準ずる）	54
学外発表・出演, および学内演奏会関連規則	54
学費の滞納・延納の処理に関する手続について	55
桐朋演劇奨学会規程	56

桐朋音楽奨学会規程	57
桐朋学園芸術短期大学専攻科特待生規程	58
桐朋学園芸術短期大学被災学生支援奨学金規程	58
校舎施設の使用について	59
学校法人桐朋学園 個人情報保護方針	62
桐朋学園芸術短期大学 学生個人情報保護規程	63
桐朋学園芸術短期大学 セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程	66
演劇専攻自治会 自治会規約	67
音楽専攻学生会 学生会会則	70
音楽専攻同窓会「桐の音」 同窓会会則	72
演劇専攻同窓会 同窓会会則	74

概 要

2018年度入学生

芸術科：教育課程・卒業の要件	77
本学における中学校教諭2種免許状取得の要件	85
専攻科：教育課程・修了の要件	87

2017年度入学生

芸術科：教育課程・卒業の要件	113
専攻科：教育課程・修了の要件	121

短大事務分掌表	269
2018年度 図書館スケジュール	270
仙川キャンパス校舎配置図	271
短大校舎教室配置図	272
非常時の行動要領	275
台風・大雪等の悪天候による 交通機関の乱れ, また大地震における対応	275
学園歌	276

Toho Gakuen College of Drama and Music

学生便覧

芸術科／専攻科

音楽専攻
演劇専攻

4 月				5 月					
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	日				1	火			
2	月				2	水			
3	火	入学式			3	木	憲法記念日		演劇セミナー
4	水	ガイダンス			4	金	みどりの日		↓
5	木	健康診断・マナー講座			5	土	こどもの日		↓
6	金	↑ 前期授業開講			6	日			
7	土	履修登録期間			7	月			
8	日				8	火			
9	月				9	水			
10	火				10	木			
11	水				11	金			
12	木				12	土			
13	金				13	日	オープンキャンパス		
14	土		新入生歓迎行事	新入生歓迎行事	14	月			
15	日				15	火			
16	月				16	水			
17	火				17	木			
18	水				18	金			
19	木				19	土			【演1・演2】午後 小劇場で仕込みパラス事前学習
20	金				20	日			
21	土				21	月			
22	日			小劇場・ライブスタジ 補助ガイダンス	22	火			
23	月			専攻科WS	23	水			
24	火			↓	24	木			
25	水				25	金			
26	木				26	土			俳優育成システム研究会
27	金				27	日			舞台監督実習
28	土			↓	28	月			
29	日	昭和の日			29	火			
30	月	通常授業日(振替休日)			30	水			
					31	木			

6 月				7 月					
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	金				1	日			演技発表会
2	土				2	月			
3	日				3	火			
4	月			オープンクラス	4	水			
5	火			↓	5	木			
6	水		特別演習		6	金		実技試験(弦)	
7	木				7	土		(Pf・日)	実技公開試験
8	金				8	日		↓ (V・管・Gu)	↓
9	土			↓	9	月			
10	日				10	火			
11	月				11	水			伴奏合わせ
12	火				12	木			
13	水				13	金			
14	木				14	土			入学志望者のためのWS
15	金				15	日		夏期講習	↓
16	土				16	月	海の日	↓	↓
17	日				17	火			
18	月				18	水			
19	火			【専演】試演会A	19	木	レポート提出		伴奏合わせ
20	水				20	金	↓		
21	木				21	土		大掃除	
22	金				22	日		定演オーディション	
23	土	オープンキャンパス		俳優育成	23	月			
24	日				24	火	木曜授業 前期授業終講		
25	月			↓	25	水			個人歌唱試験
26	火				26	木			
27	水				27	金			
28	木				28	土			指導者WS
29	金				29	日			↓
30	土			演技発表会	30	月			
					31	火			

8 月				9 月					
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	水				1	土		海外研修	
2	木				2	日			
3	金				3	月			
4	土				4	火	集中講義・補講・試験期間		
5	日				5	水			
6	月			俳優育成システム	6	木			
7	火				7	金			
8	水				8	土			
9	木				9	日			
10	金				10	月			
11	土	山の日			11	火			
12	日	↑ 学校閉鎖 ↓			12	水			
13	月				13	木			
14	火				14	金			
15	水				15	土			
16	木				16	日			
17	金			17	月	敬老の日	AOI期入試		
18	土			18	火				
19	日			19	水				
20	月			20	木				
21	火			21	金			桐朋祭(準備・前夜祭) ↓	
22	水			22	土			桐朋祭	
23	木			23	日	秋分の日		桐朋祭	
24	金			24	月	振替休日		桐朋祭(片付け)	
25	土			25	火	↑ 後期授業開講			
26	日	オープンキャンパス		26	水	履修登録期間			
27	月			27	木				
28	火			28	金				
29	水		海外研修	29	土				
30	木			30	日				
31	金								

10 月				11 月					
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	月	↓ 通常授業日(都民の日)			1	木			
2	火				2	金			
3	水				3	土	通常授業日(文化の日)		推薦入試
4	木				4	日			
5	金				5	月		オープンクラス	
6	土	オープンキャンパス	学内演奏会		6	火			【演2】試演会S
7	日		日本音楽演奏会		7	水			
8	月	通常授業日(体育の日)			8	木			
9	火				9	金			
10	水				10	土			
11	木				11	日			
12	金				12	月			
13	土				13	火			【専演】試演会
14	日				14	水			
15	月				15	木		定期演奏会	
16	火				16	金			
17	水				17	土			俳優育成
18	木				18	日		推薦・社会人I期入試	
19	金		研究生演奏会		19	月			
20	土				20	火	通常授業日(創立記念日)		【演2】試演会M
21	日		AOII期入試	俳優育成	21	水		定期演奏会	
22	月				22	木			
23	火				23	金	通常授業日(勤労感謝の日)		
24	水				24	土			
25	木				25	日			オープンキャンパス
26	金		専攻科・研究生説明会		26	月			
27	土				27	火			
28	日				28	水			
29	月			専攻科・研究生説明会	29	木		特別講座	
30	火				30	金			
31	水								

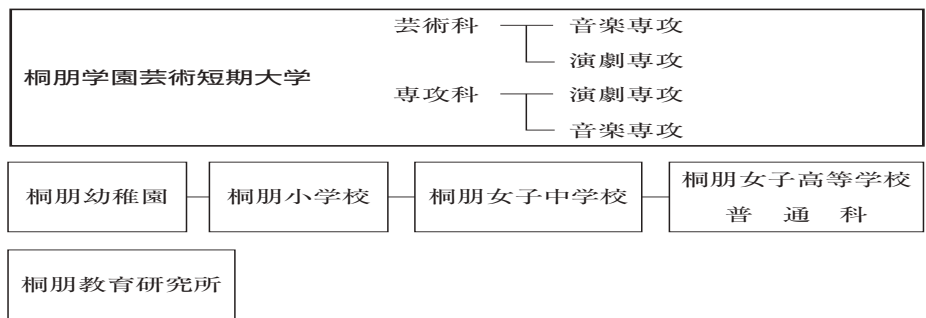
12 月					1 月				
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	土			【演1】演技発表会	1	火	元日		
2	日		オープンキャンパス	↓	2	水			
3	月		学内演奏会		3	木			
4	火				4	金	授業再開 月曜授業		
5	水				5	土			
6	木				6	日			
7	金		日独交流		7	月			
8	土		冬期講習	俳優育成	8	火			
9	日		↓		9	水			伴奏合わせ
10	月				10	木			
11	火				11	金			
12	水				12	土			
13	木				13	日			
14	金				14	月	成人の日		
15	土			専攻科I期入試	15	火			
16	日				16	水			
17	月	年内授業終了			17	木			
18	火		大掃除		18	金			伴奏合わせ
19	水				19	土			個人歌唱試験
20	木	↑集中講義 補講期間			20	日			
21	金				21	月			
22	土		AOⅢ期入試		22	火			【専演】修了公演
23	日	天皇誕生日			23	水	レポート提出		
24	月	振替休日			24	木	↓		
25	火				25	金	後期授業終講		
26	水				26	土		実技試験(Pf・日)	
27	木				27	日		↓(V・弦・Gu)	
28	金				28	月			
29	土	↑学校閉鎖			29	火		実技試験(管)	
30	日				30	水		↓(副科V)	↑試験後期
31	月				31	木		↓(副科Pf)	

2 月					3 月				
日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻	日	曜	共 通	音楽専攻	演劇専攻
1	金			↓	1	金			
2	土				2	土		日本音楽・ギター演奏会	一般入試
3	日		A入試・社会人Ⅱ期入試		3	日		オープンキャンパス	海外研修
4	月		研究生修了演奏会		4	月			
5	火		作曲発表会		5	火			
6	水				6	水			
7	木		【専音】学内演奏会		7	木			
8	金		↓		8	金			
9	土				9	土			
10	日				10	日			
11	月	建国記念の日			11	月			
12	火				12	火			
13	水				13	水			
14	木		卒業演奏会		14	木			専攻科Ⅱ期入試
15	金				15	金	卒業・修了式 教育職員免許状授与式		
16	土				16	土			
17	日				17	日	オープンキャンパス		
18	月			卒業公演①②	18	月			
19	火			↓	19	火			
20	水				20	水			
21	木			↑	21	木	春分の日	B入試・社会人Ⅲ期	
22	金				22	金			
23	土				23	土			
24	日				24	日			
25	月			↓	25	月			
26	火		オペラ実習		26	火			
27	水		↓		27	水			
28	木				28	木			
					29	金			
					30	土			
					31	日			

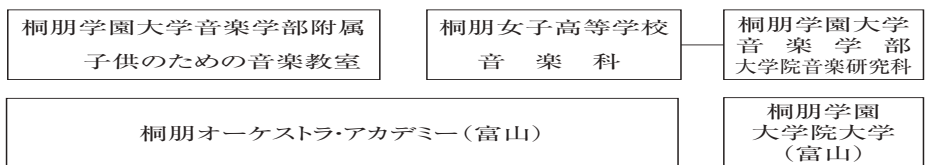
1940年	山下亀三郎氏の献金により財団法人山水育英会が設置され、本学設立の基礎がつけられた。
1941年 3月	山水育英会を母体として、本学所在地に山水高等女学校を設立する。(他に府下北多摩郡国立町168に山水中学校)
1947年 4月	終戦によって山水育英会は東京教育大学(当時は文理大・高師)に経営を移管、同大学に深い関係をもつ財団法人桐朋学園に改編される。
1948年 4月	新学制による桐朋女子高等学校(普通科)・同中学校が併置。
1951年 3月	私立学校法の施行に従って、財団は学校法人となる。
1952年 4月	高校に音楽科が付設される。
1955年 4月	短期大学音楽科ができ、一方普通科には小学校・幼稚園が設置される。
1961年 4月	音楽科に4年制大学(桐朋学園大学音楽学部)が設立される。
1964年 4月	桐朋学園大学短期大学部(文科・音楽科)が設立される。
1966年 4月	短期大学部の音楽科が廃止され、芸術科(音楽専攻・演劇専攻)として再編成される。
1968年 4月	専攻科演劇専攻が設置される。
1988年 4月	文科に日本文化・欧米文化の専攻課程を設置する。
1994年 4月	専攻科に音楽専攻、地域文化研究専攻を設置する。
2004年 4月	名称を桐朋学園芸術短期大学に変更し、芸術科に新たにステージ・クリエイト専攻を設置する。
2005年 9月	文科を廃止する。
2006年 3月	専攻科地域文化研究専攻を廃止する。
2006年 4月	専攻科にステージ・クリエイト専攻を設置する。
2014年 3月	芸術科ステージ・クリエイト専攻、専攻科ステージ・クリエイト専攻を廃止する。
2018年 4月	専攻科が独立行政法人大学評価・学位授与機構の認定を受ける。

学校法人 桐朋学園の機構

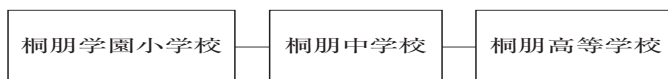
1 女子部門
(調布市)



2 音楽部門
(調布市・富山市)



3 男子部門
(国立市)



1 建学の精神・ 教育目的

桐朋学園の教育は、高名な哲学者であり、戦後日本の教育改革の担い手であった、東京文理科大学の務台理作学長（桐朋学園女子中・高等学校長）による教育理念「一人ひとりの人格を尊重し、自主性を養い個性を伸長する」に基づいており、本学はこれを建学の精神と定めている。また、教育目的を「教育基本法及び学校教育法の精神に従い、芸術文化の専門的な研究と教育とに取り組み、現代社会における芸術文化の創造と発展に寄与する人材の育成」とし、桐朋学園の特色である専門的な高等教育としての芸術教育を展開している。

2 音楽専攻の 教育

【芸術科音楽専攻】

芸術科音楽専攻は、音楽に関わる専門教育その他を通して、豊かな感性を培い、職業および人間形成に必要な能力の育成をめざしている。徹底した実技指導と、少人数クラス制のきめ細かな講義により、幅広い分野で活躍する人材を送り出すことを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 専門実技、音楽理論、ソルフェージュなどの演奏表現に必要な基礎を学び、知識を活用して作品の理解を深めることができる。(知識・理解)
- (2) 自ら課題を設定し、演奏表現の向上に向けて多面的に考察し、判断していくことができる。(思考・判断)
- (3) 社会における自分の存在意義、自己表現の意味を自覚して、積極的に創造活動を行うことができる。(関心・意欲)
- (4) 自らの音楽的な知識、経験をもって社会におけるニーズに応えることができる。(態度)
- (5) 演奏家、指導者としての基礎的な演奏技術と表現能力をもち、自分の想像した表現を実現することができる。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

芸術科音楽専攻は、幅広い教養と高度な専門性を兼ね備えた演奏家、指導者の育成と研究を目的とし、音楽芸術における演奏技術、表現の基本を体得することを目的としている。そのため、以下の三項目を軸として2年間の教育課程を組み、具体化していく。

(1) 楽譜を読み取る力

音楽理論、ソルフェージュ、音楽史などの基本を習得し楽譜に書かれていることを正確に読み取る力を養う。

(2) 演奏表現

個人レッスンを中心に、基礎的な演奏技術、表現力を身に付けるための実践的な力を養う。

(3) アンサンブル

古典から近代までクラシックを中心とした楽曲を学び、基礎的なアンサンブル能力を獲得する。

アドミッション・ポリシー

- (1) 専門実技、音楽理論についての知識と基礎的な理解力を有する者。(知識・理解)
- (2) 楽典、ソルフェージュ、和声理論などを体系的に学習し、積極的に学ぶ意

欲をもっている者。(思考・判断)

- (3) 音楽のみならず芸術一般に幅広い関心を持ち、入学後の勉学について明確な志向と熱意を有する者。(関心・意欲)
- (4) 他者と集団での創造活動をするための協調性があり、専門実技、アンサンブルなどに積極的に参加できる者。(態度)
- (5) プロフェッショナルな音楽家を目指し、その技能習得に要する基礎的な演奏技術と表現能力がある者。(技能・表現)

【専攻科音楽専攻】

専攻科音楽専攻は、学科の教育課程の上にならって、専門領域を体系的・系統的に学び、現在の高度化した音楽界の実情に対応できる知識と技術を獲得することを目的とする。

演奏家、指揮者を育成するとともに、音楽療法、アウトリーチの実践を通し、社会において教育、福祉等様々な分野で活躍し得る有為な人材を育成することを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 音楽を中心とした芸術全般の知識、音楽理論、歴史などを体系的に学び、豊かな人間性と社会を支えるための音楽的経験と教養を自ら広げ、深めることができる。(知識・理解)
- (2) 時代に即した演奏表現を獲得するとともに、同時代から求められている最先端の演奏表現などを取り入れることができる。(思考・判断)
- (3) 同時代における最先端の演奏表現、創造行為の動向に関心を払い、自らもそれに参入することができる。(関心・意欲)
- (4) 他者との協働に積極的に関わり、自らの音楽経験、知識を持って教育、福祉、文化活動など、社会的なニーズに応えると同時に、心豊かな社会の実現に向けた活動を実践することができる。(態度)
- (5) 演奏家、指導者としての確かな演奏技術と表現力を持ち、音楽による表現、創造活動の意義を社会に伝えることができる。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

専攻科は、芸術科音楽専攻の2年間の教育課程の上にならって、演奏家、指導者を育成するとともに、音楽療法、アウトリーチの実践を通し、社会において教育、福祉等様々な分野で活躍し得る有為な人材を育成することを目標としている。そのため以下の三項目を軸として2年間の専攻課程を組んで具体化していく。

(1) 音楽の理論と歴史

音楽を中心とした芸術の理論と歴史を発展的に学び、楽曲に込められた意味を体系的に分析する能力、また作曲された時代の歴史的背景を読み取り演奏に活かす力を養う。

(2) 演奏表現

個人レッスンを中心に、時代に即した演奏表現、技術力を身につける。

(3) アンサンブル

ジャンルにとらわれない多種多様なコラボレーションに柔軟に応じることができる能力を獲得する。

3 演劇専攻の教育

アドミッション・ポリシー

- (1) 専門実技、音楽理論における基礎的な知識と理解力があり、さらにそれを発展させようという意欲をもつ者。(知識・理解)
- (2) 演奏表現、音楽史などを多面的に考察し、積極的に学ぶ意欲をもつ者。(思考・判断)
- (3) 芸術のみならず社会の諸事情に関心を有し、音楽を通して社会に参加し、貢献する意欲をもつ者。(関心・意欲)
- (4) 専門実技、アンサンブルなどを通し他者と積極的に関わり、その中でも主体性をもって意欲的に学ぶ態度を有する者。(態度)
- (5) プロフェッショナルな演奏家、指導者を目指し、その技能習得に要する理解力と表現力を有する者。(技能・表現)

【芸術科演劇専攻】

演劇専攻は、幅広い教養と高度な専門性を兼ね備えた専門俳優の育成と研究を目的とし、演劇芸術における表現の基本を体得することを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 演劇を中心とした舞台芸術の理論と歴史を学び、知識を活用して作品の理解を深めることができる。(知識・理解)
- (2) 演劇、歌唱、舞踊等の表現手段を用いて、他者ととともに課題を解決することができる。(思考・判断)
- (3) 社会における自分の存在意義、自己表現の意味を自覚して、積極的に創造活動を行うことができる。(関心・意欲)
- (4) 集団の中で協働の役割をはたすことができ、演劇的な技術、知識をもって地域社会および国際社会のニーズに応えることができる。(態度)
- (5) 俳優、表現者としての基礎的な技能をもち、自分の想像した表現を実現することができる。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

芸術科演劇専攻は、幅広い教養と高度な専門性を兼ね備えた専門俳優の育成と研究を目的とし、舞台芸術における表現の基本を体得することを目標としている。そのため、以下の三項目を軸として2年間の教育課程を組み、具体化していく。

- (1) 戯曲を読み解く力
戯曲の読解力を養い、言葉を演劇作品にしていくための想像力を培う。
- (2) 身体訓練
声も含めた身体訓練を通して、自分の想像した表現を実現する力を身につける。
- (3) アンサンブル
アンサンブルに必要な優れたコミュニケーション能力と協働の精神を養う。

アドミッション・ポリシー

- (1) 専門俳優または表現者に必要な日本語の読解力がある者。(知識・理解)
- (2) 習得した知識・技能を活用し、課題に取り組むことができる者。(思考・判断)
- (3) 演劇のみならず芸術一般に幅広い関心をもち、入学後の勉学について明確な志向と熱意を有する者。(関心・意欲)

- (4) 基礎的なコミュニケーション能力と協調性があり、集団での創造活動に積極的に参加できる者。(態度)
- (5) 専門俳優または表現者（ミュージカル俳優、声優、ダンサー、パフォーマー等）を目指し、その技能習得に要する基礎的な身体能力と表現力を有する者。(技能・表現)

【専攻科演劇専攻】

専攻科演劇専攻は、学科の教育課程の上にならって、専門領域を体系的・系統的に学び、現在の多様化した演劇界の実情に対応できる知識と技術を獲得することを目的とする。

俳優、表現者を育成するとともに、国際交流や地域連携の活動を通じ、広く演劇分野で活躍し得る有為な人材を育成することを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 演劇を中心とした舞台芸術の理論、歴史などを発展的に学び、豊かな人間性と社会を支えるための演劇的経験と教養を自ら広げ、深めることができる。(知識・理解)
- (2) 自ら設定した課題を、理論や歴史を元に、演技、歌唱、舞踊、パフォーマンスなどの表現手段を用いて、他者との関わりを深めながら解決していくことができる。(思考・判断)
- (3) 社会における演劇、ひいては芸術の存在意義を考え、自らの表現活動を積極的に実践することができる。(関心・意欲)
- (4) 集団のなかで協働性をもち、進んでリーダーシップをとり、地域社会および国際社会のニーズに応じて、心豊かな社会の実現に向けた活動を実践することができる。(態度)
- (5) 専門俳優、表現者としての確かな技能と表現力をもち、演劇を中心とした舞台芸術の意義を社会に伝えることができる。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

専攻科演劇専攻は、芸術科演劇専攻の2年間の教育課程の上にならって、幅広い教養とより高度な専門性を兼ね備えた専門俳優および表現者の育成と研究を目的とし、舞台芸術における表現を発展的に体得することを目標としている。そのため、以下の三項目を軸として2年間の専攻課程を組んで具体化していく。

(1) 舞台芸術の理論と歴史

演劇を中心とした舞台芸術の理論と歴史を発展的に学び、広い視野にならって表現活動を行う力をつける。

(2) 劇作・演出・演劇教育

劇作、演出、演劇教育の理論を実践的に学び、舞台を構成する力を養う。

(3) 演技・実技

さまざまな演技メソッドと実技を体得し、それを舞台上の表現に発展させる力を養う。

アドミッション・ポリシー

- (1) 専門俳優または表現者としての基礎的な知識と経験を有しており、さらにそれを発展させる意欲をもつ者。(知識・理解)
- (2) 身体能力と知的好奇心を有し、自らの課題に取り組み、表現の創造に熱意

をもつ者。(思考・判断)

(3) 芸術のみならず社会の諸事情に関心を有し、演劇を通して社会に参加し、貢献する意欲をもつ者。(関心・意欲)

(4) 集団における創作能力があり、協調性と同時に独創性を有する者。(態度)

(5) 専門俳優または舞台芸術の表現者(劇作家、演出家、ミュージカル俳優、指導者等)を目指し、その技能習得に必要な理解力と表現力を有する者。(技能・表現)

1 教育課程

教育課程とは、本学の教育目標を達成するために、その教育内容を、必要単位数の設定および学修時期の適切な配置もふくめ、系統的にまとめたものである。

本学の教育課程は、教養科目と専攻科目によって構成されている。

教養科目は、各専攻の枠を越え、共通して必要となる基礎的知識や語学の習得を目的とした科目であり、3つの区分（キャリア教育、一般教養、語学）から成る。専攻科目は音楽、演劇各専攻の理念目的達成のために開講する専攻独自の科目である。それぞれの現場に直結した実践的な教育内容になっており、専門的内容をより深く学ぶことができる。

2 単位

- (1) 授業科目を通年または前・後期履修し、その試験等に合格した者には所定の単位を与える。
- (2) 1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、そのうち大学における授業時間数は、学則第33条に、講義・演習・実習・実技等について各々定められている。
- (3) 各授業科目の単位数は、『講義概要 別表』に記されている。
- (4) 各学期の履習登録単位数は半期20単位を上限とする（CAP制と呼ぶ、長期履修者は半期13単位を上限とする）。

3 学修の評価

- (1) 受験資格
出席が授業時数の3分の2に満たない場合および授業料を期限までに納入しない場合は、原則として受験資格を失う。
- (2) 成績の認定基準
成績は100点を最高とし、50点以上を認定、50点未満を不認定とする。また、試験を無断で欠席した場合は不認定とする。

(3) 評価の基準

学科成績	実技成績	評価
100 — 90	100 — 90	S
89 — 80	89 — 80	A
79 — 60	79 — 65	B
59 — 50	64 — 50	C
50未満	50未満	D

(4) GPA (Grade Point Average) について

本学では、GPA制度を学修指導等に活用する。学生が自らの学業成績の状況を的確に把握し、それに基づいて適切に履修計画を立て、主体的に学修を進めていくことを目的としている。

GPAはそれぞれの評価にGP(Grade Point)を与え、学生個々の履修科目のGPにその科目の単位数を乗じ、その合計を履修登録科目の総単位数で除することによって算出する。ただし、既修得単位・単位互換履修科目等の認定科目、教職に関する専門科目は算出の対象とならない。

GPA=(履修科目のGP×当該科目の単位数)の合計÷履修科目単位数の合計

評価	GP
S	4
A	3
B	2
C	1
D	0

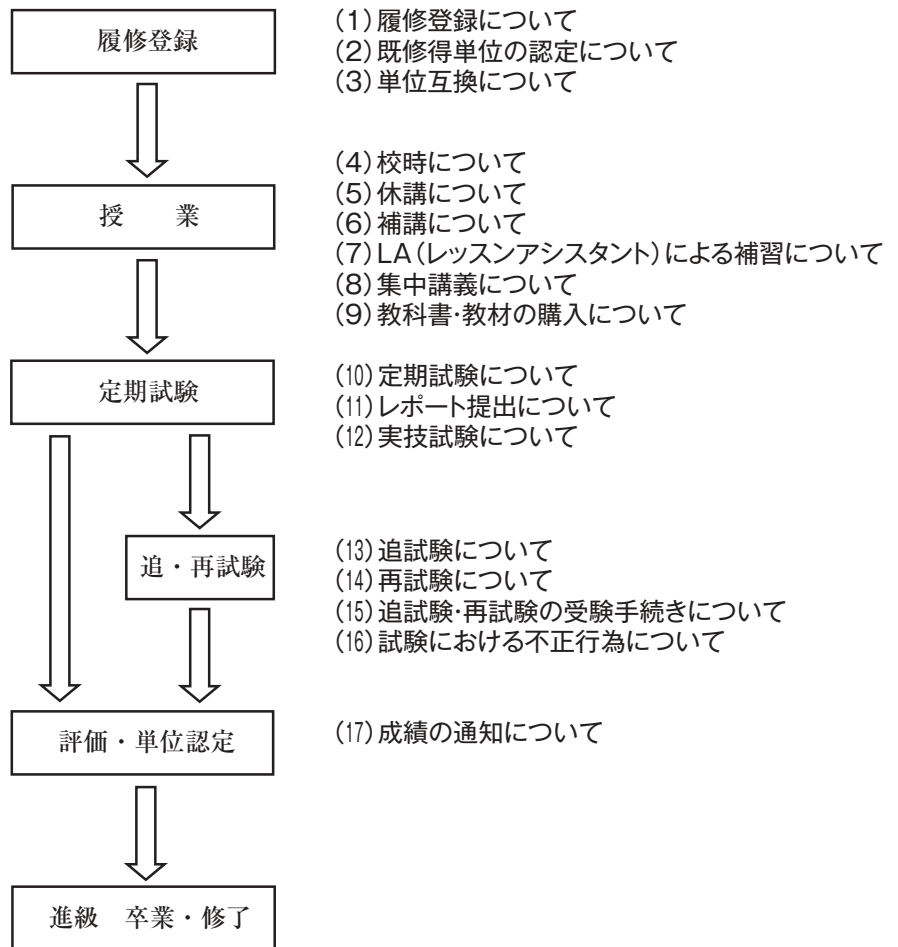
(5) 履修登録単位数の上限の緩和

GPAに基づき、優れた成績を修めた者については、履修登録単位の上限を一定数引き上げる。

4 卒業の要件

- (1) 本学を卒業するためには、2年以上在学し、学則第36条に定めるように62単位以上を修得しなければならない。
- (2) 本学を卒業するための最低修得単位数は、音楽専攻62単位、演劇専攻62単位であるが、履修条件は専攻によって異なる。(『講義概要』別表4「卒業の要件」参照)。

**5 履修登録から
単位認定まで**



(1) 履修登録について

①履修登録はマークシート用紙を使用して行う。

2018年度 履修科目登録票 (前期・後期) (〇で囲む)

履修科目登録用紙 ①



【記入上の注意】

①履修科目の登録用紙は、折り曲げたり、汚したりすると正しいデータが入力されないため、注意すること。

②マークの記入は、必ずH8の鉛筆を使用して、〇からはみ出さないよう丁寧に行うこと。

③マークの記入を訂正する場合は、プラスティックの消しゴムで完全に消すこと。

④履修科目登録用紙に記入する前に学生修業・日課表等をよく読んで履修計画を立てた上で決定すること。

良い例  悪い例 

学籍コード (学籍番号)		学科専 芸術科 ・ 専攻科 (〇で囲む)	
専攻 年 番		氏名	
生年月日 昭和・平成 年 月 日			

	1時限	2時限	3時限	4時限	5時限
月曜日	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
火曜日	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
水曜日	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
木曜日	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- ②「履修科目登録用紙」(マークシート用紙)は学籍番号、氏名、指定した科目コードを登録票に従って、「記入上の注意」をよく読みマークし、提出すること。えんぴつで記載し、同紙は汚さない・折らないこと。
- ③履修科目の「登録用紙」提出後、科目の追加、取消および変更は原則として認めない。また指定期日までに提出しなかった学生は受講資格が取り消される場合がある。登録までの期間が短いので、ガイダンスには必ず出席し、『講義概要』を参考に早めに履修計画を立てること。
- ④履修の上限は各学期20単位を基準として登録すること。(ただし集中講義および教職科目はのぞく)

⑤音楽専攻実技レッスン時間登録票について

音楽専攻の実技レッスンは、担当教員と個別に時間を設定するので前述の履修登録方法とは異なり、レッスン時間決定後、所定の用紙に記入をし、担当教員の確認印をもらい、4月の開講後2週間以内に教学課へ提出すること。

音楽専攻実技レッスン時間登録票		平成	年	月	日	
音楽1年1番						
きり		ともこ				
桐		朋子				
第一 実技	<input type="checkbox"/> ピアノ	<input type="checkbox"/> 声楽	<input type="checkbox"/> 管楽器	<input type="checkbox"/> 弦楽器	<input type="checkbox"/> ギター	<input type="checkbox"/> 日本音楽
	曜日 時 分～ 時 分 (時限)					
	担当教員名				確認印	<input type="checkbox"/>
第二 実技	<input type="checkbox"/> ピアノ	<input type="checkbox"/> 声楽	<input type="checkbox"/> ヴァイオリン	<input type="checkbox"/> ヴィオラ	<input type="checkbox"/> チェロ	
	曜日 時 分～ 時 分 (時限)					
	担当教員名				確認印	<input type="checkbox"/>
副科 実技	<input type="checkbox"/> ピアノ	<input type="checkbox"/> 声楽	<input type="checkbox"/> ヴァイオリン	<input type="checkbox"/> ヴィオラ	<input type="checkbox"/> チェロ	
	曜日 時 分～ 時 分 (時限)					
	担当教員名				確認印	<input type="checkbox"/>

上記票中の該当する□に○印をつけること、(時限)の欄にはレッスン時間が含まれる時限(「(4)校時について」参照)を記入すること。

なお第二実技の履修を希望する場合は上記時間登録票のほかに第二実技履修申込書を提出し、履修料を別途納入すること。

⑥演劇専攻の歌唱(個人レッスン)は、担当教員と個別に時間を設定するので前述の履修登録方法とは異なる。

所定の受講希望票に記入し、前期・後期の開講後1週間以内に演劇研究室へ提出すること。また、上記受講希望票のほかに教学課に履修申込書を提出し、履修料を別途納入すること。

(2)既修得単位の認定について

既修得単位とは、本学に入学する前に他の短大又は大学等において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む)をいう。これら入学前の既修得単位について、本学における授業科目の履修により修得したものとしてみなすことを既修得単位の認定という。(短期大学設置基準第16条)

本学では各専攻ごとに既修得単位の限度を決めている。いずれも、専攻科目を除き、音楽専攻14単位、演劇専攻12単位としている。

既修得単位の認定を希望する学生は、教学課にある所定の用紙に記入し、在籍した大学等の単位修得証明書あるいは成績証明書を添えて4月の開講後1週

間以内に提出すること。なお、この認定は1年次のみである。

※注 音楽専攻・専攻教養科目のうち、「音楽基礎演習－バロックダンス」「音楽理論基礎」は認定の対象とならない。

(3) 単位互換について

本学は、桐朋学園大学音楽学部と単位互換の制度を有している。音楽学部が開放している授業科目の履修に便宜を図り、一定の条件の下で、その授業科目の履修による取得単位を、本学における修得単位と同等に取り扱うことを行っている。科目や履修については別途連絡する。

なお、当単位もCAP制の対象となる。

(4) 校時について

本学の校時は年間を通して次のとおりである。

- 第Ⅰ時限 8:40～10:10
- 第Ⅱ時限 10:20～11:50
- 第Ⅲ時限 12:40～14:10
- 第Ⅳ時限 14:20～15:50
- 第Ⅴ時限 16:00～17:30

(5) 休講について

学校行事や授業担当者のやむを得ない事情により授業が行えない場合は掲示および本学ホームページで連絡する。

(6) 補講について

休講などによる、授業の未消化や授業時間数の不足を補うために前期、後期のそれぞれ決められた期間内に授業を行う場合がある。

補講を行う科目、期間内の日程などについてはそれぞれの期間の2週間前までに掲示で連絡する。

(7) LA（レスニアシスタント）による補習について

授業内容のさらなる充実・質の向上のため、LAによる補習を実施する。

今年度のLA補習対象科目は下記のとおり。

- ジャズダンスA
- ジャズダンスB
- ジャズダンスC
- ミュージカルトレーニング
- ミュージカル唱法

毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。LA補習はLAが指導、監督するのでその指示に従うこと。なお、LA補習への参加状況・受講態度も成績評価の材料となる。

(8) 集中講義について

授業科目によっては通常の週1回という形をとらずに前期、後期の決められた期間内に集中して授業を行うものがある。（『講義概要』参照）

期間内の日程などはそれぞれの期間の2週間前までに掲示で連絡する。

(9) 教科書・教材の購入について

①教科書の購入

『講義概要』に使用する教科書名が記載されている。購入については、研究室で購入できる場合と、指定書店において、学生が各自購入する場合とがある。購入についての指示は掲示をするので注意すること。

②演劇専攻で使用する袴、扇、シューズ等の購入

演劇専攻の学生は授業料と一緒に教材費を納入しているので、袴、狂言扇、日舞扇、タップシューズ、メイク道具一式、舞台製作の道具類等は本学で一斉に購入をしている。袴は「狂言」の授業時間に採寸し仕立てもらう。

(10) 定期試験について

定期試験は、原則として、前期・後期とも行事予定表に示された試験期間中に、通常授業と同じ時間帯（コマ）で実施する。

試験の有無、方法等については、試験期間の2週間前までに掲示発表するので、必ず確認すること。

なお、追試験・再試験については後述（13）、（14）を参照のこと。

不正行為が認められた場合は、厳正に対処し、懲戒を行うことがある。

(11) レポート提出について

筆記試験に替えて、レポート提出を課す科目については次のとおりとする。

①授業期間中に担当教員へ提出する場合

教員の指示した様式に従い、決められた期日に提出すること。

②指定期日に教学課へ提出する場合

教員に指示された用紙を使用する。必要事項を記入した「レポート提出票」を上につけ、ホチキスで綴じて提出する。（「レポート提出票」は教学課に用意してある。ホチキスは縦書きの場合、原則として右側を2ヶ所、横書きは上部を2ヶ所で留めること。）

提出の際、レポートと引換えに、教学課受領印を押した「レポート提出票（本人控）」が手渡されるので各自保管すること。

剽窃（他人の文章を盗用すること）が認められた場合は、厳正に対処し、懲戒を行うことがある。

郵送や宅配便での提出は、教員あて教学課あてを問わず一切認めない。また、提出期限に遅れた学生については、担当教員の了解を得られた場合のみ、追試験手続きの上、提出を認める場合がある。

提出されたレポートは原則として返還しないので必要があればコピーをしておくこと。

(12) 実技試験について

音楽専攻の実技試験については、試験期間とは別の日程（『行事予定表』参照）で実施する。詳細については適宜掲示で指示する。なお試験に先立って「レッスン受講票」の提出を求めるが、指定期間内に提出しなかった学生は追試験扱いとする。また、同受講票を紛失し、再発行する場合は2,000円を徴収する。

演劇専攻の実技試験は、特に指定のない限り試験期間中の通常のコマで行う。

歌唱の個人レッスンの試験は、試験期間とは別の日程で実施することがある。詳細については適宜掲示で指示する。

なお、歌唱の個人レッスンについては、試験に先立って「レッスン受講票」の提出を求めるが、指定期間内に提出しなかった学生は追試験扱いとする。

また、「レッスン受講票」に改ざんが認められた場合は、懲戒等厳正な対処を行う。

(13) 追試験について

病気その他やむを得ない理由で定期試験を受けられなかったり、レポートを提出できなかった場合は担当教員が許可した場合について追試験を受けることができる。その日時は教員が指定する。学生からの日時変更希望は一切受け付けない。

(14) 再試験について

定期試験の結果不認定となった科目について、担当教員の許可した場合のみ、再度試験を行う。

再試験での認定の評価は「C」とする。

(15) 追試験・再試験の受験手続きについて

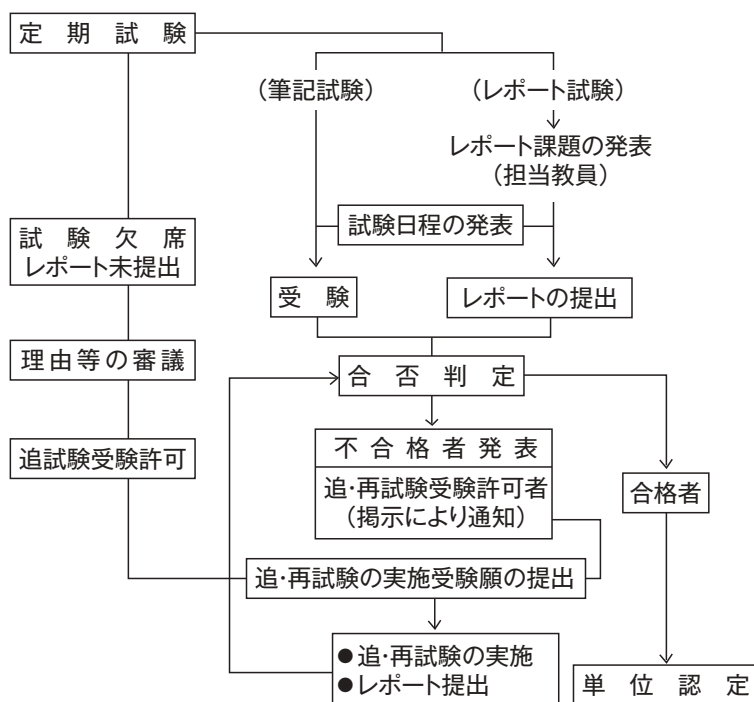
教学課で「追・再試験願」と「受験手数料の納入用紙」を受け取り、必要事項を記入し、追試験・再試験手数料（1科目2,000円）を納入する。

(16) 試験における不正行為について

試験で不正行為が認められた場合、当該学期の当該科目の単位は不認定とする。また、学生の本分に反する行為として懲戒等厳正な対処を行うものとする。

(17) 成績の通知について

前期成績表は後期開講時に教学課で配付する（ただし9月に行われる集中講義の成績は除く）。1年終了時の成績表は2年次前期開講時に、卒業・修了時の成績表は卒業・修了式に配付する。



6 教育職員免許状「音楽」の取得について

- (1) 音楽専攻では、一定の条件のもとに教科に関する科目および教職に関する科目等を履修して必要単位を修得することにより中学校教諭二種免許状（音楽）を取得することができる。
- (2) 免許状の取得を希望する者は、卒業要件を充たした上で、教職に関する科目24単位以上、教科に関する科目24単位以上、および専攻教養科目を修得しなければならない。これは、「教育職員免許法施行規則」に定める基礎資格および授業科目・単位数に基づいて本学が定めたものである。（『講義概要』別表7参照）

〈参考〉「教育職員免許法施行規則」に定める基礎資格および教科に関する科目と最低修得単位数、教職に関する科目と最低修得単位数は次の通りである。

A. 基礎資格

大学に2年以上在学し、62単位以上を修得すること（本学所定の課程を修了していること）。

B. 教科に関する科目（音楽）及び最低修得単位数

• ソルフェージュ	1 単位
• 声 楽（合唱及び日本の伝統的歌唱を含む）	1 単位
• 器 楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）	1 単位
• 指揮法	1 単位
• 音楽理論・作曲法（編曲法を含む）及び音楽史 （日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）	1 単位
	計10単位以上

C. 教職に関する科目及び最低修得単位数

• 教職の意義等に関する科目	2 単位
• 教育の基礎理論に関する科目	4 単位
• 教育課程及び指導法に関する科目	4 単位
• 生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目	4 単位
• 総合演習（2009年度以前入学生のみ）	2 単位
• 教職実践演習（2010年度以降入学生のみ）	2 単位
• 教育実習（事前および事後の指導）	5 単位
• 教育実習	
	計21単位

D. 教科又は教職に関する科目

計4 単位

- (3) 免許状を取得するには、1年次より2年次にかけて履修する「教育実習」をはじめ、集中講義による履修等の学習の負担が大きく、また、費用もかかるので、安易な気持ちでの教職課程の履修はすすめられない。下記の(6)「教育実習Ⅱ履修の条件について」(7)「教育実習Ⅱにかかわる出欠の取扱いについて」および(9)「受講料について」の項をよく読むこと。
- (4) 免許状は、本学在学中に、必要な資格・要件を充たした者について、所轄官庁に申請して取得することとなる。申請にかかわる事務は大学が一括して行うので連絡や指示をきちんと守ること。
- (5) 本学における中学校教諭2種免許状取得の要件は『講義概要別表7』のとおりである。

(6) 「教育実習Ⅱ」履修の条件について

「教育実習Ⅱ」を履修することのできる者は、次のとおりである。

- ①将来、教職に就くことに、確固とした意志がある者。
- ②第1年次に開設されている教職に関する科目・教科に関する科目の単位を修得した者。
- ③「音楽科教育法」の評価がB以上の者。なお、「第二実技（ピアノ）」「副科実技（ピアノ）」の評価がC以下の者は、教職委員会において不適格とする場合がある。
- ④当該年度中に、当該免許取得の要件の全てを充足し得る見込みのある者。
- ⑤教育実習に関するガイダンス・「教育実習Ⅰ」（事前指導）の全てに怠りなく出席した者。
- ⑥本学の指示する諸規則及び実習校・当該教育委員会の定める諸規定に違反した者、学業成績および修学態度等が著しく悪い者、介護等体験において教職履修の適格性欠如と判断される者については、教職委員会において不適格とする場合がある。
- ⑦教育実習に関する諸連絡、諸手続き等を定められた期間内に行わず、再度にわたり注意を受けた場合も、教職委員会において不適格とする場合がある。

(7) 「教育実習Ⅱ」にかかわる出欠の取扱いについて

「教育実習Ⅱ」にかかわる出欠の取扱いは、次の場合に限り公認欠課とする。

- ①指定された教育実習期間。
- ②実習校及び当該教育委員会より事前に招集を受けた日。
- ③健康診断について、日時、場所などが指定された場合。
- ④実習校が遠隔の場合は、教育実習期間の前後1日に限り、期間に加えることができる。

〔公認欠課の手続き〕

教学課において、所定の願書に必要事項を記入して受付印を受けた後、当該授業科目担当教員に提出する。

(8) 介護等体験について

1998年度入学生より、小学校及び中学校教諭の普通免許状の取得要件として「介護等体験」が義務づけられている。

介護等体験とは、18歳に達した後、7日間を下らない範囲内において盲学校、聾学校もしくは特別支援学校または社会福祉施設その他の施設において行う介護等の体験実習を指す。

なお、介護等体験期間にかかわる出欠の取扱いは公認欠課とする。手続きは前項の「教育実習Ⅱ」に準ずる。

(9) 受講料について

教職に関する科目を受講しようとする者は、受講願を教学課に提出し、受講料を納入すること。

また、介護等体験のうち、社会福祉施設での体験については実費を徴収する。(2017年度、東京都の施設の場合1日あたり2,052円、神奈川県の場合1日あたり2,057円、埼玉県の場合1日あたり1,600円、千葉県の場合1日あたり1,500円)

教科	音楽
教職に関する科目受講料	80,000円
介護等体験	10,260円 (東京都)
	10,285円 (神奈川県)
	8,000円 (埼玉県)
	7,500円 (千葉県)
教育実習を除いた科目受講料	45,000円

※2018年度の介護体験費用については改定される場合がある。

- (10) 教職課程受講者は、副科実技2科目を100,000円で受講できる。

7 長期履修制度 (芸術科音楽専攻)について

- (1) 長期履修制度とは芸術科音楽専攻の修業期間を3年間に延長して、2年間分の学費(一部別途徴収)で、計画的に学ぶことができる制度のことをいう。

専攻	標準 修業年限	長期履修制度	
		修業年限	在学年限
芸術科音楽専攻	2年	3年	4年

- (2) 対象者 入学時満22歳以上の者。
- (3) 申込手順
- ①入学後、「長期履修ガイダンス」に出席し、指定する期日までに「長期履修申込書」を提出すること。
 - ②担当教員のアドバイスを受けながら長期履修計画を作成し、履修登録を行う。
- (4) その他
- ①第一実技(主科実技)は、3年間レッスンを行うこととする。卒業試験は3年目修了時とする。なお、3年目の第一実技履修料は別途徴収する。また、副科実技・第二実技についても、3年間での選択のしかたによって、追加履修料がかかることがある。
 - ②原則として、在学中の修業年数の短縮・延長は認めない。
 - ③中学校教諭二種免許状(音楽)を取得することが可能である。
- ※教職課程には3～4週間の教育実習や、7日間の介護等体験が必要であるが、これらについては通常の修業期間で学ぶ他の学生と同様の扱いとなる。
- ※教育実習ⅠⅡについては、後半の2年間で行うことを条件とする。

8 科目等履修生 について

- (1) 科目等履修生とは、本学の学生以外の者で1つまたは複数の授業科目を履修する者のことをいう。(短期大学設置基準第17条)
- (2) 科目等履修生として本学の授業科目の履修を希望する者がある時は、学則第51条に基づき認められることがある。
- (3) 履修できる授業科目については、募集要項と一緒に配付する。
- (4) 詳しくは、P.50「科目等履修生規程」を参照すること。

9 研究生について

- (1) 研究生とは、本学専攻科音楽専攻及び専攻科演劇専攻を修了した者で、さらに専修実技等の授業科目を履修する者のことをいう。本学では科目等履修生に準ずる。
- (2) 詳しくは、P.53以降の「音楽専攻研究生規程」及び「演劇専攻研究生規程」を参照すること。

10 海外研修旅行について

(1) 音楽専攻

1999年度より始まった音楽専攻の海外研修旅行は、今年で18年目を迎える。この研修旅行は欧米の音楽大学等での実技レッスン研修を中心に据えたプログラムから成っている。

これまでに実施した研修機関は、米国ボストン大学芸術学部音楽科、英国トリニティ音楽大学（ロンドン）、ドイツ国立フライブルク音楽大学、リューベック音楽大学、ベルギー王立メッヘレン・カリヨン専門学校、ポーランド国立ショパン音楽アカデミー、そしてハンガリー国立リスト音楽院、ケチケメート・コダーイ音楽教育研究所、オーブダ民俗音楽学校である。以下は年度別の訪問国および研修機関等の一覧である。

実績年度	訪問国	研修機関	研修分野
1999年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/声楽
2000年度	ドイツ/フランス	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/声楽
2001年度	ハンガリー / オーストリア	国立リスト音楽アカデミー	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽
		国立コダーイ音楽教育研究所	コダーイ音楽教育システム入門
2002年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽
	アメリカ	ボストン大学芸術学部音楽科	フルート
2003年度	英国 / ベルギー / フランス	トリニティ音楽大学 (ロンドン)	声楽/ピアノ/室内楽/ヴァイオリン / ヴィオラ/フルート/クラリネット
		王立カリヨン専門学校 (メッヘレン, ベルギー)	カリヨン体験ワークショップ
2004年度	ハンガリー / スロヴァキア / オーストリア/チェコ	国立リスト音楽アカデミー	声楽/ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/チェロ
		国立オーブダ民俗音楽学校	マジャール伝統音楽ワークショップ
2005年度	ドイツ/イタリア	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽/その他 参加学生の専修ジャンルに配慮
2006年度	ポーランド / チェコ/ドイツ	国立ショパン音楽アカデミー	ピアノ/フルート/その他
			参加学生の専修ジャンルに配慮
2007年度	ハンガリー / ルーマニア	国立リスト音楽アカデミー 同アカデミー民俗音楽科	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他 / マジャール伝統音楽ワークショップ
2008年度	ドイツ/フランス	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2009年度	ポーランド/エストニア / ロシア/フィンランド	国立ショパン音楽アカデミー	ピアノ/フルート/その他
			参加学生の専修ジャンルに配慮
2010年度	ドイツ/オーストリア	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2011年度	チェコ/オーストリア / ハンガリー	ブラハ芸術アカデミー	声楽/ピアノ/ヴァイオリン / チェロ/その他
2012年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2013年度	ドイツ	リューベック音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他

実績年度	訪問国	研修機関	研修分野
2014年度	ハンガリー	リスト音楽院	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2015年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2016年度	チェコ	ブラハ芸術アカデミー	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/チェロ/その他
2017年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他

本場の風土に身を置き現地で経験豊かな教授陣のレッスンに接すること、加えてそこに学ぶ各国の学生との積極的な交流は、単に音楽研鑽という視点に留まらず、国際感覚を磨く上でも貴重な体験となっている。

さて今年度は、ハンガリー・ブタペストでの実技研修を中心に据えたプログラムを予定している。日々研鑽を積んでいる実技（ソロやアンサンブル）の研修を本場において体験し、深めることを目的としている。

本場ヨーロッパの風土に身を置き、現地で経験豊かな教授陣のレッスンに接することは、音楽専攻の学生にとって貴重な体験になるにちがいない。参加学生は「海外特別演習」（日程は掲示）を履修すること。グループ旅行ゆえ、団体行動への自覚が重要となるので、無断欠席、遅刻は認めない。場合によっては参加を取り消すこともある。

(2) 演劇専攻

演劇専攻の創設者の一人である故千田是也教授の日中演劇交流への貢献により、1982年に中国演劇研修旅行が実現して以来、演劇専攻では毎年10日間程度の日程で海外研修旅行を実施している。

研修では、演劇大学など相手国の演劇高等教育機関を訪問し、現地の学生とともに授業やワークショップに参加するなどして、体験を通じてその国の演劇の特色を理解している。近年、交流を行った機関としては、イギリスの王立演劇院(RADA)、ドイツのエルンスト・ブッシュ演劇学校、オーストラリアのNIDA(国立演劇大学)、北京の中央戯劇学院、ブルガリアのNATFA(国立演劇映画学院)ミラノのテアトロ・アルスナーレ、スイスのチューリッヒ芸術大学、カナダのルースムース・シアターなどがあげられる。本年度は、3月に実施する予定である。

また、近年、ITI-UNESCO(国際演劇協会)、GATS(世界演劇学校連盟)、ATEC(アジア演劇学校教育センター)、WTEA(世界演劇教育連盟)、APB(アジア太平洋支局)等が開催する演劇フェスティバルにも積極的に参加してきた。

本年度のプログラムの詳細については4月以降に発表する。

11 学生による 授業評価 について

本学では前期末・後期末に「学生による授業評価」を実施している。これは本学で開設されている授業に対して、学生がどのように評価しているかを、アンケートを行って把握していこうというものである。レッスンを除く開講科目を対象として行われる。

この「学生による授業評価」の目的は、学生から寄せられる、授業に関する率直な意見に耳を傾け、今後のより良い教育内容・教育方法・教育環境を、授業担当教員はもとより全学を挙げて作り出していこうというところにある。

学生からの回答に対しては、本学が委託した学外の専門業者が集計し、統計処理等を施す。そして授業担当教員と本学とが、それぞれに関わる情報を受領する。本学が受領した統計処理結果等については公表し、学生の閲覧にも供している。

1 学生生活

(1) 掲示について

必要な連絡・通知事項は掲示で行うので登下校時に必ず確認すること。よって、何かの提出物について、掲示を見ていなかったと言う理由で、提出を免除されたり、延期を認められたりすることはない。

なお、掲示内容は、原則として掲示してから1週間で全員に周知されたとみなす。

(2) オフィスアワー

授業科目等に関する学生の質問・相談に応じるための時間として、教員があらかじめ示す特定の時間帯（何曜日の何時から何時までなど）のことをオフィスアワーという。本学では、専任教員について年度当初に掲示にてその時間帯を伝える。その時間帯であれば、学生は基本的に予約なしで研究室を訪問することができる。

(3) 学内駐輪について

通学する際に徒歩以外は、電車・バス等の公共交通機関によることを原則としているが、やむを得ず自転車やオートバイで通学する場合は、次の条件で短大駐輪場（短大新館南側）の使用を認めている。

- ①「駐輪場使用許可願」を教学課に提出し、許可を受ける。
- ②「駐輪許可証」（ラベル）を発行するので、自転車やオートバイの見えやすい部分に貼る。
- ③「駐輪許可証」の効力は、申請年度の年度末までとする。（1年ごとに更新を必要とする）
- ④許可なく駐輪している場合は撤去、処分する。

(4) 個人ロッカーについて

本学は、学生に対して個人ロッカーを貸与している。各自の責任で清潔に使用すること。

- ①各専攻とも1人1ロッカーを貸与するので、鍵は各自で用意する。
- ②貴重品は楽屋等に置いたままにせず、ロッカーに鍵をかけ保管すること。各自で責任を持って管理すること。ロッカーに鍵をかけなかった場合の事故等には学校は一切の責任を負わない。
- ③ロッカーの上に物を置かない。
- ④卒業時は指定する期限（掲示にて連絡する）までに各自私物を整理し持ち帰ること。それ以後残っているものは廃棄処分する。

(5) 会議室の使用について

学生の休憩や談話のための場所として会議室がある。使用に当たっては次のことに注意すること。

- ①使用時間 8:15～21:30（休日・祝日および長期休暇中は閉鎖）
- ②飲食はできるが、片付けは各自が責任をもって行うこと。
- ③マナーを守って、皆が気持ち良く使用できるようにする。
- ④本学の会議・行事等で使用できない場合がある。

(6) 学内での飲食の場所について

学内での、飲食できる場所は次のとおりである。片付けは必ず行うこと。

- ①学生食堂（混雑時の11:00～13:00は持ち込み利用不可）
- ②2102教室（昼休時11:50～12:40のみ）
- ③会議室（利用方法は(5)参照）
- ④ロビーおよび各階フロアのテーブルが置いてある場所

(7) 環境の保持（施設・備品・ごみ等）について

- ①学園の施設・備品は大切に扱うこと。もし破損等した場合は、直ちに教学課に届け出ること。事情によっては弁償を請求することがある。
- ②教室の備品を移動して使用する場合は、教学課に「備品借用願」を提出して、許可を受けること。
- ③ごみは「可燃物」と「不燃物」（ビニール・プラスチック・発砲スチロール等）と「ビン・カン・ペットボトル」に分けて所定のごみ箱に捨て、学内の美化に努めること。

また、スプレー缶を捨てる場合は必ず、穴を開けてから捨てる。器具は旧館1階通路と新館地下1階にある。

(8) 喫煙・飲酒について

校舎内・外ともに指定の喫煙場所を除いて全面禁煙である。喫煙場所は新館2階テラスと新館外階段の灰皿の設置してある場所で、喫煙の際は火の始末等に十分注意すること。なお、学内での飲酒は禁止である。

(9) アパート等の斡旋について

本学ではアパート等の紹介、斡旋は行っていない。ただし、不動産業者からのパンフレット等は教学課窓口横にファイルしてある。

(10) アルバイトについて

本学ではアルバイトの斡旋は行っていない。ただし、企業等からの求人案内は進路相談室にある。

アルバイトは学業等に支障のない範囲で行い、求人企業、仕事の内容、給与等の勤務条件をよく確認し、トラブルのないよう十分注意すること。またアルバイトで何かおかしいと感じることがあったら、学生・安全対策委員会に報告すること。

(11) 落し物・忘れ物の取扱い

キャンパス内で落し物を拾得したときは、教学課窓口へ届け出ること。

また、落し物・忘れ物をしたときは、教学課窓口まで問い合わせること。

※持ち主が明らかな場合：呼び出し掲示・電話等で連絡する

持ち主不明の場合：届けられた日から6ヶ月間保管する

（教学課前のガラスケースに展示）

(12) セクシュアル・ハラスメント等の防止について

本学は、大学におけるセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントおよびその他のハラスメント（以下「セクシュアル・ハラスメント等」という。）を、学生・教職員一人ひとりの人権を侵害し、適切な教育環境の場を阻害するものとして捉え、これに対して厳しい姿勢で臨んでいる。

本学では、常勤・非常勤を問わず、本学に在職する教職員と学生との間、および本学の学生同士の間には、つねに教育環境上の関係があるものとみなす。よって大学におけるセクシュアル・ハラスメント等は、正課の授業時間中の大学構内における場合にとどまらず、課外活動や学外を含むあらゆる場合のそれを意味する。

①セクシュアル・ハラスメント等とは

(a) セクシュアル・ハラスメント

ア. 学生，教職員または関係者が，意図するか否かにかかわらず，性差別的または性的な言動によって，相手を不快にさせる行為

【例】 性的な噂を流したり，人を傷つける性的な内容の冗談を言ったりすること

性的な文書や画像等の掲示や提示をすること

相手が望まない飲食等にしつこく誘うこと

不必要に身体に触れること

イ. 学生，教職員または関係者が，利益もしくは不利益を与えることを利用して，または利益を与えることを代償として，相手に性的な誘いまたは要求をする行為

【例】 成績評価等と引き換えに，性的要求を迫ること

(b) アカデミック・ハラスメント

教育・研究の場において，教職員またはこれに準ずる者が，その地位または職務権限を利用し，これに抗し難い地位にある者に対して，相手によって差別したり，人格を否定したり，必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより，相手方の勉学・研究意欲や研究環境を害する言動または行為

(c) パワー・ハラスメント

職場において，教職員またはこれに準ずる者が，その地位または職務権限を利用し，これに抗し難い地位にある者に対して，相手によって差別したり，人格を否定したり，必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより，相手方の就労意欲や就労環境を害する言動または行為

(d) その他のハラスメント

学生，教職員または関係者が，他の学生，教職員または関係者に飲酒の強要，喫煙にまつわる不法行為，誹謗，中傷，風評の流布などにより人権を侵害したり不快にさせたりする行為

②セクシュアル・ハラスメント等を起こさないために

セクシュアル・ハラスメント等は，大学の構成員である教職員および学生の相互の人格の尊重と良識ある生活態度によって防止されるものである。

だれもがセクシュアル・ハラスメント等を受ける可能性があると同時に，だれもがセクシュアル・ハラスメント等を起こしうる可能性もあることを自覚し，日頃から，次のような姿勢を心がけることが重要である。

(a) 日常生活において男女間の対等な関係を形成すること

(b) いやなことははっきりと意思表示すること

(c) お互いに誤解を招かないように，よりよいコミュニケーションを心がけること

③被害にあったときの対処方法

実際に被害にあったときには、決してひとりで悩んだり、泣き寝入りしたりせず、以下の対処を心がけること。

- (a) 相手に、自分が「望んでいない、不快である」ことをはっきりと伝える
- (b) いつ、どこで、誰からどのようなことをされたかについての詳しい記録をとる
- (c) その場を目撃した人がいる場合は、その人にそのとき自分が何をされていたかについての確認をとっておく
- (d) 身近な信頼できる人に相談する
- (e) 学内の相談窓口等に申し出る

④被害を訴えた人への本学の対応

本学は、「セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程」に基づき、セクシュアル・ハラスメント等防止委員会および相談窓口を設置し、被害を訴えた人にとって不利益になることがないことを保証し、被害を訴えた人のプライバシーを最大限に尊重しつつ、可能なかぎり当該者が望むことへの手助けを行う。

防止委員会は、相談窓口寄せられる事例について、セクシュアル・ハラスメント等であるか否かの判断を行い（必要に応じて、別に調査委員会を組織することもある）、セクシュアル・ハラスメント等と判断した場合は、速やかに学長に報告し、その指示に基づき、関係部署と協議し、適切な措置を講ずる。

■2018年度 セクシュアル・ハラスメント等相談窓口

相談員は学生・安全対策委員が兼任する。

相談申込方法については、オフィスアワーに準拠する。

(13) インフルエンザ等・忌引について

インフルエンザ・麻疹・風疹・感染性胃腸炎等感染症であると診断された場合は、出席停止になる。完治後医師の指示に従い治癒証明書または医療機関等発行の証明書や診断書を取って研究室に提出すること。治癒証明書は本学のホームページ（保健室のページ）よりダウンロードすることができる。

授業、レッスンについては各担当者に個別に申し出ること。定期試験についても通常の追再試験手続きではなく別対応になる。

また、忌引はない。扱いについては各授業、レッスン担当者に個別に申し出ること。

2 課外活動

(1) 課外活動

- ① 学生が学内でクラブ、サークル等の団体を結成しようとする場合は、1ヵ月前までに「部活動設立申請書」（所定用紙）により、学長の許可を得なければならない。
- ② 学生関係の団体もしくはその他の学外団体の行事に参加する場合には、1週間前までに学生・安全対策委員会に『行事参加許可願』（様式任意）を提出し、許可を受ける。
- ③ クラブ活動等による上演は、桐朋祭等の学内発表に限る。
- ④ 学生が団体の行動する場合は事前に学生・安全対策委員会に願い出て許可

を受ける。

- ⑤学内にて掲示または印刷物の配布をするときは事前に学生・安全対策委員会に願い出て許可を受ける。
- ⑥クラブ活動等は授業のさまたげにならぬように注意する。

(2) 学外出演について

音楽専攻・演劇専攻の学生が、学外の演奏会や演劇等に出演する場合は、P.54以降の『学外演奏発表規則』『学外出演規則』に従って所定の手続きを行う。出演許可願の用紙は各研究室にある。

(3) 「桐朋祭」について

「桐朋祭」は各専攻学生会、自治会が中心となり、学生の日頃の授業成果の発表の場として、あるいは、研究発表の場として催されている。本年度は9月22日(土)・9月23日(日)の予定である。

参加を希望する学生及び団体は各学生会・自治会に企画書を提出する。以後、企画が進む中で企画代表者会議が開かれ必要事項が確認される。なお、以下について十分留意すること。

「桐朋祭」には、本学学生以外の一般の来訪者が多いので、安全対策には特に気を配る。

また、本学はあらゆる宗教的・政治的諸団体の学内における諸活動（情宣や勧誘など）は一切認めていない。

本学の備品を使用する場合には、「備品借用願」、火気を使用する場合には、「火気使用願」、模擬店を出す場合には、多摩府中保健所に「行事開催届」を提出する必要がある。学園は、調布消防署に「催物の開催届出書」を提出する。

企画で外部者を要請する場合は、「外部出演者等の届」を提出し、保険加入を行う。

備品借用願・火気使用願等の提出書類は教学課にある。

3 証明書・諸届

(1) 学生証（IDカード）について

学生証は在学期間中有効のものが入学時に交付されるので、現住所・通学区間の欄を記入し、写真を貼付してすみやかに教学課で契印を受ける。学生証は通学時等、常に携行し、卒業、退学等で学籍がなくなった場合は直ちに返納する。もし、紛失した時は、直ちに教学課に届け出て再交付を受けること。

次のような場合、提示を求められることがある。

- 教室使用の申込みをする時
- 定期試験を受ける時
- 通学定期券を購入する時
- 学生旅客割引証（学割証）を使用する時
- 成績表を受け取る時
- その他

また、学生証はIDカードとしても使用している。本学園は保安対策の一環として、身分を判別できるように学生および教職員にはIDカードの着用が義務付けられている。登校した時は必ず着用すること。

(2) 諸届・諸願、証明書の発行について

長期欠席や休学または退学をする場合は事前に専攻主任と相談の上、書類等を提出する。

①諸届

(a) 住所変更届

住所を変更した場合、学生証を添えて教学課へ提出する。

(b) 改姓届

改姓した場合、住民票の抄本と学生証を添えて教学課へ提出する。

(c) 保証人（住所）変更届

保証人に変更があった場合、または保証人の住所に変更があった場合、教学課へ提出する。

(d) 公認欠課届

教育実習・介護等体験の時、教学課へ提出する。

(e) 欠席届（様式任意）

長期にわたる欠席が予想される場合には、必要に応じて欠席届を教学課へ提出する。病気による欠席の場合には診断書を添える。

②諸願

(a) 退学願

事前に専攻主任に相談の上、教学課へ提出する。

(b) 休学願

病気による場合は、診断書を添えて教学課へ提出する。

(c) 復学願

病気による休学から復学する場合には、診断書を添えて教学課へ提出する。

なお、上記の願書は学長の許可を受けた後、その旨、本人及び保証人あてに通知する。

③証明書の発行

各証明書等の発行を必要とする場合は、教学課に交付願を提出し、手数料を納入、原則2日後（英文は6日後）に交付願控を提示して受け取る。

長期休業中は受渡し日時を掲示で別に連絡する。

なお、手数料は上記のとおりである。

④通学定期券・学生割引について

(a) 通学定期券について

通学定期券を購入する時は、電車・バスなどの駅等に備えつけの定期券購入申込書に学生証を添えて購入する。

なお、新生は学生証に写真の貼付・契印がなくても4月中は購入できる。

(b) 学生割引について

鉄道などを利用して101km以上を移動する場合、学割証を使用すると運賃の一部が割引きされる。

学割証を必要とする時は教学課に学生証提示の上、交付願を提出し、2日後に交付願控と引き換えに受け取る。なお、学割証の交付枚数は、原則として一人年間10枚である。

	証明書種類	金額
1	成績証明書	400円
2	成績証明書（英文）	1,000円
3	卒業証明書	200円
4	卒業証明書（英文）	600円
5	卒業見込証明書	200円
6	在学証明書（在籍証明書）	200円
7	在学証明書（在籍証明書）（英文）	600円
8	推薦書	400円
9	人物考査書・人物証明書・身上調査書	400円
10	人物考査書・人物証明書・身上調査書（英文）	1,000円
11	学生証（身分証明書）再発行	2,000円
12	単位修得証明書	400円
13	単位修得見込証明書	400円
14	学力に関する証明書	400円
15	教員免許状取得見込証明書	200円
16	健康診断書	400円

長期休業中は受渡し日時を掲示で別に連絡する。
※証明書等を申し込み後3カ月以上、受け取りに来ない場合は、無効とし廃棄する。

4 学費

(1) 学費について

- ①授業料等は、学則第45条に定められた期間に納入すること。
 - 前期は4月16日より4月30日まで（新入学生は入学手続日）
 - 後期は9月16日より9月30日まで
- ②施設維持費、学生諸料、各専攻の演習費・実習費は授業料に準じて、年2期に分けて納入する。
- ③納入方法は、前もって保証人に郵送される本学園指定の振込用紙による銀行振込とする。
- ④事情により、納入期限を延ばしたい場合（延納）は期日までに所定の願書を教学課へ提出すること。
詳細はP.55『学費の滞納・延納の処理に関する手続きについて』による。

5 福利厚生

(1) 奨学金・教育ローン

①奨学金

学生生活を経済的に援助するものとして、各種の奨学金制度がある。

個々の奨学金制度には趣旨、選考基準、金額、返還の有無などに違いがあるので、希望者はそれぞれの特徴をよく理解したうえで申し込むこと。

なお、奨学金のうち「貸与」は卒業後返還が必要な奨学金、「給付」は返還の必要がない奨学金である。

(a) 日本学生支援機構の奨学金

日本学生支援機構 第一種奨学金（無利子貸与）・第二種奨学金（有利子貸与）

日本学生支援機構（略称JASSO）は、教育の機会均等に寄与するために修学の援助を行い、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成を目的に設立された独立行政法人である。

奨学金は、経済的理由により修学に困難がある、優れた学生を対象としており、無利子で貸与される「第一種奨学金」と、有利子で貸与される「第二種奨学金」の2種類がある。

貸与額：第一種 自宅通学／月額

20,000円 30,000円 40,000円 53,000円

自宅外通学／月額

20,000円 30,000円 40,000円 50,000円 60,000円

第二種 20,000円 30,000円 40,000円 50,000円 60,000円

70,000円 80,000円 90,000円 100,000円 110,000円

120,000円から希望月額を選択

募集時期：第一種、第二種とも学内での説明会時に申込書類を配付し、その書類に基づき学内審査の後、機構に推薦する。

第一種、第二種とも年収・所得および学業成績に一定の基準がある。

説明会予定：4月上旬（日時・場所は学内に掲示）

※注1 貸与額は、2018年度以降変更される可能性がある。

※注2 上記の定期採用以外に「緊急採用（無利子貸与）」、「応急採用（有利子貸与）」があり、家計支持者が失職・破産・倒産・病気・死亡、または火災・風水害等により家計急変が生じ、緊急に奨学金が必要になった場合に申込みが可能。（但し、事由が発生したときから1年以内）

なお、2018年度入学生で予約採用候補者となっている者は「採用候補者決定通知（進学先提出用）」を入学後、すみやかに短大事務室（教学課）に提出すること。

(b) 本学独自の奨学金

桐朋演劇奨学会奨学金（給付）

演劇専攻には、有志の寄附金を財源に、成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とした奨学金制度が設けられている。（P.56『桐朋演劇奨学会規程』参照のこと）

対 象：芸術科演劇専攻2年次生および専攻科演劇専攻生

給 付 額：授業料の半額

募集人数：若干名

募集時期：年2回（前期、後期各1回）

※本年度の募集期間、提出書類等の詳細は決定次第学内に掲示する。

桐朋音楽奨学会奨学金（給付）

音楽専攻には、有志の寄附金を財源に、成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とした奨学金制度が設けられている。（P.57『桐朋音楽奨学会規程』参照のこと）

対 象：芸術科音楽専攻2年次生および専攻科音楽専攻生

給 付 額：半期授業料の半額

募集人数：若干名

募集時期：年2回（前期、後期各1回）

※本年度の募集期間、提出書類等の詳細は決定次第学内に掲示する。

被災学生支援奨学金（給付）

東日本大震災が原因で被災した学生に対して経済支援として奨学金を支給する。（P.58『桐朋学園芸術短期大学被災学生支援奨学金規程』参照のこと）

(c) 地方公共団体の奨学金

都道府県や市町村により、地元出身者・地元高等学校卒業者等を対象とした奨学金制度を設けているところがある。詳しくは、都道府県・市町村の教育委員会まで問い合わせること。

(d) 民間育英団体等の奨学金

本学学生の採用実績があるのは次の奨学金である。

福島育英会奨学金（給付）

財団法人福島育英会は、音楽関係大学生のうち、学業、人物ともに優秀かつ健康であって、経済的理由によって修学の困難の学生に奨学金を支給し、我が国音楽界の発展のために寄与する人材を育成するために設立された公益法人である。

対 象：東京都に居住する芸術科音楽専攻1年生

(収入・所得および学業成績について基準がある)

給付額：月額40,000円

募集人数：1名(学内審査の後、育英会に推薦する)

募集時期：9月頃

※2018年度新規募集については未定(給付額、募集人数は2017年度実績)
ホリプロ文化芸能財団奨学金(給付)

2018年度 月額30,000円(6ヵ月分ずつ年2回給付)

一般財団法人ホリプロ文化芸能財団は、株式会社ホリプロファウンダー最高顧問である堀威夫により平成26年4月に設立された。文化芸能の振興を担う人材を育成するため、映画・音楽・演劇・テレビ番組などのエンターテインメントの製作に携わるプロデューサーや、タレントを発掘・育成しマネージャーを志す学生を支援することを目的とした奨学金である。

対象：芸術科2年生

募集締切：2018年4月23日(月)

選考・採用方法：一次選考は課題作文(指定)、活動計画申請書(指定)等書類審査。二次選考は面接。

なお、以下の奨学制度については各個人が直接申込みを行う(募集開始期間含む)。詳細、応募方法は各団体のホームページ等で確認すること。

財団法人ヤマハ音楽振興会 音楽奨学支援(給付)

2018年度 月額100,000円

※2018年度の募集は終了している。2019年度の募集、詳細については、以下URL参照。

→ <http://www.yamaha-mf.or.jp/shien/shogaku/>

財団法人ロームミュージックファンデーション 奨学生(給付)

2018年度 月額最大300,000円

※2018年度の募集は終了している。2019年度の募集、詳細については、以下URL参照。

→ <http://www.rohm.co.jp/rmf/index.html>

②教育ローン

(a) 提携学費教育ローン

本学では、主な学費負担者となる保護者(保証人)の一時的な経済的負担軽減のため、簡単な手続きで利用できる学費の分納制度を、株式会社オリエントコーポレーション(以下、オリコ)、株式会社セディナ、楽天銀行会社の3社と提携し案内している。

これは、入学金・授業料・実習費・教材費などの納付金を提携会社が立て替え、申込者より毎月分割で口座振替により納付する制度である。

返済の利率は年3.7%(固定2018年3月現在)です。他、制度の概要、詳細については以下の各社ホームページ等でご確認ください。

○株式会社オリエントコーポレーション 学費サポートデスク

☎ 0120-517-325 営業時間 9:30～17:30(土日祝日を除く)

<http://www.orico.tv/gakuhi/beginner/>

○株式会社セディナ カスタマーセンター

☎ 0120-686-909 営業時間 9:30～17:30(土日祝日を除く)

http://www.cedyna.co.jp/moneylife/loan/gakushi_loan

○楽天銀行 カードセンター 教育ローン専用ダイヤル

☎ 0120-61-6910

受付時間 平日9:00～20:30 土日祝日10:00～17:30

<https://www.rakuten-bank.co.jp/loan/cardloan/education/>

(b) 国の教育ローン

入学・在学時にかかる諸費用を対象に、学生の保護者（保証人）が低利で融資を受けられる「国の教育ローン」制度がある。応募条件・手続詳細については、下記問い合わせ先にて確認すること。

取扱機関名：日本政策金融公庫

融資限度額：350万円以内

返済期間：15年以内（交通遺児家庭，母子家庭，父子家庭または世帯年収200万円（所得122万円）以内の方または子ども3人以上の世帯かつ世帯年収500万円（所得346万円）以内の方は18年以内）

金利：年1.76%，母子家庭，父子家庭または世帯年収200万円（所得122万円）以内の方または子ども3人以上の世帯かつ世帯年収500万円（所得346万円）以内の方は1.36%
（2017年11月10日現在）

問い合わせ先

教育ローンコールセンター TEL 0570-008656

日本政策金融公庫「国の教育ローン」HP

→ <http://www.jfc.go.jp/k/kyouiku/index.html>

(c) その他の教育ローン

銀行，信用金庫，信用組合，労働金庫，JAなどが取り扱う教育ローンについては，それぞれで融資限度額・利率・返済期間など融資条件が異なる。詳細については各金融機関に直接問い合わせること。

(2) 学生教育研究災害傷害保険制度について

本学は，教育研究活動中の不慮の災害事故補償のための「学生教育研究災害傷害保険」に芸術科・専攻科学生および研究生が加入している。

① 保険金が支払われる事故の範囲

被保険者が在籍する大学の教育研究活動中に被った急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害を被った場合に保険金が支払われる。事故発生時及び不明な点は保健室に申し出ること。

教育研究活動中とは次の場合

- (a) 正課中（講義，実験・実習，演習または実技による授業など）
（教職免許取得にかかる，教育実習，介護等体験など）
- (b) 学校行事中（入学式，オリエンテーション，卒業式など教育活動の一環としての各種学校行事）
- (c) (a) (b) 以外で学校施設内にいる間。
- (d) 学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間。

②保険金の種類など（2018年度）

担保範囲	死亡保険金	後遺障害保険金	医療保険金	入院加算金
・正課中 ・学校行事中	2,000万円	120万円～3,000万円	治療日数 1日以上が対象 3,000円～300,000円	1日につき 4,000円 (180日を限度)
・通学中 ・学校施設等 相互間の移動中	1,000万円	60万円～1,500万円	治療日数 4日以上が対象 6,000円～300,000円	
・上記以外の学校 施設にいる間 ・課外活動中			治療日数 14日以上が対象 30,000～300,000円	

※保険金が支払われない場合（例：故意、疫病など）もある。

※保険料は本学が負担する。

③学研災付帯賠償責任保険について

本学では、国内外において、学生が、正課・学校行事・教育実習等での課外活動及びその往復中で、他人にケガをさせたり、他人の財物を損壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償するための「学研災付帯賠償責任保険」に芸術科・専攻科学生および研究生が加入している。この保険で対象となる事故が発生した場合には、直ちに保険会社に連絡し、保健室へも事故についての報告をすること。

詳細については、「学研災付帯賠償責任保険加入者のしおり」を参照すること。

④学研災付帯学生生活総合保険について

本学では、学生教育災害傷害保険に全員加入しているが、さらに任意で補償を拡大した保険に加入することができる。

4月に配布されるパンフレットを参照の上、申し込み希望者は、直接パンフレットに記載されている取り扱い代理店に問い合わせること。

(3) 学生食堂・購買部等の利用案内

①学生食堂

○営業時間 平日 11:00～17:00（土曜～14:00）

なお、学生食堂（ホール）は8:00～21:00の間（日曜を除く）開いているので、営業時間以外も談話等で利用ができる。ただし、厨房への立ち入りや食堂備品の使用、また、楽器演奏、演劇・ダンス等の稽古、携帯電話等の充電は厳禁である。利用後はごみの片付けや整理・整頓に心がけること。

○場 所 短大旧館地下（170席）

○電子レンジの利用について

利用可能な時間帯は、平日11:00～13:00を除く時間とする。（食堂の繁忙時間を避けるため）

各自責任をもって大事に取り扱うこと。

電子レンジに関する質問や意見は、食堂ではなく教学課に申し出ること。

②購買部

○営業時間 平日 8:05～15:30（13:00～14:00昼休み）

○場 所 短大正面向かい校舎（本館）1階

○販売品目 文房具を中心に、おにぎりも扱っている。なお、おにぎりは

午前10時までに予約が必要。

※購買部の隣で、パン、飲み物を平日、土曜日とも9:00～13:00まで販売

③コピー・サービス

- コピー機設置場所 短大旧館2階
- 利用方法 コインキットによる現金払い
- 利用料金 1枚10円 カラー50円
- コピー可能用紙サイズ B5・B4・A4・A3
- パソコンデータの印刷 USBメモリーを差し込み印刷することが可能である。
- その他 (a) 著作権に注意して複写のこと。
(b) 図書館の図書は、図書館で複写すること。
(c) 現金の両替は原則、教学課では行わない。
(d) 用紙の補給やトラブル等は教学課に申し出ること。

④パソコン利用

- パソコン設置場所・台数 短大旧館2階・4台
- 印刷 コピー機にUSBメモリーを差し込み印刷が可能。ただし、対応ソフトで作成したデータに限る。

※上記①学生食堂、②購買部は仙川キャンパス内各学校の共有・共用施設である。そのため学校行事等に関連して一部利用が制限される場合もあるので注意すること。

6 学内諸施設、 機関の案内

(1) 図書館

本学図書館は北館にあり、図書、雑誌、視聴覚資料（DVD・CD・ビデオなど）を所蔵している。資料は必要に応じ、規程に準じて借りることができる。辞書・事典類、雑誌の最新号、視聴覚資料などは館内のみでの利用となる。

学外者の利用はできないので、入館の際は、本学学生であることを示す図書館利用カード（学生証でも可）の提示を求めている。利用カードは入学時のガイダンスで、冊子「図書館利用案内」と共に配付する。利用カードがないと館外貸出が受けられないので、卒業時まで各自で保管すること。

なお卒業後も、館内利用（閲覧）は可能である。その際は、氏名の確認ができる物を持参のうえ来館すること。

その他、利用についての詳細は、P.49『図書館利用規程』や、配布される「図書館利用案内」を参照のこと。学習の場として、在学中に大いに活用してほしい。

なお本学学生は、桐朋学園大学附属図書館（短大旧館4階、調布キャンパス共）の利用が可能である。利用の際には、学生証を持参して利用登録を行うこと。

(2) 桐朋教育研究所について

桐朋教育研究所は、桐朋学園女子部門の教育活動がより一層円滑に、そして活性化するように、様々な方向から研究し、考察し、そして実践に向けて提言している機関である。教育がより幅と深みのあるものとなるためにも、教職員がより充実した研究・研修が出来るような環境を用意することにも知恵を絞っている。更に、社会の動向と切り離すことの出来ない教育の性格を考慮して、学園と社会との接点として、情報の集約及び発信にも心を砕いている。

以下、短大生に関係する教育研究所の活動を紹介する。

①学園機関誌「桐朋教育」の編集・発行

日々の学園の教育活動がどのように行われているのかを、本来の学園の教育理念とどのように結びつけたものなのか、という視点で検証しつつ、広く社会に紹介し、批判を求める。そのような場が、年一回刊行される「桐朋教育」である。特集記事、入学試験の実際、普段の活動の様子、卒業後の進路の状況、等の記事で構成されている。巻頭のグラビアページは、学園生活の様子がビジュアルで紹介され、生き生きとした光景が毎年見られる。

②「桐朋講座」の企画・運営

保護者や卒業生、卒業生の保護者、そして在校生などの学園関係者を対象に、各種の講座を開設し、運営に当たっている。外国語会話教室、趣味や教養など、30を超える講座が、セミナーハウスを拠点に、活発に活動している。学術的な色彩の強い内容の講座には、教員が受講しているケースも見られ、時間が許せば、短大生も受講することが可能である。

尚、受講に際しては所定の受講料金が必要である。

③学術資料の収集・管理

全国各地の大学や研究機関との間で、研究紀要の交換を行っている。従ってリアルタイムで各種の学術論文に触れることが出来る。学習や研究活動に有用なものも数多くあり、希望者には、閲覧や貸し出しも行っている。

④本学園関係の様々な資料の保存・管理

創立以来75年を超える本学園の歴史の証人とも言える各種資料（文書に限らず、写真やスライドなどの画像、映画やビデオなどの映像も含めて）が教育研究所に集約され、管理されている。調布市の歴史の編纂など、学園外からも貴重な資料として利用されている。

⑤教育研究所・セミナーハウスの開設時間は、

月曜日～金曜日 9:15～16:45

土曜日 9:15～16:00である。

（日曜日、祝祭日及び中高部の長期休業期間は閉鎖される。）

※桐朋教育研究所への問い合わせは、03(3300)2119へ

(3) 総合保健体育センター（含む保健室）について

①短大校舎の南側に、総合保健体育センターがあり、演技発表会の稽古等をここで行うことがある。

このセンターは、短大を始め、高校・中学・小学校及び音楽大学の学生・生徒等の共用施設なので利用の仕方をよく知っておくこと。

②保健室について

保健室は体育センター1階に位置し、中学・高校（女子）と場所を共有している。通常養護教諭が対応に当たり、保健衛生管理等を目的とし次の業務を行っている。

(a) 定期健康診断

本学では、4月のガイダンス時に健康診断を実施している。全員必ず受診すること。検査項目は、1年生が胸部レントゲン、尿検査（蛋白・糖・潜血）、血液検査（貧血・脂質）、内科検診、身体測定（身長・体重・視力）を実施し、2年生及び専攻科は、尿検査（蛋白・糖・潜血）、内科検診、身体測定（身長・体重・視力）を実施している（教職課程履修者の希望者のみ、実費にて胸部レントゲン検査可能）。

(b) 健康相談

月2回程度、保健室では健康相談を実施している。日程については「短大保健室通信」に記載し、掲示による連絡をしている。

(c) 短大保健室通信

「短大保健室通信」を4月はガイダンス時に全員に配布し、他の月については掲示をしている。(学生・安全対策委員会の掲示板に掲示。)

(d) 救急処置

保健室では、傷病についての救急処置を行っている。内科的なことに関しては、ベッドでの休養などしている。基本的に内服薬の使用はしていない。近年、薬に対するアレルギーの学生が増えたこと、症状を抑えることによる症状の悪化などがその理由である。

外科的なことに関しては、アイシング(氷で冷やす)などを行っている。症状により2次的処置を行ったり、医療機関での受診をしている。

(e) 学生教育研究災害傷害保険に関する手続きについて

学生生活の中で発生した事故に対して、救済措置として設けられている保障制度である。本学では学校負担により、全員加入の手続きを行っている。学内・学外での事故及び通学中の事故に遭った場合は、保険会社に事故発生日から30日以内に届出をしなければならない。(30日以内に届出をしない場合、保険の適用を受けられない場合がある。)事故が発生した場合は、直ちに保健室へその旨を申し出ること。

また、通院の実日数(実際に通院した日数)により、保険申請ができない場合がある。授業中や休憩中など、状況により申請に必要な実日数が異なる。入学時に配布される「学生教育研究災害傷害保険加入者のしおり」とP.31「(2) 学生教育研究災害傷害保険制度について」を参照すること。

また、学研災付帯賠償責任保険及び学研災付帯学生生活総合保険については、P.32を参照すること。

③ スクールカウンセラーについて

学園内にて、スクールカウンセラー(臨床心理士)との面談日が設けられている。プライバシーは完全に守られるので、安心して面談を受けることができる。面談の申し込みは保健室を通しての完全予約制となる。(スクールカウンセラーに急用が生じた場合など、緊急を要する際にその旨を連絡するため名前を申し出てもらっている。)

詳細は以下の通りである。

(a) 面談申し込み方法⇒完全予約制の為、保健室を通しての申し込みとなる。面談をキャンセルする場合は、必ず保健室に連絡すること。

なお、面談の申し込み及びキャンセルについては保健室の直通電話でも受け付けているので、来訪が無理な場合は下記に連絡すること。

◎保健室直通電話 ☎03(3300)4295 8:15~16:30

(b) 面談日・面談時間⇒毎週火~土曜日

10:40~17:00(12:20~13:20は除く)

※但し、長期休業中は原則的に休室。また、臨時に休室となる場合がある。

※同じ時間帯に中高生も相談日が開設されており、面談希望者が多い場合は予約が取りにくい場合もある。一人当たりの面談時間は

約40分。

(c) 面談場所⇒セミナーハウス2階の203教室。場所はP.271で確認すること。

④コミュニケーションサポートの相談窓口について

学校生活を送る中で、学生同士、また授業等での主にコミュニケーションにおいてメンタル面や身体面で悩みを抱え困っている学生に対して、カウンセラーとは別にサポートする窓口を設けています。豊富な経験を積んだベテランの担当者が相談に乗ります。ケースによって必要であれば精神科の専門の先生につないだり、また授業担当者や保健室などと連携を取りながら適切な対応をします。

(a) 申し込み：授業課窓口での予約制（原則）

(b) 相談日：前期 毎週土曜日午後／後期 毎週水曜日午後

(c) 場 所：短大会議室等

(4) 八ヶ岳高原寮について

「いまだこの地には 語られざる詩がある 見えざる絵がある 聞こえざる歌がある（後略）」

今から約50年前、故生江義男元本学学長が、八ヶ岳高原寮の開設にあたって詠まれた詩の一節である。当時に比べて、建物は木造から鉄筋コンクリートに変わり、周囲の環境も道路が整備され、観光に避暑に訪れる人も多くなってきたが、それでも高原寮を取巻く自然環境は未だ豊かであり、人々の心を惹きつけている。

八ヶ岳高原寮では、年間を通じ、短大の演劇専攻の合宿授業を始め、高等学校・中学校・小学校の合宿活動、クラブ合宿や補講等が実施されている。

また、短大を含めた在学生・卒業生、その家族の方も利用できる。ただし、前述の通り、桐朋学園女子部門の学生・生徒・児童の教育活動のための施設なので、教育活動の期間以外の利用となる。その他詳細については、毎年4月にお知らせする「八ヶ岳高原寮の利用案内」をご覧ください。その趣旨を理解の上、利用していただきたい。なお、問い合わせ等は本館事務室で取り扱っている。

所在地 〒409-1501

山梨県北杜（ほくと）市大泉町西井出8240

電 話 (0551) 38-2106 （管理人 玉川裕之）

F A X (0551) 38-2164

交 通 JR中央線小淵沢駅にて小海線に乗換え、2駅目の『甲斐大泉駅』下車、徒歩40分またはタクシー 10分

7 学園生活の 安全と環境の 向上のために

(1) 桐朋学園女子部門仙川キャンパス内の各学校には、安全対策委員会とそれぞれの代表委員で構成される保安委員会が設置されている。

これらの委員会では次のような諸業務を行うことにより、園児・児童・生徒・学生・教職員の安全で快適な学校生活の確保に努めている。

- ①校舎及び諸施設の使用の許可・規制などの管理
- ②火気使用（暖房器具も含む）の許可・規制などの管理
- ③学内駐輪場使用の許可・規制などの管理
- ④火災，地震，風水害に対する防災対策全般
- ⑤学内生活環境の施設設備に関すること全般
- ⑥その他，安全対策上必要な対応並びに諸規則の作成と指導

(2) 保安委員会より「安全で快適な学校生活のために」（抜粋）

- ①指定の喫煙場所（P.23参照）を除いて校舎内外を問わずキャンパス内は全面禁煙である。
- ②自動車の校内乗り入れは禁止されている。
- ③駐輪は短大駐輪場以外は禁止されている。希望者は許可手続き（P.22参照）が必要である。
- ④休業中も含めて教室等の使用は，必ず事前に定められた手続きを行って使用すること。（P.59参照）
- ⑤教室等の使用にあたっては，照明・空調等使用施設の後始末を確実に行うこと。
- ⑥貴重品は各自が責任を持って管理すること。ロッカーに鍵をかけなかった場合の事故等には学校は一切の責任を負わない。
- ⑦不審者を見たり異常を感じたら些細なことでも速やかに近くの教職員に知らせること。（P.275参照）
- ⑧キャンパスには幼稚園の園児や小学校の児童が生活している。よって弱者の安全確保には十分留意すること。
- ⑨その他，お互いに安全で快適な生活ができるよう自覚を持って行動するように心がけること。

学園各校門の開閉時間

	通常		土曜日		日，祝，振替休日		長期休業中	
	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間
正門	7:25	18:00	7:25	17:00	閉鎖		8:30	16:00
「自動車通用門」脇の 夜間等通用門	6:30 18:00	7:25 22:00	6:30 17:00	7:25 22:00	6:30	22:00	6:30 16:00	8:30 22:00
音楽部門正門	5:10	22:00	5:10	22:00	8:00	22:00	8:00	17:00

※東門，初等部通用門は終日閉門

1 企業への就職 について

(1) 本学では、進路相談室が就職についての学生支援を取り扱い、就職活動に関する指導、相談、情報提供および斡旋、紹介等を行っている。

よって、就職を希望する学生全員に対して、就職に対する一般的心得、就職活動の過程と日程、自己分析、企業研究の必要性とその方法、企業の採用動向（求人状況）、応募書類作成上の注意、応募手続きの方法及び面接・マナー等について、進路講座を随時実施するとともに、個別に学生の相談に応じている。

(2) 就職斡旋要項

①本学では職業安定法第33条2項及び「就職斡旋要項」に基づき、本学の学生の就職を斡旋する。就職を希望する者は、本要項を厳守しなければならない。

②就職を希望する者は、必ず所定の手続き（就職登録等）をしなければならない。したがって手続きをしない者には就職の斡旋はしない。

③学内選考による就職の斡旋（学校推薦）は、学生一人に対し原則として常時1企業（1法人）とする。

④就職が内定した場合には、最初に内定（縁故、自由応募による直接受験をも含む）したところを以て就職先とし、以後の斡旋を中止する。

(3) 就職斡旋事務

①就職を希望する学生は進路相談室にある就職（進学）カードに、必要事項を記載の上、提出すること。なお、進学を希望する学生も該当する欄をチェックの上、同カードを提出のこと。

②就職斡旋についての詳細は、掲示で明らかにするので就職を希望する学生は、しっかり把握すること。

③会社概況及び募集要項等の求人に関する書類は、進路相談室で閲覧すること。また、各企業への資料請求については、各個人が当該企業に直接請求すること。

④学校推薦依頼のあった求人先への受験希望者が、推薦人数を越えた場合は、学内で選考を実施する。

⑤学校推薦状の必要な者は、進路相談室に申し込むこと。

⑥成績証明書、卒業見込証明書、健康診断書等の各種証明書を必要とする時は、各自が、教学課で申込むこと。

(4) 就職を希望する企業（法人）等に内定を得た場合、または進学等が決定した場合には、その時点で進路相談室に報告し、所定の書類を提出すること。

2 進学・編入学に ついて

卒業後の進路として進学、編入学を希望する学生が増えている。進路相談室ではその方面に関する情報を収集しているので、興味・関心に応じてこれを活用することが望ましい。

(1) 本学専攻科への進学

本学芸術科には、専攻科演劇専攻、専攻科音楽専攻が設置されている。本科での学習を深め、より高度な専門的内容を学ぶことのできる2年間の課程である。

わが国では法令により、四年制大学と独立行政法人大学改革支援・学位授与機構のみが、学士の学位を授与することができる。本学専攻科は、同機構により大学の学士課程に相当する教育を行っているとして認定され、平成30年度より認定専攻科になった。所定の単位を修得し、「学修成果」を作成すれば、学位授与の申請ができる。審査に合格すれば、「学士（芸術学）」を取得でき

る。詳しくは、同機構が発行する資料『新しい学士への途』（平成30年度版）を参照すること。

短大における「単位取得の要件」については、同資料P.11～P.12を参照すること。『新しい学士への途』（平成30年度版）

http://www.niad.ac.jp/n_gakui/shinseishiryoku/no7_5_gakushiH30.pdf

(2) 4年制大学への編入学

多くの大学から送付された大学案内を演劇専攻研究室前に置いているので、閲覧することができる。編入学試験には二種類あり、一般編入学試験と指定校推薦編入学試験がある。一般編入学試験は各自で入学要項などを取り寄せ、受験するものである。指定校推薦編入学試験では、該当大学から本学宛に推薦依頼が届くものである。なお、指定校推薦編入学試験に合格した場合、入学辞退はできない。芸術関係の学部学科から編入学試験の案内が届くこともある。編入学に関して質問がある場合には、所属専攻の教員および進路相談室に相談すること。

(3) 専門学校への進学

資格取得や技術修得を目指して、専門学校や各種学校へ進学する学生もいる。各学校から送付された資料は演劇専攻研究室前に置いている。

どのような進路を考えるにしても、本学2年間の学習を充実させることが基本となる。進学を希望する学生は、所属専攻の教員、あるいは進路相談室に相談し、進学先の内容についてよく知ることが大切である。

3 音楽専攻 卒業後の進路 について

音楽専攻の凝縮した2年間を終えた後、ここで身につけた能力や関心を強力なバネにして、それぞれが、実に多彩で発展的な進路をとっている。その中で、さらなる勉学の継続としては、本学専攻科への進学が3分の1、その他桐朋学園大学音楽学部（3年次編入）等他大学への編入が挙げられる。海外留学をする卒業生も増えており、留学先としては、ドイツ、オーストリア、イギリス、フランス、ハンガリー、アメリカ等がある。就職については、教職免許を取得し教員になる者、音楽教室で指導者になる者の他、本学で学んだことを基礎に、音楽療法士、保育士、バレエピアニスト等、幅広い領域で活躍している者が多くいる。また、コンクール入賞者も多く、たくさんの卒業生が演奏家として活躍している。

4 演劇専攻 卒業後の進路 について

日本における劇団の数は俳優座、文学座、青年座等の他、ミュージカルの劇団、若い小劇団も含め、東京だけでも1,500以上といわれその実数は把握されていない。

俳優として舞台に立つためには、所属劇団の公演での抜擢、自分達で劇団を結成しての上演活動、フリーもしくはプロダクション（芸能事務所）に所属して各種公演のオーディションを受けて「役につく」という方法等がある。

劇団やプロダクションによってその採用方法、研修期間・制度、待遇も異なる。まずなによりも大事なことは「自分の目標は何か?」という目的意識を明確にすること。劇団を選ぶ場合、まずその劇団の舞台を観劇し、その劇団の表現が自分の目的に合ったところであるか否かの判断が重要である。プロダクションの場合は資料を取り寄せるなどして主な実績を知る必要がある。「研修生制度」と称して多額の入所金を徴収する場合もあるので注意してほしい。1年次は、比較的時

間にゆとりがあるので少しでも多くの舞台に接して勉強すること。必要な情報を集め、実際の創造現場の状況を把握した上で進路を決めることが大切である。

ここ数年の主な進路は次のとおりである。

[俳優座，文学座，青年座，円，四季，さいたまネクスト・シアター，虚構の劇団，劇団仲間，青年団，音楽座，ステップス，アミューズ，SCOT，コンドルズ，イツフォーリーズ，オリエンタルランド等]

また，一般就職を希望する場合は進路相談室に相談すること。演劇でつちかった能力は幅広い適応性を示している。

卒業後，さらに勉強を続けたい学生にはより専門性を高める専攻科がある。専攻科では年3回の劇上演実習やワークショップ等を通じて実践力を養っていく。

桐朋学園芸術短期大学学則

第1章 総 則

(目 的)

- 第1条 本学は、教育基本法および学校教育法の精神にしたがい、芸術文化の専門的な研究と教育とに取り組み、現代社会における芸術文化の創造と発展に寄与する人材の育成を目的とする。
2. 本学の設置する各学科または専攻における人材の育成に関する目的その他教育研究の目的については別に定める。

(目的達成と評価)

- 第2条 本学は、その目的及び社会的使命を達成するため、教育の水準、研究活動等の状況について、自ら点検および評価を行う。
2. 本学は、教育研究等の総合的な状況について、学校教育法施行令第40条で定める期間ごとに、文部科学大臣の認定を受けた認証評価機関による評価をうけるものとする。
3. 前項の点検及び評価に関する事項は別に定める。

(教育内容等の改善)

- 第3条 本学は、授業内容及び方法の改善を図るための委員会を設け、研修及び研究を実施する。
2. 前項の委員会については、別に定める。

(名 称)

- 第4条 本学は、桐朋学園芸術短期大学という。

(位 置)

- 第5条 本学の位置は、東京都調布市若葉町1丁目41番地の1とする。

第2章 組 織

(学科・専攻課程)

- 第6条 本学に、次の学科を置く。
- 芸 術 科
2. 芸術科に、次の専攻課程を置く。
- 音 楽 専 攻
- 演 劇 専 攻

(専攻科)

- 第7条 本学に、専攻科を置く。
2. 専攻科に、次の専攻課程を置く。
- 演 劇 専 攻
- 音 楽 専 攻

(図書館)

- 第8条 本学に図書館を置く。

(保健室)

- 第9条 本学に保健室を設け、学生および教職員の健康管理にあたる。

(事務室)

- 第10条 本学に事務室を置く。
- 第11条 図書館、保健室および事務室に関して必要な事項は、別に定める。

(職員組織)

- 第12条 本学に次の職員を置く。
- 学 長
- 教 授
- 准 教 授
- 講 師
- 助 手
- 事 務 職 員
- 技 術 職 員
- 司 書
- その他必要な職員

(教授会)

第13条 本学に重要事項を審議するため教授会を置く。

2. 教授会は学長、教授、准教授および専任講師をもって構成する。
3. 本条に定めるもののほか、教授会に関する事項は、教授会規程の定めるところによる。

(一般条項の学科適用)

第14条 第3章以後の条項は、特に付言する場合を除き、学科について適用するものとする。

第3章 学生定員および修業年限

(学生定員)

第15条 本学の学生定員は、次のとおりとする。

専攻課程	入学定員	収容定員
音楽専攻	50名	100名
演劇専攻	70名	140名

(修業年限および在学年限)

第16条 本学の修業年限は2年とする。

2. 学生は4年を越えて在学することはできない。

第4章 学年、学期および休業日

(学年)

第17条 学年は4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(学期)

第18条 学年を次の2学期に分ける。

前学期	4月1日から	9月30日まで
後学期	10月1日から	翌年3月31日まで

(休業日)

第19条 休業日は次のとおりとする。

日曜日	
国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日	
夏季休業	8月1日から 8月31日まで
冬季休業	12月23日から翌年1月4日まで
春季休業	3月21日から 3月31日まで
創立記念日	11月20日

2. 必要がある場合、学長は、前項の休業日を臨時に変更することができる。
3. 第1項に定めるもののほか、学長は、臨時の休業日を定めることができる。

第5章 入学、退学および休学

(入学の時期)

第20条 入学の時期は学年の始めとする。

(入学の資格)

第21条 本学に入学することのできる者は、次の各号の1に該当する者とする。

- (1) 高等学校もしくは中等教育学校を卒業した者
- (2) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者
- (3) 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- (4) 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- (5) 専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たす者に限る）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が別に定める日以後に修了した者
- (6) 文部科学大臣の指定した者
- (7) 高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。）
- (8) 個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるとみとめた者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第22条 本学に入学を志願する者は、本学所定の願書および必要書類に、検定料を添えて提出しなければならない。

(入学者の選考)

第23条 前条の入学志願者に対しては、入学試験を行い、入学を許可すべき者を定める。

2. 前項の入学試験に関しては、別に定める「入学試験規定」による。

(入学手続きおよび入学許可)

第24条 前条の選考の結果に基づき、合格の通知を受けた者は、所定の期日までに本学所定の書類を提出するとともに、入学料等を納付しなければならない。

2. 学長は、前項の入学手続きを完了した者に入学を許可する。

(転学)

第25条 本学に転学を志願する者があるときは、欠員のある場合に限り、選考の上、相当学年次に入学を許可することがある。

2. 前項の規定により入学を許可された者の既に修得した授業科目および単位数の取扱いならびに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

(退学)

第26条 退学をしようとする者は、学長の許可を受けなければならない。

(休学)

第27条 疾病その他やむを得ない事情により3ヵ月以上修学することのできない者は、学長の許可を得て休学することができる。

2. 疾病のため修学することが適当でないと認められる者については、学長は休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第28条 休学の期間は1年を超えることができない。ただし、特別の事由がある場合は、引き続き更に1年まで延長することができる。

2. 休学の期間は通算して2年を超えることができない。

3. 休学の期間は、第16条の在学年限に算入しない。

(復学)

第29条 休学期間中にその理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができる。

(除籍)

第30条 次の各号の1に該当する者は、教授会の議を経て学長が除籍する。

- (1) 第16条第2項に定める在学年限を超えた者
- (2) 第28条第2項に定める休学の期間を超えてなお修学できない者
- (3) 授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者
- (4) 長期間にわたり行方不明の者

第6章 教育課程、履修方法および卒業等

(教育課程及び授業科目)

第31条 本学の授業科目は教養科目と専攻科目とする。

2. 授業科目の種類、単位数等は別表第1のとおりとする。

(教職に関する科目)

第32条 前条に定めるもののほか、教職に関する科目を置く。

2. 教職に関する科目の種類、単位数等は別表第2のとおりとする。

(単位の計算方法)

第33条 各授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により計算するものとする。

- (1) 講義については15時間の授業をもって1単位とする。但し、別に定める授業科目については30時間の授業をもって1単位とする。
- (2) 演習については30時間の授業をもって1単位とする。但し、別に定める授業科目については15時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 実習・実技については45時間の授業をもって1単位とする。但し、別に定める授業科目については30時間の授業をもって1単位とする。
- (4) 個人指導による芸術科音楽専攻・演劇専攻、専攻科音楽専攻・演劇専攻の実技科目については、本学が定める時間の授業をもって1単位とする。
- (5) 芸術科演劇専攻、専攻科演劇専攻の劇上演実習については、集中的な研修による成果と準備を評価して、4単位を与える。
- (6) 卒業または修了の論文に対しては、その研究の成果と準備を評価して4単位を与える。

(単位の授与)

第34条 授業科目を履修し、その試験に合格した者には、所定の単位を与える。

(学修の評価)

第35条 試験等の評価は、S、A、B、C、Dの評語で表し、C以上を合格とする。

2. 成績と評価基準は、次のとおりとする。

学科成績	実技成績	評価
100-90	100-90	S
89-80	89-80	A
79-60	79-65	B
59-50	64-50	C
50未満	50未満	D

3. 前項の成績評価による学修成果を総合的に判断する指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。

(卒業の要件)

第36条 本学を卒業するためには、2年以上在学し、別表第1に定めるところにより、62単位以上を修得しなければならない。

(入学前の既修得単位の認定)

第37条 本学は、教育上有益と認めるときは、学生が入学する前に短期大学または大学等において履修した授業科目について修得した単位を、入学後の本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2. 学生が入学する前に行った第39条第1項に規定する学修を、本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

3. 前2項により修得したものとみなし、または与えることのできる単位数は、転学等の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、合わせて15単位を超えないものとする。

(他の短期大学または大学等における授業科目の履修等)

第38条 本学は、教育上有益と認めるときは、学生が他の短期大学または大学等において履修した授業科目について修得した単位を、15単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2. 前項の規定は、学生が外国の短期大学または大学に留学する場合に準用する。この場合修得したものとみなすことのできる単位数は、前項および第39条第2項の単位数と合わせて30単位を超えないものとする。

(短期大学または大学以外の教育施設等における学修)

第39条 本学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学または高等専門学校の専攻科における学修、その他文部科学大臣が別に定める学修を、本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

2. 前項により与えることができる単位は、前条第1項により修得したものとみなした単位数と合わせて15単位を超えないものとする。

(卒業)

第40条 本学に2年以上在学し、第36条に定める単位を取得した者については、教授会の議を経て、学長が卒業を認定する。

(学位の授与)

第41条 前条により卒業した者には、本学学位規程の定めるところにより短期大学学士の学位を授与する。

(資格の取得)

第42条 本学において取得することができる資格および免許状の種類は次のとおりとする。

専攻課程	資格および免許状の種類
音楽専攻	中学校教諭二種免許状(音楽)

2. 前項の資格を取得しようとする者は、教育職員免許法(昭和63年法律第106号)に定める単位数を取得しなければならない。

第43条 本章に定めるもののほか、教育課程、履修方法及び卒業等に関して必要な事項は別に定める。

第7章 検定料, 入学料, 授業料その他の費用

(検定料等の種類および金額)

第44条 本学の検定料, 入学料, 授業料, その他の費用の種類と金額は次のとおりとする。

学費等種類	専攻課程名	金 額	
検 定 料	全 専 攻	35,000 円	
	(ただし, 同一年度内に異なる入試種別で再受験する場合の2回目以降および一般入試で複数の専攻を併願する場合の2専攻日の検定料または一般入試で桐朋学園大学音楽学部を併願する場合は20,000円)		
入 学 金	音 楽	入学時	420,000 円
	演 劇	入学時	330,000 円
施設拡充費	全 専 攻	入学時	170,000 円
授 業 料	音 楽	年 額	1,090,000 円
	演 劇	年 額	975,000 円
施設維持費	音 楽	年 額	80,000 円
	演 劇	年 額	70,000 円
学 生 諸 費	全 専 攻	年 額	32,000 円
演習実習費	音 楽	年 額	45,000 円
舞台実習費	演 劇	年 額	110,000 円

(授業料等の納入期)

第45条 授業料, 清掃冷暖房費等(以下授業料等という)は, 学期区分に従い, 次の期間に納入しなければならない。

前学期 4月16日より4月30日まで。但し, 新入学生は入学手続日

後学期 9月16日より9月30日まで。

但し, 納入期の最終日が金融機関休業日に当たる場合, その直前の金融機関営業日を最終期限とする。

2. 特別の事情があると認められる者には, 延納または分納を認めることがある。

(退学および除籍の場合の授業料等)

第46条 学期の途中で退学したまたは除籍された者の当該学期分の授業料等は徴収する。

(休学の場合の授業料等)

第47条 休学を許可された者については, その期間, 以下に定める休学在籍料を納めなければならない。ただし, 学期の中途から休学した者の当該学期分の授業料等は徴収する。

休学在籍料: 半期60,000円 通年120,000円

(復学の場合の授業料等)

第48条 学期の中途において復学した者は, 当該学期分の授業料等を納入しなければならない。

(学年の途中で卒業する場合の授業料等)

第49条 学年の途中で卒業する者は, 卒業する学期分の授業料等を納入しなければならない。

(既納入金扱い)

第50条 一旦納入した検定料, 入学料は原則として返還しない。一旦納入した施設拡充費, 授業料等は, 4月1日以降は原則として返還しない。

2. 在学生については, 第1項の規定にかかわらず, 学期末までに退学, 休学が認められ, 納入済の翌学期の授業料等があるときは, その授業料の全額を返還する。

第8章 科目等履修生, 単位互換履修生, 外国人留学生, 委託生および長期履修生

(科目等履修生)

第51条 本学の授業科目の履修を希望する者があるときは, 本学の教育に支障のない限りにおいて科目等履修生として履修を許可することができる。

2. 科目等履修生には, 本学則第34条および第35条の規定を準用して単位を与えることができる。

(単位互換履修生)

第52条 桐朋学園大学音楽学部の学部生が本学の履修対象科目の履修を希望した場合, 単位互換履修生として履修を許可することができる。

2. 単位互換履修生には, 本学則第34条および第35条の規定を準用して単位を与えることができる。

(外国人留学生)

第53条 外国人で, 本学に入学を志願する者があるときは, 選考のうえ外国人留学生として入学を許可することができる。

(委託生)

第54条 公共団体またはその他の機関が、その所属職員の教育の委託を願い出たときは、本学の教育に支障がない限りにおいて、選考のうえ委託生として入学を許可することがある。

(長期履修生)

第55条 入学時に修業年限延長を申し出た者は長期履修生として1年の延長を許可する。修業年限は3年とし、在学年限は4年とする。履修方法、授業料等の納入については、別に定める。

(その他)

第56条 科目等履修生、単位互換履修生、外国人留学生、委託生および長期履修生に関し必要な事項は、別に定める。

第9章 専攻科

(本章の適用)

第57条 この章は、専攻科に関し必要な事項を定める。

(専攻課程および学生定員)

第58条 専攻科の専攻課程および学生定員は、次のとおりとする。

専攻課程	入学定員	収容定員
演劇専攻	20名	40名
音楽専攻	20名	40名

(修業年限)

第59条 専攻科の修業年限は各専攻2年とする。

2. 専攻科の学生は、修業年限の2倍を超えて在学することはできない。

(入学資格)

第60条 専攻科に入学することのできる者は、本学を卒業した者およびこれと同等以上の学力があると認められる者とする。

(授業科目)

第61条 専攻科の授業科目の種類、単位等は、別表第3のとおりとする。

(修了の要件)

第62条 本学専攻科を修了するための要件は、次のとおりとする。

専攻課程	在学年数	修得単位
演劇専攻	2年以上	50単位以上
音楽専攻	2年以上	50単位以上

2. 専攻科を修了した者に、修了証書を授与する。

(専攻科の検定料、入学料、授業料、その他の費用)

第63条 専攻科の検定料(審査料)、入学料、授業料、その他の費用は下表のとおりとする。

学 費	入学生	専攻課程	本学卒業生	一般公募生
	検 定 料	全	専 攻	10,000円
入 学 金 (入学時)	演	劇	10,000円	165,000円
	音	楽	10,000円	210,000円
施設拡充費 (入学時)	全	専 攻	0円	85,000円
授 業 料 (年額)	全	専 攻	975,000円	975,000円
施設維持費 (年額)	全	専 攻	70,000円	70,000円
学 生 諸 費 (年額)	全	専 攻	32,000円	32,000円
舞台実習費 (年額)	演	劇	120,000円	120,000円
演習実習費 (年額)	音	楽	45,000円	45,000円

(注) 一般公募生とは、本学卒業生以外の者をいう。

(授業料の納入期)

第64条 授業料等は学期区分に従い、次の期間に納入しなければならない。

前学期 4月16日より4月30日まで。但し一般公募生は入学手続日

後学期 9月16日より9月30日まで。

但し、納入期の最終日が金融機関休業日に当たる場合、その直前の金融機関営業日を最終期限とする。

(準用規定)

第65条 この章に定めるもののほか、専攻科学生に関し必要な事項は、学科学生に適用する関係条項を準用する。

第10章 賞 罰

(表 彰)

第66条 学生として表彰に価する行為のあった者は、教授会の議を経て学長が表彰する。

(懲 戒)

第67条 本学の規則に違反し、または学生の本分に反する行為をした者は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2. 前項の懲戒の種類は、退学、停学および訓告とする。

3. 前項の退学は、次の各号の1に該当する学生に対して行う。

(1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者

(2) 学力劣等で成業の見込みがないと認められる者

(3) 正当な理由がなくて出席常でない者

(4) 本学の秩序を乱し、その他学生の本分に著しく反した者

附 則 略

学位規程

(目 的)

第1条 この規程は、学位規則（昭和28年文部省令第9号）第13条及び桐朋学園芸術短期大学学則（以下「学則」という。）第41条の規定に基づき、桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）において授与する学位について必要な事項を定めるものである。

(付記する専攻分野)

第2条 本学において授与する学位は短期大学士とし、付記する専攻分野の名称は次のとおりとする。

音楽 Associate of Music

演劇 Associate of Drama

(学位授与の要件)

第3条 短期大学士の学位は、学則第41条の規定に基づき、本学を卒業した者に授与する。

(学位の授与)

第4条 学長は、教授会の議を経て、卒業を認定した者に対して、学位を授与し、学位記を交付するものとする。

(学位の名称)

第5条 本学の学位を授与された者が、その学位の名称を用いるときは、「桐朋学園芸術短期大学」と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第6条 学長は、学位を授与された者が、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又はその名誉を汚辱する行為があったときは、教授会の議を経て当該学位を取消することができる。

2. 学長は、前項の規定に基づき当該学位を取消したときは、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

附 則

1. この規程は、平成18年1月1日から施行する。

2. この規程の改廃については、教授会において行う。

桐朋学園芸術短期大学学生懲戒規程

(目的)

第1条 この規程は、桐朋学園芸術短期大学学則第66条に基き学生の懲戒に関する規程を定めることを目的とする。

(懲戒の対象とする者)

第2条 この規程において懲戒の対象とする者とは、芸術科、専攻科に所属する学生（以下「学生」という。）のことをいう。

2. 科目等履修生、および研究生の取扱いは各規程の定めによる。

(懲戒の対象とする行為)

第3条 懲戒の対象とする行為は、次の各号に掲げるものとする。

- (1) 犯罪行為等、社会的諸秩序に対する侵犯行為
- (2) 学生の本分に反し本学の秩序を乱す行為
- (3) ハラスメント行為
- (4) 情報倫理に反する行為
- (5) 学問的倫理に反する行為
- (6) 学生の学習、研究および教職員の教育研究活動等の正当な活動を妨害する行為
- (7) 試験等における不正行為

2. 前項各号につき、別に規程が定められている場合、その規程にしたがう。

(懲戒の種類)

第4条 学則第66条第2項に定める懲戒は、次のとおりとする。

- (1) 退学は、学生としての身分を剥奪するものとする。
- (2) 停学は、一定期間、学生の教育課程の履修および課外活動等を停止するものとする。
- (3) 訓告は、学生の行った行為の責任を確認し、その将来を、書面をもって戒めるものとする。

(停学の期間)

第5条 停学の期間は、無期もしくは原則1か月以上6か月以下の有期とする。

2. 期間については、対象とする行為等で勘案するものとする。

(事実関係の調査)

第6条 懲戒の対象となる行為またはその疑いが生じたときは、当該専攻は、遅滞なく当該学生等に対する事情聴取等の調査を行い、事実関係を確認し、学生・安全対策委員会に報告しなければならない。

2. 前項の調査にあたり、学生・安全対策委員会は、事前に学生に対して、要旨を口頭または文書で告知し、当該事実に関する弁明の機会を与えなければならない。

3. 前項の定めにかかわらず、行為が重大犯罪であり、明白と認められる等特段の事情がある場合は、この限りではない。

(懲戒決定までの手続き)

第7条 学生部長は、前条の事実関係の調査により、懲戒が相当と判断した場合、懲戒手続きを開始する。

2. 学生部長は、学生・安全対策委員会において懲戒の原案を作成し、運営委員会で調整のうえ、教授会を経て学長に上申する。

(懲戒の発効)

第8条 懲戒は、教授会を経て学長が行う。

2. 懲戒は、学生に対して懲戒内容を文書で発信した日から発効する。

(学生への通告および保証人への通知)

第9条 学長は、学生に対し懲戒の内容を文書により通告する。

2. 学長は、学生の保証人に対し懲戒の内容を文書により通知する。

(公示)

第10条 懲戒を行った場合、学長は遅滞なく公示を行う。

2. 公示する事項は、所属、学年、懲戒の種類、懲戒理由とする。

3. 公示期間は、原則1か月とする。

(無期停学の解除)

第11条 無期停学は、懲戒の発効日から6か月を経過した後でなければ解除できない。

2. 無期停学解除の学生への通告、保証人への通知は、文書で行う。

(懲戒に関する記録)

第12条 学生部長は、懲戒の事実を学籍簿に記録する。

(不服申立て)

第13条 懲戒を課せられた学生は、懲戒の発効日から1週間以内にその懲戒に対する不服申立てを行うことができる。

2. 不服申立てをしようとする学生は、不服申立書を学長に提出しなければならない。

(不服申立審査について)

第14条 学長は、前条の不服申立てに基づき不服申立審査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

2. 委員会は、学生・安全対策委員会から学生部長が招集する委員と、不服申立てを行った学生が所属する専攻主任で構成する。

3. 委員会が必要と認める場合は、弁護士等学外有識者の出席を求めることができる。

4. 不服申立てをした学生は、書面で意見を述べ、資料を提供することができる。

5. 委員会は、懲戒の内容が相当であると判断した場合は、不服申立ての却下を求める旨の勧告を学長に行う。

6. 委員会は、懲戒の内容が相当でないと判断した場合は、懲戒の取消または変更を求める旨の勧告を学長に行う。

(不服申立に対する措置)

第15条 学長は、前条第5号の勧告を受けた場合には、不服申立てを却下する旨を申立てた学生に通知する。

2. 学長は、前条第6号の勧告を受けた場合には、学生部長に対し、学生・安全対策委員会の協議を経て、新たな懲戒原案を作成するよう指示する。

3. 学生部長は学生・安全対策委員会においてあらたな懲戒原案を作成し、再度教授会を経て学長に上申する。

(懲戒対象者の退学申し出の取扱い)

第16条 学長は、第9条において事情聴取等調査の対象となった者から、懲戒の決定前に退学の申し出がある場合、懲戒が決定するまでこの申し出を受理しない。

(停学期間中の指導)

第17条 停学期間中は教育的指導を行う。

2. 学長は、教育的指導に必要と判断される場合、学生の施設利用および正課授業への参加を認めることができる。

(補 則)

第18条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施にあたって必要な事項は、別にこれを定める。

(改 廃)

第19条 この規程の改廃は、教授会の議を経て学長が決定する。

附 則

1. この規程は平成27年4月1日より施行する。

図書館利用規程（抄）

(開館時間) 図書館の開館時間は次のとおりとする。

(1) 月曜日～金曜日 午前9時～午後6時

(2) 土曜日 午前9時～午後2時

2. 館長は必要に応じて開館時間を延長または短縮することができる。

(館外利用)

本学は、次の各号により、教職員及び学生に対して資料の貸出を行なう。

(1) 図書については次のとおりとする。

①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

(2) 雑誌については次のとおりとする。

①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

(3) 楽譜については次のとおりとする。

①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。

(但し、2年生は2月10日（閉館日の場合はその翌日）を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない)

- (4) その他の資料については別に定める。
- (5) 長期休暇前の貸出期間・冊数については別に定める。
2. 学生の卒業、休学及び退学の際は、館外貸出中の図書館資料を直ちに返却するものとする。
(未返却の図書館資料がある場合、卒業、休学及び退学が承認されないこともある)
3. 図書館から借りた資料は、他の利用者に貸してはならない。
4. 図書館は次の資料は原則として貸出を認めない。
 - (1) 参考図書
 - (2) 映像資料
 - (3) 録音資料
 - (4) 貴重資料
 - (5) その他特別に指定した資料

(視聴覚資料・機器の利用)

利用者は、視聴覚資料ならびに機器を所定の手続きにより、図書館内で利用することができる。

(複写)

利用者は、本学所蔵資料の複写を所定の手続きにより行なうことができる。

ただし次の資料は複写することはできない。

- (1) 著作権法に抵触するもの
- (2) 館長が不適当と認めたもの

(相互利用)

本学における他の図書館等の利用については次のとおりとする。

- (1) 館長は必要に応じて当該機関に対して利用依頼等を行なう。
- (2) 経費は利用者負担とする。

(館内規律)

利用者は次のことを守らなければならない

- (1) 静粛にすること
 - (2) 他の利用者の迷惑になるような行為をしないこと
 - (3) 館員の指示にしたがうこと
 - (4) 資料の無断持ち出しをしないこと
2. 前各号を守らない場合は退館を求められることがある。

(弁償)

利用者は、利用中の資料、機器を紛失、毀損または汚損した場合は弁償しなければならない。弁償は現物弁償を原則とするが、不可能な時は時価弁償とする。

(貸出停止)

館長はこの規程に違反した者に対しては、図書館の利用を制限または停止することがある。

科目等履修生規程

第1章 総 則

(目 的)

第1条 この規程は、本学学則第51条の規定に基づき、科目等履修生に関する取扱いについて定める。

(趣 旨)

第2条 本学において開講する授業科目の履修を希望する者があるときは、当該専攻等の授業及び研究の妨げのない限り、科目等履修生として履修を許可することができる。

第2章 出願手続・履修の許可・履修料・履修期間

(出願資格)

第3条 科目等履修生として出願できる者は、芸術科においては本学入学の資格を有する者とする。専攻科においては本学を卒業した者、またはこれと同等以上の学力を有する者。ただし、教職に関する科目については、本学卒業または修了した者とする。

(出願期間)

第4条 願書の受付期限は、原則として前年度末日までとする。

(出願手続)

第5条 出願する者は、次に定める書類を提出しなければならない。また、単位認定を希望する者は別表に定める選考登録料を納入しなければならない。

単位認定を希望する者

ア. 科目等履修生願書

イ. 最終出身学校の卒業証明書（卒業見込証明書）

単位認定を希望しない者

ア. 科目等履修生願書

(履修の許可)

第6条 履修については、30単位以内とし、当該授業科目担当教員の承諾を得るとともに、当該専攻会議等で審査のうえ、教授会の議を経て学長が許可する。

(履修の始期)

第7条 履修の開始は、学年または後学期の初めとする。

(履修料)

第8条 履修を許可された者は別表に定める履修料を所定の期日までに納入し、科目等履修生証の交付を受けなければならない。

(履修期間)

第9条 履修期間は原則として6か月または1カ年以内とする。

第3章 単位の認定

(単位算定基準)

第10条 履修単位の算定基準は、履修した授業科目における本学の学生の算定基準に準ずる。

(単位の認定)

第11条 単位の認定は、履修した授業科目の担当教員の指定する試験または報告、論文、作品等により、当該担当教員の評価に基づき、教授会の承認を経て決定する。

(教員免許状の単位)

第12条 科目等履修生の修得した単位は、教育職員免許法施行規則第20条の規定により、認定された単位とすることができる。

第4章 その他

(準用規定)

第13条 この規程に定めるもののほかは、本学学生に関する規程を準用する。

(規程の改廃)

第14条 この規程の改廃については、教授会において行なう。

附 則 略

【別表】 選考登録料及び履修料

選考登録料（単位認定希望者のみ必要）	35,000円
履修料（1単位あたり）	12,500円
教育実習関係手数料	35,000円

科目等履修生（高大連携）規程

第1章 総 則

(目 的)

第1条 この規定は、本学学則第51条2の規定に基づき、科目等履修生（高大連携）に関する取扱いについて定める。

(趣 旨)

第2条 桐朋女子高等学校音楽科に所属する高校生が、桐朋学園芸術短期大学音楽専攻（以下「本学」という）の授業科目の単位の修得を希望するときは、当年度の科目等履修生（高大連携）として受け入れる。

2. 桐朋女子高等学校音楽科より推薦された履修生候補者のうちから、所定の手続きを経て履修生を決定する。

第2章 学費・単位の認定

(学費等)

第3条 本規定に基づき受け入れた生徒の学費等（入学科、検定料、授業料、手続料等）は、原則として徴収しない。ただし、実技個人レッスン料は別途徴収する。

(履修単位)

第4条 本学が許可する授業科目および、認定することのできる単位数は、別に定める。

(単位の認定)

第5条 教授会は、受講が認められた科目について、学年末の試験等により単位を認定する。
2. 前項に定める成績及び単位を学年末に桐朋女子高等学校音楽科あてに通知するものとする。
3. 本規定により認定された単位は、本学に入学した際、本学の学則に則り単位を認定する。

附 則

1. この規定は、平成30年4月1日から施行する。

単位互換履修生規程

第1章 総 則

(目 的)

第1条 この規定は、本学学則第52条の規定および、桐朋学園芸術短期大学と桐朋学園大学音楽学部とにおける単位互換に関する協定書に基づき、桐朋学園芸術短期大学単位互換履修生の受け入れ方法及び履修科目その他について定めることを目的とする。

(趣 旨)

第2条 桐朋学園大学音楽学部の学部生が桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という）の授業科目の単位の修得を希望するときは、当年度の単位互換履修生として受け入れる。
2. 本学は、桐朋学園大学音楽学部より推薦された履修希望者のうちから、所定の手続きを経て履修生を決定する。

第2章 学費・単位の認定

(学費等)

第3条 本規定に基づき受け入れた学生の学費等（入学科、検定料、授業料、手続料等）は、原則として徴収しない。

(履修単位)

第4条 本学が許可する授業科目および、認定することのできる単位数は、別に定める。
2. 本学が履修を許可する授業科目は、桐朋学園大学音楽学部との協議によって定める。

(単位の認定)

第5条 教授会は、受講が認められた科目について、学年末の試験等により単位を認定する。
2. 前項に定める成績及び単位を学年末に桐朋学園大学音楽学部あてに通知するものとする。

(遵守義務等)

第6条 単位互換履修生は、本学の学則及びその他の規則を遵守しなくてはならない。

附 則

1. この規定は、平成30年4月1日から施行する。

音楽専攻研究生規程（科目等履修生に準ずる）

第1章 総 則

（目 的）

第1条 この規程は、本学学則第51条の規定に基づき、音楽専攻研究生に関して必要な事項を定めることを目的とする。

（趣 旨）

第2条 本学専攻科音楽専攻を修了、または桐朋学園大学音楽学部を卒業した者で、なお特定の専修実技等の研究を深めようとする希望者があるときは、実技審査、及び書類審査の上、研究生として履修を許可することができる。

第2章 出願・履修期間・履修料等

（履修開始）

第3条 履修開始は、原則として学年初めとする。

（履修期間）

第4条 履修期間は、原則として一年間とする。ただし、研究のため引き続き履修する希望がある場合は、さらに一年に限り延長を認めることがある。

（履修資格）

第5条 履修資格は、本学専攻科音楽専攻を修了、または桐朋学園大学音楽学部を卒業した者とする。

（履修科目）

第6条 第一実技の他に、本学専攻科音楽専攻の開設科目を所定の手続きを経て履修することができる。ただし、第二実技は履修料を別途徴収する。

（履修料）

第7条 音楽専攻研究生の履修料（年額）は次のとおりとする。

- (1) 審 査 料 5,000円
- (2) 授 業 料 435,000円
- (3) 実 習 費 45,000円（合計 485,000円）

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

（研究生証・修了証）

第8条 研究生には履修手続終了と同時に研究生証を交付する。

第9条 修了コンサートをもって研究生修了とみなす。なお、修了コンサートの出演には第一実技担当者と音楽専攻の承認を必要とする。

第10条 研究生を修了した者に、修了証を発行し、履修の成果を認証する。

（特別研究生）

第11条 研究生として二年以上在籍して修了した者で、なお研究を深めようとする者があるときは、特別研究生として履修を許可することができる。

2. 特別研究生は、第一実技の他に、決められた専攻科の科目の中から2科目まで履修することができる。

（特別研究生履修料）

第12条 音楽専攻特別研究生の履修料（年額）は次のとおりとする。

- (1) 審 査 料 5,000円
- (2) 授 業 料 275,000円
- (3) 実 習 費 45,000円（合計 325,000円）

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

（規程の改廃）

第13条 この規程の改廃については、教授会において行う。

演劇専攻研究生規程（科目等履修生に準ずる）

第1章 総 則

（目 的）

第1条 この規程は、本学学則第51条の規定に基づき、演劇専攻研究生に関して必要な事項を定めることを目的とする。

（趣 旨）

第2条 本学専攻科演劇専攻を修了した者で、なお特定の実技等の研究を深めようとする希望者があるときは、書類審査の上、研究生として履修を許可することができる。

第2章 出願・履修期間・履修料等

（履修開始）

第3条 履修開始は、原則として学年初めとする。

（履修期間）

第4条 履修期間は、原則として一年間とする。ただし、研究のため引き続き履修する希望がある場合は、一年ごとに審査の上、最長四年間まで期間の延長を認めることがある。

（履修資格）

第5条 履修資格は、本学専攻科演劇専攻を修了した者とする。

（出願者）

第6条 履修希望者は、あらかじめ専攻主任の承認を得た上で出願しなければならない。専攻主任は面接の上、承認を与えないこともある。

（履修科目）

第7条 本学専攻科生の受講することのできる科目のうち、20単位分に限り、所定の手続きを経て履修することができる。単位の認定をあわせて行う。

（履修料）

第8条 演劇専攻研究生の履修料（年額）は次のとおりとする。

- | | |
|-----------|-----------------------|
| (1) 審 査 料 | 5,000円 |
| (2) 授 業 料 | 100,000円 |
| (3) 実 習 費 | 220,000円（合計 325,000円） |

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

（研究生証・修了証）

第9条 研究生には履修手続終了と同時に研究生証を交付する。

第10条 研究生を修了した者に、修了証を発行し、履修の成果を認証する。

（規程の改廃）

第11条 この規程の改廃については、教授会において行う。

学外発表・出演、および学内演奏会関連規則

(1) 学外演奏発表規則（芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻）

①学生が学外で演奏または発表を行う際には、次の規定に従わなくてはならない。

- 許可を必要とするもの：入場料、出演料等の有無にかかわらず、あらゆる公開演奏会、門下生発表会、コンクール、放送テレビ等での発表出演に際し、自己の氏名または大学名を明示する場合。
- 届出のみ必要なもの：上記すべての演奏発表のうち自己の氏名または大学名を明示しない場合。
- 許可を必要とするものについては音楽研究室にある所定の許可願用紙に必要事項を記入し、専攻実技担当教員ならびに専攻主任の承認を得たうえ、演奏発表の1週間前までに音楽研究室に提出して許可を得ること。
- 届出のみを必要とするものについては、所定の届出用紙に必要事項を記入の上、事前に音楽研究室へ提出すること。

②学生としてふさわしくない演奏会、発表会、また演奏の技倆、内容が未熟であると判断された場合、もしくは出欠席その他学業に多大の支障が生ずる場合においては、演奏、出演を許可しないことがある。

③上記の規定に従わない学生に対しては、学則の定めるところにより懲戒処分を行うことがある。

(2) 学外出演規則 (芸術科演劇専攻・専攻科演劇専攻)

- ① 学生が学外で演劇・映画・放送・商業写真およびそれに類するものへ出演する際は、履修登録期間内に出演許可願を演劇研究室に提出して許可を得ること。出演許可は、出演内容および出演申請者の状態などを考慮してその決定を行う。ただし、その稽古・リハーサルが履修登録期間以前に開始される場合、出演許可願は稽古・リハーサル開始の1ヵ月前までに提出すること。出演許可は、出演内容および出演申請者の状態などを考慮してその決定を行う。
- ② 舞踊・声楽などの発表会出演は、出演2週間前までに出演許可願を演劇研究室に提出して許可を得ること。
- ③ 単位認定を行う芸術科科目「劇上演実習C」「劇上演実習D」及び専攻科科目「劇上演実習E」「劇上演実習F」を履修する場合は他に手続きがある。
- ④ 上記の規定に従わない学生に対しては、学則の定めるところにより懲戒処分を行うことがある。

(3) 芸術科音楽専攻学内演奏会規則

① (目的)

この演奏会は、学生が互いに音楽を探究しあい、日々の勉強の積み重ねを認識し、かつ、ステージ演奏の経験と聴衆としての経験を深めるために、開かれるものである。

出演者は、演奏曲目に対して全力を尽くし、聴く学生は、積極的に集中して聴くことを通し、音楽体験を豊かにすることを目的とする。

② (実施要領)

- (a) この演奏会は公開とし、授業の一環として、学生は全員出席することを原則とする。
- (b) この演奏会は前期、後期各1回行われる。
- (c) 演奏者は2年次生とする。
- (d) 演奏者は原則として音楽専攻会議において実技の成績上位者から選ばれる。
- (e) 出演者は、出演決定後、所定の期日までに音楽研究室で必要な手続きをすませること。

(4) 専攻科音楽専攻学内演奏会規則

① (目的)

この演奏会は、本科の勉強の積み重ねをさらに発展させ、より高度なステージ演奏の経験と、集中して音楽を聴く経験を深めるために、開かれるものである。

② (実施要領)

- (a) この演奏会は公開とし、授業の一環として、学生は全員出席することを原則とする。
- (b) 1年次生、2年次生とも、必要単位として全員出演する。
- (c) 2年次生で卒業演奏会に出席する者は出演を免除される。
ただし、卒業演奏会と異った曲目を用意し、積極的に希望する場合に限り重複出演を認める。
- (d) 出演者は、所定の期日までに、音楽研究室で必要な手続きをすませること。

学費の滞納・延納の処理に関する手続について

授業料等の納入に関して、指定納入期限を過ぎても納入していない学生(滞納者)および納入期限の延長を願い出た学生(延納者)に対する具体的な処理は以下の手続によって行う。

I. 事前報告と対応

1. 経理課長は、学生の授業料等の納入状況について、定期的に短大教学課長に報告し、短大教学課長は、各専攻に報告する。
2. 各専攻の教員は前項の報告に基づき、授業料等の納入に支障をきたしている学生に対応する。必要のある場合は運営委員会に報告し、助言を得る。

II. 滞納者

1. 第1回文書催告

指定納入期限を過ぎても、未納であることが確認され次第、納入期限を示して、経理課長名をもって保証人あて文書による催告を行う。納入期限は、前期分については5月末日、後期分については10月末日とする。

2. 第2回文書催告

第1回文書催告に示した納入期限を過ぎても納入していない学生に対しては、新たな納入期限を示して、学長名をもって保証人あて文書による催告を行う。

この場合、その納入期限までに納入しなかったときには、学則第30条の適用を受けることがある旨を併記する。納入期限は、前期分については6月末日、後期分については11月末日とする。

3. 滞納者の処分

第2回文書催告によっても、その納入期限までに納入しない学生については、学長は教授会に諮って除籍処分とする。ただし、教授会が、特別の事情があると認めるときは、除籍に代えて他の措置を講ずることができる。

III. 延納者

1. 延納を申し出た学生には前期分については4月末日までに、後期分については9月末日までに所定の「延納許可願」を短大教学課に提出させる。
2. 延納の納入期限は、前期分については6月末日、後期分については11月末日とする。
3. 新規入学生の前期分授業料等の延納は認めない。

4. 納入期限までに納入しない学生については、学長は教授会に諮って除籍処分とする。ただし、延納期間に再び延納を申し出た場合は、学長の判断でこれを考慮する。
5. 専攻科学生には、学則第63条に定める授業料等の納入期間の最終日を指定納入期限として、この手続きを準用する。ただし、一般公募による新規入学生の前期分授業料等については、この手続きを準用しない。
6. 研究生には、4月末日を指定納入期限として、この手続きを準用する。

桐朋演劇奨学会規程

(名称)

第1条 本会は桐朋演劇奨学会と称する。

(目的)

第2条 本会は成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とする。

(女子部門奨学会への繰り入れ)

第3条 前条の目的のために、本会は、各年度において奨学金給付相当額を桐朋学園女子部門奨学会に繰り入れる。

(財源)

第4条 奨学金の財源は、有志の寄附金をもってこれにあてる。

(運営)

第5条 本会の会長は桐朋学園芸術短期大学（以下、「本学」という）学長がこれにあたり、運営は本学教職員によって行う。

(奨学生の資格)

第6条 芸術科演劇専攻2年次生および専攻科演劇専攻生（専攻科特待生は除く）である。なお、特別な例を除き、当該年度において本奨学金を一度受給している者は、申し込むことができない。

(奨学生の募集および内容)

第7条 前期、後期の2回にわたり募集し、奨学金は半期授業料相当分とする。

(奨学金の申請)

第8条 次の書類を募集期間に事務局に提出する。

- 1 奨学金申請書（所定用紙）
- 2 家庭調書（所定用紙）
- 3 収入証明書（源泉徴収票等）

(奨学生の選考および発表)

第9条 奨学生の選考は本会が行い、その決定は、本人に通知するとともに本学掲示板に告示する。

(奨学生の資格喪失)

第10条 奨学生が次の各号のいずれかに該当したと認められた場合は、専攻会議および教授会の議を経て、その資格の喪失を決定し、返金を求めることができる。

1. 退学または除籍となったとき
2. 学則及び学生規程による懲戒処分を受けたとき
3. 学業成績が不良のとき
4. その他奨学生として適当でないと認められたとき

(奨学金の返還)

第11条 奨学生は、第10条に定めるいずれかの項に抵触した場合、資格を喪失し、給付された金額を返還しなければならない。

附 則

1. この規程は平成26年4月1日より改正施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

附 則 略

桐朋音楽奨学会規程

(名 称)

第1条 本会は桐朋音楽奨学会と称する。

(目 的)

第2条 本会は成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とする。

(女子部門奨学会への繰り入れ)

第3条 前条の目的のために、本会は、各年度において奨学金給付相当額を桐朋学園女子部門奨学会に繰り入れる。

(財 源)

第4条 奨学金の財源は、有志の寄附金をもってこれにあてる。

(運 営)

第5条 本会の会長は桐朋学園芸術短期大学（以下、「本学」という）学長がこれにあたり、運営は本学教職員によって行う。

(奨学生の資格)

第6条 芸術科音楽専攻2年次生および専攻科音楽専攻生（専攻科特待生は除く）である。

なお、特別な例を除き、当該年度において本奨学金を一度受給している者は、原則として申し込むことができない。

(奨学生の募集及び内容)

第7条 前期、後期の2回にわたり募集し、奨学金は半期授業料の半額相当分とする。

(奨学金の申請)

第8条 次の書類を募集期間に事務局に提出する。

1. 奨学金申請書（所定用紙）
2. 家庭調書（所定用紙）
3. 収入証明書（源泉徴収票等）

(奨学生の選考及び発表)

第9条 奨学生の選考は本会が行い、その決定は、本人に通知するとともに本学掲示板に告示する。

(奨学生の資格喪失)

第10条 奨学生が次の各号のいずれかに該当したと認められた場合は、専攻会議および教授会の議を経て、その資格の喪失を決定し、返金を求めることができる。

1. 退学または除籍となったとき
2. 学則及び学生規程による懲戒処分を受けたとき
3. 学業成績が不良のとき
4. その他奨学生として適当でないと認められたとき

(奨学金の返還)

第11条 奨学生は、第10条に定めるいずれかの項に抵触した場合、資格を喪失し、給付された金額を返還しなければならない。

附 則

1. この規程は平成26年4月1日より施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

桐朋学園芸術短期大学専攻科特待生規程

(目的)

第1条 桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）では、本学芸術科から本学専攻科（演劇専攻・音楽専攻）への進学を積極的に奨励するとともに、学生のさらなる勉学意欲の向上を企図して、学業奨励金を給付する。

(特待生)

第2条 この規程により、学業奨励金の給付を受ける学生を特待生という。

2. 特待生は、以下の期間の成績ならびに勉学への取り組み姿勢等を評価の対象とし、年間10名以内とする。
 - (1) 1年次後期特待生は、芸術科および専攻科1年次前期までの成績
 - (2) 2年次前期特待生は、芸術科および専攻科1年次の成績

(特待生の決定)

第3条 各専攻会議は、専攻科入学者数を勘案したうえで、専攻科入学定員（音楽（20）、演劇（20））を基準に候補者を選抜し、学科会議を経た上で、前条第2項（1）については6月教授会、（2）については11月教授会で審議・決定する。
2. 特待生として決定した学生には、本人宛てに通知する。

(他の奨学金との関係)

第4条 特待生の選抜にあたっては、同時期に桐朋演劇奨学会および桐朋音楽奨学会奨学生として奨学金の給付を受けている者は対象としない。

(学業奨励金)

第5条 学業奨励金は1名につき100,000円とする。

2. 給付は、各専攻の授業料等納入金から、前項の金額を減ずる形で措置する。授業料等納入金を既に納めている場合は、返金する形で措置する。

(特待生の資格喪失)

第6条 特待生が次の各号のいずれかに該当したと認められた場合は、学科会議および教授会の議を経て、その資格の喪失を決定することができる。

- (1) 退学または除籍となったとき
- (2) 学則及び学生規程による懲戒処分を受けたとき
- (3) 学業成績が不良のとき
- (4) その他特待生として適当でないと認められたとき

(学業奨励金の返還)

第7条 特待生は、第6条に定めるいずれかの項に抵触した場合、資格を喪失し、給付された金額を返還しなければならない。

附 則

1. この規程は平成26年4月1日より改正施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

桐朋学園芸術短期大学被災学生支援奨学金規程

(趣旨)

第1条 この規程は、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が原因で被災した桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）の学生に対し、緊急の経済支援として「桐朋学園芸術短期大学被災学生支援奨学金」（以下「奨学金」という。）を支給することに関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 この規程は、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）により被災した正規学生（以下「被災学生」という。）に対し、奨学金を支給することにより、学業の継続を支援することを目的とする。

(適用対象者)

第3条 この規程は、保証人が東日本大震災の災害救助法適用地域に居住し、被害状況が下記のいずれかにあたる学生を対象とする。

1. 家屋の全半壊、流失
2. 避難所生活を余儀なくされている場合（原発事故によるものも含む）
3. 家計支持者の死亡・行方不明
4. 東日本大震災による直接被害により、家計支持者の年収が激減した場合

(支給額)

第4条 授業料等の免除は、次の各号に掲げる基準により行う。

- (1) 全額免除
家屋全壊、家計支持者の死亡、学資負担者失職又は計画的避難区域外への避難のいずれかに該当する場合
 - (2) 半額免除
住家半壊又は学資負担者負傷の場合
- 2 前項第1号及び前項第2号いずれにも該当しない場合は、桐朋学園芸術短期大学被災学生支援奨学金選考委員会（以下「委員会」という。）にて審議する。

(支給期間)

第5条 支給期間は、本規程の適用を受ける者が在学する課程の修業年限又は標準修業年限に相当する期間を上限とする。

(授業料等の返還)

第6条 被災後に納付した授業料等が免除された場合は、所定の様式による申請に基づき、納付済の当該授業料等を返還する。

(申請手続及び審査)

第7条 奨学金の支給を受けようとする者は、次の書類を提出しなければならない。

- (1) 東日本大震災被災学生に対する入学科・授業料免除申請書
 - (2) 家庭調書、罹災証明書等、被害の程度を認定し得る書類や資料等
- 2 免除の審査は、委員会が行う。

(免除の取消し)

第8条 授業料等の免除を受けている者が、次の各号に該当する場合は、委員会の議を経て免除を取り消す。

- (1) 免除を必要としなくなった場合
 - (2) 免除申請について虚偽の事実が判明した場合
 - (3) 退学・除籍により学籍を失った場合
- 2 前項により授業料等免除を取り消された者は、速やかに授業料等を納付しなければならない。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

附 則

この規程は平成24年4月1日から施行する。

校舎施設の使用について

本学諸施設の学生による使用については、本学の学生による自主練習などのための使用にのみ許可される。

(1) 一般教室・実習室の使用規程要旨

●平日・土曜の使用

○使用教室

一般教室	新館	2111 2112 2211 2212
	旧館	2101 2102 2301 2302 2303 2304 2305
実習室	新館	小劇場 第1実習室 第2実習室
	旧館	ライブスタジオ
	別棟	第3実習室 第4実習室 スペース桐朋 N111(※)

- 使用時間 8時30分～21時50分（第4実習室・スペース桐朋 21時30分） ※音楽専攻の学生は1人1回2時間まで
～22時30分（劇上演実習稽古に限り）
～23時00分（劇上演実習関係の搬入搬出に限り）
※7時30分～8時30分の使用は、鍵の開閉が不都合な教室に限り「早朝使用表」に記入し、他は通常どおりとする。
ただし、使用時間にはカウントしない。
※N111の使用は17時00分～21時30分（行事関係等で使用できない場合がある）

○使用手続

1. 申込時間 平日 8 時15分～16時20分 土曜 8 時15分～12時30分
使用当日の一般教室のみ、上記申込時間以降21時まで、警備員の許可にて使用可
2. 申込方法 ①使用の前日及び当日、『教室使用状況一覧表』『教室使用届』に所定事項を記入する
②研究室で教員、助手の承認印を得る（不在時のみ教学課で対応）
③承認済の『教室使用届』を『使用予約 教室等使用届』ファイルに綴じる
④予約した日時に教室を使用する際、上記③で綴ったファイルから『教室使用届』をとりだし、
ドアの所定場所に表示する
⑤使用後は『使用済み 教室等使用届』ファイルに綴じる
⑥朝の申込みについては、7時30分に窓口在所定の予約順番表を出す。8時15分より記入順に予約する。
※『教室使用状況一覧表』及び『使用予約 教室等使用届』及び、『使用済み 教室等使用届』の
保管場所は以下のとおり
【月～金】 8 時15分～16時00分 ⇒ 教学課窓口
16時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【土曜日】 8 時15分～12時00分 ⇒ 教学課窓口
12時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【休 日】 終日 ⇒ 本館警備室

●休日の使用

- 使用教室 新館の一般教室・実習室および第3実習室
- 使用時間 9 時00分～18時00分 ※音楽専攻、演劇専攻学生共に1人1日4時間まで
～21時00分（劇上演実習稽古に限り）
8 時30分～21時50分（上記の開演日の2週間前から）

○使用手続

1. 申込時間 平日 8 時15分～16時20分 土曜 8 時15分～12時30分
2. 申込方法 平日と同じ
ただし、休日は使用当日の申込ができないため、休前日に予約する

●休業期間中（春季・夏季・冬季）の使用

- 使用教室 旧館/新館の一般教室・実習室およびスペース桐朋・ライブスタジオ・第3・4実習室・N111
期間中の土曜、日曜、休日、及び8/12～16、12/29～1/3の学園閉鎖期間は使用できない。
- 使用時間 9 時00分～18時00分
～21時50分（劇上演実習稽古に限り）
- 使用手続 申込期間・申込方法を休業期間前に掲示にて連絡する。

●その他

1. 複数名で使用する場合は、『教室使用届』に同伴者の氏名を記入すること。ただし、学外の同伴者は認めない。
2. 原則として22時までに学外へ出ること（休日及び休業期間中は18時まで）。
3. 原則として小劇場・第1・2・4実習室は演劇専攻以外の学生は使用できない。
4. 第4実習室及びスペース桐朋はグループ（団体）3名以上の使用とする。
5. 2303、2304、2305教室は18時00分までピアノ使用不可とする。
6. レッスン室・練習室が空いている場合には、ピアノ等の練習のため、少人数での一般教室の使用を控えること。
7. ピアノ使用後は、必ず蓋をして、カバーを掛けること。故意に傷つけた場合は、弁償すること。
8. 教室に置いている備品は原則として使用できない。
9. 使用を取り消す場合は、教学課又は警備員に連絡すること。
10. 16時以降（土曜12時以降）の使用終了後は、警備員詰所のホワイトボードに終了時間を記入すること。
11. 旧館3階のロビーで練習の為の音出しは上の階の図書館に影響が及ぶため、禁止。
12. 第3実習室での楽器使用不可。
13. 音楽専攻以外の学生が2301教室を使用する場合は、1回あたりの時間制限を音楽専攻学生と同様とする。
14. 身の安全に注意し、異変等に気づいたら、教学課又は警備室まで連絡する。
15. 戸締り、消灯、空調（暖房機）の節電を必ず行う。
16. 平日・土曜日使用申込をした学生が、しかるべき理由なしに教室を継続して20分以上空けた場合は、権利を放棄したものとみなし、他の学生が所定の手続きを経て使用することができる。
17. 学外者による制作や主催を目的とした諸施設の使用に関しては、本学専任教員の関与するものは別として、たとえ本学学生が参加するものであっても使用は認めない。

(2) レッスン室・練習室の使用規程要旨

●平日・土曜の使用

○使用教室

レッスン室	新館	2213	2214	2215	2216	2217
	旧館	2001	2002	2003	2004	
練習室	旧館	2005	2006	2007	2008	2009 2010

- 使用時間 8時30分～21時50分 ※1人1回2時間まで、使用後空いている部屋があれば、再度予約可能
※7時30分～8時30分の使用は、鍵の開閉が不要な教室に限り「早朝使用表」に記入し、他は通常どおりとする。
ただし、使用時間にはカウントしない。

○使用手続

1. 申込時間 平日8時15分～16時20分 土曜8時15分～12時30分
使用当日のみ、上記申込時間以降21時まで、警備員の許可にて使用可
2. 申込方法 ①使用の前日及び当日、『レッスン室・練習室使用状況一覧表』『レッスン室・練習室使用届』に所定事項を記入する
②研究室で承認印を得る（研究室が不在時のみ教学課で対応）
③承認済の『レッスン室・練習室使用届』を『使用予約 教室等使用届』ファイルに綴じる
④予約した日時にレッスン室・練習室を使用する際、上記③で綴ったファイルから『レッスン室・練習室使用届』をとりだし、ドアの所定場所に表示する
⑤使用後は『使用済み 教室等使用届』ファイルに綴じる
⑥朝の申込みについては、7時30分に窓口に所定の予約順番表を出す。8時15分より記入順に予約する。
※『レッスン室・練習室使用状況一覧表』及び『使用予約 教室等使用届』及び、『使用済み 教室等使用届』の保管場所は以下のとおり
【月～金】 8時15分～16時00分 ⇒ 教学課窓口
16時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【土曜日】 8時15分～12時00分 ⇒ 教学課窓口
12時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【休日】 終日 ⇒ 本館警備室

●休日の使用

- 使用教室 新館レッスン室
○使用時間 9時00分～18時00分 ※1人1日4時間まで、使用後の再予約は不可
○使用手続
1. 申込時間 平日8時15分～16時20分 土曜8時15分～12時30分
2. 申込方法 平日と同じ
ただし、休日は使用当日の申込ができないため、休前日に予約する

●その他

1. 複数名で使用する場合は、『レッスン室・練習室使用届』に同伴者の氏名を記入すること。ただし、学外の同伴者は認めない。
2. 飲食は認めない。
3. 原則として音楽専攻以外の学生は使用できない。音楽学部生・音高生は、新館レッスン室のみ使用可。
4. 音楽専攻以外で副科・第二実技科目・歌唱（個人レッスン）を履修している学生は、旧館練習室のみ使用することができる（休日は新館レッスン室の使用可）。
5. 原則として22時までに学外へ出ること（休日及び休業期間中は18時まで）。
6. 使用を取り消す場合は、教学課又は警備員に連絡すること。
7. 16時以降（土曜12時以降）の使用終了後は、警備員詰所のホワイトボードに終了時間を記入すること。
8. ピアノ使用後は、必ず蓋をして、カバーを掛けること。故意に傷つけた場合は、弁償すること。
9. 身の安全に注意し、異変等に気づいたら、教学課又は警備室まで連絡する。
10. 戸締り、消灯、空調（暖房機）の節電を必ず行う。
11. 平日・土曜日使用申込をした学生が、しかるべき理由なしにレッスン室を継続して20分以上空けた場合は、権利を放棄したものとみなし、他の学生が所定の手続きを経て使用することができる。

(3) 大学校舎レッスン室使用規程要旨 (音楽専攻学生のみ)

●一般レッスン室 (個人練習・二重奏練習)

主に地下の部屋を使用できる。

●練習時間帯 (一般授業開講期間 — オリエンテーション期間を含む)

平日	早朝練習時間帯 5:10am ~ 8:00am 授業時間帯 8:00am ~ 5:00pm 夜間練習時間帯 5:00pm ~ 9:45pm	休日	休日練習時間帯 8:00am ~ 9:45pm
----	---	----	-------------------------

[授業時間帯] 授業・レッスンに使用されていない時は自由に練習できる。(特別な届の必要はない)

[練習時間帯] その都度使用願を提出し、許可を受ける。

●使用手続

1. 申し込みは直接本人が行う。伴奏者などの代理人の申し込みは受け付けない。
2. 1回の申し込みは1人(1グループ)1日につき1件とし、1件についての時間を次のように制限する。
早朝練習時間帯→特に定めなし 夜間練習時間帯→2時間以内
休日練習時間帯→4時間以内
3. 申し込みにあたっては、『レッスン室一般使用許可願』に必要事項を記入し、身分証明書を添えて窓口にて提出する。(用紙は大学事務局前にある)
4. 当日、大学の警備員室窓口で、予約申し込み受け付け時に渡された整理券との引き換えにより交付される許可証を受けとってから、使用を開始できる。

受付窓口など			
早朝	警備員室	当日	5:10am ~ 7:00am
夜間	教務課カウンター	当日	8:30am ~ 2:00pm (予約)
	警備員室	当日	5:00pm ~ 9:00pm
休日	教務課カウンター	前日	8:30am ~ 2:00pm (予約)
	警備員室	当日	8:00am ~ 9:00pm

注意 ・休日の正午～午後1時、午後6時～午後7時は受け付けない。

注意 ・上記教務課カウンターでの受付時間は午後2時までであるが、当日の教室・レッスン室の状況により早める場合もある。

学校法人桐朋学園 個人情報保護方針

学校法人桐朋学園では、教育・研究、事務等の諸活動において、多くの個人情報を取り扱っております。学生、生徒、児童、園児をはじめその保護者、そして教職員等、学園にかかわる方々の個人情報を慎重に取り扱い、適切に保護、管理することは、教育機関としての本法人の社会的責務であると認識しております。

この責務を果たすため、本法人は、個人情報保護法及びその他の規範を遵守するとともに、以下に掲げる方針のもと、個人情報の適切な保護、管理を実行いたします。

1. 個人情報の取得

個人情報の取得に際しては、利用目的を特定のうえ、これを明示し、適法かつ公正な方法により、原則として本人から取得します。

2. 個人情報の利用

個人情報は、取得の際に明示した利用目的の範囲内で利用いたします。本人の同意を得ないで、目的外での利用はいたしません。

3. 個人情報の保護、管理

個人情報の正確性及び安全性を確保するために、安全管理対策を講じ、個人情報の漏えい、改ざん、紛失等を防止します。

本法人は、各部門各機関に「個人情報保護管理責任者」を置き、個人情報の保護、管理について、責任の所在を明確にしております。

個人情報の取扱いは、その権限を付与された教職員のみが、業務の遂行上必要な限りにおいて取り扱うものとします。なお、個人情報を取り扱う教職員であるか否かにかかわらず、学園に勤務する全ての者に必要かつ適切な監督を行い、加えて、教育・研修等の機会を通して意識の啓発に努めます。

個人情報に関する業務を外部に委託する場合は、委託先において個人情報の安全管理が図られるよう、契約書を取り交わすなど、必要かつ適切な措置を講じます。

4. 個人情報の第三者への提供

原則として、法令に定める場合等を除き、事前に本人の同意を得ることなく、第三者に個人情報を提供することはいたしません。
なお、第三者に個人情報を提供する場合には、提供先においてその安全管理が図られるよう、契約書を取り交わすなど、必要かつ適切な措置を講じます。

5. 個人情報の開示、訂正、利用停止、削除等の請求並びに不服の申立

各機関の「個人情報保護管理責任者」は、開示、訂正、利用停止、削除の請求等に関しては、本人であることの確認をしたのち、速やかに対応いたします。

6. 個人情報に対する保護、管理体制の継続的改善

個人情報保護の重要性を、本法人の役員をはじめ学園に勤務する全ての者に周知徹底するとともに、今後も本方針に則り、保護・管理体制の見直し、改善、向上に努めます。

桐朋学園芸術短期大学 学生個人情報保護規程

第1章 総則

(目的)

第1条 桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）は個人情報（個人情報データベースを含む。以下「個人情報」という。）の保護が、人格の尊厳に由来する基本的人権の保障に係る問題であることを深く認識し、本学が保有する個人情報の取扱いに関する基本事項を定める。

(用語の定義)

第2条 この規程において、「学生」とは次の各号によるものとし、「教職員」とは専任の教職員ならびに本学の業務に直接かかわりがあり、またはかかわりがあった者をいう。

- (1) 「本学において教育を受けている者」で在學生、科目等履修生や聴講生など。
- (2) 「本学において教育を受けようとする者」で受験生、入学前の合格者、入学ガイダンスへの参加者など。
- (3) 「過去において、本学において教育を受けた者」で卒業生、修了生、中退など。
- (4) 「過去において、本学において教育を受けようとした者」で不合格者や入学辞退者など。

2 この規程において、「個人情報」とは次の各号によるものとする。

- (1) 学生について特定の個人が識別されるもの（氏名、住所、生年月日、電話番号）。
- (2) 識別され得るもの（映像、デジタル記録等）。
- (3) 個人を特定できないものであっても学内で対応付けられた個人情報がある場合のもの（学籍番号、IPアドレス等）。
- (4) 教職員が業務上取得または作成した情報（文書、写真、フィルム、磁気テープその他これらに類するものに記録されたものを含む。）。

3 この規程において「個人情報データベース」とは、個人情報が含まれる情報の集まりで、検索できる状態のものであって、ユーザーIDとユーザーが記録されているログ情報ファイル、紙ベースの住所録や名刺など整理されて検索できる利用可能な状態のデータベースをいう。

(責務)

第3条 学長はこの規程の目的を達成するため個人情報の保護に関し次の各号に対する必要な措置を講じなければならない。

- (1) 利用目的の特定・公表
 - (2) 適正管理、利用、第三者への提供
 - (3) 本人の権利と関与
 - (4) 本人の権利への対応
 - (5) 苦情の処理
- 2 教職員または教職員であった者は、業務上知り得た個人情報をみだりに他人に知らせ、または不当な目的に使用してはならない。
- 3 学生、教職員は個人情報保護の重要性を認識し、本規程によって学生個人の権利利益を侵害しないように努めなければならない。

第2章 個人情報の収集および利用目的の特定・公表等

(個人情報収集の制限)

第4条 教職員が業務上学生の個人情報を収集するときは、利用目的を明確に特定・公表し、その目的達成に必要な最小限度の範囲で収集しなければならない。ただし、思想および信教に関する個人情報は、いかなる理由があろうともこれを収集してはならない。

2 あらかじめ個人情報を「第三者に提供」することを想定している場合には、利用目的で、その旨特定しなければならない。

3 インターネットのCGI等での個人情報の入力には、入力ホームページ内には必ず利用目的をユーザーの目に付く位置に記載しなければならない。

4 教職員が業務上、個人情報を収集するときは、適正かつ公正な手段により、次の各号のいずれかに該当するときに除き、直接本人から収集しなければならない。

- (1) 本人の同意があるとき。
- (2) 個人の生命、身体、健康、財産に対する急迫の危険を避けるためにやむを得ないと認められるとき。

- (3) 教員の教育指導上特段の必要性があるとき。
- (4) 法の定めるところにより、行政機関から依頼があったとき。
- (5) 指導または相談援助に関わって、本人から収集したのでは目的を達成することができないか、業務に支障があると認められるとき。
- (6) 学長が正当な理由があると認めたとき。

(個人情報の適正管理)

第5条 学長は、個人情報の保護のため、次に各号に掲げる事項について、適正で安全な措置を講じなければならない。

- (1) 紛失、滅失、毀損、破壊その他の事故の防止
 - (2) 改ざんおよび漏洩の防止
 - (3) 個人情報の正確性および最新性の保持
 - (4) 不要となった個人情報のすみやかな廃棄または消去
- 2 学長は前項の事務をはじめ、本規程に基づく業務を適切に執行するため、業務ごとに個人情報保護管理責任者を選任するとともに次の組織的・人的・物理的、技術的その他の広範囲な安全対策措置を講ずる。

組織的安全管理措置

- ・個人情報保護管理者の設置、組織体制の整備
- ・学内諸規程の整備と運用
- ・個人情報取扱い台帳の整備
- ・安全管理措置の評価、見直し、改善
- ・事故または違反への対処

人的安全管理措置

- ・雇用時や契約時において非開示契約を締結
- ・教職員に対する教育・訓練の実施

物理的安全管理措置

- ・入退室管理
- ・盗難対策
- ・機器、装置等の物理的な保護

技術的安全管理措置

- ・個人情報のアクセス認証・制御・記録・権限管理
- ・不正ソフトウェア対策
- ・移送、通信時の対策
- ・動作確認時の対策
- ・情報システムの監視

その他重要事項

- ・個人情報を閲覧できる教職員の限定
 - ・個人情報の持ち出し制限
 - ・外部からの個人情報への不正アクセス防止策の導入
 - ・教職員に対する個人情報保護研修の実施
 - ・個人情報漏洩時は当該本人に速やかに通知
 - ・事件内容の公表（類似事件の発生回避）
- 3 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する教職員に対する情報セキュリティ対策として、個人情報に対するアクセス制限、アクセス管理及び監視を行う。
 - 4 個人情報保護管理責任者は、業務マニュアルを定め、持ち出し制限や移動時の取り決め、暗号化等のプロセスを決め、全て申請・承認によって処理することを決めて、守らせる。
 - 5 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する教職員に個人情報を取り扱わせるに当たっては、当該個人情報の安全管理が図られるよう、当該教職員に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。
 - 6 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する個人情報の取扱いの全部または一部を委託する場合は、その取扱いを委託された個人情報の安全管理が図られるよう、委託を受けた者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。
 - 7 個人情報保護管理責任者は、第6条に掲げる場合を除くほか、あらかじめ本人の同意を得ないで、個人情報を第三者に提供してはならない。

(個人情報の利用制限)

第6条 教職員は、業務上収集した個人情報をその目的以外のために利用または提供してはならない。ただし、次の各号のいずれかに該当するときはこの限りでない。

- (1) 本人の同意があるとき。
- (2) 個人の生命、身体、健康に対する急迫の危険を避けるためにやむを得ないと認められるとき。
- (3) 教員および保護者の教育上、特段の必要性があるとき。
- (4) 法の定めがあるとき。
- (5) 学長または個人情報保護管理責任者が必要と認めたとき。

- 2 前号一から五の各号に該当して個人情報を利用または提供する場合、または緊急に対応した場合は、業務責任者はすみやかに個人情報保護管理責任者に届け出なければならない。

(個人情報に関する業務の学外委託)

第7条 個人情報に関する業務を学外に委託するときは、業務責任者は個人情報保護管理責任者の指導のもと委託業者との間で個人情報の保護に関する必要な措置をとらなければならない。

(収集の届出)

第8条 教職員は、新たに個人情報を収集するときは、あらかじめ次に事項について個人情報保護管理責任者に届け出なければならない。

- (1) 個人情報の名称
 - (2) 個人情報の利用目的
 - (3) 個人情報の収集の対象者
 - (4) 個人情報の収集方法
 - (5) 個人情報の記録項目
 - (6) 個人情報の記録の形態
- 2 前項により届け出た事項を変更または廃止するときは、業務責任者は、あらかじめこれを個人情報保護管理責任者に報告しなければならない。

第3章 個人情報の開示, 訂正等

(個人情報の開示)

第9条 学生は本学が保有する自己に関する個人情報の開示を請求することができる。

- 2 開示の請求があったときは、個人情報保護管理責任者は遅滞なくこれを開示しなければならない。ただし、その個人情報が、個人の選考、評価、判定、学生健康記録その他に関するものであって、本人に知らせないことが明らかに適当であると認められるときは、その個人情報の全部または一部を開示しないことができる。
- 3 個人情報の全部または一部を開示しないときは、その理由を本人に通知しなければならない。
- 4 第1項に規定する請求は、学長に対し、本人であることを明らかにして、次に掲げる事項を記載した文書を提出することにより行う。
- (1) 所属および氏名
 - (2) 個人情報の名称および記録項目
 - (3) 請求の理由
 - (4) その他学長が必要と認めた事項

(個人情報の訂正または削除)

第10条 学生は、自己に関する個人情報の記録に誤りがあると認めるときは、前条第4項に定める手続に準じて、学長に対し、その訂正または削除を請求することができる。

- 2 学長は前項の規定による請求を受けたときは、すみやかに調査のうえ、必要な措置を講じ、結果を本人に通知しなければならない。ただし、訂正または削除に応じないときは、その理由を文書により本人に通知しなければならない。

第4章 不服の申立て

(不服の申立て)

第11条 自己の個人情報に関し、第10条第2項に規定する請求に基づいてなされた措置に不服がある学生は、本人であることを明らかにして、学長に対し、申立てを行うことができる。

- 2 学長は、前項の不服申立てを受けたときは、すみやかに審査し、その結果を文書により本人に通知しなければならない。
- 3 不服の申立ては、次に掲げる事項を記載した文書を学長に対し提出することにより行う。
- (1) 不服の申立てを行う者の所属および氏名
 - (2) 不服申立て事項
 - (3) 不服申立て理由
 - (4) その他学長が必要と認めた事項

第5章 規程管理

(所 管)

第12条 本規程の管理責任者は学長とし、所管は短期大学教学課とする。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は教授会の議を経て学長が行う。

付 則

第1条 この規程は平成17年7月11日から施行する。

桐朋学園芸術短期大学 セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程

(目的)

第1条 この規程は、桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）におけるセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントおよびその他のハラスメント（以下「セクシュアル・ハラスメント等」という。）の防止および排除のための措置並びにセクシュアル・ハラスメント等に起因する問題が生じた場合に適切に対応するための措置（以下「セクシュアル・ハラスメント等の防止等」という。）に関し、必要な事項を定めることにより、本学における良好な学習・教育・研究・労働環境の維持・確立を図ることを目的とする。

(定義)

第2条 この規程における用語の意義は、次の各号に掲げるものをいう。

(1) セクシュアル・ハラスメント

ア. 学生、教職員または関係者が、意図すると否にかかわらず、性差別的または性的な言動によって、相手を不快にさせる行為

（例）性的な噂を流したり、人を傷つける性的な内容の冗談を言ったりすること。

性的な文書や画像等の掲示や提示をすること。

相手が望まない飲食等にしつこく誘うこと。

不必要に身体に触れること

イ. 学生、教職員または関係者が、利益もしくは不利益を与えることを利用して、または利益を与えることを代償として、相手に性的な誘いまたは要求をする行為

（例）成績評価等と引き換えに、性的要求を迫ること

(2) アカデミック・ハラスメント

教育・研究の場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の勉学・研究意欲や研究環境を害する言動または行為

(3) パワー・ハラスメント

職場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の就労意欲や就労環境を害する言動または行為

(4) その他のハラスメント

学生、教職員または関係者が、他の学生、教職員または関係者に飲酒の強要、喫煙にまつわる不法行為、誹謗、中傷、風評の流布などにより人権を侵害したり不快にさせたりする行為

(5) セクシュアル・ハラスメント等に起因する問題

セクシュアル・ハラスメント等のため学生等の修学上または職員の就労上の環境が害されることおよびセクシュアル・ハラスメント等への対応に起因して学生等が修学上または職員が就労上の不利益を受けること

(6) 学生

本学で修学する一般学生（本科生・専攻科生）、科目等履修生（研究生含む）、単位互換履修生、外国人留学生および委託生をいう。

(7) 教職員

教員、事務職員、非常勤講師、嘱託職員、定時職員、委託職員など本学に勤務するすべての教職員をいう。

(8) 関係者

学生の保護者および関係業者等職務上の関係を有する者をいう。（ただし、教職員および学生を除く。）また、かつて本学に在籍し、現在大学を離れた者であっても、セクシュアル・ハラスメント等と判断される行為のどちらか一方の当事者が、学生または教職員である場合はこれに含める。

(9) 教育・研究の場

本学では、常勤・非常勤を問わず、本学に在職する教職員と学生との間、および本学の学生同士の間には、つねに教育環境上の関係があるものとみなす。よって大学におけるセクシュアル・ハラスメント等は、正課の授業時間中の大学構内における場合にとどまらず、課外活動や学外を含むあらゆる場合のそれを意味する。

(学生および教職員の責務)

第3条 学生および教職員は、相互に個人の人格を尊重するよう努め、セクシュアル・ハラスメント等を行ってはならない。

2. 学生および教職員は、前条で規定した用語の意義を深く認識し、セクシュアル・ハラスメント等の防止および排除に努めなくてはならない。

3. 学生のセクシュアル・ハラスメント等に関する苦情や相談については、全ての教職員がこれにあたり、相談を受けた教職員は、必要な指導、助言を行うとともに、事実関係の調査に協力するなど、適切な対応をとらなければならない。

(学長の責務)

第4条 学長は、セクシュアル・ハラスメント等を差別、人権侵害として禁止するとともに、その防止および排除するため、本学の教職員に対し、この規程の周知徹底を図るものとする。

2. 学長は、万一セクシュアル・ハラスメント等による問題が本学内に生じた場合は、必要な措置を迅速かつ適切に講じなければならない。

(防止委員会)

第5条 セクシュアル・ハラスメント等に関する具体的事例について、事実関係の調査および対応策の検討を行うため、また、セクシュアル・ハラスメント等の防止に関する広報および啓蒙等に関する業務を行うためにセクシュアル・ハラスメント等防止委員会（以下「防止委員会」という）を設置する。

2. 防止委員会の運営については、別に定める。

(相談窓口)

第6条 防止委員会は、セクシュアル・ハラスメント等に関する苦情相談が学生、教職員または関係者からなされた場合に対応するため、セクシュアル・ハラスメント等相談窓口（以下「相談窓口」という。）を設置し相談員を配置する。

2. 相談窓口の運営については、別に定める。

(調査委員会)

第7条 防止委員会は、特定の事例について調査が必要と判断した場合、セクシュアル・ハラスメント等調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置くことができる。

2. 調査委員会の運営については、別に定める。

(不利益取扱いの禁止)

第8条 学長および教職員は、セクシュアル・ハラスメント等に関する苦情相談、当該苦情相談に関する調査への協力その他セクシュアル・ハラスメント等に関して正当な対応をした学生または教職員に対し、そのことをもって不利益な取扱いをしてはならない。

(懲戒)

第9条 セクシュアル・ハラスメント等を行った教職員は、その態様等によっては、桐朋学園女子部門就業規則第54条(3)「教職員としての信用を著しく失う非行があった場合」に該当するものとして、懲戒処分を行うことがある。

2. セクシュアル・ハラスメント等を行った学生は、桐朋学園芸術短期大学学則第66条に基づき、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

附 則

1. この規程は平成20年4月1日より施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

演劇専攻自治会 自治会規約

第1章 総 則

(名称・本部)

第1条 本会は、桐朋学園芸術短期大学・演劇専攻自治会とし、その本部を桐朋学園芸術短期大学内に置く。

(会 員)

第2条 本会は桐朋学園芸術短期大学芸術科・演劇専攻生並びに専攻科生をもって組織する。

(目 的)

第3条 本会は、会員一人一人の主体性にとり、演劇芸術の創造と、その新なる運動体を形成することを目的とするものである。各会員はその能力を十二分に発揮し、思想性を高めると共に、既存の諸観念を乗り越え自らの主体を確立し遂に現在の広漠たる芸術分野に、ひとつの指標を打ち立てる責務を担う。

第2章 構 成

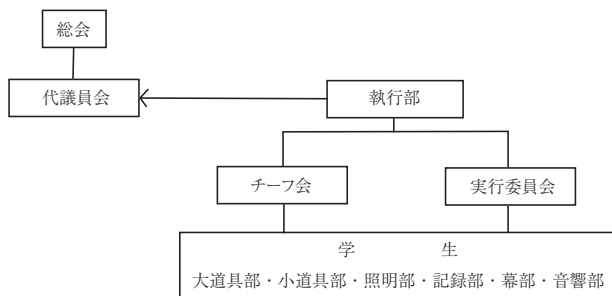
(構 成)

第4条 本会は次の機関を設ける。

1. 総会
2. 代議員会（会計監査、選挙管理委員会）
3. 執行部
4. チーフ会
5. 各種行事実行委員会

(議決機関)

第5条



(総会)

第6条 総会は本会における最高の機関であり、第2条に定められた全会員をもって組織する。

(総会の開催)

第7条 総会は原則として年2回開催し、本会会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合及び全会員の5分の1以上の要請があった場合には会長は臨時に総会を開催しなければならない。

会長は総会開催の3日前迄に、日程、議案、その他必要事項を全会員に明示しなくてはならない。

(総会成立)

第8条 総会は全会員の過半数（休学者をのぞく在籍数）をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(総会決議)

第9条 総会において次のことを決議する。

1. 規約改正に関すること。
2. 予算及び決算に関すること。
3. 運営方法に関すること。

(代議員会)

第10条 本委員会は総会に次ぐ議決機関であり、学年代議員（各学年2名、ただし専攻科は2学年をもって2名とする）をもって組織する。

(代議員会の開催)

第11条 本委員会は原則として本会会長が必要と認めた場合会長が招集する。ただし学年代議員の3分の1以上の要請があった場合、会長は臨時に代議員会を開催しなければならない。

会長は代議員会開催の7日前迄に、日程、議案、その他必要事項を全会員に明示しなくてはならない。

(代議員会の成立)

第12条 本委員会は、学年代議員の過半数をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(代議員会の決議)

第13条 代議委員会において次のことを決議する。

1. 学年代議員の提出事項。
2. 各委員会からの提出事項
3. その他本委員会において必要と認められる事項。

(執行部)

第14条 執行部は本会を円滑に運営する機関であり、会長1名、副会長2名、会計2名、書記2名をもって組織する。

第15条 執行部は次の事項を執行する。

1. 総会及び代議員会への議案提出
2. 予算原案及び決算書の作成
3. その他必要事項

(執行部役員の職務)

第16条 会長は本会を代表し、本会の一切の会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長不在のときの職務を代行する。会計は会の会計を、書記は会の記録を担当する。

(各部)

- 第17条 1. 演劇専攻の全学生は、4月中に各部に所属しなければならない。原則として、部署の移動は認められない。
2. 各部は、1名のチーフと1名のチーフ補佐を執学年から選出しなければならない。相談役として専攻科から各部に1名付けるものとする。

(チーフ会)

第18条 チーフ会は各部チーフをもって組織する。

(チーフ会の開催)

第19条 チーフ会は原則として会長が必要と認めた場合、チーフ会議長がこれを招集する。ただし、チーフの3分の1以上の要請があった場合には、臨時にチーフ会を開催しなければならない。

(チーフ会の成立)

第20条 チーフ会はチーフの過半数をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(チーフ会決議)

- 第21条 チーフ会において次のことを決議する。
1. 道具、備品に関すること。
 2. 仕込み、ばらしに関すること。
 3. その他チーフ会において必要と認められた事項。

(各種実行委員会)

第22条 本委員会の役員は、行事ごとに執行部が必要数を公募し、各行事の企画運営及び総括を行う。

第3章 選挙

(学年代議員の選出)

第23条 学年代議員は年度始め学年ごとに2名選出し、総会で了承を得る。

(学年代議員の任期)

第24条 学年代議員の任期は毎年4月1日より翌年3月31日までの1年間とする。

(議長)

- 第25条 1. 総会の議長は、総会で選出されたものとする。
2. 学年代議員の議長は、代議員会で選出されたものとし、総会で承認を得る。
3. チーフ会の議長は、執行部副会長のうちいずれか1名を議長とする。

(執行部の選出)

第26条 執行部は演劇専攻1学年の中から選出し、総会で承認を得る。

(執行部の任期)

第27条 執行部の任期は毎年10月から翌年9月末日までとし、10月中は連絡期間とし、その期間の続任を認める。

(選挙管理委員会)

第28条 本委員会は各学年代議員のうち1名、計3名をもって組織される。

(リコール)

第29条 リコール請求は会員の3分の2以上の要求によって成立し、選挙管理委員会がこれにあたる。

第4章 会計

(会費)

第30条 本会の財務は、自治会費にその基をおく。

(金額)

第31条 本会の会員は本会によって定められた会費(入会金2,500円、年額3,500円)を定期に納入しなければならない。ただし、入会金は入学年度のみとし、芸術科演劇専攻から専攻科演劇専攻への進学者はこれを免除される。

(会計年度)

第32条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月末日までとする。会計年度に剰余金のある場合は翌年に繰り越す。

(会計報告)

第33条 本会に収支決算書は執行部会計が作成し代議員会で審議し、総会において承認されることにより成立する。

(会計監査)

第34条 本会に会計監査6名(学年代議委員)を置き、本会の会計を監査する。

第5章 クラブ

(クラブ)

第35条 本会員は第2条の主旨に基づきクラブならびに同好会を結成することができる。

(構成)

第36条 各クラブは年度始めに構成員名簿および活動計画を執行部に提出しなければならない。

(クラブ会計)

第37条 各クラブの会計担当者は年度初めに前年度決算報告ならびに新年度予算申請書を執行部に提出しなければならない。

(成立基準)

第38条 下記の成立基準に満たないものは同好会とする。

1. 活動開始から1年未満のもの
2. 人数が5名に満たないもの

第6章 附 則

第39条 本規約の改正は本会会員の3分の1以上をもって成立する。

第40条 本会規約は2002年4月1日より施行する。

音楽専攻学生会 学生会会則

第1章 総 則

(名 称)

第1条 桐朋学園芸術短期大学音楽専攻に学生会を置き、桐朋学園芸術短期大学音楽専攻学生会(以下、本会という)と称する。

(会 員)

第2条 本会は桐朋学園芸術短期大学芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻の学生全員をもって組織する。

(本 部)

第3条 本会の本部は、東京都調布市若葉町1-41-1桐朋学園芸術短期大学内に置く。

(目 的)

第4条 本会会員は個人の人格を尊重し、学生相互の親睦をはかり、学生会活動を有効かつ円滑に運営し、学生の福祉増進をはかることを目的とする。

第2章 機 関

(機 関)

第5条 本会に次の機関を置く。

1. 総 会
2. 執行部

(総 会)

第6条 総会は本会の最高決議機関であって、芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻の学生全員をもって組織する。

(総会の開催)

第7条 総会は毎年4月、年1回の開催を原則とし、本会会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合及び全会員の3分の1以上の要求が合った場合に会長は臨時に総会を招集しなければならない。

(総会成立)

第8条 総会は全会員の3分の2以上の出席をもって成立し、その決議は出席者の過半数の賛成を必要とする。(委任状出席を認める。)ただし、会則改正の場合は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(議長・総会決議)

第9条 総会の議長はそのつど選出され、総会において次のことを決議する。

1. 会則の改正に関すること。
2. 運営方法に関すること。
3. 予算および決算に関すること。

(執行部)

第10条 執行部は本会の運営を円滑に執行する機関であり、次のことについて共同の責任を負うものとする。

1. 各行事の企画および運営
2. 予算の作成および決算報告
3. その他の必要事項

(執行部)

第11条 執行部は次の役員をもって構成する。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 会計 2名
4. 書記 2名
5. 桐朋祭実行委員 必要数

(職務)

第12条 会長は本会の一切の会務を統括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐し、会長不在のときの任務を代行する。書記は会の記録を、会計は会の会計を、桐朋祭実行委員は桐朋祭の企画運営などを担当する。

(会計監査)

第13条 本会に会計監査2名を置き、本会の会計を監査する。

(顧問)

第14条 本会に顧問を置く。顧問は桐朋学園芸術短期大学音楽専攻の教員に委嘱し、本会活動全般に関して指導助言を仰ぐものとする。

第3章 選挙

(執行部役員選出)

第15条 執行部役員は学年初め、学年ごとに3名から4名選出する。

(任期)

第16条 執行部の役員の任期は4月1日より翌年の3月31日までの1年間とし、再任を妨げない。ただし、任期途中で欠員が生じた場合は補充を行う。この場合は、後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長、副会長選出)

第17条 会長、副会長は就任の前年度の12月までに選出し、総会で承認を得る。

(会計、書記)

第18条 会計、書記は執行委員の互選による。

(桐朋祭委員)

第19条 桐朋祭委員は執行委員に加え、必要数を公募する。

(会計監査)

第20条 会計監査は総会によって選出される。

第4章 会計

(会費)

第21条 本会の財務は、会費にその基をおく。

(金額)

第22条 本会の会員は本会によってさだめられた会費(入会金2,000円、年額2,000円)を定期に納入しなければならない。ただし、入会金は入学年度のみとし、芸術科音楽専攻から専攻科音楽専攻への進学者は、これを免除される。

(会計年度)

第23条 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わるものとする。

(会計報告)

第24条 本会の収支決算書は執行部会計が作成し、執行部に提出された後に会計監査と総会の承認をえるものとする。

第5章 クラブ

(クラブ)

第25条 会員相互の親睦を深め、責任ある自主活動を行うため、本会に教養、趣味、特技などを同じくするクラブならびに同好会を結成することができる。

(構成)

第26条 各クラブは年度初めに構成員名簿、および活動計画を執行部に提出しなければならない。

(クラブ会計)

第27条 各クラブの会計担当者は年度初めに前年度決算報告ならびに新年度予算申請書を執行部に提出しなければならない。

(成立基準)

第28条 下記の成立基準に満たないものは同好会とする。

1. 活動開始から1年未満のもの
2. 人数が10名に満たないもの（同好会は5名から活動できる）

(クラブ顧問)

第29条 各クラブならびに同好会には顧問を置く。顧問は桐朋学園芸術短期大学の常勤の教職員に委嘱する。

第6章 会則の改正

(会則の改定)

第30条 会則の改正は本会が必要と認め、かつ総会で全会員の3分の2以上の承認を得た場合に行われる。

(会則改定委員会)

第31条 本会は必要に応じ、会則改正委員会を置き、会則の改正を検討させることができる。

附 則

本会会則は平成8年4月1日より施行する。

音楽専攻同窓会「桐の音」同窓会会則

第1条 名 称

桐朋学園芸術短期大学芸術科音楽専攻同窓会「桐の音」（以下本会とする）と称する。

第2条 目 的

本会は会員相互の親睦と向上をはかることを目的とする。

第3条 事 業

本会は下記の事業を行う。

- (1) 会員名簿及び会報の発行。
- (2) 会員の音楽活動の後援及び奨励。
- (3) 母校の発展に寄与し、後援する。
- (4) その他必要に応じて事業の開催・後援を行う。

第4条 組 織

- (1) 本会は正会員と特別会員により組織される。
- (2) 本会の運営は正会員より選任された役員及び委員により遂行される。
- (3) 正会員のうち若干名を理事とする。

第5条 本部及び事務局

- (1) 本会の本部は桐朋学園芸術短期大学内に置く。
- (2) 本会の事務局は桐朋学園芸術短期大学音楽研究室に置く。

第6条 正会員及び特別会員

- (1) 正会員は母校の卒業生及び母校の一時在籍者のうち入会希望者とする。
- (2) 特別会員は母校の現教職員のうちの専門科目の教職員及び理事会から推薦された者とする。

第7条 名誉会長及び名誉顧問、顧問

- (1) 本会は桐朋学園芸術短期大学学長を名誉会長に推挙する。
- (2) 桐朋学園芸術短期大学音楽専攻主任を顧問に推挙する。
- (3) 理事会は必要に応じ顧問を推挙できる。

第8条 理事

- (1) 理事は本会会長経験者及び理事会役員会で認められた者とし、任期は定めないものとする。
- (2) 理事は、理事及び会長、役員会が必要と認めた場合、会の運営活動に参加することができる。

第9条 役員及び委員

- (1) 本会の役員は会長、副会長、書記・会計・庶務からなり、委員は代表委員、音楽活動委員、編集委員とし、役員及び委員は全員が評議する権利を持つ。
- (2) 役員及び委員は定められた方法により、正会員の中より選任される。
- (3) 役員及び委員の任期は原則として5年間とし、再選を阻まない。

第10条 役員の職務・権限

- (1) 会長は会務を統括し、会の代表者としての活動をする。
- (2) 副会長は4名とし、会長を補佐し、必要ある時は会長の任務を代行することができる。
- (3) 副会長は運営委員長、代表委員長、音楽活動委員長、会報委員長があたり、各々担当の委員会活動を統括する。
- (4) 役員及び委員選任の決定及び任命は、会長及び副会長の合議により行う。
- (5) 運営委員長は書記・会計・庶務を統括し、運営実務を担当する。
- (6) 役員は必要に応じて理事会に参加することができる。

第11条 委員の任務

- (1) 代表委員は各期2名以上とし、各期会員の動勢、及び活動を把握し、また名簿作成にあたり、名簿、会報その他印刷物を配布する。
- (2) 音楽活動委員は、会員の演奏会活動の支援、研究会その他音楽活動の中心となる活動をする。
- (3) 編集委員は、同窓会の機関紙としての会報の企画・編集にあたる。

第12条 総会

- (1) 総会は、会長またはその代行が必要と認めた場合これを招集する。
- (2) 本会則の改正は総会において承認される。

第13条 理事会

- (1) 理事会は、年1回以上開くものとする。
- (2) 理事及び会長、役員会が必要と認めた場合これを招集することができる。
- (3) 必要に応じて役員会に議事を提出することができる。

第14条 役員会及び委員会

- (1) 役員会は会長、副会長、書記、会計、庶務からなる。
- (2) 役員会は年1回以上開くものとするが、会長及び役員が必要と認めた場合これを招集することができる。
- (3) 役員会の議事は出席役員の過半数でこれを決し、可否同数の場合は理事、役員合議の上審議し決定するものとする。
- (4) 代表委員会、音楽活動委員会、会報委員会は会則にのっとり個別に活動することができる。
- (5) 会報委員会は会報委員長及び編集委員からなる。

第15条 本会の経費

- (1) 本会の経費は、年会費、入会金、臨時会費、寄付金をもって充てる。
- (2) 入会金は、本会の入会と同時に納入する。

第16条 会計年度及び決算

- (1) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
- (2) 決算は会報により会員へ報告されなければならない。
- (3) 会計監査を置く。

第17条 会則の改定

- (1) 本会則の改定は役員会により審議され総会により承認される。
- (2) 同窓会の運営実務については、別にこれを定める。

第18条 報告

- (1) 総会及び役員会、委員会で承認された事項は会員に報告されなければならない。

演劇専攻同窓会 同窓会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は桐朋学園芸術短期大学・芸術科演劇専攻（以下、演劇科と略す）同窓会と称する。
- 第2条 本会は会員の相互の連結・親睦・団結及び演劇文化の向上をめざし、母校の発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は以下の活動を行なう。
1. 総会その他会員間の親睦を計るための集会
 2. 会員名簿・会報等の発行
 3. その他、前条の目的に則した活動への支援
- 第4条 本会の本部及び事務局は桐朋学園芸術短期大学演劇研究室内に置く。

第2章 会 員

- 第5条 本会は以下の会員により構成される。
1. 正会員・演劇科に在籍した者、及び専攻科演劇専攻のみに在籍した者。
 2. 賛助会員・演劇科教職員、演劇科担当事務職員及びその職にあった方々。

第3章 組 織

- 第6条 本会は以下の役員を置く。
1. 会長1名・会長は本会を代表し会務全般を統括する。
 2. 副会長3名・副会長は会長を補佐し、必要ある場合これを代行する。
 3. 事務局長1名・事務局長は会務全般に関する事務を統括する。
 4. 会計2名・会計は金銭出納に関する事務を行う。
- 第7条 役員は必要に応じ随時役員会を開く。
- 第8条 役員は正会員中から幹事会（第11条及び第4章第15条参照）により選出し、総会（第4章第14条参照）において正会員の承諾を受ける。
- 第9条 役員は任期は次回定例総会までとする。但し再任は妨げない。
- 第10条 役員は正会員の1/3の不信任があった場合、ただちに役員改選をしなければならない。
- 第11条 本会は各期3名の幹事を期ごとの互選によって置く。その任務・任期は以下の通りである。
1. 各期会員の意見を掌握し本会会務に反映させる。
 2. 各期会員の転居地変更を掌握し名簿作製の任に当たる。
 3. 本会会費（第5章第17条参照）の徴収の任にあたる。
 4. 任期は原則として4年とする。但し再任は妨げない。
 5. 改選されたときは、事務局に速やかに届け出ること。
- 第12条 本会は名誉会長を置き、その職は本学の学長職にある者に委嘱する。
- 第13条 本会は監査役2名を置く。任務、選出及び任期は以下の通り。
1. 会計等の会務を監査し総会・幹事会において必要に応じて監査報告をする。
 2. 正会員中から幹事会により選出する。
 3. 任期は次回定例総会までとする。但し再任は妨げない。

第4章 総会及び幹事会

- 第14条
1. 総会は原則として4年に1度開かれる。
 2. 総会は正会員の1/3（委任状を含む）の出席者をもって成立する。
 3. 正会員の1/10の要求があったときは速やかに臨時総会を開かねばならない。
 4. 総会においては次の事項を承認決定する。
 - ① 会則の改正
 - ② 役員の人選
 - ③ 会務の一般報告及び活動予定
 - ④ 予算及び決算
 - ⑤ その他の事項
 5. やむを得ず総会の開催が困難と認められた時は、幹事会をもって総会とする事ができる。
但しその場合の幹事会は、幹事の2/3の出席（委任状も含む）を必要とする。尚、正会員はこれに出席し意見を述べる事ができる。
- 第15条
1. 幹事会は役員と各期幹事によって構成される。
 2. 幹事会は原則として年1回、その他必要な場合随時開かれる。
 3. 正会員は幹事会に出席し意見を述べる事ができる。
- 第16条 本会の全ての議決は出席者の過半数を必要とする。

第5章 会 計

第17条 本会の会費は終身会費1万円とする。尚、1989年3月までに本会に入会した会員は個人の納入した年会費の額に応じて終身会費の1万円との差額を納入することとする。

第18条 本会の経費は会費及び臨時会費、寄附金及びその他の収入をもってあてる。

第19条 本会の資産は演劇科同窓会の名義により保管する。

第20条 本会の会計年度は1989年4月より2年毎を区切りとする。

第6章 会則の改正

第21条 本会則の改正は幹事会により審議され総会により承認される。

第7章 補 則

第22条 本会則は1997年5月18日より施行するものとする。

Toho Gakuen College of Drama and Music

講義概要

芸術科／専攻科

音楽専攻
演劇専攻

2018年度入学生用 別表…1

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：1. 教養科目

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				キヤップ制対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期		
キャリア教育	情報リテラシー論	竹内 聖	前期	2					127
	情報処理論	岡本 直久	前期	2					127
	音楽環境論	久保田慶一	前集	2				□	128
	社会福祉学	藤森 雄介	前期	2					128
	表現コミュニケーション論	中山 夏織	後期	2					129
	アーツマネジメント論	中山 夏織	前期	2					129
	応用演劇論	大谷賢治郎	前期	2					130
一般教養	メディア論	高橋 宏幸	後期	2					130
	現代思想論	高橋 宏幸	前期	2					131
	日本国憲法	西山 智之	後期	2					131
	文化政策論A	中山 夏織	前期	2					132
	文化政策論B	中山 夏織	後期	2					132
	青少年教育論	大谷賢治郎	前期	2					133
	地域文化論	坂田 博	後期	2					133
	文学(古典)	野間 哲	前期	2					134
	文学(近世)	野間 哲	後期	2					134
	日本語論	野間 哲	前期	2					135
	日本語表現論	野間 哲	前期	2					135
	映画論	行定 勲	後集	2				□	136
語学	英語AⅠ	J. ファーナー	前期	1					136
	英語AⅡ	J. ファーナー	後期		1				137
	英語BⅠ	田村奈穂子	前期			1			137
	英語BⅡ	田村奈穂子	後期				1		138
	演劇英語	①② C. パーハム	前期	1					138
	ドイツ語Ⅰ・Ⅱ	D. グロス	1年次	1	1				139
	ドイツ語Ⅲ・Ⅳ	D. グロス	2年次			1	1		140
	イタリア語Ⅰ・Ⅱ	M. スバラグリ	1年次	1	1				141
	イタリア語Ⅲ・Ⅳ	M. スバラグリ	2年次			1	1		142
フランス語Ⅰ・Ⅱ	野坂. S. マガリ	1年次	1	1				143	

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：2. 芸術科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	チャップ対象外	概要ページ		
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期							
教養科目	情報処理論	岡本 直久	前期	2				※教職受講者必修				127		
	日本国憲法	西山 智之	後期		2			※教職受講者必修				131		
	社会福祉学	藤森 雄介	前期	2				※教職受講者必修				128		
	英語A I・II	J. ファーナー	前・後	1	1			●語学(英・仏・独・伊) 1科目選択必修 ※音楽専修はイタリア語を含む2語学必修 ※同じ語学の「I・II」「III・IV」をもって、1科目とみなす				136・137		
	英語B I・II	田村奈穂子	前・後			1	1						137・138	
	ドイツ語I・II	D. グロス	前・後	1	1								139	
	ドイツ語III・IV	D. グロス	前・後			1	1						140	
	イタリア語I・II	M. スバラグリ	前・後	1	1								141	
イタリア語III・IV	M. スバラグリ	前・後			1	1						142		
フランス語I・II	野坂.S.マガリ	前・後	1	1								143		
専攻教養科目	音楽基礎演習・バロックダンス	a b 浜中 康子	前期	1					●全専修必修				145	
	音楽理論基礎	a b 長谷川郁子 福田 恵子	前期	1				●全専修必修				145		
演劇専攻科目	演劇専攻「実技科目(共通)」より、他専攻履修可能な科目 ※ただし、「アフレコ実技I」「アフレコ実技II」を除く							●全専修必修(いずれか1単位) ※日本音楽専修は狂言以外を選択すること ●日本音楽専修は「狂言I」「狂言II」必修						
専攻科目・1年次	音楽理論 [和声] I	a b 平井 正志 池田 哲美	前期	2				PVWSG必修				146		
	音楽理論 [和声] II	a b 平井 正志 池田 哲美	後期		2			PVWSG必修				146		
	音楽史概説 I・II	森下 俊一	前・後	2	2			PVWSG必修				147		
	日本音楽理論 A I・II	森重 行敏	前・後	2	2			J必修				147		
	日本音楽史概説 I・II	野川美穂子	前・後	2	2			J必修				148		
	日本音楽特講	杵屋 巳織	後期		2			※教職受講者(J除く)必修(教職受講者のみ履修可)				△	148	
	演奏会制作法	伊藤 直樹	後期		1								149	
	アウトリーチ概説	永井 由比	前期	2									149	
	アウトリーチ演習	永井 由比	後期		1								150	
	音響学	岩崎 真	前期	2								○	150	
	ディクション (イタリア語)	井上 由紀	前期	1				V必修					151	
	S. H. M. I・II	① 塩崎 美幸 ② 池田 哲美 ③ 坂田 晴美 ④ 三瀬 俊吾 ⑤ 長谷川郁子	前・後	1	1			●全専修必修					151	
	合唱 I・II	樋本 英一	前・後	1	1			PVWSG (女子のみ) 必修					152	
	オーケストラ・スタディA	志村 寿一	前期	1				S必修					152	
	合奏A	志村 寿一	後集		2			S必修				□	153	
	管楽器基礎 (呼吸法)	三塚 至	前期	1				W必修					153	
	声楽アンサンブルA I・II	松井 康司	前・後	1	1			男子のみ (J除く) 必修					154	
	管楽アンサンブルA I・II	a b 永井 由比 石橋 雅一	前・後	1	1			W (Flのみ) 必修					154	
	金管アンサンブルA I・II	神谷 敏	前・後	1	1			W (Tr, Tb, Tubのみ) 必修					155	
	サクソフォン・アンサンブルA I・II	彦坂 眞一郎	前・後	1	1			Sx必修					155	
	ギター・アンサンブルA I・II	佐藤 紀雄	前・後	1	1			G必修					156	
	うたA	今藤美知央	前期	1				J必修				△	156	
	邦楽アンサンブルA I・II	野坂 恵子	前・後	1	1			J必修					157	
	伴奏法 I	揚原さとみ	後期		1			※教職受講者 (J除く) 必修					157	
	初見演奏 (基礎)	吉田 真穂	前期	1				P必修					158	
	第一実技 I		通年		4			●全専修必修				□	159	
	第二実技 I (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽・作曲)		通年		4							○	□	159
	副科実技 I (ピアノ)		通年		2			●全専修必修	VWSGJ			○	□	159
	副科実技 I (声楽)	PGJ								○	□	159		
	副科実技 I (管・弦・ギター・日本音楽)	GJ								○	□	159		
	伴奏A	(1) 荻野 千里 (2)	前期 後期	1									□	158
	海外特別演習A	荻野 千里	前集	2									□	160
特別演習A	志村 寿一 長谷川郁子	通年		1			●全専修必修					□	160	
特別講座	植松 伸夫	後集		1			●全専修必修				○	□	161	
コラボレイト実習A	(1) 松井 康司 (2)	前集 後集	1									□	161	

(必修科目の修得単位は専攻科目単位として卒業要件に含まれてかたできる)

専攻科目は各専修の必修単位を含め、1・2年次を通して48単位以上修得

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャリア教育対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
専攻科目・2年次	音楽理論〔和声〕Ⅲ	a b	平井 正志 池田 哲美	前期			2		PVWSG必修			162
	音楽理論〔和声〕Ⅳ	a b	平井 正志 池田 哲美	後期			2		PVWSG必修			162
	対位法Ⅰ・Ⅱ		池田 哲美	前・後			2	2				163
	コード論Ⅰ		小林 真人	前期			2			◎		163
	楽器法		大澤 健一	前集			2			◎	□	164
	音楽マネジメント		児玉 真	前期			2					164
	日本音楽理論BⅠ・Ⅱ		森重 行敏	前・後			2	2	J必修	◎		147
	音楽史特講A		関野さとみ	前期			2			◎		165
	音楽史特講B		大津 聡	前期			2			◎		165
	音楽史演習A		関野さとみ	後期				1		◎		166
	音楽史演習B		大津 聡	後期				1		◎		166
	音楽療法概論		鈴木千恵子	前期			2			◎		167
	演奏解釈(1) ピアノ楽曲		荻野 千里	後期				2	P必修			167
	演奏解釈(2) 声楽曲		相田 麻純	前期			2		V必修	◎		168
	演奏解釈(3) 室内楽曲		寺岡有希子	前期			2		S必修			168
	音楽理論〔楽式〕Ⅰ・Ⅱ	① ②	穴戸 里佳 森下 俊一	前・後			2	2	PVWSG必修	○		169
	S. H. M. Ⅲ・Ⅳ	① ② ③ ④ ⑤	塩崎 美幸 池原 舞 坂田 晴美 三瀬 俊吾 長谷川 郁子	前・後			1	1	●全専修必修			170
	オーケストラ・スタディB		志村 寿一	前期			1		S必修			152
	合奏B		志村 寿一	後集				2	S必修		□	153
	声楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		松井 康司	前・後			1	1	男子(J除く)・女子(Vのみ)必修			154
	管楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		石橋 雅一	前・後			1	1	W(Tr, Tb, Tub, Sx除く)必修			155
	金管アンサンブルBⅠ・Ⅱ		神谷 敏	前・後			1	1	W(Tr, Tb, Tubのみ)必修			155
	指揮法Ⅰ・Ⅱ		樋本 英一	前・後			1	1	※教職受講者必修			170
	室内楽A	a b	荻野 千里 野口千代光 北本 秀樹	前期			1					171
	室内楽B	a b c d	阪本奈津子 蓼沼恵美子 白尾 隆 菊池力ナエ	後期				1				171
	サクソフォン・アンサンブルBⅠ・Ⅱ		彦坂 真一郎	前・後			1	1	Sx必修			172
	ギター・アンサンブルBⅠ・Ⅱ		佐藤 紀雄	前・後			1	1	G必修			172
	うたB		今藤 美知央	前期			1		J必修			173
	邦楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		野坂 恵子	前・後			1	1	J必修			173
	伴奏法Ⅱ		揚原さとみ	前期			1		※教職受講者(J除く)必修			174
	第一実技Ⅱ			通年				4	●全専修必修		□	159
	第二実技Ⅱ (ピアノ・チェンバロ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽・作曲)			通年				4		◎	□	159
	副科実技Ⅱ (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)			通年				2		◎	□	159
第一実技卒業試験							4	●全専修必修		□		
伴奏B	(1) (2)	荻野 千里	前集 後集			1	1			□	158	
海外特別演習B		荻野 千里	前集			2				□	158	
特別演習B		志村 寿一 長谷川 郁子	通年				1	●全専修必修		□	160	
コラボレイト実習B	(1) (2)	松井 康司	前集 後集			1	1			□	161	

専攻科目は各専修の必修単位を含め、1・2年次を通して48単位以上修得

●下記の科目については隔年開講とする。

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	開講年度	他専攻	キャリア教育対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
専攻科目	日本音楽概論	森重 行敏	後期		2			J必修 ※教職受講者必修	2018	○		175
	合奏基礎(和楽器)	滝田美智子	前期	1				J必修	2018			175
	楽器法(和楽器)	滝田美智子	前期			2		J必修	2019			
	演奏解釈(4) 日本音楽	たかの舞利	前期	2				J必修	2018			176

【備考】①P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修

②「他専攻の履修」欄は、○は他専攻の学生(1・2年次とも。専攻科生含む)が履修可能な科目。

ただし、◎は芸術科2年生以上、△は専攻科演劇専攻でない履修できない。

<2018年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 48単位
(教養科目・専攻教養科目・他専攻科目より各専修の必修単位数を含む)
- ②自由選択単位数 14単位
※専修別による必修単位数は、「注⑨専攻科目必修単位数」を参照のこと

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
- ② 第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各50分）
- ③ 第二実技は、選択（40分）。第一実技に準じた専門レベル。履修料別途徴収。
- ④ 副科実技は、I 必修、II 選択（20分）
I は、ピアノ専修者は声楽、声楽・管楽器・弦楽器専修者はピアノを必修とする。
副科実技を第二実技として履修する場合は100,000円、第二実技と副科実技の両方を履修する場合は200,000円を別途徴収。
- ⑤ 「日本音楽特講」は教職に関する科目の受講手続きを経た学生のみ履修可。
ただし、教職課程受講生の人数が少ない等の事情によっては、その他の学生の受講を認める場合がある。
- ⑥ 選択科目「伴奏」について
前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。
「伴奏受講票」を使用のこと。
- ⑦ 選択科目「コラボレイト実習」について
専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。
「コラボレイト実習受講票」を使用のこと。
- ⑧ 学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。
- ⑨ 専攻科目必修単位（※教養科目・専攻教養科目・他専攻科目内の必修単位含む）

	1年次		2年次		合計	
	男	女	男	女	男	女
ピアノ専修	26	26	23	21	49	47
声楽専修	28	28	23	23	51	51
管楽器専修	28	28	23	21	51	49
弦楽器専修	28	28	26	24	54	52
ギター専修	27	27	23	21	50	48
日本音楽専修	32	32	21	21	53	53

ただし、日本音楽専修者の専攻科目必修単位数は、下記科目群の単位数を含む。

科目区分	授業科目	担当氏名	期間	単位数
演劇専攻科目	狂言Ⅰ	善竹富太郎	後期	1
	狂言Ⅱ	善竹富太郎	前期	1

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：3. 芸術科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャンパス対象外	概要ページ	
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期						
基礎実技科目	基礎演劇演習A	a	越光 照文	前期	2			a組必修	6			177	
		b	三浦 剛	前期	2			b組必修				177	
		c	P. ゲスナー	前期	2			c組必修				178	
		d	宮崎 真子	前期	2			d組必修				178	
	基礎演劇演習B	a	P. ゲスナー	前期	2			a組必修				179	
		b	宮崎 真子	前期	2			b組必修				179	
		c	越光 照文	前期	2			c組必修				180	
		d	三浦 剛	前期	2			d組必修				180	
	身体トレーニング	a	山本光二郎	前期	1			a組必修				181	
		b	山本光二郎	前期	1			b組必修				181	
		c	山本光二郎	前期	1			c組必修				181	
		d	山本光二郎	前期	1			d組必修				181	
	ボイス・トレーニング（歌唱）	a	信太 美奈	前期	1			a組必修				181	
		b	信太 美奈	前期	1			b組必修				181	
		c	信太 美奈	前期	1			c組必修				181	
		d	信太 美奈	前期	1			d組必修				181	
演技系科目	演劇演習A	a	三浦 剛	後期		2		a組必修	8			182	
		b	越光 照文	後期		2		b組必修				182	
		c	宮崎 真子	後期		2		c組必修				183	
		d	P. ゲスナー	後期		2		d組必修				183	
	演劇演習B	a	宮崎 真子	後期		2		a組必修				184	
		b	P. ゲスナー	後期		2		b組必修				184	
		c	三浦 剛	後期		2		c組必修				185	
		d	越光 照文	後期		2		d組必修				185	
	演劇演習C	a	P. ゲスナー	前期			2			a組必修			186
		b	宮崎 真子	前期			2			b組必修			186
		c	三浦 剛	前期			2			c組必修			187
		d	大塚 幸太	前期			2			d組必修			187
	演劇演習D	a	三浦 剛	後期				2		a組必修			188
		b	大塚 幸太	後期				2		b組必修			188
		c	P. ゲスナー	後期				2		c組必修			189
		d	宮崎 真子	後期				2		d組必修			189
演技系科目 ストレートプレイ系	演技演習A（ダイアログ）	a	大谷賢治郎	前期			2	ストレートプレイコース必修	4			190	
		b	大谷賢治郎	後期			2					190	
	演技演習B（アンサンブル）	a	未定	後期			2					190	
		b	未定	前期						2		190	
演技系科目 ミュージカル系	ショーダンス I	①②	未定	前期			1	ミュージカルコース必修	4			191	
	ショーダンス II	①②	未定	後期						1		191	
	ミュージカルトレーニングB	①②	信太 美奈	前期			1						
	ミュージカル演習	①②	大塚 幸太	後期						1			192

科目 区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業 要件	他 専攻	キャップ 対象外	概要 ページ			
				1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期								
実技科目(共通)	演劇特別演習 I ①②	志賀廣太郎	後期		1				8			193			
	演劇特別演習 II ①②	未定	前期			1						193			
	マイム ①②	江ノ上陽一	前期	1								○	194		
	アクション ①②	藤田 けん	後期		1							○	194		
	日本舞踊 I ①②	藤間 希穂	後期		1							○	195		
	日本舞踊 II ①②	未定	前期			1						○	195		
	狂言 I ①②	善竹富太郎	後期		1							○	196		
	狂言 II ①②	未定	前期			1						○	196		
	ドラマリーディングA	野間 哲	前期	1								○	197		
	ドラマリーディングB	野間 哲	後期		1							○	197		
	アフレコ実技 I	未定	前期			1						○	198		
	アフレコ実技 II	未定	後期				1					○	198		
	クラシック唱法 I ①②	松井 康司	後期		1								199		
	クラシック唱法 II ①②	松井 康司	前期			1							199		
	ミュージカルトレーニングA ①②	信太 美奈	後期		1							○	200		
	ジャズダンスA ①②③④	三村みどり 畔柳小枝子	前期	1								LAの補習にも参加する	○	200 201	
	ジャズダンスB ①②③④	三村みどり 畔柳小枝子	後期		1								○	201 202	
	ジャズダンスC ①②③	未定	前期			1							○	202・203	
	バレエ・ムーヴメント ①②	中農 美保	前期	1									○	203	
	クラシックバレエ I ①②	中農 美保	後期		1								○	204	
	クラシックバレエ II ①②	未定	前期			1							○	204	
	タップダンス I ①②	中谷 諭記 近藤 淳子	後期		1								○	205	
	タップダンス II ①②	未定	前期			1							○	206	
	歌唱(個人レッスン) A		前期	2								自由 選択 単位		□	
	歌唱(個人レッスン) B		後期		2									□	
	歌唱(個人レッスン) C		前期			2								□	
	歌唱(個人レッスン) D		後期				2		□						
	歌唱(個人レッスン) E		前期	1					□						
歌唱(個人レッスン) F		後期		1				□							
歌唱(個人レッスン) G		前期			1			□							
歌唱(個人レッスン) H		後期				1		□							

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャリア教育対象外	概要ページ		
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期							
理論科目	舞台芸術概論	高橋 宏幸	前期	2				必修	12			○	207	
	日本演劇史A (古典)	安富 順	前期	2								○	207	
	日本演劇史B (近現代)	高橋 宏幸	後期		2							○	208	
	西洋演劇史A (古典)	安宅りさ子	前期	2								○	208	
	西洋演劇史B (近現代)	安宅りさ子	後期		2							○	209	
	ミュージカル概論	橋爪 貴明	前期	2								○	209	
	ミュージカル論	藤原麻優子	後期		2							○	210	
	ソルフェージュ基礎 ①②	永井 由比	後期		2								210	
	ソルフェージュ ①②	未定	前期			2						ミュージカルコース必修		211
	演劇史特講	安宅りさ子	後期				2							211
	演劇批評論	高橋 宏幸	前期			2								212
	パフォーマンス・アート論	高橋 宏幸	後期				2							212
	演劇文化論A	中山 夏織	前期		2							○		213
	演劇文化論B	中山 夏織	後期		2							○		213
	演出論	川村 毅	前集		2							○	□	214
	演劇論	高橋 宏幸	後期		2							○		214
	戯曲講読演習A (古典)	安宅りさ子	前期		1							○		215
	戯曲講読演習B (近現代)	安宅りさ子	後期		1							○		215
劇作法	瀬戸山美咲	後期		1			○		216					
実習科目	集中講義 (舞台照明実習) ①	石島奈津子	前集	1				※照明部以外対象	○	□	216			
	集中講義 (舞台照明実習) ②	兼子 慎平	前集	1				※照明部対象		□	217			
	集中講義 (舞台音響実習) ①	佐藤こうじ	前集	1				※音響部以外対象	○	□	217			
	集中講義 (舞台音響実習) ②	宮崎 淳子	前集	1				※音響部対象		□	218			
	集中講義 (舞台監督実習)	鈴木 健介	前集	1						□	218			
	集中講義 (ヘアメイク実習)	鈴木 理絵	前集	1						□	219			
	ワークショップ (ストレートプレイ) 1年次	絹川 友梨	後集		1					□	219			
	ワークショップ (ミュージカル) 1年次	宮河愛一郎	後集		1					□	219			
	ワークショップ (ストレートプレイ) 2年次	未定	前集			1				□	220			
	ワークショップ (ミュージカル) 2年次	未定	前集			1				□	220			
	演劇研修 (八ヶ岳合宿)	三浦 剛	前集	1						□	220			
	海外研修	1年次	P. ゲスナー	後集		1					□	221		
		2年次	高橋 宏幸	後集			1				□	221		
	劇上演実習A (試演会)	ストレートプレイ	未定	後集			4					221		
		ミュージカル	未定	後集			4					222		
	劇上演実習B (卒業公演)	ストレートプレイ	未定	後集			4					222		
		ミュージカル	未定	後集			4					223		
	劇上演実習C (学外出演)				4					□	223			
劇上演実習D (学外出演)				4						□	223			
劇上演実習E (学内出演)				1						□	224			
劇上演実習F (学内出演)				1						□	224			

<平成30年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 48単位
 - 1.実技科目 26単位
 - 2.理論科目 12単位
 - 3.実習科目 10単位
- ②教養科目単位数 12単位
 - 語学 2単位必修
- ③自由選択単位数 2単位

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
- ② 基礎演劇演習AB、身体トレーニング、ボイス・トレーニング (歌唱)、演劇演習ABCD、舞台芸術概論、日本演劇史AB、西洋演劇史AB、ミュージカル概論、ミュージカル論は全コース必修
- ③ 演技演習ABはストレートプレイコース必修
- ④ ショーダンスⅡ、ミュージカルトレーニングB、ミュージカル演習、ソルフェージュはミュージカルコース必修
- ⑤ 同じ科目の複数のクラスを同時に受講することはできない。
- ⑥ 歌唱 (個人レッスン) の修得単位数は自由選択単位数に含む。
- ⑦ 音楽専攻の科目は、自由選択単位数に含む。
- ⑧ 桐朋学園大学音楽学部の単位互換履修科目は教養科目単位数に含む。

○講義科目は半期2単位、実習・実技・演習科目は半期1単位、劇上演実習は4単位

【教育課程・卒業の要件】

卒業の要件

本学を卒業するには、教育課程をよく理解し、以下の条件を満たす最低修得単位数以上の単位を修得しなければならない。卒業要件の詳細については、各専攻の別表及び注意事項を参照すること。

1. 芸術科 音楽専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	48単位
自由選択単位数	14単位
(専攻科目・専攻教養科目・他専攻科目・教養科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

- ② 専攻科目単位数には、各専攻の必修単位数を含む。
- ③ 専攻教養科目「音楽基礎演習－バロックダンス」「音楽理論基礎」2 単位必修。
- ④ 教養科目の「語学」より 2 単位 1 科目必修。同じ語学の「I・II」または「III・IV」をもって 1 科目とみなす。(ただし声楽専修はイタリア語を含む 2 語学を必修とし、合計 4 単位)
- ⑤ 演劇専攻科目の『実技科目(共通)』の他専攻履修可能な科目のうち、いずれか 1 単位必修とする。(ただし、「アフレコ実技 I」「アフレコ実技 II」を除く)

2. 芸術科 演劇専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	48単位
教養科目単位数	12単位
自由選択単位数	2単位
(専攻科目・他専攻科目・教養科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

- ② 専攻科目単位数の内訳は
実技科目 26単位 理論科目 12単位 実習科目 10単位
- ③ 教養科目単位数の内訳は
語学 2 単位必修

【本学における中学校教諭2種免許状取得の要件】

1. 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目

・下記の(1)～(5)に定める授業科目を履修し、計10単位以上修得すること

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位	要件	概要 ページ
(1) 日本国憲法	日本国憲法	西山 智之	後期	2	必修	131
(2) 体育	音楽基礎演習-バロック・ダンス	浜中 康子	前期	1	必修	145
	狂言Ⅰ	善竹富太郎	後期	1		196
	狂言Ⅱ	未定	前期	1		196
	日本舞踊Ⅰ	藤間 希穂	後期	1		195
	日本舞踊Ⅱ	未定	前期	1		195
	マイム	江ノ上陽一	前期	1		194
	アクション	藤田 けん	後期	1		194
	ジャズダンスA	畔柳小枝子	前期	1		201
		三村みどり	前期	1		200
	ジャズダンスB	畔柳小枝子	後期	1	1単位選択必修	202
		三村みどり	後期	1		201
	ジャズダンスC	未定	前期	1		202
		未定	前期	1		203
	バレエ・ムーヴメント	中農 美保	前期	1		203
	クラシックバレエⅠ	中農 美保	後期	1		204
	クラシックバレエⅡ	未定	前期	1		204
	タップダンスⅠ	近藤 淳子	後期	1		205
	中谷 諭紀	後期	1		205	
タップダンスⅡ	未定	前期	1		206	
	未定	前期	1		206	
(3) 外国語コミュニケーション	英語AⅠ	J. ファーナー	前期	1	2単位選択必修	136
	英語AⅡ	J. ファーナー	後期	1		137
	英語BⅠ	田村奈穂子	前期	1		137
	英語BⅡ	田村奈穂子	後期	1		138
	ドイツ語Ⅰ	D. グロス	前期	1		139
	ドイツ語Ⅱ	D. グロス	後期	1		139
	ドイツ語Ⅲ	D. グロス	前期	1		140
	ドイツ語Ⅳ	D. グロス	後期	1		140
	フランス語Ⅰ	野坂. S. マガリ	前期	1		143
	フランス語Ⅱ	野坂. S. マガリ	後期	1		143
	イタリア語Ⅰ	M. スバラグリ	前期	1		141
	イタリア語Ⅱ	M. スバラグリ	後期	1		141
	イタリア語Ⅲ	M. スバラグリ	前期	1		142
	イタリア語Ⅳ	M. スバラグリ	後期	1		142
(4) 情報機器の操作	情報処理論	岡本 直久	前期	2	必修	127
(5) 介護等体験関連	社会福祉学	藤森 雄介	前期	2	必修	128

2. 教職に関する科目

・下記に定める授業科目を指定された年次に履修し、すべての単位を修得すること（計24単位）

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位	学年	概要 ページ
教育の意義等に関する科目	教師論	野間 哲	後期	2	1年次	263
教育の基礎理論に関する科目	教育原理	木村 康彦	後期	2	1年次	263
	教育心理学	鈴木 敦子	前期	2	2年次	264
	教育史概説	宮城 哲	前期	2	2年次	264
教育課程及び指導法に関する科目	音楽科教育法	宇佐美博子	後期	2	1年次	265
	道徳教育の研究	岡本 直久	後集	2	1年次	265
	特別活動の研究	真野 彰	後集	1	1年次	266
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	生徒指導Ⅰ	安富由美子	後期	2	1年次	266
	生徒指導Ⅱ	安富由美子	前期	2	2年次	267
教育実習	教育実習Ⅰ・Ⅱ	松井 康司	通年	5	1・2年次	267
		永井 由比				268
教職実践演習	教職実践演習（中学校）	松井 康司 永井 由比	後期	2	2年次	268

3. 教科に関する科目

・必修の授業科目含めて24単位以上を修得すること

科目区分	授業科目	学年	単位	要件
ソルフェージュ	S. H. M. I・II	音1	2	必修
	S. H. M. III・IV	音2	2	
声乐 (合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む)	合唱 I・II	音1	2	J2単位 必修
	声乐アンサンブルA I・II	音1	2	
	声乐アンサンブルB I・II	音2	2	
	うたA	音1	1	
	うたB	音2	1	
	狂言 I	音1	1	
	狂言 II	音2	1	
	第一実技 I (声乐)	音1	4	
	第二実技 I (声乐)	音1	4	
	副科実技 I (声乐)	音1	2	
	第一実技 II (声乐)	音2	4	
	第二実技 II (声乐)	音2	4	
	副科実技 II (声乐)	音2	2	
	オペラ実習A [演奏] [演技]	専音1	4	
	オペラ実習A [上演]	専音1	2	
	オペラ実習B [演奏] [演技]	専音2	4	
オペラ実習B [上演]	専音2	2		
器楽 (合奏及び伴奏並びに和楽器を含む)	第一実技 I	音1	4	GJ ピアノ必修
	第二実技 I (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音1	4	
	副科実技 I (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音1	2	
	第一実技 II	音2	4	
	第二実技 II (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音2	4	
	副科実技 II (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音2	2	
	サクソフォン・アンサンブルA I・II	音1	2	
	サクソフォン・アンサンブルB I・II	音2	2	
	ギター・アンサンブルA I・II	音1	2	
	ギター・アンサンブルB I・II	音2	2	
	ギター・アンサンブルC	専音1	2	
	ギター・アンサンブルD	専音2	2	
	室内楽A	音2	1	
	室内楽B	音2	1	
	邦楽アンサンブルA I・II	音1	2	
	邦楽アンサンブルB I・II	音2	2	
邦楽アンサンブル研究A	専音1	4		
邦楽アンサンブル研究B	専音2	4		

科目区分	授業科目	学年	単位	要件
器楽 (合奏及び伴奏並びに和楽器を含む)	オーケストラ・スタディA	音1	1	1科目 必修
	オーケストラ・スタディB	音2	1	
	オーケストラ・スタディC	専音1	1	
	オーケストラ・スタディD	専音2	1	
	合奏A	音1	2	
	合奏B	音2	2	
	合奏C	専音1	2	
	合奏D	専音2	2	
	ピアノデュオ研究A	専音1	4	
	ピアノデュオ研究B	専音2	4	
	歌曲研究A	専音1	4	
	歌曲研究B	専音2	4	
	管楽アンサンブルA I・II	音1	2	
	管楽アンサンブルB I・II	音2	2	
	管楽アンサンブル研究A	専音1	4	
	管楽アンサンブル研究B	専音2	4	
	室内楽研究A	専音1	2	
	室内楽研究B	専音1	2	
	室内楽研究C	専音2	2	
	室内楽研究D	専音2	2	
伴奏法 I・II	音1・2	2		
合奏基礎 (和楽器)	音1	1		
日本音楽特講	音1	2	必修 (J除く)	
指揮法	指揮法 I・II	音2	2	必修
音楽理論・作曲法 (編曲法を含む)及び音楽史 (日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む)	音楽理論[和声] I	音1	2	J4単位 必修
	音楽理論[和声] II	音1	2	
	音楽史概説 I・II	音1	4	
	音楽理論[和声] III	音2	2	
	音楽理論[和声] IV	音2	2	
	音楽理論[楽式] I・II	音2	4	
	対位法 I・II	音2	4	
	楽器法	音2	2	
	日本音楽理論A I・II	音1	4	
	日本音楽理論B I・II	音2	4	
	日本音楽理論C	専音2	2	
	日本音楽史概説 I・II	音1	4	
	音楽史特講A	音2	2	
	音楽史特講B	音2	2	
	音楽史演習A	音2	1	
	音楽史演習B	音2	1	
	音響学	音1	2	
	演奏解釈 (1) ピアノ楽曲	音2	2	
	演奏解釈 (2) 声乐	音2	2	
演奏解釈 (3) 室内楽曲	音2	2		
演奏解釈 (4) 日本音楽	音1	2		
日本音楽概論	音1	2	必修	

2018年度教育課程 別表…6

【教育課程・修了の要件】

1. 専攻科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ			
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期							
作曲・理論 音楽史	音楽理論 [和声] V	平井 正志	前期	2							225			
	音楽理論 [和声] VI	平井 正志	後期		2						225			
	楽曲分析 (古典派)	池田 哲美	前期	2							225			
	楽曲分析 (ロマン派以降)	池田 哲美	後期		2						226			
	コード論II	小林 真人	前期	2							226			
	S.H.M V・VI	①	塩崎 美幸	前・後	1	1						227		
		②	池原 舞											
		③	坂田 晴美											
		④	三瀬 俊吾											
		⑤	長谷川 郁子											
	音楽史研究	関野さとみ	通年		4						227			
	日本音楽史研究A	野川美穂子	通年		4			J必修			228			
	音楽療法概説A	鈴木千恵子	通年		4						229			
	音楽療法演習A	鈴木千恵子	通年		2						229			
	演奏現場論A	合田 香	前期		2						229			
アウトリーチ研究A	永井 由比	通年		4						230				
実技 レッスン	第一実技Ⅲ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年		6			●全専修必修			230			
	第二実技Ⅲ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽) (作曲)		通年		4						230			
	副科実技Ⅲ (ピアノ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年		2						230			
実技・アンサンブル 演奏・室内楽	学内演奏Ⅰ	松井 康司 荻野 千里	通年		2			●全専修必修						
	ピアノデュオ研究A	東井 美佳	通年		4			P必修			231			
	管楽アンサンブル研究A	石橋 雅一	通年		4			W (Sx除く) 必修			231			
	室内楽研究A	a	荻野 千里 野口千代光	前期	2							232		
		b	北本 秀樹									232		
	室内楽研究B	a	阪本奈津子	後期		2						233		
		b	黎沼恵美子										233	
		c	白尾 隆											234
		d	菊池カナエ											234
	室内楽特設クラスA	荻野 千里	前集		1						235			
	室内楽特設クラスB	荻野 千里	後集			1					235			
	演奏・室内楽	歌曲研究A	松井 康司 東井 美佳	通年		4						235		
		オペラ実習A [演奏] [演技]	松井 康司	前期		4			V選択			236		
		オペラ実習A [上演]	P. ゲスナー	後期			2					236		
		邦楽アンサンブル研究A	野坂 恵子	通年		4			J必修			237		
オーケストラ・スタディC		志村 寿一	前期		1			S必修			237			
合奏C		志村 寿一	後集			2		S必修			238			
ギター・アンサンブルC		佐藤 紀雄	通年		2			G必修			238			
伴奏C		(1)	荻野 千里	前集 後集	1	1						239		
		(2)	荻野 千里											
伴奏研究A		荻野 千里	前集		1						239			
伴奏研究B		荻野 千里	後集			1					239			
海外特別演習C		荻野 千里	前集		2						240			
特別講義 (音楽)	松井 康司	集中		1				●全専修必修		241				
特別演習C	荻野 千里	通年		1				●全専修必修		241				
コラボレイト実習C	(1)	松井 康司	前集 後集	1	1						240			
	(2)													

1・2年次を通じて必修科目を含めて50単位以上

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期				
音楽史	楽曲分析〔編曲〕	たかの舞俐	前期			2					242
	楽曲分析〔創作〕	たかの舞俐	後期				2				242
	日本音楽史研究B	野川美穂子	通年			4		J必修			228
	日本音楽理論C	森重 行敏	後期				2	J必修			
	音楽療法概説B	鈴木千恵子	通年			4					228
	音楽療法演習B	鈴木千恵子	通年			2					229
	音楽療法実習	鈴木千恵子	後期				1				
	演奏現場論B	合田 香	前期			2					229
	アウトリーチ研究B	永井 由比	通年			4					230
	実技レッスン	第一実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年			6		●全専修必修		
第二実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽) (作曲)			通年			4					230
副科実技Ⅳ (ピアノ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)			通年			2					230
実技・アンサンブル	第一実技修了試験					4		●全専修必修			
演奏・室内楽	学内演奏Ⅱ	松井 康司 荻野 千里	通年			2		●全専修必修			
	ピアノデュオ研究B	東井 美佳	通年			4					231
	管楽アンサンブル研究B	石橋 雅一	通年			4		W(S×除く)必修			231
	室内楽研究C a	荻野 千里 野口千代光	前期			2					232
	b	北本 秀樹									232
	室内楽研究D a	阪本奈津子									233
	b	藜沼恵美子					2				233
	c	白尾 隆	後期								234
	d	菊池カナエ									234
	室内楽特設クラスC	荻野 千里	前集			1					235
室内楽特設クラスD	荻野 千里	後集				1					
演奏・室内楽	歌曲研究B	松井 康司 東井 美佳	通年			4					235
	オペラ実習B〔演奏〕〔演技〕	松井 康司	前期			4					236
	オペラ実習B〔上演〕	P.ゲスナー	後期				2	V選択			236
	邦楽アンサンブル研究B	野坂 恵子	通年			4		J必修			237
	オーケストラ・スタディD	志村 寿一	前期			1		S必修			237
	合奏D	志村 寿一	後集				2	S必修			238
	ギター・アンサンブルD	佐藤 紀雄	通年			2		G必修			238
	伴奏D (1)	荻野 千里	前集			1					239
	(2)		後集				1				
	伴奏研究C	荻野 千里	前集			1					239
伴奏研究D	荻野 千里	後集				1				239	
海外特別演習D	荻野 千里	前集			2					240	
特別演習D	荻野 千里	通年			1					241	
コラボレイト実習D (1)	松井 康司	前集			1					240	
(2)		後集				1					

1・2年次を通して必修科目を含めて50単位以上

【備考】

①P：ピアノ専修 C：チェンバロ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修

<2018年度入学生の修了要件>

最低修得単位数50単位（2学年合計）

学位授与単位数62単位以上（2学年合計）※内12単位は教養科目であること

注

①作曲・理論・音楽史から14単位以上

②音楽教育科目から8単位以上

③演奏・室内楽科目から10単位以上

④特別演習2単位必修

⑤実技レッスン16単位（修了試験4単位を含む）

⑥桐朋学園大学音楽学部の単位互換履修科目は教養科目単位に含む。

※学位授与機構に申請する者は、他に教養科目を12単位修得すること。

2. 専攻科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				修了要件	他専攻	概要ページ		
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
理論科目	特別講義A	安宅りさ子	通年	2				4		243		
	特別講義B	宮崎 真子	通年			2				243		
	演劇学研究A (日本演劇論) (1)	高橋 宏幸	前期	2					243			
	演劇学研究A (日本演劇論) (2)		後期	2					244			
	演劇学研究B (西洋演劇論) (1)	安宅りさ子	前期	2					244			
	演劇学研究B (西洋演劇論) (2)		後期	2					245			
	演劇学研究C (現代演劇論)	井上 理恵	前期	2					245			
劇作・演出	劇作研究A (劇作論)	鴻上 尚史	前期	2				8		246		
	劇作研究B (劇作演習)	鴻上 尚史	後期	1						246		
	演出研究	三浦 剛	後期	2						247		
演劇教育・マネジメント	演劇教育論	野間 哲	後期	2					247			
	アーツマネジメント研究	中山 夏織	前期	2					248			
	アウトリーチ研究	中山 夏織	後期	2					248			
演技科目	演技研究A (日本演劇) (1)	三浦 剛	通年	2				16		249		
	演技研究A (日本演劇) (2)					2				249		
	演技研究B (外国演劇) (1)	P.ゲスナー	通年	2						250		
	演技研究B (外国演劇) (2)					2				250		
	演技研究C (実験劇) (1)	宮崎 真子	通年	2						251		
	演技研究C (実験劇) (2)					2				251		
	演技研究D (フィジカルシアター) (1)	大谷賢治郎	後期	1						252		
	演技研究D (フィジカルシアター) (2)					1				252		
	演技研究E (ミュージカル) (1)	大塚 幸太	前期	1						253		
	演技研究E (ミュージカル) (2)					1				253		
	演劇特別研究	鴻上 尚史	通年	2						254		
	ワークショップA	1年次	鶴山 仁	前集	1							258
	ワークショップB	2年次					1					258
	ワークショップC	1年次	和田 喜夫	後集	1					258		
	ワークショップD	2年次					1			258		
	海外研修	1年次	P.ゲスナー 高橋 宏幸	後集	1					254		
2年次					1			254				
実技科目	舞踊A (クラシックバレエ)	中農 美保	通年	2				2		255		
	舞踊B (コンテンポラリー)	勝倉 寧子	前期	1						255		
	舞踊C (日舞)	藤間 希穂	後期	1						256		
	ミュージカル唱法	藍澤 幸頼	通年	2						256		
	英語劇	J・アーカリ	通年	2						257		
	歌唱 (個人レッスン) I	信太 美奈		前期	2					自由 選択 単位		
	歌唱 (個人レッスン) J			後期	2							
	歌唱 (個人レッスン) K			前期	2							
	歌唱 (個人レッスン) L			後期	2							
	歌唱 (個人レッスン) M			前期	1							
歌唱 (個人レッスン) N	後期			1								
歌唱 (個人レッスン) O	前期			1								
歌唱 (個人レッスン) P	後期			1								
劇上演実習	劇上演実習A	1年次 2年次	三浦 剛	前集	4					16	259	
				前集	4				259			
	劇上演実習B	1年次 2年次	越光 照文	後集	4						259	
				後集			4				259	
	劇上演実習C (専1最終公演)	志賀廣太郎		後集	4						259	
	劇上演実習D (専2修了公演)			後集			4				260	
	劇上演実習E (学外出演)	三浦 剛	集中	4					260			
劇上演実習F (学外出演)	三浦 剛	集中	4					260				
劇上演実習G (学内出演)	三浦 剛	集中	1					261				
修了論文	修了論文	高橋 宏幸 他	通年	4					257			

<2018年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 50単位（2学年合計）

学位授与単位数 62単位（2学年合計）※内12単位は教養科目であること。

【内訳】

- ①特別講義は4単位必修※特別講義は通年15回授業
- ②理論科目、劇作・演出科目、演劇教育・マネジメント科目から8単位以上
- ③演技科目から16単位以上
- ④劇上演実習（または修了論文）から16単位以上
- ⑤実技科目から2単位以上
- ⑥自由選択科目として4単位（自他専攻科目より）
- ⑦桐朋学園大学音楽学部の単位互換履修科目は教養科目単位に含む。
※学位授与機構に申請する者は、他に教養科目を12単位修得すること。

○修了要件とは別に、芸術科演劇専攻および他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで履修可

2018年度 カリキュラムマップ

【カリキュラムマップ】

カリキュラムマップは、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）で掲げている「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲」「態度」「技能・表現」の5つの観点の到達目標が、どの授業科目の履修によって達成されるかの相関関係を示したものである。

各科目がカリキュラムの中でどのような位置づけにあるのかを確認し、学修の一助とすること。

教養科目カリキュラムマップ

- ①（知識・理解） 芸術文化を歴史・社会・自然と関連づけて理解することができる。
- ②（思考・判断） 自ら課題を設定し、必要な情報を収集・分析し、問題を解決することができる。
- ③（関心・意欲） 芸術文化に幅広く関心を持ち、新たな創造的表現を実現する意欲に高めることができる。
- ④（態度） 多様な価値観を理解し、地域社会および国際社会のニーズに応え、活力ある社会の構築に努めることができる。
- ⑤（技能・表現） 日本語と外国語を用いて、他者の発言や文章を理解し、自らの考えを的確に表明することができる。

科目区分	期	授業科目	①	②	③	④	⑤
キャリア教育	前期	情報リテラシー論		○	○		
	前期	情報処理論				○	○
	前集	音楽環境論		○	○		
	前期	社会福祉学	○			○	
	前期	表現コミュニケーション論		○		○	
	後期	アーツマネジメント論		○	○		
	前期	応用演劇論	○		○		
一般教養	後期	メディア論		○	○		
	前期	現代思想論	○				○
	後期	日本国憲法	○		○		
	前期	文化政策論A	○		○		
	後期	文化政策論B	○		○		
	前期	青少年教育論		○		○	
	後期	地域文化論	○			○	
	前期	文学（古典）	○		○		
	後期	文学（近世）	○		○		
	前期	日本語論		○			○
	前期	日本語表現論				○	○
	後集	映画論	○			○	
語学	前期	英語AⅠ	○				○
	後期	英語AⅡ	○				○
	前期	英語BⅠ				○	○
	後期	英語BⅡ				○	○
	前期	演劇英語①②				○	○
	1年次	ドイツ語Ⅰ・Ⅱ				○	○
	2年次	ドイツ語Ⅲ・Ⅳ				○	○
	1年次	イタリア語Ⅰ・Ⅱ				○	○
	2年次	イタリア語Ⅲ・Ⅳ				○	○
	1年次	フランス語Ⅰ・Ⅱ				○	○

芸術科音楽専攻カリキュラムマップ

- ① (知識・理解) 専門実技、音楽理論、ソルフェージュなどの演奏表現に必要な基礎を学び、知識を活用して作品の理解を深めることができる
- ② (思考・判断) 自ら課題を設定し、演奏表現の向上に向けて多面的に考察し、判断していくことができる。
- ③ (関心・意欲) 社会における自分の存在意義、自己表現の意味を自覚して、積極的に創造活動を行うことができる。
- ④ (態度) 自らの音楽的な知識、経験をもって社会におけるニーズに応えることができる。
- ⑤ (技能・表現) 演奏家、指導者としての基礎的な演奏技術と表現能力をもち、自分の想像した表現を実現することができる。

■ 1年次

授業科目	期	①	②	③	④	⑤
イタリア語、ドイツ語、フランス語	前・後	○		○		
音楽理論基礎	前期	○			○	
音楽基礎演習	前期				○	○
音楽理論 [和声] I・II	前・後	○	○			
音楽史概説 I・II	前・後			○	○	
日本音楽理論 A I・II	前・後	○		○		
日本音楽史概説 I・II	前・後			○	○	
日本音楽特講	後期			○	○	
演奏会制作法	後期			○	○	
アウトリーチ概説	前期		○	○		
アウトリーチ演習	後期			○		○
音響学	前期	○				○
ディクシオン (イタリア語)	前期	○				○
S. H. M. I・II	前・後	○			○	
合唱 I・II	前・後			○		○
オーケストラスタディ A	前期			○	○	○
合奏 A	後集			○	○	○
管楽器基礎 (呼吸法)	前期			○	○	○
声楽アンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
管楽アンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
金管アンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
サクソフォンアンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
ギターアンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
邦楽アンサンブル A I・II	前・後			○	○	○
うた A	前期			○	○	○
伴奏法 I	後期	○			○	
初見演奏 (基礎)	前期			○		○
第一実技 I	通年			○	○	○
第二実技 I	通年			○	○	○
副科実技 I	通年			○	○	○
伴奏 A	前後			○	○	
海外特別演習 A	前集	○		○		
特別演習 A	通年	○	○			
特別講座	後集	○	○			
コラボレイト実習 A	集中		○	○		
演奏解釈 (4) 日本音楽	前期	○	○			

■ 2年次

授業科目	期	①	②	③	④	⑤
音楽理論 [和声] III・IV	前・後	○	○			
対位法 I・II	前・後		○	○		
コード論	前期	○	○			
楽器法	前集	○		○		
音楽マネジメント	前期			○	○	
日本音楽理論 B I・II	前・後	○		○		
音楽史特講 A	前期	○		○		
音楽史特講 B	前期	○		○		
音楽史演習 A	後期	○	○			
音楽史演習 B	後期	○	○			
音楽療法概論	前期	○			○	
演奏解釈 (1) ピアノ楽曲	後期	○	○			
演奏解釈 (2) 声楽曲	前期	○	○			
演奏解釈 (3) 室内楽曲	前期	○	○			
音楽理論 [楽式] I	通年	○		○		
S. H. M. III, IV	前・後	○			○	
オーケストラスタディ B	前期			○	○	○
合奏 B	後集			○	○	○
声楽アンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
金管アンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
管楽アンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
サクソフォンアンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
ギターアンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
邦楽アンサンブル B I・II	前・後			○	○	○
うた B	前期			○	○	○
室内楽 A	前期		○			○
室内楽 B	後期		○			○
指揮法 I・II	前・後			○	○	
伴奏法 II	前期	○			○	
第一実技 II	通年			○	○	○
第二実技 II	通年			○	○	○
副科実技 II	通年			○	○	○
第一実技卒業試験		○	○			○
伴奏 B	前後			○	○	
海外特別演習 B	前集	○		○		
特別演習 B	通年	○	○			
コラボレイト実習 B	集中		○	○		

専攻科音楽専攻カリキュラムマップ

- ① (知識・理解) 音楽を中心とした芸術全般の知識、音楽理論、歴史などを体系的に学び、豊かな人間性と社会を支えるための音楽的経験と教養を自ら広げ、深めることができる。
- ② (思考・判断) 時代に即した演奏表現を獲得するとともに、同時代から求められている最先端の演奏表現などを取り入れることができる。
- ③ (関心・意欲) 同時代における最先端の演奏表現、創造行為の動向に関心を払い、自らもそれに参入することができる。
- ④ (態度) 他者との協働に積極的に関わり、社会的なニーズに応じて、自らの音楽経験、知識を持って教育、福祉、文化活動など、心豊かな社会の実現に向けた活動を実践することができる。
- ⑤ (技能・表現) 演奏家、指導者としての確かな演奏技術と表現力を併せもち、音楽による表現、創造活動の意義を社会に伝えることができる。

■ 1年次

利用区分	授業科目	①	②	③	④	⑤
専門教育	音楽療法概説A			○	○	
	音楽療法演習A			○		○
	音楽療法概説B			○	○	
	音楽療法演習B			○		○
	音楽療法実習			○		○
	演奏現場論A			○	○	
	演奏現場論B			○	○	
	アウトリーチ研究A			○	○	
	アウトリーチ研究B			○	○	
	特別講義(音楽)	○	○			
	特別演習C		○			○
特別演習D		○			○	
音楽理論	音楽理論 [和声] V	○	○			
	音楽理論 [和声] VI	○	○			
	日本音楽理論C	○	○			
	楽曲分析A	○	○			
	楽曲分析B	○	○			
	楽曲分析 [編曲]			○		○
	楽曲分析 [創作]			○		○
	コード論Ⅱ	○	○			
	音楽史研究	○		○		
	日本音楽史研究A	○		○		
	日本音楽史研究B	○		○		
ソルフェージュ	S. H. M. V. VI		○		○	
アンサンブル	ピアノデュオ研究A				○	○
	ピアノデュオ研究B				○	○
	管楽アンサンブル研究A				○	○
	管楽アンサンブル研究B				○	○
	室内楽研究A					○
	室内楽研究B					○
	歌曲研究A				○	○
	歌曲研究B				○	○
	室内楽特設クラスA				○	○
	室内楽特設クラスB				○	○

■ 2年次

利用区分	授業科目	①	②	③	④	⑤
室内楽	室内楽特設クラスC				○	○
	室内楽特設クラスD				○	○
	オペラ実習A [演奏] [演技]		○			○
	オペラ実習A [上演]				○	○
	オペラ実習B [演奏] [演技]		○			○
	オペラ実習B [上演]				○	○
	邦楽アンサンブル研究A				○	○
	邦楽アンサンブル研究B				○	○
	オーケストラスタディC				○	○
	オーケストラスタディD				○	○
	合奏C				○	○
	合奏D				○	○
	ギターアンサンブルC				○	○
	ギターアンサンブルD				○	○
	伴奏C				○	○
	伴奏D				○	○
	伴奏研究A				○	○
	伴奏研究B				○	○
	伴奏研究C				○	○
	伴奏研究D				○	○
海外特別演習C			○		○	
海外特別演習D			○		○	
学内演奏				○	○	
実技	学内演奏Ⅱ				○	○
	コラボレイト実習C		○	○		
	コラボレイト実習D		○	○		
	第一実技Ⅲ				○	○
	第一実技Ⅳ				○	○
	第二実技Ⅲ				○	○
	第二実技Ⅳ				○	○
	副科実技Ⅲ				○	○
	副科実技Ⅳ				○	○
	第一実技終了試験				○	○

芸術科演劇専攻カリキュラムマップ

- ① (知識・理解) 演劇を中心とした舞台芸術の理論と歴史を学び、知識を活用して作品の理解を深めることができる。
- ② (思考・判断) 演劇、歌唱、舞踊等の表現手段を用いて、他者ととともに課題を解決することができる。
- ③ (関心・意欲) 社会における自分の存在意義、自己表現の意味を自覚し、積極的に創造活動を行うことができる。
- ④ (態度) 集団の中で協働の役割をはたすことができ、演劇的な技術をもって地域社会および国際社会のニーズに応えることができる。
- ⑤ (技能・表現) 俳優、表現者としての基礎的な技能をもち、自分の想像した表現を実現することができる。

■ 1年次

科目区分	期	授業科目	①	②	③	④	⑤
基礎実技科目		基礎演劇演習A		○		○	
		基礎演劇演習B		○		○	
		身体トレーニング		○		○	
		ボイス・トレーニング		○			○
実技科目		マイム		○			○
		ジャズダンスA①②③④		○			○
		バレエ・ムーヴメント		○			○
		ドラマリーディングA			○		○
理論科目	前期	歌唱(個人レッスン) A,E		○			○
		舞台芸術概論	○		○		
		日本演劇史A(古典)	○		○		
		西洋演劇史A(古典)	○		○		
		ミュージカル概論	○		○		
		演劇文化論A	○		○		
実習科目		演出論	○		○		
		集中講義(舞台照明実習)①		○			○
		集中講義(舞台照明実習)②		○			○
		集中講義(舞台音響実習)①		○			○
		集中講義(舞台音響実習)②		○			○
		集中講義(ヘアメイク実習)	○		○		
		集中講義(舞台監督実習)		○			○
		演劇研修(八ヶ岳合宿)		○			○
演技科目		劇上演実習C D(学外出演)		○	○		○
		劇上演実習E F(学内出演)		○	○		○
実技科目(共通)	後期	演劇演習A		○			○
		演劇演習B		○			○
		演劇特別演習I		○			○
		アクション		○			○
		日本舞踊I	○				○
		狂言I	○				○
		クラシック唱法I	○		○		
		ミュージカルトレーニングA		○			○
		ジャズダンスB①②③④		○			○
		クラシックバレエI		○			○
		タップダンスI		○			○
		ドラマリーディングB			○		○
理論科目		歌唱(個人レッスン) B,F		○			○
		日本演劇史B(近現代)	○		○		
		西洋演劇史B(近現代)	○		○		
		ミュージカル論	○		○		
		戯曲講読演習A(古典)	○		○		
		演劇文化論B	○		○		
実習科目		ソルフェージュ基礎	○		○		
		ワークショップ(ストレートプレイ)				○	○
		ワークショップ(ミュージカル)				○	○
		海外研修	○		○		
		劇上演実習C D(学外出演)		○			○
		劇上演実習E F(学内出演)		○			○

■ 2年次

科目区分	期	授業科目	①	②	③	④	⑤
演技科目		演劇演習C		○			○
		S実技科目	演技演習A(ダイアログ)		○		
M実技科目		演技演習B(アンサンブル)		○			○
		ショーダンスI		○			○
実技科目(共通)	前期	ミュージカルトレーニングB		○			○
		演劇特別演習II		○			○
		日本舞踊II			○		○
		狂言II	○				○
		アフレコ実技I	○		○		
		クラシック唱法II①②	○		○		
理論科目		ジャズダンスC①②③		○			○
		クラシックバレエII		○			○
		タップダンスII		○			○
		歌唱(個人レッスン) C,G		○			○
		ソルフェージュ①②	○		○		
		演劇論	○		○		
実習科目		演劇批評論	○		○		
		ワークショップ(ストレートプレイ)				○	○
		ワークショップ(ミュージカル)				○	○
演技科目		劇上演実習C D(学外出演)		○	○		○
		劇上演実習E F(学内出演)		○	○		○
		S実技科目	演劇演習D		○		
M実技科目		演技演習B(アンサンブル)		○			○
		演技演習A(ダイアログ)		○			○
		ショーダンスII		○			○
実技科目		ミュージカル演習		○			○
		アフレコ実技II	○		○		
		歌唱(個人レッスン) D,H		○			○
理論科目	後期	演劇史特講	○		○		
		戯曲講読演習B(近現代)	○		○		
		劇作法	○		○		
		パフォーミングアーツ論	○		○		
		海外研修	○		○		
		劇上演実習A(試演会)		○			○
実習科目		劇上演実習B(卒業公演)		○			○
		海外研修	○		○		
		劇上演実習C D(学外出演)		○			○
		劇上演実習E F(学内出演)		○			○

専攻科演劇専攻カリキュラムマップ

- ① (知識・理解) 演劇を中心とした舞台芸術の理論、歴史などを発展的に学び、豊かな人間性と社会を支えるための演劇的経験と教養を自ら広げ、深めることができる。
- ② (思考・判断) 自ら設定した課題を、理論や歴史を元に、演技、歌唱、舞踊、パフォーマンスなどの表現手段を用いて、他者との関わりを深めながら解決していくことができる。
- ③ (関心・意欲) 社会における演劇、ひいては芸術の存在意義を考え、自らの表現活動を積極的に実践することができる。
- ④ (態度) 集団のなかで協働性をもち、進んでリーダーシップをとり、地域社会および国際社会のニーズに応じて、心豊かな社会の実現に向けた活動を実践することができる。
- ⑤ (技能・表現) 専門俳優、表現者としての確かな技能と表現力をもち、演劇を中心とした舞台芸術の意義を社会に伝えることができる。

■ 1年次

科目区分	期	授業科目	①	②	③	④	⑤
理論科目	前期	特別講義A	○		○		
		演劇学研究A (日本演劇論) (1)	○		○		
		演劇学研究B (西洋演劇論) (1)	○		○		
		演劇学研究C (現代演劇論)	○		○		
創作・演出科目	前期	劇作研究A (劇作論)			○		○
		演劇教育・マネジメント科目	アーツマネジメント研究			○	○
演技科目	前期	演技研究A (日本演劇) (1)		○		○	
		演技研究B (外国演劇) (1)		○		○	
		演技研究C (実験劇) (1)		○		○	
		演技研究E (ミュージカル) (1)		○		○	
		演劇特別研究	○			○	
劇上演実習	前期	ワークショップA 1年次				○	○
		劇上演実習A 1年次		○		○	○
		劇上演実習E (学外出演)		○		○	○
実技科目	前期	劇上演実習F (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習G (学内出演)		○		○	○
		舞踊A (クラシックバレエ)		○		○	○
		舞踊B (コンテンポラリー)		○		○	○
実技科目	前期	ミュージカル唱法		○		○	○
		英語劇	○		○		
理論科目	後期	特別講義A	○		○		
		演劇学研究A (日本演劇論) (2)	○		○		
		演劇学研究B (西洋演劇論) (2)	○		○		
創作・演出科目	後期	劇作研究B (劇作演習)			○		○
		演出研究				○	○
演劇教育・マネジメント科目	後期	演劇教育論			○		○
		アウトリーチ研究			○		○
演技科目	後期	演技研究A (日本演劇) (1)		○		○	
		演技研究B (外国演劇) (1)		○		○	
		演技研究C (実験劇) (1)		○		○	
		演技研究D (フィジカルシアター) (1)		○		○	
		演劇特別研究	○			○	
劇上演実習	後期	ワークショップC 1年次				○	○
		海外研修 1年次	○		○		
		劇上演実習B 1年次		○		○	○
劇上演実習	後期	劇上演実習C (専1最終公演)		○		○	○
		劇上演実習E (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習F (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習G (学内出演)		○		○	○
実技科目	後期	舞踊A (クラシックバレエ)		○		○	○
		舞踊C (日舞)		○		○	○
		ミュージカル唱法		○		○	○
		英語劇	○		○		

■ 2年次

科目区分	期	授業科目	①	②	③	④	⑤
理論科目	前期	特別講義B	○		○		
		演劇学研究A (日本演劇論) (1)	○		○		
		演劇学研究B (西洋演劇論) (2)	○		○		
		演劇学研究C (現代演劇論)	○		○		
創作・演出科目	前期	劇作研究A (劇作論)			○		○
		演劇教育・マネジメント科目	アーツマネジメント研究			○	○
演技科目	前期	演技研究A (日本演劇) (2)		○		○	
		演技研究B (外国演劇) (2)		○		○	
		演技研究C (実験劇) (2)		○		○	
		演技研究E (ミュージカル) (2)		○		○	
		演劇特別研究	○			○	
劇上演実習	前期	ワークショップB 2年次				○	○
		劇上演実習A 2年次		○		○	○
		劇上演実習E (学外出演)		○		○	○
実技科目	前期	劇上演実習F (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習G (学内出演)		○		○	○
		舞踊A (クラシックバレエ)		○		○	○
		舞踊B (コンテンポラリー)		○		○	○
実技科目	前期	ミュージカル唱法		○		○	○
		英語劇	○		○		
修了論文	前期	修了論文	○	○			○
理論科目	後期	特別講義B	○		○		
		演劇学研究A (日本演劇論) (2)	○		○		
		演劇学研究B (西洋演劇論) (2)	○		○		
創作・演出科目	後期	劇作研究B (劇作演習)			○		○
		演出研究				○	○
演劇教育・マネジメント科目	後期	演劇教育論			○		○
		アウトリーチ研究			○		○
演技科目	後期	演技研究A (日本演劇) (2)		○		○	
		演技研究B (外国演劇) (2)		○		○	
		演技研究C (実験劇) (2)		○		○	
		演技研究D (フィジカルシアター) (2)		○		○	
		演劇特別研究	○			○	
劇上演実習	後期	ワークショップD 2年次				○	○
		海外研修 2年次	○		○		
		劇上演実習B 2年次		○		○	○
劇上演実習	後期	劇上演実習D (専2修了公演)		○		○	○
		劇上演実習E (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習F (学外出演)		○		○	○
		劇上演実習G (学内出演)		○		○	○
実技科目	後期	舞踊A (クラシックバレエ)		○		○	○
		舞踊C (日舞)		○		○	○
		ミュージカル唱法		○		○	○
		英語劇	○		○		
修了論文	後期	修了論文	○	○			○

2018年度 科目ナンバリング

科目コード

科目コードは、学問分野の中で、その科目がどのような位置づけとなっているかを示す、学問分野中での住所のような役割を持っています。

科目コードの示し方は大学により多様ですが、基本的に3文字か4文字からなる文字コード部と、3ケタから5ケタからなる数字コード部で表す方式が一般的です。

【例】ジャズダンスA：DNC 1 3 2 0 T

↓

DNC…科目が属する学問分野を示す3文字コード
 1 …レベル
 3 …授業の方法
 2 …学問分野・領域の細分
 0 …科目整理番号
 T …所属コード

3文字コードは、その科目が主としてどのような学問分野に属しているのかを示しています。

3文字コードと学問分野との関係を【表1】に示します。

数字コードは、千の位にてその科目の難易度（レベル）を【表2】、百の位にて当該科目で主とする授業の方法（講義主体なのか、実技主体なのかなど）を【表3】、十の位にて3文字コードで示す学問分野・領域を細分した場合の位置づけを【表4】、一の位にて3文字コードと数字コードの千の位・百の位・十の位とが同じ科目中での、住所での番地に相当する当該科目の固有番号（科目を整理するための番号）を示しています。

所属コードは、本学での開講を担っている教育組織などを示しています。所属コードと教育組織との関係は次の通りです。

M：音楽専攻 T：演劇専攻 MA：専攻科音楽専攻 TA：専攻科演劇専攻 B：教養科目

〔表1〕 3文字コード：科目が属する学問分野

3文字コード	学問分野名称<日本語>	学問分野名称<英語>
FLS	語学	Foreign Language Studies
THE	演劇学	Theater
DNC	舞踊学	Dance
MUS	音楽	Music
VOM	音楽(歌唱)	Vocal Music
CAE	キャリア教育	Career Education
LIA	一般教養	Liberal Arts
ARC	芸術文化	Art and Culture

〔表2〕 千の位：レベル

1000から4000へと段階的にレベルが高くなります。

千の位	レベル
1	1000
2	2000
3	3000
4	4000

〔表3〕 百の位：授業の方法

百の位	授業の方法
0	講義
1	演習(理論)
2	演習(演技)
3	実技(グループレッスン)
4	実技(個人レッスン)
5	実習(スタッフ)
6	実習(ワークショップ)
7	実習(上演)

[表4] 十の位：学問分野・領域の細分

3文字コード	学問分野名称<日本語>	十の位	学問分野・領域の細分
FLS	語学	0	総論／総合／概論／一般／原論
		1	英語
		2	ドイツ語
		3	イタリア語
		4	フランス語
THE	演劇学	0	総論／総合／概論／一般／原論
		1	戯曲
		2	演出
		3	演技
		4	舞台技術
		5	制作
		6	批評
		7	映画
DNC	舞踊学	0	総論／総合／概論／一般／原論
		1	クラシックバレエ
		2	ジャズダンス
		3	タップダンス
		4	日舞
		5	コンテンポラリー
MUS	音楽（音楽学、ソルフェージュ）	1	ソルフェージュ
		2	音楽学
VOM	音楽（歌唱）	0	ソルフェージュ
		1	声楽
		2	発声
CAE	キャリア教育	0	情報
		1	環境
		2	社会福祉
		3	コミュニケーション
		4	アーツマネジメント
		5	応用演劇
LIA	一般教養	0	メディア
		1	思想
		2	日本国憲法
		3	文化
		4	教育
		5	文学
		6	日本語表現

2018年度 科目ナンバリング [教養科目]

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
キャリア教育	情報リテラシー論	CAE	講義	2	1・2	前期	CAE2000B
	情報処理論	CAE	講義	2	1・2	前期	CAE2001B
	音楽環境論	CAE	講義	2	1・2	前集	CAE2010B
	社会福祉学	CAE	講義	2	1・2	前期	CAE2020B
	表現コミュニケーション論	CAE	講義	2	1・2	後期	CAE2030B
	アーツマネジメント論	CAE	講義	2	1・2	前期	CAE2040B
	応用演劇論	CAE	講義	2	1・2	前期	CAE2050B
一般教養	メディア論	LIA	講義	2	1・2	後期	LIA2001B
	現代思想論	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2010B
	日本国憲法	LIA	講義	2	1・2	後期	LIA2020B
	文化政策論A	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2030B
	文化政策論B	LIA	講義	2	1・2	後期	LIA4030B
	青少年教育論	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2040B
	地域文化論	LIA	講義	2	1・2	後期	LIA2031B
	文学（古典）	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2050B
	文学（近世）	LIA	講義	2	1・2	後期	LIA2051B
	日本語論	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2060B
	日本語表現論	LIA	講義	2	1・2	前期	LIA2061B
	映画論	LIA	講義	2	1・2	後集	LIA2000B
語学	英語A I	FLS	演習（理論）	1	1	前期	FLS1100B
	英語A II	FLS	演習（理論）	1	1	後期	FLS2110B
	英語B I	FLS	演習（理論）	1	2	前期	FLS3110B
	英語B II	FLS	演習（理論）	1	2	後期	FLS4110B
	演劇英語	FLS	演習（理論）	1	1	前期	FLS1110B
	ドイツ語 I	FLS	演習（理論）	1	1	前期	FLS1120B
	ドイツ語 II	FLS	演習（理論）	1	1	後期	FLS2120B
	ドイツ語 III	FLS	演習（理論）	1	2	前期	FLS3120B
	ドイツ語 IV	FLS	演習（理論）	1	2	後期	FLS4120B
	イタリア語 I	FLS	演習（理論）	1	1	前期	FLS1130B
	イタリア語 II	FLS	演習（理論）	1	1	後期	FLS2130B
	イタリア語 III	FLS	演習（理論）	1	2	前期	FLS3130B
	イタリア語 IV	FLS	演習（理論）	1	2	後期	FLS4130B
	フランス語 I	FLS	演習（理論）	1	1	前期	FLS1140B
	フランス語 II	FLS	演習（理論）	1	1	後期	FLS2140B

2018年度 科目ナンバリング [芸術科/音楽専攻]

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
専攻教養科目	音楽基礎演習 バロックダンス	MUS	演習 (技術)	1	1	前期	MUS1200M
	音楽理論基礎	MUS	演習 (理論)	1	1	前期	MUS1010M
音楽理論	音楽理論 [和声] I	MUS	講義	2	1	前期	MUS1011M
	音楽理論 [和声] II	MUS	講義	2	1	後期	MUS2010M
	音楽理論 [和声] III	MUS	講義	2	2	前期	MUS3010M
	音楽理論 [和声] IV	MUS	講義	2	2	後期	MUS4010M
	対位法 I	MUS	講義	2	2	前期	MUS3011M
	対位法 II	MUS	講義	2	2	後期	MUS4011M
	コード論 I	MUS	講義	2	2	前期	MUS3012M
	音楽理論 [楽式] I	MUS	講義	2	2	前期	MUS3013M
	音楽理論 [楽式] II	MUS	講義	2	2	後期	MUS4012M
	日本音楽理論 I	MUS	講義	2	1	前期	MUS1012M
	日本音楽理論 II	MUS	講義	2	1	後期	MUS2011M
	日本音楽理論 III	MUS	講義	2	2	前期	MUS3014M
	日本音楽理論 IV	MUS	講義	2	2	後期	MUS4013M
音楽史	音楽史概説 I	MUS	講義	2	1	前期	MUS1020M
	音楽史概説 II	MUS	講義	2	1	後期	MUS2020M
	音楽史特講A	MUS	講義	2	2	前期	MUS3020M
	音楽史特講B	MUS	講義	2	2	前期	MUS3021M
	音楽史演習A	MUS	演習 (理論)	1	2	後期	MUS4120M
	音楽史演習B	MUS	演習 (理論)	1	2	後期	MUS4121M
	日本音楽史概説 I	MUS	講義	2	1	前期	MUS1021M
	日本音楽史概説 II	MUS	講義	2	1	後期	MUS2021M
	日本音楽概論	MUS	講義	2	2	後期	MUS4020M
ソルフェージュ	S.H.M. I	MUS	演習 (理論)	1	1	前期	MUS1130M
	S.H.M. II	MUS	演習 (理論)	1	1	後期	MUS2130M
	S.H.M. III	MUS	演習 (理論)	1	2	前期	MUS3130M
	S.H.M. IV	MUS	演習 (理論)	1	2	後期	MUS4130M
専門教育科目	演奏会制作法	MUS	演習 (理論)	1	1	後期	MUS1000M
	アウトリーチ概説	MUS	講義	2	1	前期	MUS1001M
	アウトリーチ演習	MUS	演習 (技術)	1	1	後期	MUS2200M
	音響学	MUS	講義	2	1	前期	MUS1002M
	特別講座	MUS	講義	1	1	集中	MUS1003M
	日本音楽特講	MUS	講義	2	1	後期	MUS1201M
	ディクショ (イタリア語)	MUS	演習 (技術)	1	1	前期	MUS1202M
	管楽器基礎 (呼吸法)	MUS	演習 (技術)	1	1	前期	MUS1203M
	うたA	MUS	演習 (技術)	1	1	前期	MUS1204M
	うたB	MUS	演習 (技術)	1	2	前期	MUS2202M
	初見演奏 (基礎)	MUS	演習 (技術)	1	1	前期	MUS1205M
	音楽マネジメント	MUS	講義	2	2	前期	MUS2000M
	音楽療法概論	MUS	講義	2	2	前期	MUS3000M
	演奏解釈 (1) ピアノ楽曲	MUS	講義	2	2	後期	MUS3001M
	演奏解釈 (2) 声楽曲	MUS	講義	2	2	前期	MUS3002M
	演奏解釈 (3) 室内楽曲	MUS	講義	2	2	前期	MUS3003M
	演奏解釈 (4) 日本音楽	MUS	講義	2	2	前期	MUS3004M
	楽器法 (和楽器)	MUS	講義	2	1	前期	MUS1004 M
	楽器法	MUS	講義	2	2	前集	MUS2001M
	指揮法 I	MUS	演習 (理論)	1	2	前期	MUS3100M
	指揮法 II	MUS	演習 (理論)	1	2	後期	MUS4100M
	伴奏法 I	MUS	演習 (技術)	1	1	後期	MUS2201M
	伴奏法 II	MUS	演習 (技術)	1	2	前期	MUS3200M

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
室内楽・ アンサンブル科目	合唱Ⅰ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1240M
	合唱Ⅱ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2240M
	合奏A	MUS	演習(技術)	2	1	後集	MUS2241M
	合奏B	MUS	演習(技術)	2	2	後集	MUS4240M
	室内楽A	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3244M
	室内楽B	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4244M
	オーケストラ・スタディ A	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1241M
	オーケストラ・スタディ B	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3240M
	声楽アンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1242M
	声楽アンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2242M
	声楽アンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3241M
	声楽アンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4241M
	管楽アンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1243M
	管楽アンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2243M
	管楽アンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3242M
	管楽アンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4242M
	金管アンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1244M
	金管アンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2244M
	金管アンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3243M
	金管アンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4243M
	サクソフォンアンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1245M
	サクソフォンアンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2245M
	サクソフォンアンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3245M
	サクソフォンアンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4245M
	ギターアンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1246M
	ギターアンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2246M
	ギターアンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3246M
	ギターアンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4246M
	邦楽アンサンブルAⅠ	MUS	演習(技術)	1	1	前期	MUS1247M
	邦楽アンサンブルAⅡ	MUS	演習(技術)	1	1	後期	MUS2247M
	邦楽アンサンブルBⅠ	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3247M
	邦楽アンサンブルBⅡ	MUS	演習(技術)	1	2	後期	MUS4247M
	合奏基礎	MUS	演習(技術)	1	2	前期	MUS3248M
伴奏A	MUS	演習(技術)	1	1	前・後	MUS1248M	
伴奏B	MUS	演習(技術)	1	2	前・後	MUS4248M	
実技科目	第一実技Ⅰ	MUS	実技	4	1	通年	MUS2450M
	第一実技Ⅱ	MUS	実技	4	2	通年	MUS4450M
	第二実技Ⅰ	MUS	実技	4	1	通年	MUS2350M
	第二実技Ⅱ	MUS	実技	4	2	通年	MUS4350M
	副科実技Ⅰ	MUS	実技	2	1	通年	MUS2351M
	副科実技Ⅱ	MUS	実技	2	2	通年	MUS4351M
	第一実技卒業試験	MUS	実習	4	2	後期	MUS4551M
特別演習	海外特別演習A	MUS	演習(技術)	2	1	前集	MUS1249M
	海外特別演習B	MUS	演習(技術)	2	2	前集	MUS3249M
	特別演習A	MUS	演習(技術)	1	1	通年	MUS1206M
	特別演習B	MUS	演習(技術)	1	2	通年	MUS3201M
実習科目	コラボレイト実習A	MUS	実習	1	1	集中	MUS2550M
	コラボレイト実習B	MUS	実習	1	2	集中	MUS4550M

2018年度 科目ナンバリング [専攻科/音楽専攻]

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
専門教育	音楽療法概説A	MUS	講義	4	1	通年	MUS1000MA
	音楽療法演習A	MUS	演習(演技)	2	1	通年	MUS1200MA
	音楽療法概説B	MUS	演習(演技)	4	2	通年	MUS2200MA
	音楽療法演習B	MUS	演習(演技)	2	2	通年	MUS3200MA
	音楽療法実習	MUS	実習(Staff)	1	2	後期	MUS4500MA
	演奏現場論A	MUS	講義	2	1	前期	MUS1001MA
	演奏現場論B	MUS	講義	2	2	前期	MUS3001MA
	アウトリーチ研究A	MUS	講義	4	1	通年	MUS1002MA
	アウトリーチ研究B	MUS	講義	4	2	通年	MUS3002MA
	特別講義(音楽)	MUS	講義	1	1	集中	MUS1003MA
	特別演習C	MUS	演習(演技)	1	1	通年	MUS1201MA
	特別演習D	MUS	演習(演技)	1	2	通年	MUS2200MA
音楽理論	音楽理論【和声】V	MUS	講義	2	1	前期	MUS1010MA
	音楽理論【和声】VI	MUS	講義	2	1	後期	MUS2010MA
	日本音楽理論C	MUS	講義	2	2	後期	MUS1011MA
	楽曲分析(古典派)	MUS	講義	2	1	前期	MUS1012MA
	楽曲分析(ロマン派以降)	MUS	講義	2	1	後期	MUS2011MA
	楽曲分析【編曲】	MUS	講義	2	2	前期	MUS3010MA
	楽曲分析【創作】	MUS	講義	2	2	後期	MUS4010MA
コード論II	MUS	講義	2	1	前期	MUS1013MA	
音楽史	音楽史研究	MUS	講義	4	1	通年	MUS1020MA
	日本音楽史研究A	MUS	講義	4	1	通年	MUS1021MA
	日本音楽史研究B	MUS	講義	4	2	通年	MUS2022MA
ソルフェージュ	S. H. M. V	MUS	演習(理論)	1	1	前期	MUS1130MA
	S. H. M. VI	MUS	演習(理論)	1	1	後期	MUS2130MA
アンサンブル	ピアノデュオ研究A	MUS	演習(演技)	4	1	通年	MUS1240MA
	ピアノデュオ研究B	MUS	演習(演技)	4	2	通年	MUS3240MA
	管楽アンサンブル研究A	MUS	演習(演技)	4	1	通年	MUS1241MA
	管楽アンサンブル研究B	MUS	演習(演技)	4	2	通年	MUS3241MA
	室内楽研究A	MUS	演習(演技)	2	1	前期	MUS2240MA
	室内楽研究B	MUS	演習(演技)	2	1	後期	MUS4240MA
	歌曲研究A	MUS	演習(演技)	4	1	通年	MUS1243MA
	歌曲研究B	MUS	演習(演技)	4	2	通年	MUS3242MA
	室内楽特設クラスA	MUS	演習(演技)	1	1	前集	MUS1244MA
室内楽特設クラスB	MUS	演習(演技)	1	1	後集	MUS2241MA	

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
室内楽	室内楽特設クラスC	MUS	演習 (演技)	1	2	前集	MUS3243MA
	室内楽特設クラスD	MUS	演習 (演技)	1	2	後集	MUS4241MA
	オペラ実習A【演奏】【演技】	MUS	実習 (Staff)	4	1	前期	MUS1540MA
	オペラ実習A【上演】	MUS	実習 (Staff)	2	1	後期	MUS2540MA
	オペラ実習B【演奏】【演技】	MUS	実習 (Staff)	4	2	前期	MUS3540MA
	オペラ実習B【上演】	MUS	実習 (Staff)	2	2	後期	MUS4540MA
	邦楽アンサンブル研究A	MUS	演習 (演技)	4	1	通年	MUS1245MA
	邦楽アンサンブル研究B	MUS	演習 (演技)	4	2	通年	MUS3244MA
	オーケストラスタディC	MUS	演習 (演技)	1	1	前期	MUS1246MA
	オーケストラスタディD	MUS	演習 (演技)	1	2	前期	MUS2242MA
	合奏C	MUS	演習 (演技)	2	1	後集	MUS3245MA
	合奏D	MUS	演習 (演技)	2	2	後集	MUS4242MA
	ギターアンサンブルC	MUS	演習 (演技)	2	1	通年	MUS1247MA
	ギターアンサンブルD	MUS	演習 (演技)	2	2	通年	MUS3246MA
	伴奏C	MUS	演習 (演技)	2	1	前集・後集	MUS3247MA
	伴奏D	MUS	演習 (演技)	2	2	前集・後集	MUS4243MA
	伴奏研究A	MUS	演習 (演技)	1	1	前集	MUS1248MA
	伴奏研究B	MUS	演習 (演技)	1	1	後集	MUS2243MA
	伴奏研究C	MUS	演習 (演技)	1	2	前集	MUS3248MA
	伴奏研究D	MUS	演習 (演技)	1	2	後集	MUS4244MA
	海外特別演習C	MUS	演習 (演技)	2	1	前集	MUS2244MA
	海外特別演習D	MUS	演習 (演技)	2	1	前集	MUS4245MA
実技	学内演奏Ⅰ	MUS	実習 (Staff)	2	1	通年	MUS3550MA
	学内演奏Ⅱ	MUS	実習 (Staff)	2	2	通年	MUS4550MA
	コラボレイト実習C	MUS	実習 (Staff)	2	1	前集・後集	MUS3551MA
	コラボレイト実習D	MUS	実習 (Staff)	2	2	前集・後集	MUS4551MA
	第一実技Ⅲ	MUS	実技 (PL)	6	1	通年	MUS2450MA
	第一実技Ⅳ	MUS	実技 (PL)	6	2	通年	MUS4450MA
	第二実技Ⅲ	MUS	実技 (GL)	4	1	通年	MUS2350MA
	第二実技Ⅳ	MUS	実技 (GL)	4	2	通年	MUS4350MA
	副科実技Ⅲ	MUS	実技 (GL)	2	1	通年	MUS2351MA
	副科実技Ⅳ	MUS	実技 (GL)	2	2	通年	MUS4351MA
第1実技修了試験	MUS	実習 (Staff)	4	2	後期	MUS4550MA	

2018年度 科目ナンバリング [芸術科/演劇専攻]

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
基礎実技科目	基礎演劇演習A	THE	演習 (演技)	1	1	前期	THE1230T
	基礎演劇演習B	THE	演習 (演技)	1	1	前期	THE1231T
	身体トレーニング	THE	実技 (GL)	1	1	前期	THE1330T
	ボイス・トレーニング (歌唱)	VOM	実技 (GL)	1	1	前期	VOM1310T
演技科目	演劇演習A	THE	演習 (演技)	1	1	後期	THE2230T
	演劇演習B	THE	演習 (演技)	1	1	後期	THE2231T
	演劇演習C	THE	演習 (演技)	1	2	前期	THE3230T
	演劇演習D	THE	演習 (演技)	1	2	後期	THE4230T
ストレートプレイ 実技科目	演技演習A (ダイアログ)	THE	演習 (演技)	1	2	前・後	THE3231T
	演技演習B (アンサンブル)	THE	演習 (演技)	1	2	前・後	THE4231T
ミュージカル 実技科目	ショーダンス I	DNC	実技 (GL)	1	2	前期	DNC3320T
	ミュージカルトレーニングB	VOM	実技 (GL)	1	2	前期	VOM3310T
	ミュージカル演習	THE	演習 (演技)	1	2	後期	THE4232T
	ショーダンス II	DNC	実技 (GL)	1	2	後期	DNC4320T
実技科目	演劇特別演習 I	THE	演習 (演技)	1	1	後期	THE2232T
	演劇特別演習 II	THE	演習 (演技)	1	2	前期	THE3232T
	マイム	THE	実技 (GL)	1	1	前期	THE1331T
	アクション	THE	実技 (GL)	1	1	後期	THE2333T
	狂言 I	THE	実技 (GL)	1	1	後期	THE2334T
	狂言 II	THE	実技 (GL)	1	2	前期	THE3330T
	日本舞踊 I	DNC	実技 (GL)	1	1	後期	DNC2340T
	日本舞踊 II	DNC	実技 (GL)	1	2	前期	DNC3340T
	バレエ・ムーヴメント	DNC	実技 (GL)	1	1	前期	DNC1310T
	クラシックバレエ I	DNC	実技 (GL)	1	1	後期	DNC2310T
	クラシックバレエ II	DNC	実技 (GL)	1	2	前期	DNC3310T
	クラシック唱法 I	VOM	実技 (GL)	1	1	後期	VOM2311T
	クラシック唱法 II	VOM	実技 (GL)	1	2	前期	VOM3311T
	ジャズダンス A	DNC	実技 (GL)	1	1	前期	DNC1320T
	ジャズダンス B	DNC	実技 (GL)	1	1	後期	DNC2320T
	ジャズダンス C	DNC	実技 (GL)	1	2	前期	DNC3321T
	タップダンス I	DNC	実技 (GL)	1	1	後期	DNC2330T
	タップダンス II	DNC	実技 (GL)	1	2	前期	DNC3330T
	ミュージカルトレーニングA	VOM	実技 (GL)	1	1	後期	VOM2310T
	アフレコ実技 I	THE	実技 (GL)	1	2	前期	THE3331T
	アフレコ実技 II	THE	実技 (GL)	1	2	後期	THE4330T
	ドラマリーディングA	THE	実技 (GL)	1	1・2	前期	THE1332T
	ドラマリーディングB	THE	実技 (GL)	1	1・2	後期	THE2330T
	歌唱 (個人レッスン) A	VOM	実技 (PL)	1	1	前期	VOM1410T
	歌唱 (個人レッスン) B	VOM	実技 (PL)	1	1	後期	VOM2410T
	歌唱 (個人レッスン) C	VOM	実技 (PL)	1	2	前期	VOM3410T
	歌唱 (個人レッスン) D	VOM	実技 (PL)	1	2	後期	VOM4410T
	歌唱 (個人レッスン) E	VOM	実技 (PL)	1	1	前期	VOM1411T
	歌唱 (個人レッスン) F	VOM	実技 (PL)	1	1	後期	VOM2411T
	歌唱 (個人レッスン) G	VOM	実技 (PL)	1	2	前期	VOM3411T
	歌唱 (個人レッスン) H	VOM	実技 (PL)	1	2	後期	VOM4411T

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
理論科目	舞台芸術概論	THE	講義	2	1	前期	THE1000T
	日本演劇史A (古典)	THE	講義	2	1	前期	THE1001T
	日本演劇史B (近現代)	THE	講義	2	1	後期	THE2000T
	西洋演劇史A (古典)	THE	講義	2	1	前期	THE1002T
	西洋演劇史B (近現代)	THE	講義	2	1	後期	THE2001T
	ミュージカル概論	THE	講義	2	1	前期	THE1004T
	ミュージカル論	THE	講義	2	1	後期	THE2002T
	戯曲講読演習A (古典)	THE	演習 (理論)	1	1・2	前期	THE2110T
	戯曲講読演習B (近現代)	THE	演習 (理論)	1	1・2	後期	THE3110T
	演劇批評論	THE	講義	2	2	前期	THE3060T
	演劇文化論A	THE	講義	2	1・2	前期	THE1003T
	演劇文化論B	THE	講義	2	1・2	後期	THE2004T
	ソルフェージュ基礎	VOM	演習 (理論)	1	1	後期	VOM2100T
	ソルフェージュ	VOM	実技 (GL)	1	2	前期	VOM3300T
	パフォーミングアーツ論	THE	講義	2	2	後期	THE4060T
	演劇史特講	THE	講義	1	2	後期	THE4000T
	演劇論	THE	講義	2	1・2	後期	THE2003T
	演出論	THE	講義	2	1・2	前集	THE1020T
	劇作法	THE	講義	2	1・2	後期	THE4011T
実習科目	集中講義 (舞台照明実習) ①	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1540T
	集中講義 (舞台照明実習) ②	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1541T
	集中講義 (舞台音響実習) ①	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1542T
	集中講義 (舞台音響実習) ②	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1543T
	集中講義 (ヘアメイク実習)	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1544T
	集中講義 (舞台監督実習)	THE	実習 (Staff)	1	1	前集	THE1545T
	ワークショップ (ストレートプレイ)	THE	実習 (WS)	1	1	後集	THE2630T
	ワークショップ (ストレートプレイ)	THE	実技 (GL)	1	2	前集	THE3332T
	ワークショップ (ミュージカル)	THE	実習 (WS)	1	1	後集	THE2631T
	ワークショップ (ミュージカル)	THE	実技 (GL)	1	2	前集	THE3333T
	演劇研修 (八ヶ岳合宿)	THE	実習 (WS)	1	1	前集	THE1600T
	海外研修	THE	実習 (WS)	1	1・2	後集	THE3600T
	劇上演実習 A (試演会)	THE	実習 (上演)	4	2	後集	THE4702T
	劇上演実習 B (卒業公演)	THE	実習 (上演)	4	2	後集	THE4703T
	劇上演実習 C (学外出演)	THE	実習 (上演)	4	1・2	前・後	THE4700T
	劇上演実習 D (学外出演)	THE	実習 (上演)	4	1・2	前・後	THE4701T
	劇上演実習 E (学内出演)	THE	実習 (上演)	1	1・2	前・後	THE3700T
	劇上演実習 F (学内出演)	THE	実習 (上演)	1	1・2	前・後	THE3702T

2018年度 科目ナンバリング [専攻科/演劇専攻]

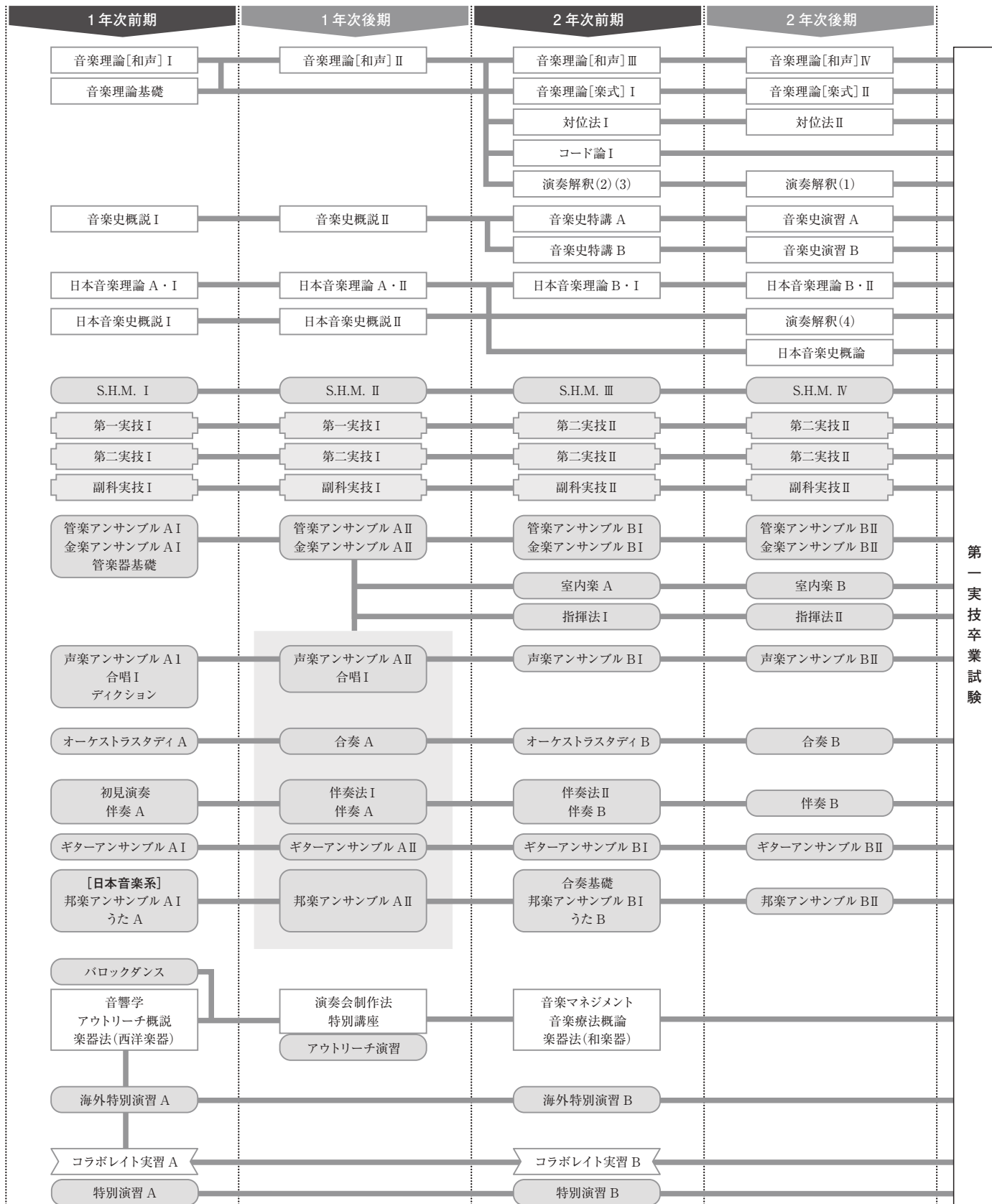
科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
理論科目	特別講義A	THE	講義	2	1	通年	THE1000TA
	特別講義B	THE	講義	2	2	通年	THE3000TA
	演劇学研究A (日本演劇論) (1)	THE	講義	2	1・2	前期	THE1001TA
	演劇学研究A (日本演劇論) (2)	THE	講義	2	1・2	後期	THE2000TA
	演劇学研究B (西洋演劇論) (1)	THE	講義	2	1・2	前期	THE1002TA
	演劇学研究B (西洋演劇論) (2)	THE	講義	2	1・2	後期	THE2001TA
	演劇学研究C (現代演劇論)	THE	講義	2	1・2	前期	THE3002TA
劇作・演出科目	劇作研究A (劇作論)	THE	講義	2	1・2	前期	THE1010TA
	劇作研究B (劇作演習)	THE	演習 (理論)	1	1・2	後期	THE3110TA
	演出研究	THE	講義	2	1・2	後期	THE2020TA
演劇教育・ マネジメント 科目	演劇教育論	THE	演習 (理論)	2	1・2	後期	THE2100TA
	アーツマネジメント研究	THE	演習 (理論)	2	1・2	前期	THE1150TA
	アウトリーチ研究	THE	演習 (理論)	2	1・2	後期	THE2150TA
演技科目	演技研究A (日本演劇) (1)	THE	演習 (演技)	2	1	通年	THE1230TA
	演技研究A (日本演劇) (2)	THE	演習 (演技)	2	2	通年	THE3230TA
	演技研究B (外国演劇) (1)	THE	演習 (演技)	2	1	通年	THE1231TA
	演技研究B (外国演劇) (2)	THE	演習 (演技)	2	2	通年	THE3231TA
	演技研究C (実験劇) (1)	THE	演習 (演技)	2	1	通年	THE1232TA
	演技研究C (実験劇) (2)	THE	演習 (演技)	2	2	通年	THE3232TA
	演技研究D (フィジカルシアター) (1)	THE	演習 (演技)	1	1	後期	THE1233TA
	演技研究D (フィジカルシアター) (2)	THE	演習 (演技)	1	2	後期	THE3233TA
	演技研究E (ミュージカル) (1)	THE	演習 (演技)	1	1	前期	THE1234TA
	演技研究E (ミュージカル) (2)	THE	演習 (演技)	1	2	前期	THE3234TA
	演劇特別研究	THE	演習 (演技)	2	1・2	通年	THE4230TA
	ワークショップA	THE	実習 (WS)	1	1	前集	THE1630TA
	ワークショップB	THE	実習 (WS)	1	2	前集	THE3630TA
	ワークショップC	THE	実習 (WS)	1	1	後集	THE2630TA
	ワークショップD	THE	実習 (WS)	1	2	後集	THE4630TA
	海外研修 (1)	THE	実習 (WS)	1	1	後集	THE3600TA
	海外研修 (2)	THE	実習 (WS)	1	2	後集	THE4600TA
実技科目	舞踊A (クラシックバレエ)	DNC	実技 (GL)	2	1・2	通年	DNC2310TA
	舞踊B (コンテンポラリー)	DNC	実技 (GL)	1	1・2	前期	DNC3350TA
	舞踊C (日舞)	DNC	実技 (GL)	1	1・2	後期	DNC2340TA
	ミュージカル唱法	VOM	実技 (GL)	2	1・2	通年	VOM2310TA
	英語劇	FLS	演習 (演技)	2	1・2	通年	FLS3210TA
	歌唱 (個人レッスン) I	VOM	実技 (PL)	2	1	前期	VOM1410TA
	歌唱 (個人レッスン) J	VOM	実技 (PL)	2	1	後期	VOM1411TA
	歌唱 (個人レッスン) K	VOM	実技 (PL)	2	1	前期	VOM2410TA
	歌唱 (個人レッスン) L	VOM	実技 (PL)	2	1	後期	VOM2411TA
	歌唱 (個人レッスン) M	VOM	実技 (PL)	1	2	前期	VOM3410TA
	歌唱 (個人レッスン) N	VOM	実技 (PL)	1	2	後期	VOM3411TA
	歌唱 (個人レッスン) O	VOM	実技 (PL)	1	2	前期	VOM4410TA
	歌唱 (個人レッスン) P	VOM	実技 (PL)	1	2	後期	VOM4411TA

科目区分	授業科目	科目コード	授業の方法	単位数	履修年次	履修期	科目No.
劇上演実習	劇上演実習A	THE	実習（上演）	4	1	集中	THE3700TA
	劇上演実習A	THE	実習（上演）	4	2	集中	THE4700TA
	劇上演実習B	THE	実習（上演）	4	1	集中	THE3701TA
	劇上演実習B	THE	実習（上演）	4	2	集中	THE4701TA
	劇上演実習C（専1最終公演）	THE	実習（上演）	4	1	集中	THE3702TA
	劇上演実習D（専2修了公演）	THE	実習（上演）	4	2	集中	THE4702TA
	劇上演実習E（学外出演）	THE	実習（上演）	4	1・2	集中	THE4703TA
	劇上演実習F（学外出演）	THE	実習（上演）	4	1・2	集中	THE4704TA
	劇上演実習G（学内出演）	THE	実習（上演）	1	1・2	集中	THE3703TA
修了論文	修了論文	THE	講義	4	1・2	通年	THE4000TA

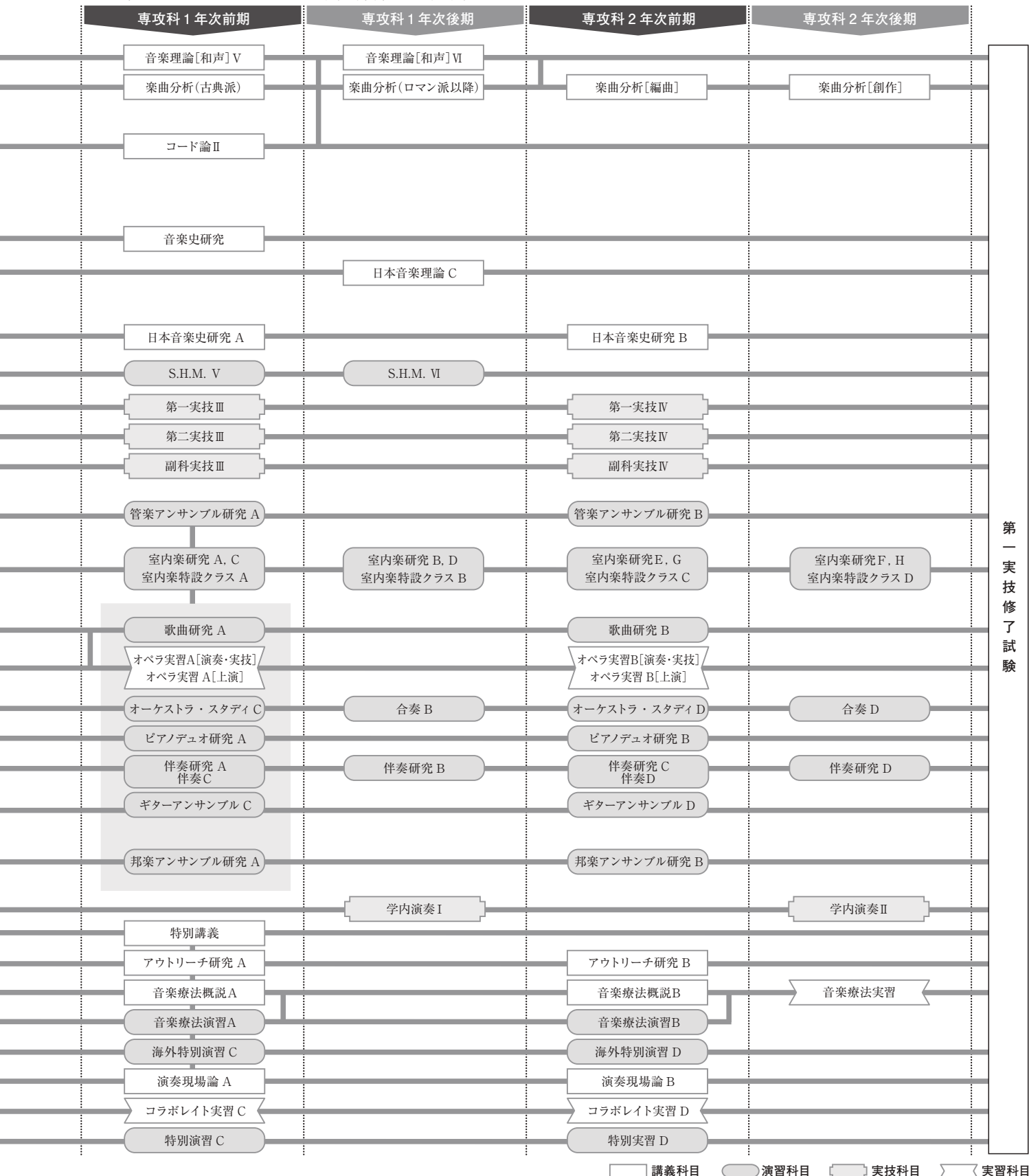
2018年度 カリキュラムツリー

カリキュラムツリーは、2年間の学修の系統性と順次性を図に示したものである。各科目がカリキュラムの中でどのような位置づけにあるのかを確認し、学修の一助とすること。

2018年度 カリキュラムツリー [芸術科/音楽専攻]



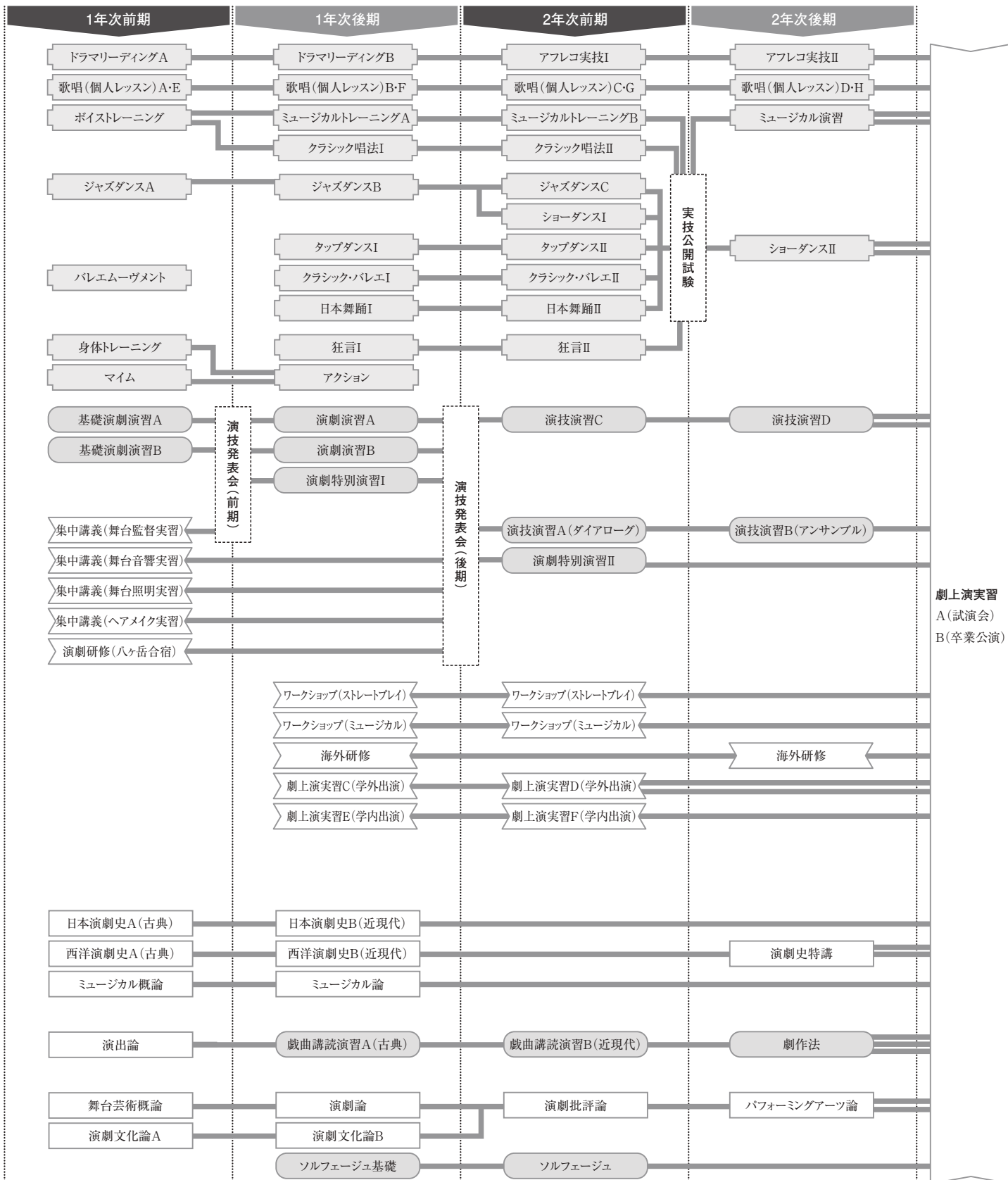
2018年度 カリキュラムツリー [専攻科科/音楽専攻]



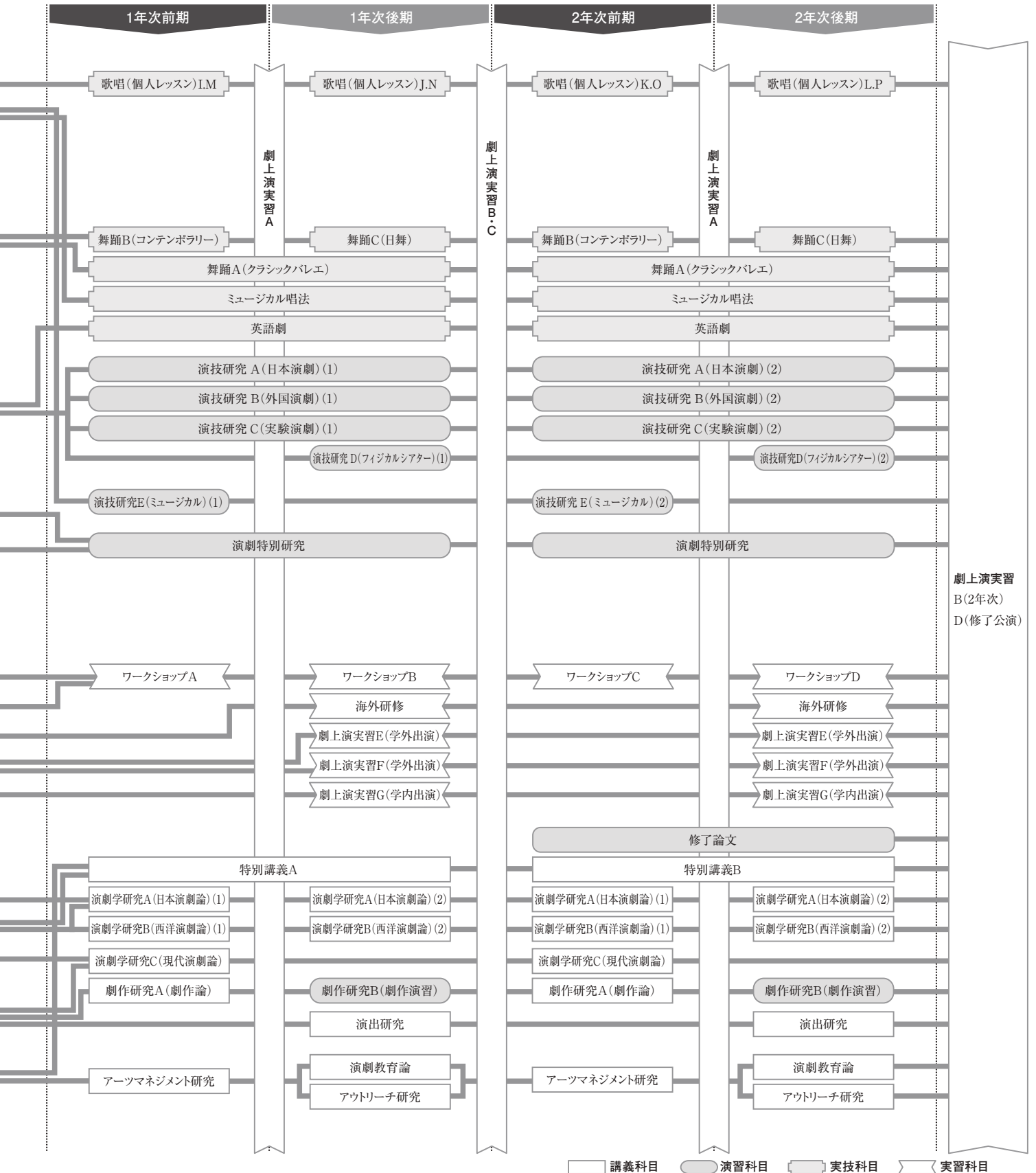
第一実技修了試験

講義科目
 演習科目
 実技科目
 実習科目

2018年度 カリキュラムツリー [芸術科/演劇専攻]



2018年度 カリキュラムツリー [専攻科/演劇専攻]



劇上演実習
B(2年次)
D(修了公演)

2017 年度入学生用 別表…1

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：1. 基礎教養科目

科目区分	授業科目・クラス	2018年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				概要 ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	
キャリアデザイン	キャリア・デザインA(基礎教養)	情報リテラシー論	竹内 聖	前期	2				127
	キャリア・デザインB(メディアと表現)	メディア論	高橋 宏幸	後期	2				130
	キャリア・デザインC(情報処理)	情報処理論	岡本 直久	前期	2				127
	芸術とキャリアA	音楽環境論	久保田 慶一	前集	2				128
	芸術とキャリアB	廃止		前集	2				
	表現コミュニケーション論	追加	中山 夏織	後期	2				129
	アーツマネージメント論	追加	中山 夏織	前期	2				129
	応用演劇論	追加	大谷賢治郎	前期	2				130
芸術文化	芸術文化講座A(日本国憲法)	日本国憲法	西山 智之	後期	2				131
	芸術文化講座B(異文化理解)	地域文化論	坂田 博	後期	2				133
	芸術文化講座C(現代の福祉)	社会福祉学	藤森 雄介	前期	2				128
	芸術文化講座D(日本語論)	日本語論	野間 哲	前期	2				135
	芸術文化講座E(芸術と社会)	現代思想論	高橋 宏幸	前期	2				131
	芸術文化講座F(日本語表現論)	日本語表現論	野間 哲	後期	2				135
	芸術文化講座G(近代文学)	文学(近世)	野間 哲	後期	2				134
	芸術文化講座H(古典文学)	文学(古典)	野間 哲	前期	2				134
	文化政策論A	追加	中山 夏織	前期	2				132
	文化政策論B	追加	中山 夏織	後期	2				132
	青少年教育論	追加	大谷賢治郎	前期	2				133
	映画論	芸術科演劇専攻科目から変更	行定 勲	後集	2				136
外国語	英語AⅠ		J. ファーナー	前期	1				136
	英語AⅡ		J. ファーナー	後期		1			137
	英語BⅠ		田村奈穂子	前期			1		137
	英語BⅡ		田村奈穂子	後期				1	138
	英語C	廃止		後期		1			
	演劇英語①②		C. バーナム	前期	1				138
	ドイツ語Ⅰ・Ⅱ	芸術科音楽専攻科目から変更	D. グロス	1年次	1	1			139
	ドイツ語Ⅲ・Ⅳ	芸術科音楽専攻科目から変更	D. グロス	2年次			1	1	140
	イタリア語Ⅰ・Ⅱ	芸術科音楽専攻科目から変更	M. ズバラグリ	1年次	1	1			141
	イタリア語Ⅲ・Ⅳ	芸術科音楽専攻科目から変更	M. ズバラグリ	2年次			1	1	142
フランス語Ⅰ・Ⅱ	芸術科音楽専攻科目から変更	野坂.S. マガリ	1年次	1	1			143	

2017年度入学生用 別表…2

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：2. 芸術科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	チャップ対象外	概要ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
基礎教養科目	キャリアデザインC(情報処理)	情報処理論	岡本 直久	前期	2				※教職受講者必修	(必修科目の修得単位は専攻科目単位として卒業要件に含むことができる) 修得単位は自由選択単位として卒業要件に含むことができる			127
	芸術文化講座A(日本国憲法)	日本国憲法	西山 智之	後期		2			※教職受講者必修				131
	芸術文化講座C(現代の福祉)	社会福祉学	藤森 雄介	前期	2				※教職受講者必修				128
	英語A I・II		J. ファーナー	前・後	1	1			●外国語(英・仏・独・伊) 1科目選択必修 ※声楽専修はイタリア語を含む2外国語必修 ※同じ語学の「I・II」「III・IV」をもって、1科目とみなす				136・137
英語B I・II		田村奈穂子	前・後			1	1					137・138	
専攻教養科目	ドイツ語I・II		D. グロス	前・後	1	1			●全専修必修 ●全専修必修(いずれか1単位) ※日本音楽専修は狂言以外を選択すること ●日本音楽専修は「狂言I」「狂言II」必修			139	
	ドイツ語III・IV		D. グロス	前・後			1	1					140
	イタリア語I・II		M. スバラグリ	前・後	1	1							141
	イタリア語III・IV		M. スバラグリ	前・後			1	1					142
	フランス語I・II		野坂. S. マガリ	前・後	1	1							143
	音楽基礎演習 -バロックダンス	a b		浜中 康子	前期	1							
音楽理論基礎			福田 恵子	前期	1							145	
演劇専攻科目	演劇専攻『実技科目(共通)』より、他専攻履修可能な科目 ※ただし、「アプレコ実技I」「アプレコ実技II」を除く												
専攻科目・1年次	音楽理論[和声] I	a b	平井 正志 池田 哲美	前期	2				PVWSG必修				146
	音楽理論[和声] II	a b	平井 正志 池田 哲美	後期		2			PVWSG必修				146
	音楽史概説I・II		森下 俊一	前・後	2	2			PVWSG必修		○		147
	日本音楽理論A I・II		森重 行敏	前・後	2	2			J必修		○		147
	日本音楽史概説I・II		野川美穂子	前・後	2	2			J必修		○		148
	日本音楽特講		杵屋 日織	後期		2			※教職受講者(除く)必修(教職受講者のみ履修可)		△		148
	演奏会制作法		伊藤 直樹	後期		1							149
	アウトリーチ概説		永井 由比	前期	2								149
	アウトリーチ演習		永井 由比	後期		1							150
	音響学		岩崎 真	前期	2						○		150
	ディクシオン(イタリア語)		井上 由紀	前期	1				V必修				151
	S. H. M. I・II	① ② ③ ④ ⑤ 追加	塩崎 美幸 池田 哲美 坂田 晴美 三瀬 俊吾 長谷川郁子	前・後	1	1			●全専修必修				151
	合唱I・II		樋本 英一	前・後	1	1			PVWSG(女子のみ)必修				152
	オーケストラスタディア		志村 寿一	前期	1				S必修				152
	合奏A		志村 寿一	後集		2			S必修		□		153
	管楽器基礎(呼吸法)		三塚 至	前期	1				W必修				153
	声楽アンサンブルA I・II		松井 康司	前・後	1	1			男子のみ(J除く)必修				154
	管楽アンサンブルA I・II	a b	永井 由比 石橋 雅一	前・後 前・後	1 1	1 1			W(FIのみ)必修 W(FI, Tp, Tb, Tub, Sx除く)必修				154 155
	金管アンサンブルA I・II		神谷 敏	前・後	1	1							155
	サクソフォンアンサンブルA I・II		彦坂真一郎	前・後	1	1			Sx必修				156
	ギター・アンサンブルA I・II		佐藤 紀雄	前・後	1	1			G必修				156
	うたA		今藤美知央	前期	1				J必修		△		156
	邦楽アンサンブルA I・II		野坂 恵子	前・後	1	1			J必修				157
	伴奏法I		揚原さとみ	後期		1			※教職受講者(J除く)必修				157
	初見演奏(基礎)		吉田 真穂	前期	1				P必修				158
	第一実技I			通年		4			●全専修必修		□		159
	第二実技I (ピアノ・声楽・管弦・ギター・日本音楽・作曲)			通年		4					○	□	159
	副科実技I(ピアノ)			通年		2			●全専修必修	VWSGJ	○	□	159
	副科実技I(声楽)			通年		2				PGJ	○	□	159
	副科実技I(管弦・ギター・日本音楽)			通年		2				GJ	○	□	159
	伴奏A (1) (2)		荻野 千里	前集 後集	1 1								158 158
	海外特別演習A		荻野 千里	前集	2								160
特別演習A		志村 寿一 長谷川郁子	通年		1			●全専修必修			□	160	
特別講座		植松 伸夫	後集		1			●全専修必修				161	
コラボレイト実習A (1) (2)		松井 康司	前集 後集	1 1						○	□	161	

科目 区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業 要件	他 専攻	キャ ップ 対 象 外	概要 ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目・2年次	音楽理論【和声】Ⅲ	a	平井 正志 池田 哲美	前期			2		PVWSG必修			162	
	音楽理論【和声】Ⅳ	a b	平井 正志 池田 哲美	後期			2		PVWSG必修			162	
	対位法Ⅰ・Ⅱ		池田 哲美	前・後			2	2				163	
	コード論	コード論Ⅰ	小林 真人	前期			2			◎		163	
	楽器法		大澤 健一	前集			2			◎	□	164	
	音楽マネジメント		児玉 真	前期			2					164	
	日本音楽理論BⅠ・Ⅱ		森重 行敏	前・後			2	2	J必修	◎		147	
	音楽史特講A		関野さとみ	前期			2			◎		165	
	音楽史特講B		大津 聡	前期			2			◎		165	
	音楽史演習A		関野さとみ	後期				1		◎		166	
	音楽史演習B		大津 聡	後期				1		◎		166	
	音楽療法概論		鈴木千恵子	前期			2			◎		167	
	演奏解釈(1)ピアノ楽曲		荻野 千里	後期				2	P必修			167	
	演奏解釈(2)声楽曲		相田 麻純	前期			2		V必修	◎		168	
	演奏解釈(3)室内楽曲		寺岡有希子	前期			2		S必修			168	
	音楽理論【楽式】Ⅰ・Ⅱ	① ②	穴戸 里佳 森下 俊一	前・後			2	2	PVWSG必修	◎		169	
	S. H. M. Ⅲ・Ⅳ	① ② ③ ④ ⑤	塩崎 美幸 池原 舞 坂田 晴美 三瀬 俊吾 追加 長谷川郁子	前・後			1	1	●全専修必修			170	
	オーケストラ・スタディB		志村 寿一	前期			1		S必修			152	
	合奏B		志村 寿一	後集				2	S必修		□	153	
	声楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		松井 康司	前・後			1	1	男子(J除く)・女子(Vのみ)必修			154	
	管楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		石橋 雅一	前・後			1	1	W(Sx除く)必修			155	
	金管アンサンブルBⅠ・Ⅱ		神谷 敏	前・後			1	1	W(Tr. Tb. Tuのみ)必修			155	
	指揮法Ⅰ・Ⅱ		樋本 英一	前・後			1	1	※教職受講者必修			170	
	室内楽A	a b	荻野 千里 野口千代光 北本 秀樹	前期			1					171	
	室内楽B	a b c d	追加 阪本奈津子 藤沼恵美子 白尾 隆 菊池カナエ	後期				1				171	
	サクソフォン・アンサンブルBⅠ・Ⅱ		彦坂真一郎	前・後			1	1	Sx必修			172	
	ギター・アンサンブルBⅠ・Ⅱ		佐藤 紀雄	前・後			1	1	G必修			172	
	うたB		今藤美知央	前期			1		J必修			173	
	邦楽アンサンブルBⅠ・Ⅱ		野坂 恵子	前・後			1	1	J必修			173	
	伴奏法Ⅱ		揚原さとみ	前期			1		※教職受講者(J除く)必修			174	
	初見演奏(応用)	追加	吉田 真穂	後期				1				174	
	第一実技Ⅱ			通年				4	●全専修必修		□	159	
	第二実技Ⅱ (ピアノ・チェンバロ・声楽・管・ 弦・ギター・日本音楽・作曲)			通年				4		◎	□	159	
	副科実技Ⅱ (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)			通年				2		◎	□	159	
	第一実技卒業試験							4	●全専修必修		□		
	伴奏B	(1) (2)	荻野 千里	前集 後集			1	1			□	158	
海外特別演習B		荻野 千里	前集				2			□	158		
特別演習B		志村 寿一 長谷川郁子	通年		1			●全専修必修		□	160		
コラボレート実習B	(1) (2)	松井 康司	前集 後集			1	1			□	161		

専攻科目は各専修の必修単位を含め、1・2年次を通じて48単位以上修得

●下記の科目については隔年開講とする。

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	開講 年度	他 専攻	キヤップ 対象外	概要 ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目	日本音楽概論		森重 行敏	後期				2	J必修 ※教職受講者必修	2018	○		175
	合奏基礎(和楽器)		滝田美智子	前期			1		J必修	2018			175
	楽器法(和楽器)		滝田美智子	前期	2				J必修	2017			
	演奏解釈(4)日本音楽		たかの舞俐	前期				2	J必修	2018			176

【備考】

- ①P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修
 ②「他専攻の履修」欄は、○は他専攻の学生（1・2年次とも。専攻科生含む）が履修可能な科目。
 ただし、◎は芸術科2年生以上、△は専攻科演劇専攻でないと履修できない。

<2017年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 48単位
 （基礎教養科目・専攻教養科目・他専攻科目より各専修の必修単位数を含む）
 ②自由選択単位数 14単位
 ※専修別による必修単位数は、「注⑨専攻科目必修単位数」を参照のこと

注

- ①Iの修得なしにIIの履修はできない。
 ②第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各50分）
 ③第二実技は、選択（40分）。第一実技に準じた専門レベル。履修料別途徴収。
 ④副科実技は、I必修、II選択（20分）
 Iは、ピアノ専修者は声楽、声楽・管楽器・弦楽器専修者はピアノを必修とする。
 副科実技を第二実技として履修する場合は100,000円、第二実技と副科実技の両方を履修する場合は200,000円を別途徴収。
 ⑤「日本音楽特講」は教職に関する科目の受講手続きを経た学生のみ履修可。
 ただし、教職課程受講生の人数が少ない等の事情によっては、その他の学生の受講を認める場合がある。
 ⑥選択科目「伴奏」について
 前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。
 「伴奏受講票」を使用のこと。
 ⑦選択科目「コラボレイト実習」について
 専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。
 「コラボレイト実習受講票」を使用のこと。
 ⑧学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。
 ⑨専攻科目必修単位（※基礎教養科目・専攻教養科目・他専攻科目内の必修単位含む）

	1年次		2年次		合計	
	男	女	男	女	男	女
ピアノ専修	26	26	23	21	49	47
声楽専修	28	28	23	23	51	51
管楽器専修	28	28	23	21	51	49
弦楽器専修	28	28	26	24	54	52
ギター専修	27	27	23	21	50	48
日本音楽専修	29	29	24	24	53	53

ただし、日本音楽専修者の専攻科目必修単位数は、下記科目群の単位数を含む。

科目区分	授業科目	担当氏名	期間	単位数
演劇専攻科目	狂言Ⅰ	善竹富太郎	後期	1
	狂言Ⅱ	善竹富太郎	前期	1

2017年度入学生用 別表…3

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：3. 芸術科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業 要件	他 専攻	キャンパス 対象外	概要 ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
基礎実技科目	基礎演劇演習A	a	越光 照文	前期	2				a組必修	6			177
		b	三浦 剛	前期	2				b組必修				177
		c	P. ゲスナー	前期	2				c組必修				178
		d	宮崎 真子	前期	2				d組必修				178
	基礎演劇演習B	a	P. ゲスナー	前期	2				a組必修				179
		b	宮崎 真子	前期	2				b組必修				179
		c	越光 照文	前期	2				c組必修				180
		d	三浦 剛	前期	2				d組必修				180
	身体トレーニング	a	山本光二郎	前期	1				a組必修				181
		b	山本光二郎	前期	1				b組必修				181
		c	山本光二郎	前期	1				c組必修				181
		d	山本光二郎	前期	1				d組必修				181
	ボイス・トレーニング(歌唱)	a	信太 美奈	前期	1				a組必修				181
		b	信太 美奈	前期	1				b組必修				181
		c	信太 美奈	前期	1				c組必修				181
		d	信太 美奈	前期	1				d組必修				181
演技系科目	演劇演習A	a	三浦 剛	後期		2			a組必修	8			182
		b	越光 照文	後期		2			b組必修				182
		c	宮崎 真子	後期		2			c組必修				183
		d	P. ゲスナー	後期		2			d組必修				183
	演劇演習B	a	宮崎 真子	後期		2			a組必修				184
		b	P. ゲスナー	後期		2			b組必修				184
		c	三浦 剛	後期		2			c組必修				185
		d	越光 照文	後期		2			d組必修				185
	演劇演習C	a	P. ゲスナー	前期			2		a組必修				186
		b	宮崎 真子	前期			2		b組必修				186
		c	三浦 剛	前期			2		c組必修				187
		d	大塚 幸太	前期			2		d組必修				187
	演劇演習D	a	三浦 剛	後期				2	a組必修				188
		b	大塚 幸太	後期				2	b組必修				188
		c	P. ゲスナー	後期				2	c組必修				189
		d	宮崎 真子	後期				2	d組必修				189
演技系 ストレートレイ系	演技演習A(ダイアログ)	a	大谷賢治郎	前期			2	ストレートプレイコース 必修	4			190	
		b		後期			2				190		
	演技演習B(アンサンブル)	a	シライ ケイタ	後期			2					190	
b	前期				2			190					
演技系 ミュージカル系	ショーダンスⅠ	①②	三村みどり	前期			1	ミュージカルコース必修	3			191	
	ショーダンスⅡ	①②	三村みどり	後期			1					191	
	ミュージカル唱法	①②	信太 美奈	前期			1					192	

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他 専攻	キャップ 対象外	概要 ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
実技科目(共通)	演劇特別演習Ⅰ ①②③		鴻上 尚史	後期		1						193	
	演劇特別演習Ⅱ ①②		志賀廣太郎	前期			1					193	
	マイム ①②		江ノ上陽一	前期	1						○	194	
	アクション ①②		藤田 けん	後期		1					○	194	
	日本舞踊Ⅰ ①②		藤間 希穂	後期		1					○	195	
	日本舞踊Ⅱ ①②		藤間 希穂	前期			1				○	195	
	狂言Ⅰ ①②		善竹富太郎	後期		1					○	196	
	狂言Ⅱ ①②		善竹富太郎	前期			1				○	196	
	アフレコ実技Ⅰ		小金丸大和	前期			1				○	198	
	アフレコ実技Ⅱ		小金丸大和	後期				1			○	198	
	クラシック唱法Ⅰ ①②		松井 康司	後期		1						199	
	クラシック唱法Ⅱ ①②		松井 康司	前期			1					199	
	ミュージカルトレーニング ①②	ミュージカルトレーニングA	信太 美奈	後期		1							200
	ジャズダンスA	①		三村みどり	前期	1			レッスンアシスタント による補習にも毎週参 加すること			○	200
		②		畔柳小枝子						○	201		
		③		三村みどり						○	200		
		④		畔柳小枝子						○	201		
	ジャズダンスB	①		三村みどり	後期		1				○		201
		②		畔柳小枝子							○	202	
		③		三村みどり							○	201	
		④		畔柳小枝子							○	202	
	ジャズダンスC	①		渡辺美津子	前期		1				○		202
		②		畔柳小枝子							○	203	
		③		渡辺美津子							○	202	
		④		畔柳小枝子							○	203	
	バレエ・ムーヴメント ①②		中農 美保	前期	1						○	203	
クラシックバレエⅠ ①②		中農 美保	後期		1					○	204		
クラシックバレエⅡ ①②		中農 美保	前期			1				○	204		
タップダンスⅠ	①		中谷 諭紀	後期		1					○	205	
	②		近藤 淳子	後期		1					○	205	
タップダンスⅡ	①		中谷 諭紀	前期			1				○	206	
	②		近藤 淳子	前期			1				○	206	
実技科目(共通)	歌唱(個人レッスン)A			前期	2						□		
	歌唱(個人レッスン)B			後期		2					□		
	歌唱(個人レッスン)C			前期			2				□		
	歌唱(個人レッスン)D			後期			2				□		
	歌唱(個人レッスン)E			前期	1						□		
	歌唱(個人レッスン)F			後期		1					□		
	歌唱(個人レッスン)G			前期			1				□		
	歌唱(個人レッスン)H			後期			1				□		

ストリートブレイクコース12、
ミュージカルコース13

自由選択単位

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャリア 対象外	概要 ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
理論系科目	舞台芸術概論		高橋 宏幸	前期	2				必修	16	○		207
	日本演劇史A(古典)		安富 順	前期	2			○				207	
	日本演劇史B(近現代)		高橋 宏幸	後期		2		○				208	
	西洋演劇史A(古典)		安宅りさ子	前期	2			○				208	
	西洋演劇史B(近現代)		安宅りさ子	後期		2		○				209	
	ミュージカル概論		橋爪 貴明	前期	2			○				209	
	ミュージカル論		藤原麻優子	後期		2		○				210	
	ソルフェージュ基礎 ①②		永井 由比	後期		2					210		
	ソルフェージュ ①②		岩崎 廉	前期			2		ミュージカルコース必修			211	
	演劇史特講		安宅りさ子	後期				2			211		
	演劇批評論		高橋 宏幸	前期			2				212		
	パフォーマンスアート論		高橋 宏幸	後期				2			212		
	ミュージカル特講	廃止		前期			2						
	映画論	教養科目に変更	行定 勲	後集			2				○	□	136
	演出論		川村 毅	前集			2				○	□	214
	舞踊論	廃止		後期			2				○		
	戯曲論	廃止		前期			2				○		
	演劇論		高橋 宏幸	後期			2				○		214
	音声生理学	廃止		前集			1				○	□	
	戯曲講読演習A(古典)		安宅りさ子	前期			1				○		215
戯曲講読演習B(近現代)		安宅りさ子	後期			1			○		215		
戯曲講読演習C(日本)	廃止		前期			1			○				
劇作法		瀬戸山美咲	後期			1			○		216		
演劇学演習A(演劇史)	廃止		前期			1							
演劇学演習B(演劇論)	廃止		後期				1						
実習科目	集中講義(舞台照明実習) ①		石島奈津子	前集	1				※照明部以外対象	10	○	□	216
	集中講義(舞台照明実習) ②		兼子 慎平	前集					※照明部対象			□	217
	集中講義(舞台音響実習) ①		佐藤こうじ	前集	1				※音響部以外対象		○	□	217
	集中講義(舞台音響実習) ②		宮崎 淳子	前集					※音響部対象			□	218
	集中講義(舞台監督実習)		鈴木 健介	前集	1							□	218
	集中講義(ヘアメイク実習)		鈴木 理絵	前集	1							□	219
	ワークショップ(ストレートプレイ) 1年次		瀬戸山美咲	後集		1						□	219
	ワークショップ(ミュージカル) 1年次		宮河愛一郎	後集		1						□	219
	ワークショップ(ストレートプレイ) 2年次		未定	前集			1					□	220
	ワークショップ(ミュージカル) 2年次		井田 邦明	前集			1					□	220
	演劇研修(八ヶ岳合宿)		三浦 剛	前集	1							□	220
	海外研修 1年次		P. ゲスナー	後集		1						□	221
	海外研修 2年次		P. ゲスナー	後集				1				□	221
	劇上演実習A(試演会) ストレートプレイ		宮崎 真子	後集				4					221
	劇上演実習A(試演会) ミュージカル		信太 美奈	後集				4					222
	劇上演実習B(卒業公演) ストレートプレイ		篠崎 光正	後集				4					222
	劇上演実習B(卒業公演) ミュージカル		P. ゲスナー	後集				4					223
	劇上演実習C(学外出演)						4					□	223
劇上演実習D(学外出演)						4				□	223		
劇上演実習E(学内出演)						1				□	224		
劇上演実習F(学内出演)						1				□	224		

<2017年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 56単位
 - 1.実技系科目 30単位
 - 2.理論系科目 16単位
 - 3.実習科目 10単位
- ②基礎教養科目単位数 1単位
 - 外国語(英語) 1単位必修
- ③自由選択単位数 5単位

注

- ①Iの修得なしにIIの履修はできない。
- ②基礎演劇演習AB、身体トレーニング、ボイス・トレーニング(歌唱)、演劇演習ABCD、舞台芸術概論、日本演劇史AB、西洋演劇史AB、ミュージカル概論、ミュージカル論は全コース必修
- ③演技演習ABはストレートプレイコース必修
- ④ショーダンスIⅡ、ミュージカル唱法、ソルフェージュはミュージカルコース必修
- ⑤同じ科目の複数のクラスを同時に受講することはできない。
- ⑥歌唱(個人レッスン)の修得単位数は自由選択単位数に含む。レッスン時間はABCD40分、EFGH20分。履修料別途徴収。
- ⑦音楽専攻の科目および桐朋学園大学音楽学部の単位互換履修科目は自由選択単位数に含む。

○講義科目は半期2単位、実習・実技・演習科目は半期1単位、劇上演実習は4単位

【教育課程・卒業の要件】

卒業の要件

本学を卒業するには、教育課程をよく理解し、以下の条件を満たす最低修得単位数以上の単位を修得しなければならない。卒業要件の詳細については、各専攻の別表及び注意事項を参照すること。

1. 芸術科 音楽専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	48単位
自由選択単位数	14単位
(専攻科目・専攻教養科目・他専攻科目・基礎教養科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数には、各専修の必修単位数を含む。

③ 専攻教養科目より、「外国語」(基礎教養科目の「英語 A I・II」「英語 B I・II」を含む)
「音楽基礎演習-バロックダンス」「音楽理論基礎」合計 4 単位必修とする。

(ただし、声楽専修はイタリア語を含む 2 外国語を必修とし、合計 6 単位)

④ 外国語は、同じ語学の「I・II」または「III・IV」をもって 1 科目とみなす。

⑤ 演劇専攻科目の『実技科目(共通)』の他専攻履修可能な科目のうち、いずれか 1 単位必修とする。
(ただし、「アフレコ実技 I」「アフレコ実技 II」を除く)

2. 芸術科 演劇専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	56単位
基礎教養科目単位数	1単位
自由選択単位数	5単位
(専攻科目・他専攻科目・基礎教養科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数の内訳は

実技科目 30単位 理論系科目 16単位 実習科目 10単位

③ 基礎教養科目単位数の内訳は

外国語(英語) 1 単位必修

2017 年度教育課程 別表… 5

【教育課程・修了の要件】

1. 専攻科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ	
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
専攻科目・1年次	音楽理論 [和声]V		平井 正志	前期	2							225	
	音楽理論 [和声]VI		平井 正志	後期		2						225	
	日本音楽理論C	開講せず	森重 行敏	後期		2			J必修				
	楽曲分析A	楽曲分析(古典派)	池田 哲美	前期	2							225	
	楽曲分析B	楽曲分析(ロマン派以降)	池田 哲美	後期		2						225	
	コード論II	追加	小林 真人	前期	2							226	
	音楽史研究		関野さとみ	通年		4						227	
	S. H. M V・VI	① ② ③ ④ ⑤	追加	塩崎 美幸	前・後	1	1						227
				池原 舞									227
				坂田 晴美									227
				三瀬 俊吾									227
				長谷川 郁子									227
	日本音楽史研究A		野川美穂子	通年		4			J必修			228	
	音楽療法概説A		鈴木千恵子	通年		4						228	
	音楽療法演習A		鈴木千恵子	通年		2						229	
	演奏現場論A		合田 香	前期	2							229	
	アウトリーチ研究A		永井 由比	通年		4					○	230	
	第一実技Ⅲ	(ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)			通年		6			●全専修必修			230
	第二実技Ⅲ	(ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (パロック・フルート) (パロック・オーボエ) (弦楽器) (ギター) (日本音楽) (作曲)			通年		4						230
	副科実技Ⅲ	(ピアノ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (パロック・フルート) (パロック・オーボエ) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)			通年		2						230
	学内演奏Ⅰ			松井 康司 荻野 千里	通年		2			●全専修必修			
	ピアノデュオ研究A			東井 美佳	通年		4			P必修			231
	管楽アンサンブル研究A			石橋 雅一	通年		4			W(Tp. Tb. Tub. Sx除く)必修			231
	室内楽研究A	a b		荻野 千里	前期	2							232
				野口 千代光									232
	室内楽研究B	a b c d	追加	阪本 奈津子	後期		2						233
				藜 沼 恵美子									233
				白尾 隆									234
				菊池 カナエ									234
	室内楽特設クラスA			荻野 千里	前集	1						235	
	室内楽特設クラスB			荻野 千里	後集		1					235	
	歌曲研究A			松井 康司 東井 美佳	通年		4						235
	オペラ実習A [演奏] [演技]			松井 康司	前期	4				V選択	○	236	
	オペラ実習A [上演]			P. ゲスナー	後期		2				○	236	
	邦楽アンサンブル研究A			野坂 恵子	通年		4			J必修			237
	オーケストラ・スタディC			志村 寿一	前期	1				S必修			237
	合奏C			志村 寿一	後集		2			S必修			238
	ギター・アンサンブルC			佐藤 紀雄	通年		2			G必修			238
	サクソフォン・アンサンブルC				通年		2			Sx必修			
	初見演奏(応用)		芸術科科目に変更	吉田 真穂	後期		1						174
伴奏C	(1) (2)		荻野 千里	前期	1							239	
				後期		1							
伴奏研究A			荻野 千里	前集	1							239	
伴奏研究B			荻野 千里	後集		1						239	
海外特別演習C			荻野 千里	前集	2							240	
特別講義(音楽)			松井 康司	集中	1							241	
特別演習C			荻野 千里	通年		1			●全専修必修			241	
コラボレイト実習C	(1) (2)		松井 康司	前集	1							240	
				後集		1							

1・2年次を通じて必修科目を含めて46単位以上

科目区分	授業科目・クラス	2018年度 授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ	
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目・2年次	楽曲分析 [編曲]		たかの舞俐	前期			2					241	
	楽曲分析 [創作]		たかの舞俐	後期			2					242	
	日本音楽史研究B		野川美穂子	通年			4		J必修			228	
	音楽療法概説B		鈴木千恵子	通年			4					228	
	音楽療法演習B		鈴木千恵子	通年			2					229	
	演奏現場論B		合田 香	前期			2					229	
	アウトリーチ研究B		永井 由比	通年			4					230	
	第一実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)				通年			6		●全専修必修			230
	第二実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (パロック・フルート) (パロック・オーボエ) (弦楽器) (日本音楽) (作曲)				通年			4					230
	副科実技Ⅳ (ピアノ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (パロック・フルート) (パロック・オーボエ) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)				通年			2					230
	第一実技修了試験							4		●全専修必修			
	学内演奏Ⅱ			松井 康司 荻野 千里	通年			2		●全専修必修			
	ピアノデュオ研究B			東井 美佳	通年			4					231
	管楽アンサンブル研究B			石橋 雅一	通年			4		W(Tp、Tb、Tub、Sx除く)必修			231
	室内楽研究C	a		荻野 千里	前期			2					232
		b		野口千代光 北本 秀樹									
	室内楽研究D	a		阪本奈津子	後期			2					233
		b		藜沼恵美子									
		c		白尾 隆									
		d	追加	菊池カナエ									
	室内楽特設クラスC			荻野 千里	前集			1					235
	室内楽特設クラスD			荻野 千里	後集			1					235
	歌曲研究B			松井 康司 東井 美佳	通年			4					235
	オペラ実習B [演奏] [演技]			松井 康司	前期			4		V選択			○ 236
	オペラ実習B [上演]			P. ゲスナー	後期			2					○ 236
	邦楽アンサンブル研究B			野坂 恵子	通年			4		J必修			237
	オーケストラ・スタディD			志村 寿一	前期			1		S必修			237
	合奏D			志村 寿一	後集			2		S必修			238
	ギター・アンサンブルD			佐藤 紀雄	通年			2		G必修			238
	サクソフォン・アンサンブルD				通年			2		Sx必修			
	伴奏D	(1)		荻野 千里	前期			1					239
		(2)			後期			1					
伴奏研究C			荻野 千里	前集			1					239	
伴奏研究D			荻野 千里	後集			1					239	
海外特別演習D			荻野 千里	前集			2					240	
特別演習D			荻野 千里	通年			1					241	
コラボレイト実習D	(1)		松井 康司	前集			1					240	
	(2)			後集			1						

1・2年次を通して必修科目を含めて46単位以上

【備考】

P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修

<2017年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 46単位（2学年合計）

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
 - ② III の修得なしに IV の履修はできない。
 - ③ 第一実技は、専修別による必修（1 年次・2 年次各 60 分）
 - ④ 第二実技は、選択（40 分）。履修料（150,000 円）を別途徴収する。
 - ⑤ 副科実技は、選択（20 分）。履修料（75,000 円）を別途徴収する。
 - ⑥ 選択科目「伴奏」について
前期、後期とも同一学生との 5 回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。
「伴奏受講票」を使用のこと。
 - ⑦ 選択科目「コラボレイト実習」について
専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5 回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。
「コラボレイト実習受講票」を使用のこと。
 - ⑧ 「室内楽研究」等アンサンブル科目の履修において、研究生を含むグループは、科目担当者及び専攻の教員との相談の上、外部より臨時のアンサンブル指導員を招聘することができる。
 - ⑨ 学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。
- 修了要件とは別に、芸術科音楽専攻科目及び他専攻の履修可能な科目のうち、年間 5 科目まで所定の手続きを経て履修することができる。
- 他専攻専攻科科目については、2 年間で 6 単位まで、修了要件内で履修することができる。

2017 年度教育課程 別表… 6

2. 専攻科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	2018年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				修了要件	他専攻	概要ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期			
演技・演技系科目	演劇特別研究	1年次 2年次	※	鴻上 尚史	通年	2				254	
	演劇研究A (現代劇)	1年次 2年次	演技研究A (日本演劇) (1) 演技研究A (日本演劇) (2)	三浦 剛	通年	2		2		254 249 249	
	演劇研究B (日本演劇)	1年次 2年次	廃止		通年	2					
	演劇研究C (外国演劇)	1年次 2年次	演技研究B (外国演劇) (1) 演技研究B (外国演劇) (2)	P.ゲスナー	通年	2		2		250 250	
	演劇研究D (演劇論)	1年次 2年次	演劇学研究A (日本演劇論) (1) 演劇学研究A (日本演劇論) (2)	高橋 宏幸	前期 後期	2				243 243	
	演劇研究E (実験劇)	1年次 2年次	演技研究C (実験劇) (1) 演技研究C (実験劇) (2)	宮崎 真子	通年	2		2		251 251	
	演劇研究F (演劇教育)	1年次 2年次	※演劇教育論	野間 哲	後期	2				247 247	
	演劇学研究B (西洋演劇論) (1)		追加	安宅りさ子	前期	2				244	
	演劇学研究B (西洋演劇論) (2)		追加		後期	2				245	
	演劇学研究C (現代演劇論)		追加	井上 理恵	前期	2				245	
	劇作研究A (劇作論)		追加	鴻上 尚史	前期	2				246	
	劇作研究B (劇作演習)		追加	鴻上 尚史	後期	1				246	
	演出研究		追加	三浦 剛	後期	2				247	
	アーツマネジメント研究		追加	中山 夏織	前期	2				247	
	アウトリーチ研究		追加	中山 夏織	後期	2				248	
	演技研究D (フィジカルシアター) (1)		追加		後期	1				252	
	演技研究D (フィジカルシアター) (2)		追加	大谷賢治郎	後期			1		252	
	演技研究E (ミュージカル) (1)		追加		前期	1				253	
	演技研究E (ミュージカル) (2)		追加	大塚 幸太	前期		1			253	
	舞踊A (クラシックバレエ)		追加	中農 美保	通年	2				255	
	実技A (コンテンポラリー)	1年次 2年次	※ 舞踊B (コンテンポラリー)	勝倉 寧子	前期	1		1		255 255	
	実技B (ヒップホップ)	1年次 2年次	廃止		通年	2					
	舞踊C (日舞)		追加	藤間 希穂	後期	1		1		256	
	ミュージカル唱法	1年次 2年次	※	藍澤 幸頼	通年	2		2		256 256 257	
	英語劇		追加	J・アーカリ	通年	2					
	ワークショップA	1年次 2年次		ニコラス・バーター	前集	1		1		258	
	ワークショップB	1年次 2年次		鶴山 仁	後集	1				258	
	海外研修	1年次 2年次		和田 喜夫	後集			1		254 254	
歌唱 (個人レッスン) I		追加	P.ゲスナー	後集	1		1				
歌唱 (個人レッスン) J				前期	2						
歌唱 (個人レッスン) K				後期	2						
歌唱 (個人レッスン) L				前期		2					
歌唱 (個人レッスン) M				後期		2					
歌唱 (個人レッスン) N				前期	1						
歌唱 (個人レッスン) O				後期		1					
歌唱 (個人レッスン) P				前期			1				
特別講義A	1年次 2年次	廃止	高橋 宏幸	前期	2						
特別講義B	1年次 2年次	廃止		前期		2					
劇上演実習A	1年次 2年次		安宅りさ子	通年			2		243		
劇上演実習B	1年次 2年次		越光 照文	集中	4				259		
劇上演実習C (専1最終公演)	1年次 2年次		三浦 剛	集中		4			259		
劇上演実習D (修了公演)	1年次 2年次		P.ゲスナー	集中		4			259		
劇上演実習E (学外出演)			越光 照文	集中			4		259		
劇上演実習F (学外出演)			福田 善之	集中		4			260		
劇上演実習G (学内出演)			志賀廣太郎	集中			4		260		
修了論文	修了論文	追加	高橋 宏幸 他	通年	4				261		

※がついている科目は、1年次に履修していた場合、2年次の履修は不可となる。

<2017年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 50単位（2学年合計）

【内訳】

- ①演劇研究から12単位以上
- ②実技、ミュージカル唱法、ワークショップ、海外研修から6単位以上
- ③特別講義 6単位必修
- ④劇上演実習から16単位以上
- ⑤自由選択科目として10単位（自他専攻科目より）

○修了要件とは別に、芸術科演劇専攻および他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで履修可

Toho Gakuen College of Drama and Music

教養

科目名 情報リテラシー論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 竹内 聖

期間 前期

2

/

—

履修条件

Adobe製品が動作するノートPCを用意すること。WindowsでもMacでも構いません。

Adobe Creative Cloud 学生版(月額1980円1年間契約)を購入できること。初回ガイダンスにて説明します。

授業の概要

演劇公演における制作実務の中でも専門技術を要する宣伝美術について、実際の制作実習を通じて学びます。またスマートフォンやインターネットの普及により演劇の広報や宣伝活動も従来のポスターやフライヤーに加えfacebookやTwitterなどのソーシャルメディア抜きでは考えられなくなってきています。そのような時代にどのようなプロモーションが効果的か?紙の媒体と比べてどのようなことに注意を払わなくてはいけないのか?インターネットによりメディアが身近になり便利になった反面、今までと違った危険も多くなってきています。そんな時代の新しい演劇の宣伝活動を学んでいきます。

授業の到達目標

公演のフライヤー、プログラム、ホームページの制作の技術の習得。宣伝企画力の習得。社会人として大学生として身につけておくべき「メディア情報リテラシー」。インターネットと情報機器の正しい知識と使い方やソーシャルメディア時代のコミュニケーションと宣伝企画制作の基本を学びます。メディアと宣伝美術を学べばこれからの一般社会において幅広く役に立つ知識と技術を身につけることが出来ます。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
演劇における宣伝美術とメディアリテラシーについて
- 第2回 フライヤーなどの制作に使うソフトウェアの説明と基本操作
- 第3回 PhotoShopを使った画像処理
- 第4回 写真の撮り方と画像処理 (photoshop)
- 第5回 レイアウトツールIllustratorの基本操作1
- 第6回 Illustratorを使ったレイアウト実習1
- 第7回 Illustratorを使ったレイアウト実習2
- 第8回 公演の企画と宣伝美術のメインビジュアル企画

- 第9回 メインビジュアルとポスター・フライヤー・チケットなどの制作-1
- 第10回 メインビジュアルとポスター・フライヤー・チケットなどの制作-2
- 第11回 ソーシャルメディアでの広報、宣伝を考える
- 第12回 Webサービスを使ったWebサイトの制作
- 第13回 Webサイトとfacebook page の制作
- 第14回 公演宣伝企画プレゼン講習会-1
- 第15回 公演宣伝企画プレゼン講習会

授業時間外の学習

photoshop、illustrator習得のための復習と課題制作。SNSなどの利用。制作ツールやWEBサービスを使ったサイト制作の自習。

公演チラシや特設サイトなどの情報収集を自分の時間を使って行う。

教科書・参考書等

特にありませんが、授業内外でPC、スマートフォンを使用します。特にPCは毎時間持参下さい。PCを持っていないくても受講は可能ですが、必ずガイダンスの時に相談下さい。これからの社会においてパソコンは必要なツールですので持っていない人はこの機会に購入することをお勧めします。ソフトウェアはAdobeのCreative Cloudを購入してもらいますが詳細についてはガイダンスで説明します。すでに古いバージョンのソフトを購入済みの方は新規に購入する必要はありません。

成績評価

1. 授業への取り組み (50点)
 2. 授業態度積極性 (20点)
 3. プレゼンテーション (30点)
- S 総合点90点以上
A 総合点80点以上
B 総合点70点以上
C 総合点50点以上
D 総合点49点以下

科目名 情報処理論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 岡本 直久

期間 前期

2

/

—

履修条件

教職課程受講者は必修。

コンピュータ教室の定員の都合上、受講希望者多数の場合には、履修制限をおこなうこともある。

授業の概要

情報の横溢状態

自己表現に当たって、これら世間に氾濫状態を呈している情報が威力を発揮するであろうことは疑いないものの、その方法を一步誤ることで、意図する方向とは全く異なる受け取り方を招きかねない。これは報道が取り上げる事件や事故に、情報に絡むものが殆どであることでも明らかである以上に、身近かな処にも起こっていることで首肯することが出来る。自己の主張に見合った情報との付き合い方、表現の仕方を身に着けることで、このような弊害を避けることが出来る。情報との付き合い方に書かせないツールとなったPCの操作を通して、各自の主張を明確に表現出来る技能及び姿勢を養う。

授業の到達目標

各自の課題の解決や主張の徹底を確実なものにするための情報の取得、加工、表現が出来ることを目標とする。

授業計画

- 1 情報取得の基本
- 2 情報取得の実際(各種メディア)
- 3 情報の加工の基本1(ワープロ)
- 4 情報の加工の基本2(表計算)

- 5 情報の表現の基本1(ワープロ)
- 6 情報の表現の基本2(表計算)
- 7 情報の加工の応用(表計算)
- 8 情報の表現の応用1(報告書等の作成)
- 9 情報の表現の基本3(プレゼン)
- 10 情報の表現の基本4(プレゼン)
- 11 情報の表現の応用2(プレゼン)
- 12 マスコミと情報
- 13 各自課題、主張と情報の在り方(内容表明)
- 14 課題作業1
- 15 課題作業2

授業時間外の学習

各種報道を通しての情報収集を基本姿勢とする。特に情報関係の話題に注目し、記録することを習慣とされたい。

教科書・参考書等

学生諸君は個人として用意する必要は無い。担当者作成のプリント等の教材をその都度配布する。関連書物、関係文献等は授業の中で矢張りその都度紹介する。

成績評価

授業で取り組んだ課題解決の作品の出来映えを中心に、授業への取り組み及び出席状況を総合して評価する。作品に関しては、各自の設定した課題が妥当か、課題に相応しい表現方法か、表現の技能の程度、取り組みの密度、説得力の有り様、等を観点として評価する。

科目名 音楽環境論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 久保田 慶一

期間 前期集中

2

/

○

履修条件

「音楽環境論」という授業科目ですが、音楽科以外の学生の履修を歓迎します。

授業の概要

卒業後にフリーランスで生きていくには、どのようなことを知っていればよいのかを、学びます。自分と社会という環境、そして音楽や演劇との関係について考察します。

授業の到達目標

卒業後の人生設計を自分でできるようになる。

授業計画

1. キャリアとは何か?
2. 働くとはどういうことか?
3. 職業とは何か?
4. フリーランスという働き方
5. プロフェッショナル・フリーランスになる
6. 自分がボスになる
7. 必要なのはキャリア・デザイン!
8. フリーランスの「資産」とリスクのマネジメント
9. キャリアのマネジメント
10. ファイナンスのマネジメント
11. ヒューマン・リソースのマネジメント
12. 音楽の起業のすすめ
13. 音楽のプロフェッショナル・フリーランスとして
14. 発表
15. まとめ

授業時間外の学習

授業で課題を出すので、次の授業で提出・発表できるようにしておくこと。

教科書・参考書等

久保田慶一：音大・美大卒業生のためのフリーランスの教科書、ヤマハミュージックメディア 2018年。

成績評価

授業時の発表状況、提出レポートによって、総合的に判断する。

科目名 社会福祉学

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 藤森 雄介

期間 前期

2

/

—

履修条件

特になし。教職課程受講者は必修。

授業の概要

21世紀の日本における社会福祉は、「社会福祉基礎構造改革」以降、その制度施策も含めて大きな変革の渦中にある。

本講義においては、上記のような現状を踏まえつつ、現代に至る戦後日本社会における社会福祉の歴史的背景や思想等を学んでいきたい。

また、教職課程における施設実習に取り組む際に必要な社会福祉援助技術についても合わせて学んでいくとともに、いわゆる「対人援助」に対する心構え等についても理解を深めていく機会としたい。

授業の到達目標

1. 社会福祉全般に対する基本的理解
2. 「対人援助」の現場における、援助者の基本的な心構えの理解
3. 社会福祉の学びを通じた、創造的表現に不可欠な新たな視点の獲得

授業計画

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 現代日本における社会福祉の定義
- 第3講 「介護」の概念
- 第4講 ノーマライゼーションの思想
- 第5講 「共生」の思想
- 第6講 社会保障制度の基本的理解①
～社会保障制度における社会福祉の位置づけについて～

- 第7講 社会保障制度の基本的理解②
～近代イギリス社会と救貧法について～
- 第8講 社会保障制度の基本的理解③
～20世紀のイギリスと福祉国家について～
- 第9講 社会福祉制度の成立過程①～昭和20年代～
- 第10講 社会福祉制度の成立過程②～昭和30年代～
- 第11講 社会福祉制度の成立過程③～昭和40年代～
- 第12講 社会福祉制度の成立過程④～昭和50年代～
- 第13講 社会福祉制度の成立過程⑤～平成年代～
- 第14講 社会福祉制度の成立過程⑥～21世紀の方向性～
- 第15講 授業の総括

授業時間外の学習

本科目は、予習よりは復習を重視している。第2講以降の受講日前日には前回の講義内容の振り返りを行った上で、翌日の講義に臨んでほしい。また、いわゆる「社会福祉」は実学であり現代社会の動向とは不可分な学問である。日頃から、政治や経済の動向にも関心を持っておくことが必要である。

教科書・参考書等

教科書は特に定めない。必要に応じて、プリントを配布する。また、講義中に参考文献を適時紹介していく。

成績評価

原則として、期末に行う筆記試験の得点をもとに評価を行う。

- S → 100点～90点
A → 89点～80点
B → 79点～70点
C → 69点～60点
D → 60点以下

科目名 表現コミュニケーション論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 後期

2

/

—

履修条件

前期のアートマネジメント論履修者が望ましい。
遅刻・欠席をしない。

授業の概要

舞台芸術にとって「観客」の存在が不可欠である。若い世代の劇場離れ、観客の高齢化、絶対数の減少が大きな課題となっ
ていながらも、その観客とのコミュニケーションのあり方や、観
客にとっての芸術鑑賞の価値が十分に検証されてきたとはいえない。さらに、劇場や音楽堂等は、最も社会的弱者を疎外してき
た空間でもある。これらの問題を探りながら、新しい観客を開拓
するための観客との新たなコミュニケーションのあり方を探る。
特に、児童青少年や障がい児・者、高齢者（認知症を含む）と
いう不可能な観客についても検証していく。

授業の到達目標

- 表現者と観客との双方向コミュニケーションの意味を理解する。
- 多様な観客の参加の意味と方策理解する。
- コンベンションを問う批判的思考能力をもつ。

授業計画

1. 表現者として観客と向かいあう—お客様は神様ですか？
2. 観客の意識と構造
3. 鑑賞組織という存在
4. 芸術鑑賞の価値—観客の体験を検証する
5. 新しい観客？—観客は変化する
6. 劇場の形と観客とのコミュニケーション
7. インタラクティブシアター—観客参加型演劇
8. イマージブシアター—観客もリスクを負う
9. シアターインエデュケーション—少人数制と教育
10. 子どもという観客1
11. 子どもという観客2
12. 子どもという観客3
13. 不可能な観客—障がいと医療ケア
14. 不可能な観客—高齢者・認知症
15. 演劇は誰のもの？—まとめ

授業時間外の学習

劇場やコンサートホール、美術館等で観客がいかに芸術作品
に関与しているかを観察すること。

教科書・参考書等

教科書：『子どもという観客』マシュー・リーズン著、中山夏
織訳（2018年、晩成書房）
また、授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介
する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に
評価する。

科目名 アーツマネジメント論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 前期

2

/

—

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

俳優であれ、演奏家であれ、ひとりで仕事をしていくことはで
きない。また、社会システムに相反して活動を行うこともできない。
集団として、カンパニーとして仕事をしていくために理解しておく
べき芸術の組織の構造、そのマネジメントを学ぶとともに、芸
術の公共性を担うプロフェッショナルとしていかに社会とかわっ
ていくかを考察していく。

授業の到達目標

- 非営利の芸術組織の運営の特性を理解する。
- チームで成果をあげる意味を理解する。
- 次世代のリーダーとしての自覚を促す

授業計画

1. アーツマネジメントって何？
2. アーツマネジメントの特殊性
—営利と非営利、芸術の公共性をめぐって
3. 組織とマネジメント
4. 芸術と組織—劇団制／自主運営オケをめぐって
5. 新しい組織の形
6. グループダイナミクス
7. グレイトグループ
8. ミッションと意思決定
9. モチベーション
10. リーダーシップ1
11. リーダーシップ2—オルフェウス・プロセス
12. アーツマーケティング1
13. アーツマーケティング2
14. エデュケーション・プログラム
15. 社会と生きるアーティスト

授業時間外の学習

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。
次回の授業のために指示されたテーマについて、下調べすること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。
参考書：『何もない空間』ピーター・ブルック著（1968年）。他、
適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に
評価する。

科目名 応用演劇論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大谷 賢治郎

期間 前期

2

/

—

履修条件

社会に於いて演劇ができることの可能性に関心があること。芸術作品の創造だけでなく、ワークショップのファシリテーター(ワークショップを進める役割の人)など演劇の手法を用いて社会に貢献したり、一般の人に関わることに関心があること。

授業の概要

応用演劇とは何かを学ぶ。
演劇の手法を用いて社会に貢献のできる、そして一般の人が体験できるワークショップの可能性を学習ならびに模索する。
芸術としての演劇と経験としての演劇を比較、演劇ができることの可能性を探求する。
実際にワークショップの内容を作成し、実践する。

授業の到達目標

1. 多岐にわたる応用演劇について学習し、その現状について説明することができる。
2. 演劇を応用した具体例を学び、また自らリサーチすることができる。
3. これらの学習を経て、自らが考案したワークショップを実施する。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 応用演劇とは何か
3. 世界の応用演劇①
4. 世界の応用演劇②
5. 世界の応用演劇③
6. フォーラムシアターとは何か①
7. フォーラムシアターとは何か②
8. フォーラムシアターの実践

9. タブーワークショップとは何か①
 10. タブーワークショップとは何か②
 11. タブーワークショップの実践
 12. 日本に於ける演劇ワークショップの可能性①
 13. 日本に於ける演劇ワークショップの可能性②
 14. ワークショップ・ファシリテーターの実践
 15. 総評
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

授業内容の復習・予習を行う。出題された課題に取り組む。ワークショップのアイデアを作成する。

教科書・参考書等

教科書：必要に応じて授業時に配布
参考書：必要に応じて授業時に配布

成績評価

1. 出席日数
 2. 授業への取組み
 3. 発表の内容の総合的評価
- S 全出席。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- A 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定日数に達している。各課題の発表まで達している。
- D 出席が規定日数に達していない。各課題の発表が評価できない。

科目名 メディア論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 後期

2

/

—

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

表現というものは、メディアという媒介物をとおしてなされることによって、どのような表象となるのか。詩、小説、戯曲、美術、映画、演劇などを比較検討しながら、メディアの特殊性について考える。とくに今回は、映画や映像を中心に分析的に物事を探求する。

授業の到達目標

さまざまなメディアと表現とは、どのように成り立っているのか。普段何気なく見慣れているものであっても、それは何なのか、考える思考性を身につけることを目標とする。

授業計画

- 1 インタロダクション
- 2 映画表現という媒体 1
- 3 映画表現という媒体 2
- 4 ドキュメントというコンセプトからみる映画 1
- 5 ドキュメントというコンセプトからみる映画 2
- 6 ドキュメントというコンセプトからみる映画 3
- 7 ドキュメントというコンセプトからみる演劇 1
- 8 ドキュメントというコンセプトからみる演劇 2
- 9 ドキュメントというコンセプトからみる演劇 3
- 10 「もの」という物体性としての美術 1

- 11 「もの」という物体性としての美術 2
 - 12 「もの」という物体性としての美術 3
 - 13 レポート講評
 - 14 レポート講評
 - 15 まとめ
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書： 授業時にその都度指示する。
参考書： 授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

- 発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない)

科目名 現代思想論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 前期

2

/

—

履修条件

特になし。

授業の概要

現代思想を単に哲学や思想という枠に閉じ込めるのではなく、そこから社会や共同体、国家、個人などを含み、さまざまな文化や社会現象を考察するためのツールとして、この授業では扱う。かつて生きるとはなにか、死とはなにか、他者とはなにか、内面とはなにか、などいくつものテーマが重みを持って語られた時代があったが、それらとは局面の違う現代の文化をどのように考えることが可能か。そのために、その思想が生まれた歴史的な背景などを含みながら論じる。それはときに文学や演劇、映画などのさまざまな表象文化とも通じるものである。それらの映像やテキストも交える。また、日本の現代思想と欧米のものを取り上げる予定である。

授業の到達目標

私たちをとりまく文化現象を批評的に見る目を養うことが最終的な目標となります。たんに好きなものをなぜ好きなのか、なぜそれが受けているのか、どのような戦略をもって、どのようなターゲットを層にしているのか、さまざまなものを現代思想とおとして分析できるようにする。

授業計画

- 1 インロダクション
- 2 「14歳からの哲学」を読む
- 3 「14歳からの哲学」を読む
- 4 「14歳からの哲学」を読む

- 5 「構造と力」を読む
- 6 「構造と力」を読む
- 7 「構造と力」を読む
- 8 「日本近代文学の起源」を読む
- 9 「日本近代文学の起源」を読む
- 10 「日本近代文学の起源」を読む
- 11 「日本近代文学の起源」を読む
- 12 「現代思想の冒険者たち」シリーズを読む
- 13 「現代思想の冒険者たち」シリーズを読む
- 14 「現代思想の冒険者たち」シリーズを読む
- 15 まとめ

授業時間外の学習

図書館やWEBで授業で話したことをチェックすること

教科書・参考書等

授業で使うテキストなどは指示する。

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない)

科目名 日本国憲法

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 西山 智之

期間 後期

2

/

—

履修条件

特になし。

授業の概要

憲法は私たちの普段の生活では、馴染みの薄い存在なのかもしれない。しかし近年、集団的自衛権の行使容認に関する議論や過激な表現活動の規制に関する問題等、憲法上の諸問題が活発に議論されており、これらの問題は高等教育を受けた者として当然に知っておくべきものである。また憲法は、刑法や民事法の基礎となる法であり、今後私たちが生活をする際に法律を学んでいく中で、理解しておくことが望ましいと考えられる。

本講座は、憲法の歴史をはじめ、国民に保障される自由や権利の他、国会・内閣・裁判所に関する基本的な知識を習得することを目的としている。講義では、上記にあげた集団的自衛権や表現の自由の他、現政権の憲法改正議論について等、タイムリーな話題についても解説を行いたいと考えている。

社会問題を考える力を育成するため、授業中にディベート等発言する機会を多く設ける予定である、積極的に議論に参加してほしい。

授業の到達目標

日本国憲法の基礎的知識を習得し、人権の意義や国会・内閣・裁判所の役割を理解し、説明することができることを目標とする。

授業計画

1. ガイダンス 憲法とは何か、法とは何か
2. 平和主義
3. 基本的人権の原理、基本的人権の保障と限界
4. 包括的人権、平等原則
5. 精神的自由①(思想・良心の自由、信教の自由)
6. 精神的自由②(表現の自由、学問の自由)
7. 人身の自由

8. 経済的自由
9. 社会権
10. 国務請求権・参政権
11. 統治機構①(国会)
12. 統治機構②(内閣)
13. 統治機構③(裁判所)
14. 違憲審査制、地方自治
15. 授業の総括

授業時間外の学習

ニュース・新聞を通じ、現代の社会問題に関心をもつこと。

教科書・参考書等

教科書：齋藤康輝・高畑英一郎 編『Next教科書シリーズ 憲法(第2版)』弘文堂、2017
参考書：高橋雅夫 編『Next教科書シリーズ 法学(第2版)』弘文堂、2017

成績評価

筆記試験及び平常点によって評価する。平常点では、教員の問いに対する発言回数や議論の際の態度等、授業に積極的に参加をしているかをみる。

- S: 90点以上の者
授業態度が大変良く、憲法について優れた理解をしている
- A: 80点以上の者
授業に積極的に参加し、憲法について十分に理解している
- B: 65点以上の者
授業に参加し、憲法についてある程度理解している
- C: 50点以上の者
授業に参加し、憲法について最低限度理解している
- D: 50点未満の者
授業に参加せず、憲法についての理解度が著しく低い

科目名 文化政策論 A

対象 全専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 前期

2

/

—

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

「文化」「芸術」という人の心と関わる領域を政策とすることの意味を、歴史的展開から紹介していくとともに、その方向性や手段によって、芸術文化の創造とそのマネジメントがどのような影響を受けるのかを検証する。また、明治維新から現代に至るまでの日本の文化政策の展開と、日本に特有の課題を考えていく。

授業の到達目標

- 文化政策の功罪を理解する。
- 文化政策のあり方と創造者・表現者の仕事のあり方の相関を理解する。
- 次代のリーダーとして文化政策の策定に参画していくための土台を創る。

授業計画

1. 文化政策って何？
2. 文化政策の誕生と理念
3. 文化政策の理念とその展開
4. 文化政策の類型とアーツマネジメント
5. 公的助成の理論的根拠
6. 日本の文化政策1ー明治期
7. 日本の文化政策2ー戦前・戦中期
8. 日本の文化政策3ー内容不関与の法則
9. 日本の文化政策4ーバブル経済とメセナブームの功罪
10. 日本の文化政策5ー創造都市と社会的投資？
11. 日本の文化政策6ー文化芸術基本法
12. 日本の文化政策7ー指定管理者制度
13. 日本の文化政策8ー劇場法をめぐって
14. 日本の文化政策9ーアーツカウンシル制度
15. 公的助成のジレンマ

授業時間外の学習

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。「公」の施設の運営のあり方を観察すること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 文化政策論 B

対象 全専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 後期

2

/

—

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

様々な国々の文化政策の理念と手段の展開を概観するとともに、そこに生きる芸術家をめぐる社会法制（労働法、税制、社会保障等）との相関を検証していく。また、日本において、創造者（著作者）・表現者（著作隣接権者）を規定する唯一の法律としての著作権と著作隣接権の理念と課題、そしてエンターテインメント産業における契約との相関を探る。

授業の到達目標

- 個々の国にとっての文化政策の意味と手段を理解する。
- プロフェッショナルとして生きる創造者・表現者をめぐる社会法制を自らの問題として理解する。
- 著作権と契約との関係性を理解し、問題解決能力を身につける。

授業計画

1. 国際文化政策の展開ーフランス
2. 国際文化政策の展開ー英国1
3. 国際文化政策の展開ー英国2
4. 国際文化政策の展開ーEU
5. 国際文化政策の展開ー合衆国
6. 国際文化政策の展開ーアジア諸国
7. 文化をめぐる社会法制
8. 芸術家の労働者性をめぐって1
9. 芸術家の労働者性をめぐって2
10. 著作権と著作隣接権1
11. 著作権と著作隣接権2
12. 舞台芸術と契約1
13. 舞台芸術と契約2
14. 舞台芸術と裁判
15. 文化政策と創造者・表現者ーまとめ

授業時間外の学習

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 青少年教育論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大谷 賢治郎

期間 前期

2

/

—

履修条件

子どもならびに若者のための舞台芸術に深い関心があること。
児童青少年教育に於ける演劇の可能性への探求意欲があること。

授業の概要

世界の児童青少年の演劇事情を学ぶ。
舞台芸術が児童青少年の発達にどのような影響を及ぼすのか
学習・研究する。
児童青少年のための舞台芸術作品の創作に挑戦する。

授業の到達目標

1. 世界の児童青少年演劇を学習し、その現状について説明することができる。
2. 発達心理学の分野などで研究されている、舞台芸術が児童青少年に及ぼす影響を学習し、自らリサーチすることができる。
3. これらの学習を経て、児童青少年のための演劇作品を創作する。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. Theatre for Young Audiences (TYA) とは何か
3. 世界のTYA①
4. 世界のTYA②
5. 世界のTYA③
6. 世界のTYA：リサーチの発表①
7. 世界のTYA：リサーチの発表②
8. 発達心理学などに於ける舞台芸術の重要性について①
9. 発達心理学などに於ける舞台芸術の重要性について②

10. 発達心理学などに於ける舞台芸術の重要性について
：リサーチの発表①

11. 発達心理学などに於ける舞台芸術の重要性について
：リサーチの発表②

12. 作品創造①

13. 作品創造②

14. 作品創造③

15. 総評

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後がある
ことを承知しておくこと。

授業時間外の学習

課題発表のためのリサーチを行う。作品の執筆に取り組む。

教科書・参考書等

教科書：必要に応じて授業時に配布

参考書：必要に応じて授業時に配布

成績評価

1. 出席日数
 2. 授業への取組み
 3. 発表の内容の総合的評価
- S 全出席。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- A 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定日数に達している。各課題の発表まで達している。
- D 出席が規定日数に達していない。各課題の発表が評価できない。

科目名 地域文化論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 坂田 博

期間 後期

2

/

—

履修条件

意欲的積極的であることが望ましい。

授業の概要

所変わればヒト変わる。世界にはさまざまな部族や民族がいる。その考え方や身体つき、生活様式などにそれぞれの特徴をもつ。これらの違いはどこから生じたのだろうか。文化や文明がどのように生まれ、どのような変化を生み出したのだろうか。これまでの発明や発見に焦点を当て、人間の暮らしがどのように変化してきたかを探る。現在の世界がどのようにして出来てきたかを探る「人類進化史」の旅に出かけよう。

人類はどのようにして生まれ、アフリカから世界各地へ広がったのだろうか。生活が狩猟採集から牧畜や農業に変化し、都市ができ、「清潔」「暖房」「冷房」が生じた。また、鉄やガラス、コンクリート、プラスチックは生活をどのように変えたのだろうか。演劇や音楽、医学なども生まれ、発展してきた。その道筋をたどり、今後どのように変化していくかを探る。授業は、学生も意見や感想などを述べあい、話し合いによって進めていく。

授業の到達目標

1. 世界のさまざまな文化や文明、およびその変遷を学ぶ。
2. さまざまな民族について理解を深める。
3. ものの見方考え方の多様性を知る。
4. 異文化との接し方を身につける。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2 農業・牧畜
- 3 絹・羊毛・綿
- 4 車輪・水車・風車
- 5 医学・疫病

6 鋼鉄

7 コンクリート

8 紙

9 ガラス

10 プラスチック

11 暖房・冷房

12 清潔

13 演劇・音楽

14 研究発表

15 まとめ

授業時間外の学習

さまざまな場面やメディアで、世界各地の人々の暮らしを観察する。また興味のあるものについて研究する。

教科書・参考書等

教科書は使用しない。授業時にプリントを配付する。参考書はその都度紹介する。

成績評価

観点を次の5つとする。①授業への参加、②授業中の意見や感想の発表、③授業内容に対する理解、④レポートの研究内容、⑤異なる文化に対する接し方。

S 5つの観点のうち、いずれも目標に到達していて、独自性をもつ。

A 5つの観点のうち、いずれも目標に到達している。

B 5つの観点のうち、①を含む4つの観点において目標に到達している。

C 5つの観点のうち、①を含む3つの観点において目標に到達している。

D 出席不良、レポート未提出、講義内容が理解できていない。

科目名 文学(古典)

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 前期

2

—

履修条件

高校時代、古典が今ひとつ好きになれなかった者、愛のかたち(恋愛・親子愛・師弟愛・同性愛等)に興味のある者、能・歌舞伎を理解したい者など、現代に受け継がれている日本人のルーツに関心ある者。

授業の概要

1000年間の人々の愛のかたちを古典作品を通して検証する。また、その背景となる歴史、文化を学ぶ。特に現代人に多くの影響を与えている江戸時代の風習、習慣、音楽、演劇のルーツと実際に学ぶ。授業計画に沿って、様々な作品に触れ、その作品を通して、学習する。

授業の到達目標

古典作品を通して、時代ごとの愛のかたちをよく理解し、その背景となる歴史、文化を認識することができる。得た知識を元に今後の自己活動に応用することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 「紫式部 vs 清少納言」の構図からわかる平安貴族の美男・美女絵図。流星(よばいど)について
3. 『伊勢物語』から見てくる恋愛模様。『平中物語』の主人公、平中の変人ぶりについて。
4. 『源氏物語』を完全制覇。映像で見る源氏の憂鬱①
5. 『源氏物語』を完全制覇! 映像で見る源氏の憂鬱②
6. 『源氏物語』に登場する女性の生き方について。献身派・積極派・執着派・密会派など。
7. 能講座。能の和製ミュージカルたるゆえん。劇・舞・詩・音楽のコラボレーション。

8. 歌舞伎講座。歌舞伎『義経千本桜』にみる人情劇と「けれん」(宙乗り、早替え)。
9. 井原西鶴『好色一代男』にみる遊郭、遊女の暮らし。吉野太夫の悲喜劇。
10. 井原西鶴『世間胸残用』にみる大みそかの暮らし方。借金取りから逃げる方法。
11. 井原西鶴『日本永代蔵』にみるお金儲けのすすめ。「私はこうして金持ちになりました。」
12. 映像で見る『八百屋お七』(舞台) わずか14歳の娘の決意。火あぶりの刑の及ぼした影響。
13. 近松門左衛門『曾根崎心中』、『八百屋お七』にみる究極の純愛悲劇。
14. 「浮世絵」から浮かび上がる江戸庶民の「浮世思想」、中世の「憂き世思想」との違い。
15. まとめ

授業時間外の学習

事前指示による下調べ、まとめなど適宜指示をするので、積極的に取り組むこと。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 文学(近世)

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 後期

2

—

履修条件

舞台化、映画化された近代文学作品に興味のある者。文学と演劇、文学と音楽の関係性について探求したい者。

授業の概要

近世文学との繋がりを踏まえながら、舞台、映画、音楽などになりやすい近代文学作品を取り上げ、作品論、作者論の視点で研究する。また、文学作品の具象化の実際を知り、文学作品を原作にした芸術作品の可能性を学ぶ(実際に舞台化、音楽化された作品を鑑賞し、原作との比較を試みる)。

授業の到達目標

作品を読みこみ、ある一定水準の作者研究と作品研究を行うことができる。同時にそれらを原作とした芸術作品がどういったちで具象化される可能性があるかを認識することができる。

授業計画

※状況をみて、順番が入れ替わる場合もあります。

1. ガイダンス
2. 夏目漱石を読む① 悪妻だった鏡子夫人。無二の親友正岡子規。漱石はかんしゃく持ち。
3. 夏目漱石を読む② 音楽座ミュージカル『アイ・ラブ・坊ちゃん』から探る原作『坊ちゃん』
4. 宮澤賢治を読む① 岩手県花巻をイーハトーブ(理想郷)にしたかった理由。妹トシとの壮絶関係。
5. 宮澤賢治を読む② 『銀河鉄道の夜』の真相に迫る。死に際の際の第4稿の残したメッセージ。
6. 宮澤賢治を読む③ アニメ『銀河鉄道の夜』から探る原作『銀河鉄道の夜』。賢治の死生観。
7. 宮澤賢治を読む④ 舞台『銀河鉄道幻想』にみる賢治の生い立ち、人間関係、悲劇。

8. 宮澤賢治を読む⑤ 舞台『セロ弾きのゴーシュ』から探る賢治の動物・仏教思想、恋愛観。
9. 芥川龍之介を読む① 朗読『羅生門』。文章表現・読み聞かせ実践。
10. 芥川龍之介を読む② 『蜜柑(みかん)』と芥川の深層心理。その色彩感覚に迫る。
11. 太宰治を読む① 負い目と誇り、苦悩と破壊、愛と信頼、あこがれと絶望のはざままで考えたこと。
12. 太宰治を読む② 『富嶽百景』、『走れメロス』、『人間失格』…太宰の入水自殺の真相。
13. サン・テグジュペリを読む① 『星の王子さま』読解。翻訳の違いを検証する。
14. サン・テグジュペリを読む② 舞台『星の王子さま』から探る文学作品の具象化について。
15. まとめ

授業時間外の学習

授業内だけでは作品を読み切れないケースもあるため、事前に作品を読みこむ課題を与えることもあるので、積極的に取り組むこと。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 日本語論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 前期

2

/

—

履修条件

表現者として、「日本語」に興味があり、日本語の特徴、表現の可能性について、実習を通して体感したい、また台詞・歌詞に明瞭さ、深み、説得力を持たせたいと考えている者。

授業の概要

日本語の歴史、文化にとどまらず、様々な課題実習を通して、日本語の特性を実体験する。ひいては演劇にあつては「台詞」、音楽にあつては「歌詞」を中心に、日本語の使い方を正しく理解する一助とし、実践に役立つ知識・方法を身につける。授業では興味、関心を喚起させながら、その方法を実習形式で、日本語の実際を学ぶ。

授業の到達目標

世の中に氾濫する日本語の現状をよく理解し、自己表現者としての日本語のあり方について自覚し、実践することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 「日本語のルーツ」。琉球語・アイヌ語・ウィルタ語などについて
3. ウェストサイドストーリーの「楽曲の翻訳」①。オリジナル歌詞の実践。
4. ウェストサイドストーリーの「楽曲の翻訳」②。オリジナル歌詞の実践。
5. ウェストサイドストーリーの「楽曲の翻訳」③。発表
6. 楽曲に「オリジナル歌詞」をつける。テーマ・スチュエーション・決めたフレーズ導入等を条件にして。

7. 「言霊(ことだま)」について。口に出したことは現実に起きるといふ言霊信仰について。
8. 「中国語」講座①音痴と中国語。遣唐使の業績。
9. 「中国語」講座②漢詩の中国語読み実践。音読みについて。
10. J-POPの歌詞にみる「戦後の日本語の変遷」① アイドル曲・グループサウンズ曲・卒業ソング
11. J-POPの歌詞にみる「戦後の日本語の変遷」② フォークソング・演歌・ROCK・ラップ
12. 「新語・流行語」・「オヤジギャグ」0・「ギャル言葉」検証
13. 「外郎売(ういろうり)」に見る日本語のルーツ。口上上手について。「通販番組」の口上検証
14. 「古典落語」から学ぶ日本語のルーツ。「江戸語」の検証。
15. まとめ

授業時間外の学習

次時間のための準備(予習)で、下調べを指示された場合には積極的に取り組むこと。課題提出は遅れず、確実にを行うこと。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。録音用にスマホを持参させることがある(ない場合にはその際に申し出る)

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 日本語表現論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 前期

2

/

—

履修条件

表現者として正しい日本語を身につけたいと考える者、日本語検定3級以上を取得したいと考えている者(希望制)、教職を志している者など。6月の検定試験3級以上を受験することが望ましい(履歴書掲載可)。

授業の概要

6月中旬までは「日本語検定3級以上合格」のための授業を展開する(全6回)。ただし、資格取得は希望制で、受験の有無にかかわらず、日本語検定取得の学習に沿って授業を展開する。その後、日本語検定学習で身につけた日本語スキルをより多角的、現実的に実践できる力を養成する。表現者として日本人固有の文化、感性、話し方を理解し、身につけることで、言葉による様々な表現スタイルを修得する。

授業の到達目標

日本語検定の3級以上の資格取得レベルの日本語力の養成。正しい日本語の使い方を学び、表現者としての表現スキルを向上させ、実践することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 日本語検定指導①(全6回) 3級・2級レベルの学習。本人の希望でグレードを定める。
3. 日本語検定指導②
4. 日本語検定指導③
5. 日本語検定指導④
6. 日本語検定指導⑤
7. 日本語検定指導⑥
※受験者希望者は6月8日(金)または9日(土)に本学にて受験。

8. 「敬語の基礎」実践。
電話対応・就活・オーディションでの敬語を使った模擬授業
9. 「散文・詩(歌詞)の書き方」①韻文のデフォルメ。倒置法で告白の意味。
10. 「散文・詩(歌詞)の書き方」②類型化された言葉に個性はない。大阪のおばちゃんトーク検証。
11. 「散文・詩(歌詞)の書き方」③
キラリと光るフレーズ、一文がグレードアップのコツ。
12. 「オーディション・面接」で使う美しい日本語実践話し方のクセの矯正。
13. 「履歴書」の書き方
性格を表す文字表現 美しい文字について。
14. 「志願理由書」の書き方
的をしぼって、整理して、デフォルメして情熱を伝える。
15. まとめ

授業時間外の学習

日本語検定取得のための練習問題、模擬問題を積極的に取り組むこと。課題提出は遅れず、確実にを行うこと。

教科書・参考書等

「日本語」増補改訂版 上級1,100円、中級1,000円
日本語検定公式練習問題集(特定非営利活動法人日本語検定委員会刊)1級・2級 各1,000円、3級900円
※後日どれを購入するか指示する。

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 映画論

対象 全専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 行定 勲

期間 後期集中

2

○

○

履修条件

特になし。

授業の概要

本講義では、映画はどうやって制作されていくのか題材をどこに求めるのか等について、演劇と映画の具体的な作品を参照しながら、テーマごとに掘り下げていく。具体的な作品の解説を通じて講義を進めていくため、学術的な内容よりも実践的な内容が中心となるが、映画制作にとどまらず創作活動において重要となる要素について、丁寧に取り扱っていかねばと考えている。

講義を通じて、学生の皆さんと質疑応答だけでなくテーマごとにディスカッションを活発にできればと、思っている。

授業の到達目標

映画制作に関するいくつかの論点を通じて、映画制作にとどまらず、創作活動において基礎となる大事なポイントを理解してほしい。

授業計画

以下、テーマについて、具体的な作品を参照しながら、解説、ディスカッションの流れで授業を進めていく。

- 1-2 映画はどうやって制作されているのかという概論
- 3-4 演出における自作論と発想
- 5 演劇作品の映画化についての考察
- 6 映画における演劇的演出の意義
- 7 評価されることの意義
- 8 映画化企画のプレゼンテーション

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

授業への取り組み レポート課題(予定)。

科目名 英語 A I

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 James Barry Ferner

期間 前期

1

/

-

履修条件

なし。

授業の概要

実用的な英語のトレーニングをします。レベルを問わず、皆が楽しく参加できます。実践的なロールプレイ・スピーチ・対話などで自信をつけ、英語を話す人々とコミュニケーションできるようになることを目指します。

また、英語の音楽用語、表現についても学びます。

授業の到達目標

基礎的な英語表現を身につけ、英語で身のまわりの事柄や音楽の話を楽しめるようになる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 自己紹介(スピーチ)
- 3.好きなこと、そうでないこと(対話・ディスカッション)
4. ご招待・天気予報(ロールプレイ)
5. 旅行の切符を買う(ロールプレイ)
6. ホテルチェックインの手続き・コンシェルジュにお願いする(ロールプレイ)
7. レストランで食事(ロールプレイ)
8. 買い物(ロールプレイ)
9. 健康・薬のおすすめ・TV・CM(ロールプレイ)
10. 映画・演劇・コンサートの切符を買う(ロールプレイ・ディスカッション)
11. 見に行ったイベントの感想(スピーチ・ディスカッション)
12. ルール・やってはいけないこと(ロールプレイ)
13. 落とし物(スピーチ・説明)
14. パーティの招待(ロールプレイ)
15. 道を聞く(ゲーム)

授業時間外の学習

予習は必要ないが、毎週、各自復習することで上達が早くなる。

教科書・参考書等

各回に必要なプリントを配付

成績評価

出席・授業中の参加

科目名 英語 A II

対象 全専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 James Barry Ferner

期間 後期

1

/

—

履修条件

なし。

授業の概要

実用的な英語のトレーニングをします。レベルを問わず、皆が楽しく参加できます。実践的なロールプレイ・スピーチ・対話などで自信をつけ、英語を話す人々とコミュニケーションできるようになることを目指します。

また、英語の音楽用語、表現についても学びます。

授業の到達目標

基礎的な英語表現を身につけ、英語で身のまわりの事柄や音楽の話を楽しめるようになる。

授業計画

1. ガイダンス
2. お久しぶりです (ロールプレイ)
3. 食事の招待 (ロールプレイ)
4. オーディション・バイトの面接 (ロールプレイ・スピーチ)
5. OJT どうやって〜 (スピーチ・ロールプレイ)
6. 買い物・返品 (ロールプレイ)
7. 商品のおすすめ TV CM (ロールプレイ)
8. 人の恰好 (ロールプレイ・スピーチ)
9. 注意・緊急 (ロールプレイ)
10. 病院に行く (ロールプレイ)
11. ニュース・アナウンス (アナウンス・ロールプレイ)
12. アルバイトでのミスの謝罪 (ロールプレイ)
13. 道を聞く (ゲーム)
14. 舞台や映画、コンサートに招待 (ロールプレイ・スピーチ)
15. ディスカッション (対話・ディスカッション)

授業時間外の学習

予習は必要ないが、毎週、各自復習することで上達が早くなる。

教科書・参考書等

各回に必要なプリントを配付

成績評価

出席・授業中の参加

科目名 英語 B I

対象 全専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 田村 奈穂子

期間 前期

1

/

—

履修条件

なし。

授業の概要

基礎的文法を確認しながらアメリカの劇作家バーナード・スライド (Bernard Slade 1930-) の戯曲『セイムタイム・ネクストイヤー』(Same Time Next Year 1975) を読む。この戯曲は1975年にニューヨークで初演された後、1978年までに1453回のロングランを達成し、映画にもなった作品である。

本作はそれぞれ家庭のある男女が、年に一度、同じ場所で密会するという二人芝居である。設定は単純ではあるが、その背景は1951年から1975年までの25年間に及び、各場面のセリフから、時代の影響を受けた登場人物の心理的变化と葛藤を読むことができる。

授業では担当を決め、輪番でテキスト訳を発表し理解度を確認する。担当者以外も自発的に意見を発表する等、積極的な授業への参加を期待する。

授業の到達目標

1. 履修者は英語で書かれた戯曲を正確に読み取り、日本語を介さず登場人物のセリフを理解することができる。
2. 履修者は戯曲の精読を通し、歴史的・文化的知識を深めることができる

授業計画

- 1回目：ガイダンス。作品の概要、背景等の説明。
- 2回目：テキストpp.6-9
- 3回目：pp.10-14
- 4回目：pp.15-18

- 5回目：pp.19-22
- 6回目：pp.23-26
- 7回目：pp.27-30
- 8回目：pp.31-34
- 9回目：pp.35-38
- 10回目：pp.39-42
- 11回目：pp.43-46
- 12回目：pp.47-50
- 13回目：pp.51-54
- 14回目：pp.55-60
- 15回目：授業の総括。

授業時間外の学習

担当者は和訳と登場人物の心理・時代背景を説明できるように十分に準備すること。担当外の履修者も積極的な授業参加のためには十分な予習が必要。

教科書・参考書等

教材は授業時にプリントを配布する。
授業には辞書(紙/電子辞書いずれも可)を必ず持参すること。ただし、携帯電話・スマートフォンを辞書として使用するの認めない。

成績評価

- 期末試験60%、授業への参加態度40%を総合的に評価する。
- A 総合点が90点以上の者 (作品を十分に理解できている)
 - B 総合点が80点以上の者 (作品を概ね理解できている)
 - C 総合点が60点以上の者 (作品をある程度で理解できている)
 - C 総合点が50点以上の者 (作品の理解度が半分程度である)
 - D 総合点が49点以下の者 (作品を理解できていない部分が多い)

科目名 英語 B II

対象 全専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 田村 奈穂子

期間 後期

1

/

—

履修条件

なし

9回目: pp.32-34

10回目: pp.35-37

11回目: pp.38-40

12回目: pp.41-43

13回目: pp.44-46

14回目: pp.47-49

15回目: 授業の総括。

授業の概要

本授業では、イギリスの劇作家ピーター・シェファア (Peter Shaffer 1926-2016) 作の戯曲『アマデウス』(Amadeus 1989) を読む。本作は1979年にロンドンで初演をむかえた後、1981年にニューヨークでも上演され、1984年には映画化された。

『アマデウス』は、実在した作曲家モーツァルトとサリエリを中心人物とし、「モーツァルトの死にサリエリは関与したのか」というテーマで構成されたフィクションである。

授業では担当を決め、輪番でテキスト訳を発表し理解度を確認する。担当者以外も自発的に意見を発表する等、積極的な授業への参加を期待する。

授業時間外の学習

履修者には、単語、文法のみならず、登場人物像の把握、音楽的要素等、入念な予習が求められる。担当外の履修者も積極的な授業参加のためには十分な予習が必要。

授業の到達目標

- 履修者は英語で書かれた戯曲を正確に読み取り、日本語を介さず登場人物のセリフを理解することができる。
- 履修者は戯曲の精読を通し、歴史的・文化的知識を深めることができる。

教科書・参考書等

教材は授業時にプリントを配布する。

授業には辞書(紙/電子辞書いずれも可)を必ず持参すること。ただし、携帯電話・スマートフォンを辞書として使用するの認めない。

授業計画

- 1回目: ガイダンス。作品の概要、背景等の説明。
- 2回目: テキスト pp.10-13
- 3回目: pp.14-16
- 4回目: pp.17-19
- 5回目: pp.20-22
- 6回目: pp.23-25
- 7回目: pp.26-28
- 8回目: pp.29-31

成績評価

期末試験60%、授業への参加態度40%を総合的に評価する。

- S 総合点が90点以上の者 (作品を十分に理解できている)
 A 総合点が80点以上の者 (作品を概ね理解できている)
 B 総合点が60点以上の者 (作品をある程度で理解できている)
 C 総合点が50点以上の者 (作品の理解度が半分程度である)
 D 総合点が49点以下の者 (作品を理解できていない部分が多い)

科目名 演劇英語①②

対象 全専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Chris Parham

期間 前期

1

/

—

履修条件

Welcome to the Drama Through English course!

wk11 Intro to musical / Cast groups

wk12 Rehearse song

wk13 Rehearse song

wk14 Perform song

wk15 Evaluate Course / Games

授業の概要

Students work in groups and creatively think of ways to perform 3 kinds of dramatic work: a devised fairy-tale, a short scripted piece and a song from a musical. Students build up confidence performing in English and learn about different ways to approach character.

授業時間外の学習

Students practice in groups outside of class and memorise own work individually.

授業の到達目標

Objectives for this course are: improve communication skills in English; understand dialogue written in English; improve pronunciation and fluency in speaking in English.

教科書・参考書等

The teacher provides all the material.

授業計画

- wk1 Introduction to course
- wk2 Introduction to fairy-tale project
- wk3 Rehearse fairy tale
- wk4 Perform fairy tale
- wk5 Introduction to script work
- wk6 Cast students in scene
- wk7 Rehearse scene
- wk8 Rehearse scene
- wk9 Perform scene
- wk10 Drama Games day

成績評価

- S +90
 A +80
 B +65
 C +50
 D below 49

科目名 ドイツ語Ⅰ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Daniel Gross

期間 前期

1

/

—

履修条件

特になし。

授業の概要

このコースは、ドイツ語の基礎や知識のない学生を対象にドイツ語圏の人々と基礎的な日常会話ができるようになり、ドイツ文化や習慣、地域の見解を深めてもらうことを目標としている。

授業で使用するテキストは、修了時(2年間)には、ドイツ語の公式テスト(Zertifikat Deutsch)を受ける能力を修得することができるものを使用する。また、授業では、テキストだけを使用するのではなく、他のアイテムを使用し、受け身の授業ではなく、学生に自主的に参加して話をするスタイルで進め、学んだことを実用的に使えるよう、授業を進めていく。

授業の到達目標

- ①ドイツ語の文法の基本を学び理解することが出来る。
- ②基本的なドイツ語のボキャブラリーを構築する。
- ③発音を修得する。
- ④異文化に触れ日本との違いを感じとる。

授業計画

- 第1回 あいさつ、自己紹介(アルファベット)
- 第2回 カウンティング(1~100まで)
- 第3回 Weekdays, Months(月)、day(日)
- 第4回 動詞の現在人称変化
- 第5回 定冠詞と名詞の格変化
- 第6回 不定冠詞と名詞の格変化

- 第7回 名詞と形容詞の使い方(一格)
- 第8回 名詞(男性名詞、女性名詞、中性名詞) ex. 食べ物、飲み物
- 第9回 4格
- 第10回 名詞と形容詞の使い方(4格)
- 第11回 ein / kein (1格)
- 第12回 einen / keinen (4格)
- 第13回 時計
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト、まとめ

授業時間外の学習

授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。

教科書・参考書等

「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- S 筆記試験の結果が90-100%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%~80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%~60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%~40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 ドイツ語Ⅱ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Daniel Gross

期間 後期

1

/

—

履修条件

「ドイツ語Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

ボキャブラリーが少なく、基本的な文法の習得でも充分にさまざまなことを表現し伝えることが出来ることを理解し、能動的にドイツ語を学んでいってもらいたい。

授業では「ドイツ語Ⅰ」で使用したテキストを使用し、更にボキャブラリーや文法の幅を広げていく。

授業の到達目標

- ①ドイツ語の文法の基本を学び理解することが出来る。
- ②基本的なドイツ語のボキャブラリーを構築する。
- ③発音を修得する。
- ④基本的なコミュニケーションスキルとリスニングスキルを修得する。
- ⑤授業を通して、ドイツの文化の魅力を学び広い学識を身につける。

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回 単語(洋服)
- 第3回 色
- 第4回 2~3のプラクティス(4格の使い方)
- 第5回 ロールプレイ
- 第6回 現在完了形
- 第7回 現在完了形のプラクティス
- 第8回 コミュニケーションプラクティス

- 第9回 ロールプレイ
- 第10回 3格と結びつく前置詞
- 第11回 単語(3格の使い方)
- 第12回 3格のプラクティス
- 第13回 3格と4格
- 第14回 復習
- 第15回 テスト、まとめ

授業時間外の学習

授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。

教科書・参考書等

「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- S 筆記試験の結果が90-100%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%~80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%~60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%~40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 ドイツ語Ⅲ

対象 全専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Daniel Gross

期間 前期

1

/

—

履修条件

「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

コース修了時にはドイツ語ボキャブラリーと文法の知識の幅を広げ、ドイツ語を自信を持って話せることを目標としている。

授業では、発音や読解力の訓練をロールプレイ形式で進め、またテキストやCDを使用しながらリスニングトレーニングを行っていく。その他ピクチャーワークシートなども使用していく。

授業の到達目標

- ①一年目で身につけた基礎から、さらに流暢な発音が出来る。
- ②小文章を作成することが出来る。
- ③リスニング能力やコミュニケーションの能力の向上。
- ④文法だけでなくとどまらずドイツの音楽の理解を深めていく。

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回 3格、4格（だれに／何を～）
- 第3回～5回 どこで（3格）どこへ（4格）地図を使用
- 第5回 主文と副文（何故～ warum／～なので weil）
- 第6回 ロールプレイ（内容5回目のレッスン）
- 第7回 接続詞と副文（～にもかかわらず obwohl／～なので weil）
- 第8回 接続詞と副文（～するとき wenn）
- 第9回 esの使い方
- 第10回 dassの使い方

- 第11回 ロールプレイ
- 第12回 コミュニケーションプラクティス
- 第13回 従属の接続詞と副文
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト、まとめ

授業時間外の学習

授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。

教科書・参考書等

1年目と同じ「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- S 筆記試験の結果が90-100%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%～80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%～60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%～40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 ドイツ語Ⅳ

対象 全専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Daniel Gross

期間 後期

1

/

—

履修条件

「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

前期同様のスタイルで進めて行く。またこれらの身に付けた能力をベースにドイツ語の文化やドイツ社会の習慣等を学生と共に話し合い、ディスカッションしながら授業を進め更に実用的なドイツ語に近づけて行く。

この授業を通してドイツ語に関心を深め、その後も一過性で終るのではなく、ドイツ語を身近な物としてとらえ、学び続けて行って欲しい。

授業の到達目標

- ①基本的な日常会話が出来ようになること。
- ②自信を持って自己表現をし、実用的に使えるようになること。
- ③ドイツの文化・習慣を理解し、広い視野を身につける。

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回～第3回 話法の助動詞
- 第4回 分離助詞
- 第5回 zu不定詞
- 第6回 現在完了形
- 第7回 現在完了形のプラクティス
- 第8回 再帰代名詞と再帰動詞
- 第9回 楽器、音楽関係
- 第10回 比較級、最上級

- 第11回 関係文の作り方
- 第12回～第13回 過去形
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト、まとめ

授業時間外の学習

授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。

教科書・参考書等

1年目と同じ「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- S 筆記試験の結果が90-100%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%～80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%～60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%～40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 イタリア語Ⅰ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Sbaragli Marco

期間 前期

1

/

—

履修条件

声楽専修は必修。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. ガイダンス、イタリア語へのアプローチ
2. イタリア語の発音、挨拶や簡単な自己紹介、数え方
3. 性と数、定冠詞等を中心としたイタリア語の特徴
4. 指示代名詞、形容詞の性と数の一致
5. 動詞essereを用いた文章の構造
6. 疑問詞che及びchiを用いた疑問文の作り方、その答え方
7. c'èとci sonoを用いた文章
8. 主語人称代名詞と動詞essereの直説法現在の活用
9. 動詞avereの活用変化とその使い方
10. avere, essereを用いた文章
11. 定冠詞と不定冠詞、前置詞等を中心とした文章の構造
12. 規則動詞の現在形とその使い方(1)

13. 規則動詞の現在形とその使い方(2)

14. 規則動詞を使った文章、疑問文&答えを中心に

15. まとめ

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)

「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 授業への取組み30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40%で100点換算

S なお、他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者は、成績をSとする

A およそ80点以上

B およそ60点以上

C およそ50点以上

D 49点以下

科目名 イタリア語Ⅱ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Sbaragli Marco

期間 後期

1

/

—

履修条件

声楽専修は必修。

「イタリア語Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. 時間、曜日の表現
2. 動詞andareとvenire
3. 動詞andareとvenireの前置詞の使い方
4. 助動詞dovereを使った文章
5. 助動詞potereを使った文章
6. 助動詞volereを使った文章
7. その他の不規則動詞
8. 動詞piacereの使い方
9. 所有形容詞
10. 現在形のまとめ(1)
11. 現在形のまとめ(2)
12. 近過去の仕組み(1)

13. 現在形のまとめ(2)

14. 近過去を使った文章の作り方

15. 1年間の総復習

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)

「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 授業への取組み30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40%で100点換算

S なお、他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者は、成績をSとする

A およそ80点以上

B およそ60点以上

C およそ50点以上

D 49点以下

科目名 イタリア語Ⅲ

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Sbaragli Marco

期間 前期

1

/

—

履修条件

「イタリア語Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. ガイダンス、既習事項の確認
2. 現在形を用いての基本的な作文&会話練習(1)
3. 現在形を用いての基本的な作文&会話練習(2)
4. 近過去形を用いての基本的な作文&会話練習(1)
5. 近過去形を用いての基本的な作文&会話練習(2)
6. 再帰動詞の用法(現在形)
7. 再帰動詞の相互的用法(現在形)
8. 再帰動詞(近過去形)
9. avereを用いた文章
10. essereを用いた文章
11. 直接目的語代名詞の使い方
12. 近過去の文章における直接目的語代名詞の使い方

13. 半過去形の用法(1)
14. 半過去形の用法(2)
15. まとめ

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 授業への取組み30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断)40%で100点換算
S なお、他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者は、成績をSとする
A およそ80点以上
B およそ60点以上
C およそ50点以上
D 49点以下

科目名 イタリア語Ⅳ

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 Sbaragli Marco

期間 後期

1

/

—

履修条件

「イタリア語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(1)
2. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(2)
3. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(3)
4. 現在→近過去→半過去 総復習
5. 未来形の用法(1)
6. 未来形の用法(2)
7. 未来形と現在形を用いた基本的な作文&会話練習
8. 動詞piacere 他
9. 直接目的語代名詞
10. 間接目的語代名詞
11. 間接目的語代名詞の用法(1)
12. 間接目的語代名詞の用法(2)

13. 間接目的語代名詞と直接目的語代名詞の複合形
14. 総まとめ(1)
15. 総まとめ(2)

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 授業への取組み30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断)40%で100点換算
S なお、他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者は、成績をSとする
A およそ80点以上
B およそ60点以上
C およそ50点以上
D 49点以下

科目名 フランス語Ⅰ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

期間 前期

1

/

—

履修条件

特になし。
他専攻学生の履修も可。

授業の概要

ゼロから、ゆっくりと楽しみながらフランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。

授業の到達目標

「聞けて、読めて、書けて、話せて」の能力を身につけるようになることを目的とする。各レッスンでは、必ず発音の練習、聞き取りと書き取りの練習、自己表現の練習も行う。様々なテーマを通じて、前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識に身につけることができる。

授業計画

1. 入門■挨拶・つづり・アルファベット・1～10・クラスで使う指示の理解・発音の基礎
2. Leçon 1a■自分のことを伝えよう(1)：名前・職業・住んでいるところ・出身地を伝えられる。基本会話
3. Leçon 1b■自分のことを伝えよう(1)：職業の単語・数字(1～20)・動詞(être, habiter, s'appeler)・疑問語(Quel, comment où)
4. Leçon 2a■自分のことを伝えよう(2)：国籍・年齢・兄弟の有無・話せる言語を伝えられる。基本会話
5. Leçon 2b■自分のことを伝えよう(2)：国・国籍・言語・年齢の言い方・数字(21～69)・動詞(avoir, parler)・非定形
6. Leçon 3a■家族や友人を紹介しましょう：人の容姿や性格を描写できる。基本会話
7. Leçon 3b■家族や友人を紹介しましょう：家族・形容詞(容姿、性格、服装、色)・所有形容詞・数字(70～100)
8. 総合的な復習
9. Leçon 4a■趣味や好みを紹介しましょう：趣味、余暇の活

動について話せる・好きなもの、嫌いなものについて話せる。基本会話

10. Leçon 4b■趣味や好みを紹介しましょう：食べ物、飲み物・趣味・数字(100～1000)・動詞(aimer, détester, préférer, écouter, regarder, voyager, faire, aller, lire, jouer, prendre)・定冠詞
11. Leçon 5a■道案内をしよう：人や物の位置について話せる・道順についてのやりとりができる。基本会話
12. Leçon 5b■道案内をしよう：施設・身のまわり品・道案内の表現・序数・il y a・命令形・不定冠詞・前置詞(à gauche, à droite, devant, derrière, sur, sous...)
13. Leçon 6a■行動について話そう：したばかりのこと、している最中のこと、これからすることについて話せる。基本会話
14. Leçon 6b■習慣・計算・動詞(manger, boire, travailler, écrire, sortir, aller, venir de)・近接未来形・近接過去形・être en train de
15. 試験

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Soyons actifs! 白水社

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- S：総合点が90点以上の者
A：総合点が80点以上の者
B：総合点が60点以上の者
C：総合点が50点以上の者
D：総合点が49点以下の者

科目名 フランス語Ⅱ

対象 全専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

期間 後期

1

/

—

履修条件

フランス語Ⅰに参加した方。
他専攻学生の履修も可。

授業の概要

楽しみながらフランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。

授業の到達目標

「聞けて、読めて、書けて、話せて」の能力を身につけるようになることを目的とする。各レッスンでは、必ず発音の練習、聞き取りと書き取りの練習、自己表現の練習も行う。様々なテーマを通じて、前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識に身につけることができる。

授業計画

1. Leçon 7a■習慣について話そう：一日の行動について話せる・日常瞬間について話せる・時間についてやりとりができる。基本会話
2. Leçon 7b■習慣について話そう：曜日・頻出・交通手段・時刻の言い方・代名動詞の活用・様々動詞の活用・部分定冠詞・à
3. Leçon 8a■過去の経験を伝えよ：過去の行為や出来事についてやりとりできる。基本会話
4. Leçon 8b■過去の経験を伝えよ：季節・年月日・値段の尋ね方・答え方・複合過去(être・avoir)・過去分詞・qu'est-ce que・c'est・combien・動詞(aller, venir, arriver, partir, entrer, sortir, rester, tomber, revenir, monter, descendre, naître, mourir)
5. Leçon 9a■過去の自分について話そう：過去の習慣、状況、気持ちについてやりとりできる。基本会話
6. Leçon 9b■過去の自分について話そう：印象・感想・体調・単位・半過去、複合過去と半過去の使い分け
7. 総合的な復習

8. Leçon 10a■インターネットを使おう：インターネットの情報を読み取り、比較検討できる・天気についてやりとりできる。基本会話

9. Leçon 10b■インターネットを使おう：インターネット、天気単語・比較級と最上級・前置詞と定冠詞の縮約
10. Leçon 11a■未来について話そう：今後の予定や将来についてやりとりできる。基本会話
11. Leçon 11b■未来について話そう：可能・希望・意義を表す表現・単純未来・条件法現在・指示形容詞
12. Leçon 12a■インタビューをしよう：身近な人に簡単なインタビューをし、その結果を順序だてて表現することができる。基本会話
13. Leçon 12b■疑問視・順序を表す副詞・接続詞・直接目的補語代名詞・間接目的補語代名詞・中性代名詞
14. 総合的な復習
15. 試験

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Soyons actifs! 白水社

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- S：総合点が90点以上の者
A：総合点が80点以上の者
B：総合点が60点以上の者
C：総合点が50点以上の者
D：総合点が49点以下の者

Toho Gakuen College of Drama and Music

芸術科音楽専攻

科目名 音楽基礎演習ーバロック・ダンス

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 浜中 康子

期間 前期

1

/

—

履修条件

音1必修。

授業の概要

17世紀初めの頃から18世紀半ばにかけてフランス宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていったダンスをバロック・ダンスと称する。

メヌエットやガヴォット等がその代表的なものであり、日頃演奏や鑑賞を通して関わっているこれらのバロック舞曲を、実際のダンス・ステップを通して体験する。バロック・ダンスのステップや踊り方は、現存する舞踏譜やダンス教本によって300年以上経た今、復元することができる。これらの読み方についても触れ、音楽とダンスの歴史的及び運動的関連性を明らかにする。

ダンスの実習と共に、器楽で舞曲を演奏し、実際にダンスの伴奏を試みたい。

授業の到達目標

様々な舞曲の中でブレ、メヌエット、カヴォットを発表できるように仕上げる。

授業計画

各授業とも、歴史的資料(舞踏譜等)に基づいてダンス実技実習を中心とする。

- 1 テクニックの基本、歴史的背景
- 2 同上(2)
- 3 ブレ、メヌエットを中心に
- 4 同上(2)
- 5 同上(3)
- 6 同上(4)
- 7 同上(5)
- 8 同上(6)
- 9 ガヴォット、サラバンド他
- 10 同上(2)
- 11 同上(3)
- 12 同上(4)
- 13 まとめ 総合的な練習
- 14 同上(2)
- 15 同上(3)

授業時間外の学習

- ・授業中は知的な理解に留まることも身体表現としてスムーズに行えるようにステップ名と動きを結びつけながらリピート練習すること。
- ・様々な作曲家・時代の舞曲を数多く演奏・鑑賞すること。

教科書・参考書等

- 書籍：「栄華のバロック・ダンス―舞踏譜に舞曲のルーツを求めて」浜中康子著(音楽之友社)
- DVD：フランス宮廷の華「バロック・ダンスへの招待」I・II 浜中康子監修(音楽之友社)
- 服装：膝の曲げ伸ばしが行いやすいパンツまたはスカート(タイトスカート不可)、ダンスシューズ使用

成績評価

- ・授業への取り組みを重視する
- ・実技発表
- ・レポート

科目名 音楽理論基礎 a・b

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 福田 恵子・長谷川 郁子

期間 前期

1

/

—

履修条件

音1必修。

出された宿題、テスト準備を真面目に行うこと。
欠席、遅刻は厳しくとる。

授業の概要

音楽を学ぶにあたって必ず理解しておかねばならない大前提としての「楽典」を初歩から講義する。専門実技はもちろん、「和声」「楽式」「対位法」「SHM」その他音楽理論に関する科目の習得に必要な欠くべからざる基礎となる科目である。

*1回目の授業時にテストを行ない、すでに楽典を十分に習得していると認められる学生は、授業への出席を免除する。

授業の到達目標

楽典の真の習得により、音程、音階、和音、調等が有機的に関連づけて理解できるようになること。

授業計画

1. 本講座の概要説明及び習得度確認テスト
2. 音の不思議、楽譜の常識
3. 音程の説明
4. 音程の聴き分け、名曲における効果的音程の使いかた
5. 小テスト、音階の説明
6. 音階の続き、調号
7. 調号の確認
8. 小テスト、和音の種類、和音の位置
9. 調における和音の役割
10. Dominantの和音①、属七の和音について
11. Dominantの和音②、減七の和音について
12. 終止形、借用和音について
13. 調の判定
14. 和声外音とは
15. 授業の総括

授業時間外の学習

テキストを熟読した上での宿題の実践。

教科書・参考書等

- 入学前に配布したテキスト。
- 参考書としては「楽典 理論と実習」(音楽之友社)を所持することを勧める。初回授業時に説明する。

成績評価

小テスト成績30%、期末試験成績60%、出席・遅刻・授業態度10%、総合100点満点に換算する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が65点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 音楽理論[和声] I・II a

対象 音楽専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 平井 正志

期間 前期・後期

2・2

/

—

履修条件

音1(日本音楽専修以外)必修。

授業の概要

本科の2年間に、ロマン派までの西洋音楽における和声学の基礎理論を理解し、課題の実習を通して、和声機能の本質を把握し得る能力を育成する。

1年次には、三和音の基本形および転回形とドミナント諸和音(属七・属九の和音)の配置、連結に関する原則を中心に、終止形の形成、様々な終止(全終止、半終止、偽終止、変終止)に対する考察、基本的な声部進行法について学習する。

授業の到達目標

1. 三和音(各種転回形を含む)による和声体を扱うための基礎力を確実に習得すること。
2. 属七の和音、属九の和音を扱うことを通じ、より厳密な声部進行の書法を身に付けること。

授業計画

- 第1～2回 和声学概論。(初歩の音響学に対する知識を踏まえて。)
- ・四声体和声法課題実施に先立つ楽典的理解の確認。
 - ・三和音の四声体配置を行う上での規則、良好な音響状態についての理解。
- 第3～7回 基本形三和音の配置と連結
- ・基本形三和音における声部進行法上の規則、その背景となる和声法の原則の理解、旋律的配慮に関する考察。
 - ・終止形と、和音進行法についての理解、および音感としての把握。
- 第8～10回 三和音の第1転回形
- 第11～14回 三和音の第2転回形

- 第15回 前期筆記試験
第16～19回 属七の和音
第20～23回 属七の和音の根音省略形
第24～29回 属九の和音
第30回 後期筆記試験

授業時間外の学習

講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。
止む終えない事情で欠席した場合は、講義内容と課題を他の受講者から入手するなどして自習しておくこと。

教科書・参考書等

教科書: 課題を配布
参考書: 和声「理論と実習」第一巻
音楽之友社(執筆責任 島岡 譲)

成績評価

- 前・後期々末に筆記試験を行う。筆記試験の成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、課題の実績と課題の実施内容についても勘案し、総合的な判断によって可否を決定する。
- S 90点～100点: 重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して自在な練達を感じられる。
- A 80点～89点: 重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い。
- B 60点～79点: 概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足。
- C 50点～59点: 重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない。
- D 50点未満: 重要な公理が理解出来ておらず、和声法を修めたと認めがたい。

科目名 音楽理論[和声] I・II b

対象 音楽専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 池田 哲美

期間 前期・後期

2・2

/

—

履修条件

音1(日本音楽専修以外)必修。

和声法は、継続した学習の積み上げが大切とされるので、欠席遅刻は厳禁とする。

授業の概要

音楽作品を理解する上で和声の知識は必須である。論理的に楽曲を把握することは、演奏表現をする際に、より鮮明なイメージを作る手助けともなりえる。その論理的理解に必要な基礎知識の一つとして、和声法の学習があげられる。和声課題の実施とともに、具体的な作品の分析を行い、音楽における和声構造の仕組みを捉え、音楽のより深い理解を目指す。一年目は、和声法の学習に必要な予備知識の確認を導入とし、基本形・転回形・属七の和音のそれぞれの進行を理解する。

授業計画

- 1～5回 和声学習に必要な予備知識の確認と、三和音の組み立て(密集と開離)。
- 4～8回 基本形の簡単な連結。
- 9～14回 第一転回形
- 15回 前期のまとめと確認
- 16～20回 第二転回形
- 21～26回 属七の和音
- 27～29回 楽曲の和声分析と実施
- 30回 年度末のまとめ

授業時間外の学習

授業で学習したこと、確認と課題の宿題。

教科書・参考書等

『和声 理論と実習 I』音楽之友社 池内友次郎 他著

授業の到達目標

具体的な楽曲の音楽のより深い理解・把握と、課題実施による、基礎的な和声進行の定型的学習とその応用。

成績評価

学期末試験とともに、授業に対する取組みや態度を含めた平常点、そして小テスト・宿題の提出を重視する。

科目名 音楽史概説Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 森下 俊一

期間 前期・後期

2・2

○

—

履修条件

日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

古代から中世、ルネサンス、バロック、古典派、ロマン派の時代を経て、現代に至るまでのヨーロッパ音楽史を概観する。

ヨーロッパ音楽の理解を深めるため、ヨーロッパ以外の地域(とりわけ日本を含むアジアの音楽)にも目を向ける。

教科書は使用しないが、楽譜や音資料、映像資料を適宜用いながら講義を進める。

授業の到達目標

ヨーロッパ音楽の歴史的・様式的変遷を正しく理解する。

授業計画

【音楽史概説Ⅰ】

- 1 『世界音楽』の視点から
- 2 ヨーロッパ音楽の基本様式をめぐって
- 3 古代の社会と音楽
- 4 中世の社会と音楽(聖楽)
- 5 中世の社会と音楽(俗楽)
- 6 初期ポリフォニー
- 7 ルネサンスの社会と音楽

【音楽史概説Ⅱ】

- 1 バロックの社会と音楽
 - 2 後期バロックから古典派へ
 - 3 古典派の音楽
 - 4 ロマン派の音楽
 - 5 19世紀末の音楽
 - 6 20世紀の音楽
- 以上の内容を各2～4回の時間配当で取り扱う予定。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

参考書は多数あるので、開講時に一覧表を配布する。

成績評価

授業への取組み姿勢、提出物等を総合的に勘案して評価する。
評価基準・評価区分は学則に準拠する。

科目名 日本音楽理論AⅠ・Ⅱ／BⅠ・Ⅱ

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 森重 行敏

期間 前期・後期

2・2

○/◎

—

履修条件

特になし。日本音楽専修は必修。

他専攻の学生も歓迎する。ただし日本音楽について関心を持つ者とする。

授業への取り組みを重視する。

授業の概要

日本音楽では伝統的に、理論より実践が重視されてきたため、理論的用語や概念が統一されておらず、流派や研究者においてもまちまちであることが多い。

この授業は音楽にとって理論とは何かと言う根本的な観点に立ち返って、日本音楽のさまざまな側面を観察するとともに、洋楽やアジア諸民族の音楽とも比較しながら、その理論的基礎を見つけ出して行くこととした。

授業の到達目標

日本の楽器や音楽についての基礎知識を身につけるとともに、その音楽的特性、理論的構造などを指摘できるようになること。

授業計画

前期	後期
1 オリエンテーション	1 日本の音律1 三分損益
2 日本音楽の概観	2 同2 自然倍音と純正律
3 日本の楽器と楽譜 音高譜と奏法譜	3 同3 平均律とは何か
4 同 箏1	4 移動ドと固定ド1
5 同 箏2	5 同2
	6 日本のリズム1

- | | |
|----------|----------------|
| 6 同 三味線1 | 7 同2 |
| 7 同 三味線2 | 8 同3 |
| 8 同 尺八 | 9 日本音楽の構造1 序破急 |
| 9 同 笛 | 10 同2 雅楽の構造 |
| 10 同 箏 | 11 同3 語り物音楽の構造 |
| 11 同 笙 | 12 同4 箏曲段物の構造 |
| 12 同 琵琶 | 13 世界の中の日本音楽1 |
| 13 同 打楽器 | 14 同2 |
| 14 同 その他 | 15 後期まとめ |
| 15 前期まとめ | |

授業時間外の学習

積極的に伝統芸能の鑑賞をすることを奨める。
詳細については随時紹介する。

教科書・参考書等

必要なプリントは随時配布する。
参考書として『日本音楽との出会い』月溪恒子著(東京堂出版)など

成績評価

授業への取組み、態度50%、課題50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 日本音楽史概説Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野川 美穂子

期間 前期・後期

2・2

○

—

履修条件

なし。

授業の概要

縄文・弥生時代から現在にいたるまで、日本人は様々な音楽に親しんできた。しかし、現在の生活では、日本の伝統的な音楽を聴く機会が少なくなっている。この授業では、日本音楽の変遷をたどりながら、楽器や音楽様式の特徴、文学・演劇・舞踊との関連などについて概説する。知識としてではなく音としての理解を深めるために、毎回、視聴覚教材を活用する。

[後期]

- (1) 三味線の伝来、三曲の楽器
- (2) 地歌の歴史と音楽
- (3) 箏曲の歴史と音楽
- (4) 尺八楽、胡弓楽の歴史と音楽
- (5) 文楽と歌舞伎に使われる楽器
- (6) (7) 文楽の歴史と音楽
- (8) (9) 歌舞伎の歴史と音楽
- (10) 豊後系浄瑠璃の歴史と音楽
- (11) (12) 長唄の歴史と音楽
- (13) 近代の日本音楽
- (14) 現代の日本音楽
- (15) 近世、近代、現代の日本音楽のまとめ

授業の到達目標

時代や種目による違いをたどりながら、日本音楽の魅力を知る。

授業計画

以下の順に進める。

[前期]

- (1) 日本音楽の枠組みと特徴
- (2) (3) 日本古来の音楽
- (4) (5) (6) 雅楽の歴史と音楽
- (7) (8) 声明の歴史と音楽
- (9) (10) 琵琶楽の歴史と音楽
- (11) (12) (13) (14) 能楽の歴史と音楽
- (15) 古代、中世の日本音楽のまとめ

授業時間外の学習

授業でとりあげた種目や作品の特徴を整理し、より深く調べること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布する。参考書については、その都度指示する。

成績評価

出席状況と前期・後期末の筆記試験により評価する。出席状況50%、筆記試験の成績50%の配分で評価する。

科目名 日本音楽特講

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 杵屋 巳織

期間 後期

2

△

—

履修条件

基本的には教職受講者対象。次に音楽専攻対象。専攻科演劇専攻の履修も認める。
教職受講者、音楽専攻、専攻科演劇専攻の受講が少ない場合はそれ以外の学生の聴講を認める。

授業の概要

日本音楽が学校教育に取り入れられるようになり、学校教育の現場に立つ教員にとっても、日本音楽に対する知識や経験が必要となってきた。

具体的に教育者としての立場になった時に使える知識と三味線を弾く技術を学び、三味線を弾く事により日本音楽の音としての個性を知り、日本人として音の美しさも感じていく。日本音楽の年月を重ねた深さについても考えていく。

- 4 譜面を読みつつ三味線を弾く。
- 5 楽器の特性を理解しつつ弾く。その折に合わせた日本音楽の説明。
- 6 /
- 7 /
- 8 舞台における演奏の説明、楽器の演奏。
- 9 唄の簡単な説明と発声。楽器の演奏。
- 10 /
- 11 合奏の準備。
- 12 合奏のコツと実践。
- 13 合奏の試演。
- 14 合奏。
- 15 試験曲を演奏。

授業の到達目標

- 三味線を中心に日本の楽器についての正しい知識を持つこと。
- 西洋音楽とは違った音階を用いている日本の音を知ること。
- 三味線について正しい扱い方・正しい姿勢を習得すること。

授業計画

- 1 日本音楽の簡単な説明と話。三味線の部位の名称を学ぶ。楽器にさわる。
- 2 三味線の扱い方。構え方。音の出し方。
- 3 長唄の説明。譜面の説明。

授業時間外の学習

歌舞伎の鑑賞。邦楽器を使用した演奏会の鑑賞。

教科書・参考書等

教科書は使用せず授業時にプリント配布。

成績評価

- ・授業への取り組み ・授業態度 ・出席日数
- S 演奏も諸事項も完全に理解している。
- A 演奏も諸事項も十分理解している。
- B 演奏も諸事項もほぼ理解している。
- C 演奏も諸事項もある程度理解している。
- D 演奏も諸事項も理解が欠けている。あるいは出席回数の足りない。

科目名 演奏会制作法

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 伊藤 直樹

期間 後期

1

○

—

履修条件

演奏会等の企画・制作に興味があり、自らの音楽活動に役立てたい者。

- 13 企画演習②
- 14 企画発表
- 15 振り返り

授業の概要

文化ホール等で行う演奏会について、企画から予算作成、公演実施に至るまでの基礎知識を学び、自らが出演・企画する演奏会に役立てる。地域、公演種別等、様々な条件をシュミレーションし企画する。

授業時間外の学習

劇場公演鑑賞、近隣文化ホールの見学。

授業の到達目標

演奏会等を企画、実施するうえでの仕事の内容や行程を理解する。ニーズに合わせた企画制作ができるようにする。

教科書・参考書等

資料プリントを配布。

授業計画

- 1 ガイダンス (授業内容と目的)
- 2 劇場・文化ホールの歴史と現状、役割①
- 3 劇場・文化ホールの歴史と現状、役割②
- 4 舞台の仕組み、劇場用語
- 5 スタッフの役割
- 6 企画書の作成と予算①
- 7 企画書の作成と予算②
- 8 出演者の選定と依頼、契約
- 9 スケジュール作成とリハーサル管理
- 10 広報・宣伝
- 11 著作権法
- 12 企画演習①

成績評価

授業での取り組み姿勢／レポート等の提出物で判断する。

- S 総合点が90点以上の者(基本的な内容を十分把握できて、授業への取り組みが積極的である)
- A 総合点が80点以上の者(基本的な内容を十分理解できて、授業への取り組みが積極的である)
- B 総合点が60点以上の者(基本的な内容をほぼ理解できて、授業への取り組みが積極的である)
- C 総合点が50点以上の者(基本的な内容をある程度理解できているが、授業への取り組みが積極的でない)
- D 総合点が49点以下の者(基本的な内容を理解できておらず、授業への取り組みが積極的でない)

科目名 アウトリーチ概説

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 永井 由比

期間 前期

2

/

—

履修条件

特になし。

- 6 楽器紹介について③
- 7 学校訪問アウトリーチについて①
- 8 学校訪問アウトリーチについて②
- 9 学校訪問アウトリーチについて③
- 10 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて①
- 11 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて②
- 12 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて③
- 13 アウトリーチにおけるワークショップの手法①
- 14 アウトリーチにおけるワークショップの手法②
- 15 まとめ

授業の概要

アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉などの分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービスなどの意味で多用される。音楽でのアウトリーチというものは、演奏家が学校や施設などに出向いて、普段の生活空間(教室や音楽室)で演奏会やワークショップを行うことである。ここでは、その音楽におけるアウトリーチ活動について、音楽というソフトをどう社会に還元していくか、また、聴衆と演奏を通して感動を共有できる舞台(プログラム)や手法を模索していく。

授業時間外の学習

- ・プログラミングするにあたり色々と曲を調べておくこと
- ・専修楽器について構造など勉強しておくこと

授業の到達目標

学年や対象に適したプログラム作り。
一時間のコンサートで何を伝えたいか、また何を伝えるべきかを考え、それを生かした企画を作る。

教科書・参考書等

特になし。

授業計画

- 1 ガイダンス アウトリーチとは
- 2 公共ホールや自治体によるアウトリーチの評価と課題
- 3 施設や場所によつてそれぞれのアウトリーチの手法
- 4 楽器紹介について①
- 5 楽器紹介について②

成績評価

授業への取り組み姿勢、レポートなどの提出物で判断する。(出席態度50% レポート50%)

- S 総合点が90点以上のもの
- A 総合点が80点以上のもの
- B 総合点が60点以上のもの
- C 総合点が50点以上のもの
- D 総合点が49点以下のもの

科目名 アウトリーチ演習

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 永井 由比

期間 後期

1

/

—

履修条件

前期の「アウトリーチ概説」を履修した者。

授業の概要

現在、自治体や各文化会館での自主事業に置いて、学校や施設に演奏家を派遣するアウトリーチ事業が盛んに行われている。普段の生活(勉強)の場で、少人数で行われるこのコンサートは演奏者と聴衆の垣根のないバリアフリーなコンサートとして大変喜ばれる。この講座では、前期に学んだアウトリーチの手法を生かして実際にプログラミングをし、演奏発表する。

授業の到達目標

聴衆と感動が共有できるコンサート作りをする。
一時間のコンサートで何を伝えたいか、また何を伝えるべきか考えていく。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 企画作り
- 3 企画作り
- 4 プログラム構成
- 5 プログラム構成
- 6 聴衆が参加できるコンサート作り

- 7 聴衆が参加できるコンサート作り
- 8 楽器演奏体験について
- 9 演奏発表
- 10 演奏発表
- 11 演奏発表
- 12 演奏発表
- 13 演奏発表
- 14 演奏発表
- 15 まとめ

授業時間外の学習

演奏発表に向けて個々、またはグループで練習をしっかりとしてくること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み姿勢、演奏発表などで判断する。
(授業態度50% 演奏発表50%)

- S 総合点が90点以上のもの
A 総合点が80点以上のもの
B 総合点が60点以上のもの
C 総合点が50点以上のもの
D 総合点が49点以下のもの

科目名 音響学

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 岩崎 真

期間 前期

2

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

音響学の対象は非常に広い範囲にわたる。本講義は前期のみであり回数も限られているため、「音」に関する基礎的なことと、音響学的側面が実際の音楽とどう関連しているかという、その二つの視点で講義をすすめていく。

授業の到達目標

「音とはなにか」ということに、常識とよりいっそうの興味を持ち、自分自身の音楽やその表現に生かせる取っ掛かりをつかんでもらえればと願っている。

授業計画

以下のような15回の講義を予定しているが、テーマが変わる場合もありうる。

1. ガイダンス。音響学概観1
2. 音響学概観 2: オーディオの歴史を主として
3. 音の諸要素 1: 高さ
4. 〃 2: 大きさ
5. 〃 3: 音色
6. 波形とスペクトル
7. サウンドスペクトログラム。フォルマント
8. 映画「カストラート」にみる音声合成の例
9. 録音技術
10. ショルティ「リング」における録音技術の例

11. バーンスタイン「ウエスト・サイド・ストーリー」における録音技術の例
12. コンサートホール 1
13. 〃 2
14. 初期の電子楽器
15. 音の発生と伝搬: 再び「音」とは

授業時間外の学習

特に指示しないが、しっかり復習をすること。疑問点をそのまま残さない方がよいと思う。

教科書・参考書等

『サウンドシンセシス』(講談社サイエンティフィック)を教科書として使用する。また必要に応じてプリントを配布する。参考書は随時指示する。

成績評価

以下の順で評価対象とする。

1. 出席
3/4以上の出席が必要。遅刻は10分程度までで、それ以降は欠席扱いとする(授業の聴講は認める)。
2. 平常の受講態度
出席カードに関する不正行為、携帯電話や私語により講義を妨げるものは退席させ、以後の出席は認めない。
過去に何人か該当者がいる。あなどらないこと。
3. 期末に行う試験、またはレポートの成績。
くわしくは1回目の講義時間内で説明する。

科目名 ディクシオン(イタリア語)

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 井上 由紀

期間 前期

1

/

—

履修条件

特になし。
声楽専修は必修。

授業の概要

一言葉と音楽の密接な関係—歌を学ぶ者にとって、この研究は大変重要なことである。ただ、難しく考えるのはよそう。まずは、明るく美しいイタリア語に親しみ、詩を読み表現する。そして楽譜を眺めてみる。そうすると、色々なことが発見できる。その発見をもとに皆さんと歌唱表現がさらに豊かになることを願いつつ、イタリア歌曲を中心としたディクシオンの学習を行う。声楽専修の方々だけでなく、楽器や伴奏の勉強をしている方も一緒に学ばれることを期待する。

授業の到達目標

作品にふさわしいイタリア語の歌詞の朗読ができ、実際に音楽の中でそれを理解し表現できることを目指す。

授業計画

1. イタリア語の音に慣れ、親しむ
2. 正しく明確な発音をする
3. 単語の意味を考え表現する
4. 繰り返しの表現を学ぶ
5. 音節の数、押韻を考える
6. 強調すべき音節、単語を考え表現する
7. 表現の速さや間を考える

8. レチタティーヴォの学習
9. “
10. レチタティーヴォの発表
11. 歌詞と音のつながりを考える
12. 伴奏者とのコミュニケーションをはかる
13. “
14. 鑑賞
15. まとめ

☆講義内容に関しては、受講生の理解度をみて、前後することがある。

☆取り上げる曲については、受講生の声種を考慮し、その都度選ぶ(イタリア古典歌曲が中心)。

授業時間外の学習

事前に配布される楽譜・詩によく目を通し、どのような内容の曲なのかを考えること。また授業で学習したことへの復習に努めること。

教科書・参考書等

授業時にその都度指示、プリントを配布する。

成績評価

- S 基本的な諸事項を十分に把握し、優れた発表ができる。
- A 基本的な諸事項を十分に把握し、発表ができる
- B 基本的な諸事項をほぼ把握し、発表ができる
- C 基本的な諸事項の理解に欠け、適切な表現ができない
- D 基本的な諸事項を理解せず、適切な表現ができない
- なお、出席日数、授業に取り組む姿勢、中間発表・学期末朗読試験の成績を総合的に評価する。

科目名 S. H. M. I・II

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 塩崎、池田、坂田晴、三瀬、長谷川

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

音1必修。
各自、能力を向上させる努力を、常に実践すること。
遅刻をせずに、きちんと出席すること。出欠は各クラス同一条件で厳しくとる。

授業の概要

SHMはSolfège、Harmony、Melodyの頭文字をとったもの。音楽に携わる者にとって重要な基礎力となる。学ぶ内容は多彩。弛まぬ訓練を必要とするが、大切なのは遊びの要素も内包するので楽しんで練習すること。身につけたソルフェージュ力は必ず音楽活動に大きく役立つこと必定。
レベル別5クラスに分けて授業を行う。

授業の到達目標

音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につける。

授業計画

入学後最初の授業日に、クラス分けテストを一斉に実施する。
授業は、各クラスごとに、学生それぞれの能力・状況に対応した内容及び進度をとる。より適切なクラスへの移動が可能となるように、各学期の終わりに、再びクラス分けテストを実施する。
通年の授業計画については、漠然とした内容を記すが、前述のとおり各クラスで異なる。
・正しい楽譜の書きかた
・リズム(音価)の正しい理解

- ・多様な拍子の理解
- ・正しい音程を身につける
- ・初見視唱の練習
- ・音楽的なフレーズを身につける
- ・長調と短調の理解
- ・メロディーの書き取り
- ・二声、三声等同時に鳴る音の認識
- ・和音の種類の手分け
- ・四声体の書き取り、その重唱
- ・多様な調への挑戦
- ・旋法や様々な音階による音楽にふれる
- ・移調奏

授業時間外の学習

各々苦手とする分野を積極的に自習する。

教科書・参考書等

クラスの担当教員から指示される場合もある。

成績評価

学年末に実施する一斉テストで単位評価する。(出席は2/3以上満たすことが必須)

S・H・M各100点の合計300点満点を100点に換算する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 合唱Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 樋本 英一

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

本授業は必修科目である。音楽大学で、なぜ「合唱」が必修であるかを考え、熱意、意欲をもって受講すること。

授業の概要

合唱作品とその演奏を通して、合唱及び声楽において息の線、そのゆれ、そして言語の発音、意味がいかにその作品を演奏する上で重要かを知り、その上でアンサンブルすることの意味、楽しさを味わう。その過程に合唱作品を練習、指導していく方法、要領が含まれる。

授業の到達目標

詞（テキスト）、音楽に即した息づかいをし、それを人と合わせていくこと、その楽しさを知る。

授業計画

- 1 パート分け及び平易な作品による導入
- 2-4 ルネッサンスあるいは古典期ごろの宗教作品
- 5-7 イタリア語による作品
- 8-10 ドイツ語による作品
- 11-15 日本の合唱作品①
- 16-18 日本の合唱作品②
- 19-21 日本の合唱作品③
- 22-24 日本の合唱作品④
- 25-27 日本の合唱作品⑤
- 28-30 ポップス系の合唱作品

授業時間外の学習

授業で不十分であった譜読みは各自で補うこと。
配布されたコピー譜を各自製本すること。

教科書・参考書等

授業用コピー譜をその都度配布。

成績評価

授業への取り組みを重視する。

科目名 オーケストラ・スタディアA/B

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 志村 寿一

期間 前期

1

/

—

履修条件

弦楽器専修者は必修である。

授業の概要

後期「合奏」授業への準備段階とする。

- ①オーケストラプレイヤーとしての心しむがまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、CD等なども聴き、作品を理解して臨む。
- ②演奏するためのテクニックやアンサンブル態力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えられるようにする。

授業の到達目標

オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。全員で1つの作品を作り上げる喜びを知る。

授業計画

曲目は4月に発表する。

11月定期演奏会（オーケストラ）の演奏曲目を課題とする。

毎回の練習スケジュールを作り、進める。しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意すること。学期末に実技試験を行う。（9月を予定）

- S 授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかりと把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者。
- A 自らのパートは把握できているものの、他のパートを把握することにおいて一層の努力が求められ、その能力向上が見込まれる者。
- B ところどころに技術向上、改善努力が必要に思われるが、後期合奏においてアンサンブル能力と技術向上が見込まれる者。
- C 後期合奏授業においてなんとかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者。
- D 後期合奏授業についていける能力が見込まれない者、遅刻、無断欠席をした者。

試験の結果により後期合奏授業へのレベルが達していないと思われる者には追試験を行い、場合によっては個人的指導も行き、合奏授業に向けて能力を引き上げる機会を持つ。

科目名 合奏A/B

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 志村 寿一

期間 後期集中

2

/

—

履修条件

前期授業「オーケストラ・スタディ」で単位認定を受けた者。
弦楽器専修者は必修である。
弦楽器奏者以外についてはオーディション等で選出された者。

授業の概要

黒岩英臣氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。
個々の力が合わさると、素晴らしい響き、音楽が生まれることを体感してほしい。演奏会当日まで、各自、練習・準備をすること。

授業の到達目標

オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めていく。

授業計画

- 第1回 オーケストラガイドンス（オーケストラ授業に対する心ごまえ、様々な準備などについての確認）
- 第2回～第7回 黒岩氏とのリハーサル
定期演奏会当日 ゲネプロ 本番
- 第8回 演奏会録画を鑑賞しながら、演奏について検証、反省を行い、意見交換の場とする
毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意のこと。演奏だけでなく、譜面台や椅子の準備も含めて成績評価の対象とする。

科目名 管楽器基礎(呼吸法)

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三塚 至

期間 前期

1

/

—

履修条件

管楽器専修必修。
他専修学生の履修も可。
声楽専修学生は履修が望ましい。

授業の概要

私達人間が生まれたばかりの時は、小鳥達のようにその小さな体からは想像もできないほど、よく響く、大きな声で泣いていたはずである。それは、私達が成長するに従いいつしか忘れてしまった「自然な呼吸」を生まれて間もない頃は「無意識」に営んでいたからではないだろうか。

この授業では、こうした「自然な呼吸」、つまり、のどを開けて（オープンスロート）、腹筋、背筋、胸筋及び腰筋を、バランス良く使った呼吸（主に腹式呼吸）をストレッチ体操等を取り入れ、体を動かすことによって正しく理解していきたい。

またこれと併行して、実際に声を出して歌うことで、より響きのある、美しい音を目指したい。楽器を用いて演奏する人は特に、歌声が変わると、音色も変わることを実感してほしいところである。

授業の到達目標

演奏家として必要な体作りができたか。
体の使い方を体得できたか。

授業計画

- 1) 授業ガイドンス。
※毎回、ストレッチ、呼吸筋トレーニング、発声、歌唱をおこなう。
- 2) 正しい姿勢と呼吸と呼吸筋の働きについて。喉を「あける」練習。
- 3) 呼吸筋強化1（上半身）。2段階呼吸、息を「吐ききる」事の徹底。
- 4) 呼吸筋強化2（下半身）。ヘルカントモードをつかっ。
- 5) 呼吸筋強化3（深層筋）。15段階呼吸1（10段階まで）。
- 6) 15段階呼吸2（15段階まで）。
- 7) 共鳴について。

- 8) 横隔膜、呼吸筋を意識した発声トレーニング。
- 9) 頭声、胸声、地声、ファルセットについての考察。
- 10) 浅呼吸、深呼吸と歌唱への応用。
- 11) 表情筋、舌と呼吸筋の関係。
- 12) 呼吸を意識した子音、母音の発音。
- 13) これまでの復習、まとめ。
- 14) 歌唱テスト準備（全員が一人数ずつ歌い、改善すべき点をチェックする）。
- 15) 歌唱テスト。

授業時間外の学習

正しい呼吸は音楽家としての体づくりの基本である。
毎日必ずトレーニングする癖をつけること。

教科書・参考書等

必要な時は、こちらで用意する。
マットを使うので、動きやすい服装と内履きを用意すること。

成績評価

平常点：出席を含め、授業に能動的参加をしているか。努力はみられるか。成果はあったか。
実技テスト（個人歌唱）：姿勢、呼吸が正しくおこなわれているか。呼吸筋が正しく動いているか。正しい発声を目指しているか。その他、音楽家としての表現力、集中力をみる。
以上を総合的にみて評価する。

- S 上記の条件を全てにおいて十分に満たし、かつ優秀と認められる者。
- A 上記の条件を全てにおいて十分に満たしていると認められる者。
- B 上記の条件を一定のレベルにおいて満たしていると認められる者。
- C 上記の条件にばらつきがあり、全体にやや不足していると認められる者。
- D 上記の条件で満たしている項目が半分以下と判断される者。
※欠席は減点の対象となるので注意すること。出席日数が足りない場合は不可とする。

科目名 声楽アンサンブルA I・II / B I・II

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

Aは男子のみ必修（日本音楽以外）。
Bは男子（日本音楽以外）及び声楽専修の女子は必修である。
他専修、他専攻の学生（特に男性）の積極的な履修を希望する。
定期演奏会、オペラ実習試演会に参加する意欲を求める。

授業の概要

この授業では、日本人作曲家による混声合唱曲を取り上げる。
曲は未定だが、日本語の美しさとハーモニーの関係を深く探っていく。

曲目は、履修人数を考慮し決める。

この授業は、定期演奏会に向けてオーケストラ向き合唱曲を取り上げる。定期演奏会後は、オペラ実習試演会に向け合唱練習を行っていく。

授業の到達目標

声によるハーモニー感覚を身につける。
日本語による歌唱表現を身につける。

授業計画

11月の定期演奏会に向けて授業を進めていく。本番前には臨時練習を組むことがある。

- 第1回 今年度の履修人数の確認とレベルチェック
- 第2回 簡単な混声合唱曲に取り組む(定期演奏会演奏曲を決定)
- 第3回～第15回 定期演奏会演奏曲の音取り練習
- 第16回～第24回 定期演奏会演奏曲を音楽的に深めていく
- 第25回～第30回 オペラ実習試演会に向けての合唱練習

授業時間外の学習

授業で言われたことを確認する復習をすると共に、次回授業で取り上げる曲の音取りをしておくこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

- S 全ての授業に参加し、強い意識を持って本番に取り組んだ者。
- A 授業に積極的に参加し、強い意識を持って本番に取り組んだ者。
- B 授業への欠席はあったが、強い意識を持って本番に取り組んだ者。
- C 授業への欠席があり、本番への意識が低かった者。
- D 授業への欠席が目立ち、本番の舞台に立つことができなかった者。

科目名 管楽アンサンブルA I・II a

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 永井 由比

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

フルート専修必修。

授業の概要

この授業はフルートアンサンブルを主体に授業を展開していくが、他の専修の学生や、演奏員の協力を得て、フルートと様々な楽器とのアンサンブルも展開していく。

学年末に受講生全員でフルートアンサンブルを中心とした演奏会を行う。

授業の到達目標

二重奏から四重奏までのアンサンブル、また弦楽器やピアノとのアンサンブルも体験し、自分たちの力でアンサンブルを作り上げていく力を向上させる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、学習曲目の検討と選択
- 第2回～第6回
ハイドン、モーツァルト、ベートーベンなどのフルートデュオを中心とする演奏実習
- 第7回～第14回
J.S.バッハ、W.F.バッハ、テレマンなどのフルートデュオを中心とする演奏実習
- 第15回 前期の学習した曲の発表演奏と後期までの課題説明

後期

第16回～第19回
課題の演奏発表

第20回～第25回
ゲーラウ、ドゥヴィエンヌなどのフルートトリオとカルテットの演奏実習

第25回～第29回
管楽アンサンブル演奏発表会に向けての制作

第30回
コンサート形式にて演奏発表会

授業時間外の学習

自分の担当パートはもちろんのこと、他のパートのスコアリーディングを予習すること。

教科書・参考書等

特になし

成績評価

授業への取組み、授業中の演奏、参加意欲、実技発表演奏会などの取り組みを重視する。

- S 総合点が90点以上のもの
- A 総合点が80点以上のもの
- B 総合点が60点以上のもの
- C 総合点が50点以下のもの
- D 総合点が49点以下のもの

科目名 管楽アンサンブルA I・II b / B I・II

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 石橋 雅一

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

特になし。
管楽器専修 (Tr、Tb、Tub、Sx 専修以外) 必修。
1年生はフルート専修以外の学生を対象とする。

授業の概要

木管五重奏を中心としたアンサンブルと、管楽アンサンブルを主体にピアノや弦楽器にもお手伝いいただき色々な編成の合奏を体験してもらう。
夏休み中の宿題として木管五重奏編曲を課す(元曲は自由に選ぶこと)。後期最初の授業で発表してもらう。

授業の到達目標

他の楽器の特性を理解する。アンサンブルの基本を身につける。

授業計画

[前期]
第1回 授業内容の説明と曲の選択
第2回～第6回 ハイドン、モーツァルトを中心に演奏実習
第7回～第14回 A.ライヒャF.ダンツィを中心に演奏実習
第15回 前期のまとめ演奏と宿題の概要説明
[後期]
第16回～第18回 提出された課題(木管5重奏編曲)の演奏実習と評価
第19回～第29回 フランス、ドイツの近現代木管五重奏曲を中心に演奏実習
第30回 実技試験(コンサート形式で)

授業時間外の学習

授業をスムーズに進行するためにも、自分のパートをしっかりと予習して身に付ける様にしてくる事。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み、授業中の演奏を重視。
出席、実習への取り組みと態度50%、実技試験、課題提出50%で100点に換算
S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 金管アンサンブルA I・II / B I・II

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 神谷 敏

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

金管専修 (Tr、Tb、Tub) のみ必修。

授業の概要

管・打・ハープを含む中・大編成アンサンブル能力の育成をめざす。

授業の到達目標

様々な編成の合奏を体験し、基礎から徐々に難易度の高い曲へと進みながら、合奏能力を上げていく。

授業計画

・第1回:オリエンテーション
・第2回～第4回:吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける。
・第5回～第8回:吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を向上させる。
・第9回～第12回:より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上と高い曲の完成度をめざす。
・第13回～第15回:今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会曲の譜読みを始める。
・第16回～第19回:定期演奏会の曲の譜読み。
・第20回～第25回:定期演奏会の曲を細部にわたって練習をしてゆく。
・第26回～第29回:定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う。
・第30回:学外ホールでの演奏会を行う。

授業時間外の学習

自分の担当パートはもちろんのこと、演奏曲のスコアリーディングを行ない、作曲家やその曲の背景や歴史を研究すること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み・姿勢・合奏能力などで判断する。
S、A、B、C、D

科目名 ギター・アンサンブルAⅠ・Ⅱ／BⅠ・Ⅱ

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 佐藤 紀雄

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

ギター専修者必修。

授業の概要

古典から現代までのギターアンサンブル作品をオリジナル曲、編曲作品に加え学生自身の作品、学生自身による編曲作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの習得過程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会得ることは特に重要であり、将来、様々な楽器とのアンサンブルや、新しい作品の演奏の際に何れの楽器とも同等に演奏に加わり高いアンサンブルと一緒に楽しみながら達成出来るための準備として欠かせない経験である。

その経験のなかで、ギターと言う楽器がもつ独自の特性や個性を再認識するば場ともなるに違いない。

さらには、将来、様々な楽器とのコラボレーションなど多様な場に合わせた自在な編曲を自信で行えるようアレンジを試す貴重な場にもしてもらいたい。

授業の到達目標

年二回の発表会に向けて、アンサンブルの課題曲の演奏を完成させる。

授業計画

- 1～5回 カルメン組曲
- 6～10回 ロッシーニ『泥棒かささぎ』序曲
- 11～15回 バントウクイッカン
- 16～20回 ヴィヴァルディー四季より『春』
- 21～25回 ラヴェル『ラ・ヴァルス』
- 25～30回 レオ・ブローウェル『雨のあるキューバの風景』

授業時間外の学習

授業で学ぶ作品のスコアをよく読んで、他のパートと自分の受け持つパートとの関係をよく頭に入れておく。作品の背景や、作曲家についての知識を得ておく。

教科書・参考書等

開講時に楽譜を配布。音楽史、楽典書、関係のある書物を紹介。

成績評価

授業への取り組み、授業態度を重視する。

- S 優れたオリジナル作品を創ったもの
- A 100～75点以上
- B 75～55点
- C 55～41点 出席率75%以下
- D 40点以下 出席率50%以下

科目名 うたA／B

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 今藤 美知央

期間 前期

1

△

—

履修条件

日本音楽専修は必修。邦楽（長唄・三味線）・歌舞伎に興味がある者。

授業の概要

日本の伝統音楽「長唄」は、江戸時代に歌舞伎とともに、庶民の音楽として大流行、その後も進化・発展し、現代に至る音楽である。

長唄をととして日本の文化・音楽を理解し、今後自分の芸術表現にも活かせるよう技術を学ぶ。

授業の到達目標

情景を大切にしながら音楽的表現ができること。きれいな発音で唄うこと、話すこと。三味線を弾くこと。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 課題曲の稽古 楽器の説明、発声、間のとり方
- 3 〃 西洋音楽との違い、長唄の特徴
- 4 〃 三味線あれこれ
- 5 〃 唄と語りとセリフ
- 6 〃 三味線でいろいろな表現をする
- 7 〃 歌舞伎について

- 8 課題曲の稽古 唄の技術「ごろ」
 - 9 〃 「当てて唄う」「外して唄う」「間を遊ぶ」
 - 10 〃 日本人の豊かな感性
 - 11 〃 学校教育における長唄
 - 12-15 まとめ
- 上記の講義内容は前後することがある。
課題曲の稽古とは、唄・三味線の実習。

授業時間外の学習

与えられた課題の研究、予習、復習に努めること。
「邦楽演奏会」「歌舞伎」等、劇場に運んでみる。

教科書・参考書等

教科書はなし。資料、譜面等は授業時に配布する。配布されたものは必ず毎回持参すること。授業内での見本演奏は録音して、予習復習に活用すること。

成績評価

授業への取り組み、授業中の様子、課題に対する成果等を総合して評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 邦楽アンサンブルA I・II / B I・II

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野坂 恵子

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

日本音楽専修は必修。

授業の概要

邦楽器はそれぞれの楽器の特性が強く、音色が大切、又個性的なのでそれを尊重しつつ、さまざまな可能性を追求したい。合奏を積み重ねる中で、他のパートを聴きつつ自分の音を重ねていく訓練を続けアンサンブルの醍醐味を体得してもらう。

授業の到達目標

邦楽器によるアンサンブルの可能性について、各人が意見を持ち、その上でその楽しさを充分味わうこと。

授業計画

前期・後期

「秋風曲—主題による箏四重奏曲」高橋久美子作曲
「四重奏曲」小山清茂作曲
「OKOTO」沢井比河流作曲
「ポビーエチュード」池辺晋一郎作曲
「コンチェルティノ」浦田健次郎作曲
十月と三月の学内演奏会の曲目。

授業時間外の学習

決定した曲目を予習すること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取組みと平常点で評価する。

科目名 伴奏法 I

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 揚原 さとみ

期間 後期

1

/

—

履修条件

教職課程受講者は必修とするが、そうでない学生もアンサンブルに関心を持つ者は歓迎する。

授業の概要

主として音楽教育場面に必要とされるピアノ伴奏のあり方について、実技レッスン・オーディオ資料鑑賞・講義により、研究する。具体的には歌唱・合唱・器楽合奏形態の教授に最適なピアノ伴奏の技法、練習方法、呼吸法などを理解し、実践形式で習得していく。初見ピアノ伴奏、ピアノ弾き語り、コードネームでの即興伴奏、スコアリーディングについてもふれたい。教職課程必修科目のため対象場面は学校教育現場としているが、様々な音楽活動においてのピアノ伴奏の在り方を探る。

授業の到達目標

- ・教育場において、音楽指導を伴うピアノ伴奏が出来る。
- ・効果的なピアノ伴奏が出来る音感を養う事が出来る。
- ・コードネームを把握し、即興でシンプルな伴奏付けが出来る。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
 - 2 中学校の音楽授業考察(講義 鑑賞)
 - 3 指導案の作成方法について
 - 4 グループによる指導案作成1
 - 5 グループによる指導案作成2
 - 6 ピアノ伴奏を用いた模擬授業1
 - 7 ピアノ伴奏を用いた模擬授業2
 - 8 ピアノ伴奏を用いた模擬授業3
 - 9 ピアノ伴奏を用いた模擬授業4
 - 10 初見ピアノ伴奏
 - 11 弾き語りの練習
 - 12 コードネームについて
 - 13 コードネームによる即興伴奏付け
 - 14 課題曲レッスン
 - 15 課題曲発表
- *受講生の人数等により内容変更の可能性あります。

授業時間外の学習

毎回課題が出されるので予習、復習に努めること。
グループやペアを組んでのレッスンはお互いに協力を深めること。

教科書・参考書等

五線紙を毎時間持参する事。
授業時にプリントを配布します。

成績評価

実技発表、レポート提出、平常の授業態度、これらを総合的に評価する。

科目名 伴奏 A (1)(2) / B (1)(2)

対象 音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中・後期集中

1・1

/

—

履修条件

なし。

授業計画

各々の実技担当教員のレッスン計画による。

授業の概要

前期・後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表(実技試験・学内演奏会・修了演奏会)をもって各々単位認定を行う。“伴奏受講票”を使用のこと。

授業時間外の学習

「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。

教科書・参考書等

なし。

授業の到達目標

伴奏の役割を学びつつ、また、アンサンブルの楽しみも感じてほしい。
それらを試験、演奏会という場につなげるようにする。

成績評価

決められたレッスン回数をクリアし、演奏発表を行なった場合は「A」と認定する。
また演奏の評価が特に高いと認められた場合は「S」と認定する。
上記条件を満たしていない場合は「D」と認定する。

科目名 初見演奏(基礎)

対象 音楽専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 吉田 真穂

期間 前期

1

/

—

履修条件

音1ピアノ専修は必修。
他専修生でも、ピアノに興味と意欲があれば受講可。

授業の概要

バロックから現代にいたる作品をテキストとして、初見奏で求められる読譜力、想像力、集中力を養い、それらが日頃のピアノ演奏の基礎能力の向上につながることをめざし、実習する。楽譜を丁寧に読み、その曲にふさわしいイメージを感じ取ることで、できるセンスを磨いていきたい。それぞれのレベル、進度に応じた曲を用意して授業を進めていくので、なるべく多くの演奏ができるよう、積極的に参加してほしい。

連弾や二台ピアノの作品も随時取り入れて、アンサンブルの経験も積んでいく。

授業計画

- (1) ガイダンス・レベルチェック
 - (2)–(5) 小品
 - (6)–(9) バロック、古典派の作品
 - (10)–(14) ロマン派、近代・現代の作品
 - (15) まとめ
- ※上記以外にも随時多様な作品を取りあげる。

授業時間外の学習

授業で配布したテキストでの復習、また、指示する曲集、曲目などを参考に予習するよう努めてほしい。

教科書・参考書等

その都度配布

授業の到達目標

短い時間で曲の構成や特徴を把握し、ただ音を弾くばかりではなくテンポ、フレージング、ペダリングなどにも考慮して、表現豊かな演奏ができるようになること。

成績評価

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 第一実技Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 各担当教員

期間 通年

4

/

○

履修条件

全学生の専門実技として必修科目である。

授業の概要

全学生が、各自の専修実技を担当講師のもとで、本科は週1回、50分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。試験は前期、後期と2回行い、特に後期試験はレッスンを20回以上受講しないと試験を受ける権利を得ることができない(ただし、声楽については1年次のみ前期には試験をおこなわない)。1年次後期試験と2年次前期試験の成績優秀者は学内演奏会に出演することができ、2年次後期試験の成績優秀者は卒業演奏会に出演することができる。

授業の到達目標

担当講師との一対一での授業となるため、到達目標は各自異なる。専門実技のテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標になるが、担当講師が各学生のレベルを把握し、レベルに応じてエチュード、楽曲等を与え、与えた課題をレッスンを通して演奏できるようにしていくことを到達目標とする。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び課題の検討
- 第2回～第5回 与えられたエチュード、楽曲のレッスン
- 第6回 楽曲のまとめ。伴奏合わせ等。
- 第7回 試験曲の検討。または、新しい課題の検討

第8回 試験曲の決定。

第9回～第13回 エチュード及び試験曲研究。あるいは、与えられた課題のレッスン。

第14回～第15回 試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等。

第16回 新たな課題の検討

第17回～第20回 エチュード、楽曲のレッスン

第21回 楽曲のまとめ。伴奏合わせ等

第22回 試験曲の検討

第23回 試験曲の決定

第24回～第28回 エチュード及び試験曲研究

第29回～第30回 試験曲研究まとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。

S 演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者

A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者

B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者

C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者

D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者

あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて、受験資格がなかった者

科目名 副科実技Ⅰ・Ⅱ／第二実技Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 各担当教員

期間 通年

2 / 4

○

○

履修条件

全学生の必修科目である。
なお、他専攻の学生も履修することができる。

授業の概要

全学生が各自の実技担当講師のもとで、週1回、20分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンとなるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。

試験は後期に1回行い、20回以上のレッスンを受けることにより試験を受ける権利を得ることができる。なお、副科実技はレッスン時間が短い。別途徴収にはなるが、レッスン時間を40分にする「第二実技」という制度がある。

授業の到達目標

担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。

授業計画

第1回 オリエンテーション及び課題の検討

第2回～第21回 与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んで行くという形を繰り返して行く。

第22回 試験曲の検討

第23回 試験曲の決定

第24回～第28回 試験曲のレッスン

第29回～第30回 試験曲のまとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。

S 演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者

A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者

B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者

C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者

D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者

あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて受験資格がなかった者

科目名 海外特別演習 A / B

対象 音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中

2

/

○

履修条件

研修旅行に参加して学ぶ意欲の高い者。

授業の概要

ハンガリー・ブダペストのリスト音楽院にて、1週間のレッスン研修を行う。後半は、ウィーン、クラクフ、ワルシャワなどを訪れる。リスト、バルトーク、モーツァルト、シューベルト、ベートーヴェン、ショパン等のそうそうたる音楽家の偉大な業績をたどる。

授業の到達目標

内容の濃い充実した旅行とする。そのためには早くから個人の実技練習を十分に積んでおく。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 旅行会社による説明会 I
- 3 訪問都市についての勉強会 I
- 4 “ II
- 5 旅行会社による説明会 II
- 6 訪問都市についての勉強会 III
- 7 受講曲による試演会
- 8 研修旅行

授業時間外の学習

訪れる街の歴史や、関係する作曲家について深く学んでおく。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

- S 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加し、かつ高い成果を上げたと思われる者
- A 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加した者
- B 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に参加した者
- C 事前の授業に出席し、研修旅行に参加した者
- D 事前の授業に出席不良、研修旅行に参加できなかった者

科目名 特別演習 A / B

対象 音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 志村 寿一・長谷川 郁子

期間 通年

1

/

○

履修条件

A・Bともに全専修必修。

授業の概要

公開講座、学内演奏会、定期演奏会、卒業演奏会の4つが特別演習の内容である。公開講座はプロの演奏家による演奏会を中心とする。定期演奏会は2夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による演奏会である。

音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんのことだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことからの得るものの大きさも是非認識して欲しい。

授業の到達目標

様々な演奏、楽曲を聴くことにより、音楽の理解力をさらに深める。

授業計画

公開講座、学外演奏会、学内演奏会は、それぞれのジャンルに出席義務回数が定められている。
日程、演目、出席義務回数の詳細はオリエンテーション時に発表する。
また日程は変更となる場合もあり、常に掲示を確認のこと。

授業時間外の学習

ゲストの音楽家や、演奏される楽曲について調べ、理解を深めること。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- 各公演の開演前、終演後に行う出席チェックによる出席状況にて評価。
- S 全ての公演に出席した者
- A 3つのジャンルの出席義務回数を満たし、さらにそれ以上の出席回数が認められた者
- B 3つのジャンルの出席義務回数を満たした者
- C 3つのジャンルの出席義務回数を満たさず、担当者とは相談の上、他のジャンルへの複数出席を条件とされた者
- D 出席回数不足の者

科目名 特別講座

対象 音楽専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 植松 伸夫

期間 後期集中

1

○

○

履修条件

1年生必修。

授業の概要

音楽には様々な分野があり、本学で学ぶクラシックの他にもジャズ、ロック、ポップス、または民族音楽などをいれると無数のジャンル、スタイルがある。

この講座では上記にあげた様々な音楽のスタイル紹介をしながら、想像すること、創造することの大切を学んでいく。

授業の到達目標

様々なスタイルの音楽を学ぶことにより、音楽の想像力、創造力をさらに深めていく。

授業計画

- 第1回 クラシックの世界
- 第2回 ジャズの世界
- 第3回 ロックの世界
- 第4回 ゲーム音楽の世界
- 第5回 民族音楽の世界
- 第6回 様々な楽器について
- 第7回 電子音楽について
- 第8回 まとめ

授業時間外の学習

講座後の復習に努めること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み・態度、レポートで総合的に判断する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 コラボレイト実習A(1)(2) / B(1)(2)

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司

期間 前期集中・後期集中

1・1

/

○

履修条件

専攻主任からの指名により履修できる。

授業の概要

専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会、卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。コラボレイト実習受講票を使用のこと。

なお、単位認定は、前期・後期、1回ずつを限度とする。

授業の到達目標

演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶ。音楽専攻の催しの場合には、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶ。

授業計画

各々の公演担当教員の稽古計画による。

- 第1回 打ち合わせ
- 第2回 稽古への参加 I
- 第3回 稽古への参加 II
- 第4回 稽古への参加 III
- 第5回 本番

稽古への参加は1回につき、授業3回分に相当。本番は授業5回分に相当。

授業時間外の学習

演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかななくてはならない。

教科書・参考書等

公演台本等、各公演により異なる。

成績評価

- S 指定された稽古に全て参加し、本番での演奏が、公演の質を高めた者
- A 稽古に積極的に参加し、本番での演奏が、公演の質を高めた者
- B 予定された稽古に参加し、本番で力を発揮した者
- C 本番で演奏はしたが、稽古への参加が積極的ではなかった者
- D 専攻主任の指名による授業のため不適格者はいない

科目名 音楽理論[和声]Ⅲ・Ⅳa

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 平井 正志

期間 前期・後期

2・2

/

—

履修条件

音2(日本音楽専修以外)必修。「音楽理論[和声]Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

2年次においては、借用和音(準固有、副属和音)、サブ・ドミナント諸和音(副七の和音、四度の付加6)と各種の変化和音(増六、ドリアの四度、ナボリの6の和音)を扱ったバス課題の実施を通じて、より多様で高度な声部進行法の練達を目指す。さらに、それ等の和音を含み、かつ近親転調を伴うソプラノ課題の実施によって、2年間に学んだ和声法の総合的な習熟をはかる。

授業の到達目標

- 借用和音や変化和音などの多彩な和音を扱ったバス課題を確実に実施できる力を養うこと。
- 転調を含むソプラノ課題の実施を通して、和声進行の本質を把握できる素養を身に付けること。

授業計画

和声Ⅰ・Ⅱの内容を継続的に確認、把握しつつ、以下の項目において課題を出題し、さらに高度な和声法の習熟、練達を計る。

- 第1~4回 準固有和音
(長調における、同主短調の和音の借用。)
- 第5~9回 借用のドミナント和音
(五度五度の和音を中心に。)
- 第9回~14回 五度五度の下方変位の和音
- 第15回 前期筆記試験
- 第16~19回 二度の七、四度の七の和音
- 第19~23回 ドリアの四度の七、ナボリの六の和音、付加六、付加四六の和音
- 第24~29回 近親転調を伴うソプラノ課題

第30回 後期レポートの提出
(授業時間内に内容の検討を行う。)

授業時間外の学習

講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。止む終えない事情で欠席した場合は、講義内容と課題を他の受講者から入手するなどして自習しておくこと。

教科書・参考書等

教科書:課題を配布
参考書:和声「理論と実習」第一巻、第二巻 音楽之友社(執筆責任 島岡 譲)

成績評価

前期々末に筆記試験を行い、後期々末に最終実施課題をレポートとして提出する。

筆記試験およびレポートの成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、課題の実施実績と課題の実施内容についても勘案し、総合的な判断によって可否を決定する。

- S 90点~100点:重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して自在な練達を感じられる。
- A 80点~89点:重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い。
- B 60点~79点:概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足。
- C 50点~59点:重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない。
- D 50点未満:重要な公理が理解出来ておらず、和声法を修めたと認めがたい。

科目名 音楽理論[和声]Ⅲ・Ⅳb

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 池田 哲美

期間 前期・後期

2・2

/

—

履修条件

音2(日本音楽専修以外)必修。「音楽理論[和声]Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。
和声学は途中が抜けると理解できなくなるので、欠席、遅刻をしないこと。
知識を確実に積み上げつつ、与えられた課題を必ず実践すること。

授業の概要

2年次のⅢ(前期)・Ⅳ(後期)は1年次で学んだことを土台にして、さらにドッペルドミナントやナポリ等の美しいサブドミナント系の和音、同一調内から他の調への転調、非和声音による不響和な響きの加わる美しさ、などを学ぶ。後期の終わりには、2年間で学んだ和声過去の名曲の中でいかに効果的に使われているかを各自で分析する。

授業の到達目標

奥の深い和声学を、2年間の授業ですべて習得することは不可能に近い。しかし、これからの長い音楽活動を通じて名曲の中でいかに効果的に和声進行が図られているかを感じとる基礎力を養う。

授業計画

- 1~4回 属七・属九の和音
- 5~7回 ドッペルドミナント、増六の和音
- 8~9回 副Ⅴの和音
- 9~13回 ナポリ、ドリア等 サブドミナントの諸和音
教会法法について
- 14回 和音設定の原理
- 15回 前期の授業の総括
- 16~18回 転調の仕組 調名の判定
- 19回 名曲からの調名の判定
- 20~22回 転調課題の演習
- 23~24回 非和声音の種類と使い方
- 25~26回 簡単なメロディーへの和音づけ
- 27~29回 名曲の和声分析
- 30回 授業の総括

授業時間外の学習

授業時に与えられた課題テキストを読んで理解した上で必ず実践すること。

出来た課題をピアノで弾いて耳を鍛えること。

教科書・参考書等

『和声 理論と実習 Ⅰ』音楽之友社 池内友次郎 他著

成績評価

宿題等の平常点および筆記試験を行い評価する。

- S 90点以上 A 80点以上 B 60点以上
C 50点以上 D 49点以下

科目名 対位法Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 池田 哲美

期間 前期・後期

2・2

/

—

履修条件

和声の基本的な知識が必要。対位法及び対位法による楽曲に興味を持ち、対位法による楽曲作成・分析に意欲を持つもの。

授業の概要

J.S.BACHの対位法による楽曲の分析とともに、具体的な対位法の手法を、簡単な課題の実施を行うことで、その用法を学習する。インベンション、シンフォニア、平均律クラヴィーアなどの楽曲を分析する。実施では、二声の対位法を第一類（全音符）～第五類（華麗対位法）まで学び、課題を実施する。またフーガの主題の作成にも取り組む。

授業の到達目標

対位法の知識と具体的な創作によって、フーガその他対位法による楽曲をより身近に感じ、実際の演奏に活用できるようにする。

授業計画

- 1～5回 J.S.BACH インベンションの分析と第一類（全音符）の実施。
- 6～10回 J.S.BACH シンフォニアの分析と第二類（二分音符）の実施。
- 11～15回 J.S.BACH 平均律クラヴィーア第一巻の楽曲の分析1、及び第三類（四分音符）の実施。
- 16～20回 J.S.BACH 平均律クラヴィーア第一巻の楽曲の分析2、及び第四類（移勢）の実施。
- 21～25回 J.S.BACH 平均律クラヴィーア第二巻の楽曲の分析1、及び第五類（華麗対位法）の実施。
- 26～30回 J.S.BACH 平均律クラヴィーア第二巻の楽曲の分析2、及び実施の総括。

授業時間外の学習

課題の実施の宿題を含めた復習と、対位法楽曲に日頃から親しむこと。

教科書・参考書等

J.S.BACHの対位法による楽曲と対位法の各教科書における重要部分を、進み具合に応じて、適宜配布。

成績評価

ほぼ毎回、小テストとして分析・課題の実施を行う。及び学期末の試験。

科目名 コード論Ⅰ

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 小林 真人

期間 前期

2

◎

—

履修条件

特になし。

授業の概要

コードを知り、覚える。
メロディに対して、シンプルなコード付けを出来るようにする。
ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏する際のアイディアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。
コードを元に柔軟に演奏する方法を体験する。

コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。

授業の到達目標

3和音と4和音のコードを覚える。
メロディに対してコード付けできる。
それらをピアノなどで演奏、表現できる。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 コード論 入門編1
- 3 コード論 入門編2
- 4 コード論 入門編3
- 5 コード論 基礎編1
- 6 コード論 基礎編2
- 7 コードパターンとコード付け1
- 8 コードパターンとコード付け2
- 9 コード論 基礎編3
- 10 コード論 基礎編4
- 11 コード論 基礎編5
- 12 コード論 基礎編6
- 13 コードパターンとコード付け3
- 14 コードパターンとコード付け4
- 15 まとめ

授業時間外の学習

授業でやった事を復習しておく。
コードに慣れる。

教科書・参考書等

特になし。随時プリントを渡す。

成績評価

出席状況、授業態度、課題発表への取り組み姿勢、レポートなどで判断する。

科目名 楽器法

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大澤 健一

期間 前期集中

2

◎

○

履修条件

特になし。

授業の概要

人が音を奏でる手段としての楽器は太古から今日にいたるまで実に多くの楽器が作られてきた。伝達、信号として登場した楽器は次第に歌や踊りの伴奏として使われ、やがて音楽を伝える主役楽器となった。授業では、現在の管弦楽などで使われる楽器について講義するが、その楽器の原点である民族楽器についてもふれる。木管、金管、打楽器、弦楽器に分類して、その誕生と現在の役割、使用楽曲、メンテナンスなどについて講義する。

これら楽器の正確な知識は、あらゆる音楽に携わるすべての行動に必要な不可欠であろう。

授業の到達目標

- ・ 楽器というものが、どのように分類され、どのような歴史をたどって、現在使われているかを理解する。また作編曲、器楽指導に必要な楽器の基礎知識を学習する。
- ・ 気鳴楽器、弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、機械電気楽器の5つの楽器体系を理解し、全ての楽器がこれらに分類されることを理解する。

授業計画

[進行予定]

木管楽器…フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン
金管楽器…トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、
チューバ

弦楽器…ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス
打楽器

体鳴楽器…シンバル、トライアングル、ドラ、鍵盤楽器他

膜鳴楽器…太鼓、ティンパニー、タンバリン、ボンゴ他

[ポイント]

- 1 構造…発音原理、楽器の材質
- 2 音域…調性、最低音、最高音、適切音域
- 3 特色…得意な奏法、不得意な奏法
- 4 同属楽器…調性の異なる同属楽器
- 5 歴史…楽器の誕生について
- 6 楽曲…この楽器を説明するのに適した楽曲
- 7 メンテナンス…楽器の取り扱い上での注意点

授業時間外の学習

室内楽、管弦楽のコンサートを鑑賞し、使用される各楽器の特徴を調べておくこと。

教科書・参考書等

参考プリントを授業で配布する。

成績評価

授業への取組み50点、受講態度20点、質疑応答30点で評価する。

- S 95点以上
- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 音楽マネジメント

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 児玉 真

期間 前期

2

/

—

履修条件

特にないが、演奏する側ではなく、サポートや仕組みづくりに興味のある人者。

授業の概要

音楽芸術を自らの生きる力を高めるために活用できる、という人を増やすことが社会の健全性にとって重要である、という認識が広がってきました。この講座では、コンサートの制作の現場的手法だけでなく、音楽や音楽家の生き方、社会との結びつきをつくることで何ができるだろう、と考えることがベースとなります。現在、音楽団体や文化会館などがワークショップやアウトリーチなどの手法を積極的に採用しているのも、その流れに沿った活動といえますので、そのような話もとり入れて授業を進めます。

授業の到達目標

- ・ 音楽事業を企画するために必要な考え方基礎を理解する。
- ・ そのために必要なスキルの入口を体験し、言語化できるようにする。
- ・ アウトリーチやワークショップの現状を理解する。

授業計画

1. オリエンテーションと自己紹介、音楽マネジメントの守備範囲
2. 音楽をマネジメントすること
3. コンサートの成り立ち
4. クラシック音楽のマーケットとビジネスモデル
5. クラシック音楽活動の社会性(商売だけではない)
6. 才能ある音楽家を売り出す1 (YCAの例など)
7. 才能ある音楽家を売り出す2
8. アウトリーチという方法を考える
9. アウトリーチを見る
10. アウトリーチの活かし方
11. 企画のつくり方1 (ニーズを活かす)
12. 企画のつくり方2 (ニーズから考える)
13. 企画を提案する
14. 広報と宣伝を考える
15. まとめ

授業時間外の学習

- ・ コンサートに顔を出し、音楽そのものではなく、制作者やホールの人たち、客の動きを観察して欲しい。
- ・ ニュース(特に音楽と社会の結びつきに関する)に注意を払い、ちょっと踏み込んで考えること。

教科書・参考書等

授業時に必要に応じて紹介する。

成績評価

筆記試験は行わないが、レポート課題を提出してもらう。

評価は、日常の好奇心や発言・提出物など(50点)、レポート(50点)として採点する。

科目名 音楽史特講 A

対象 音楽専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 関野 さとみ

期間 前期

2

◎

—

履修条件

特になし。

授業の概要

テーマは「19世紀の西洋音楽」。いわゆる「ロマン主義」と呼ばれる19世紀の西洋音楽を、文化史、社会史、思想史の観点を変えながら多角的に検討する。

19世紀イギリスの文学者・批評家ウォルター・ペイターの「全ての芸術は音楽にあこがれる」という言葉は、この世紀の芸術観をよく示している。文学や絵画といった他の諸芸術までもが音楽の影響下に置かれたこの時代は、西洋芸術音楽の1つの最盛期であり、今日の演奏レパートリーの大半を占める作品が生まれた。19世紀という時代とその思想、そこから生まれた音楽の特徴や魅力を様々な角度から考えることで、受講生が実際に音楽を「演奏」したり「鑑賞」したりする際に、独自の解釈によって一歩深く踏み込んでいくためのヒントが得られるようにする。

授業の到達目標

19世紀の西洋音楽と音楽におけるロマン主義の概念について一定の知識を身に付け、音楽史の理解をより立体的なものにする。1つの時代の音楽文化・芸術の在りようを他の時代と比較できるようにすることで、音楽について考えるための基礎知識を豊かなものにする。

授業計画

- 1 ガイダンス — 西洋音楽史における「19世紀」の位置付け
- 2 フランス革命と音楽① — 古典主義からロマン主義へ
- 3 フランス革命と音楽② — 「芸術家」の誕生
- 4 「ロマン主義」の精神と音楽
- 6 ロマン主義の音楽と文学①

- 7 ロマン主義の音楽と文学②
- 8 まとめ（第1～7回まで）
- 9 オリエンタリズムと音楽
- 10 ヴィルトゥオーゾたちの時代
- 11 「絶対音楽」と「標題音楽」の概念
- 12 「未完成」という概念
- 13 ヴァーグナー①
- 14 ヴァーグナー②
- 15 まとめ（前期全体）と試験

授業時間外の学習

予習は特に必要ないが、復習に力を入れてほしい。授業後に内容を見直し、紹介された音源や参考文献を図書館などでチェックすること。また、与えられた知識だけに満足せず、自分が関心のある作曲家やその作品、さらに同時代の文化的・社会的現象について積極的に調べ、主体的に学習習慣を身に付けること。

教科書・参考書等

毎回プリントを配布する。参考文献は講義で紹介する。

成績評価

受講態度（講義後のコメント用紙提出を含む）50%、期末試験50%で総合的に判定。期末試験は記述式（ノート持ち込み可）を予定している。

- S 総合点100～90点
A 総合点89～80点
B 総合点79～60点
C 総合点59～50点
D 総合点50点未満

科目名 音楽史特講 B

対象 音楽専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大津 聡

期間 前期

2

◎

—

履修条件

特に条件はないが、授業内容への関心と受講意欲を強く期待する。

授業の概要

テーマは「交響曲の歴史」。交響曲は、私たちがクラシック音楽として呼んでいる、ヨーロッパ芸術音楽の精華の一つであり、オペラと並んで、ヨーロッパの歴史や文化に根ざした重要な文化現象である。本授業は、交響曲というジャンルの起源から、その主な時代の終焉までを見渡す「交響曲史」である。単に交響曲作品の歴史や形態を概観するにとどまらず、それらの音楽史、社会史上の意味、あるいは、各々の作曲家における交響曲という問題も考えていきたい。

授業の到達目標

交響曲とは何か、それはどのように生まれ、進化、あるいは変化していったのかを知ることができる。

授業計画

以下に便宜上、各回で扱う予定の主なテーマ、トピックを示すが、授業の進捗状況により前後することがある。

- 第1回 ガイダンス／交響曲とは何か？
- 第2回 前古典派：交響曲の誕生と発展
- 第3回 ヴィーン盛期古典派の交響曲1
- 第4回 ヴィーン盛期古典派の交響曲2
- 第5回 ヴィーン盛期古典派の交響曲3
- 第6回 ベートーヴェン1：
転換点としてのベートーヴェンの交響曲
- 第7回 ベートーヴェン2：《田園交響曲》と「標題」
- 第8回 ベートーヴェン3：

《第九交響曲》におけるジャンルの拡大

- 第9回 ポスト・ベートーヴェンの交響曲：
シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン
- 第10回 ベルリオーズの管弦楽作品：
「標題交響曲」の新たな展開
- 第11回 ブラームスとブルックナー：
絶対音楽としての交響曲への回帰？
- 第12回 ナショナル・シンフォニー：交響曲の国際化
- 第13回 マラー：最後のシンフォニスト
- 第14回 R. シュトラウスと管弦楽作品：「交響曲神話」の崩壊
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

授業では多くの作曲家やその作品について触れることになるが、授業時間内に例として鑑賞出来るのはほんの一部に過ぎない。図書館等に所蔵されたメディアを使って積極的に作品に触れ、理解を深めてもらいたい。授業の前後は問わないが、各回（あるいは各時代）につき最低一作品は、必ず通して鑑賞しておくこと。

教科書・参考書等

教科書は特に指定しない。随時プリントを配布する。参考書については初回に参考文献表を配布するほか、適宜紹介、指示する。

成績評価

受講姿勢（30%）と期末レポート（70%）による。総合評価100%中、90%以上をS評価、80%以上をA評価、60%以上をB評価、50%以上をC評価、それ以下はD評価とする。

尚、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。

科目名 音楽史演習A

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 関野 さとみ

期間 後期

1

◎

—

履修条件

特になし。

授業の概要

テーマは「20世紀の西洋音楽」。21世紀を10年以上経過した今日、20世紀の音楽もすでに1つの過去となった。20世紀フランスの詩人ヴァレリーは、近代を「相反する様々な思考や感覚が共存する時代」と定義したが、これは単に時代に限って語られるものではなく、近代以降の個々の人間、そして音楽の在りようにも深く共通する。二度の世界大戦、テクノロジーの急速な発展、メディアの変化……大きな文化的革新を幾度となく経験したこの激動の時代の音楽を、社会的・文化史的な文脈をふまえながら検討することにより、現代の音楽文化の在り方や、私たちが音楽に託すものとは何かについて考える。

毎回レヴュー・シートを提出してもらうので、受講生は内容について自分なりの感想や意見を持ち、言葉としてそれをアウトプットすることが常に求められる。20世紀の音楽という馴染みがないかもしれないが、映像や音源を多く活用するので、あまり「難しい」という先入観を持たずに臨んでもらいたい。

授業の到達目標

音楽が幅広い文化的現象の1つとして成立していること、常に過去から連続と続く歴史の線上に存在していることを認識し、20世紀の音楽に関する一定の知識とイメージを持つ。現代の音楽について自分なりの考えを持ち、それを言葉で表現できるようになる。

授業計画

- 1 ガイダンス —— 西洋音楽史における「20世紀」の位置付け
- 2 20世紀の「前奏」—— ヴァーグナーとドビュッシー
- 3 印象主義と象徴主義

- 4 「脱・19世紀」の様々な試み①
- 5 「脱・19世紀」の様々な試み② —— 1913年
- 6 シューンベルクと新ウィーン楽派
- 7 調性から無調性へ
- 8 十二音音楽／十二音技法
- 9 第一次世界大戦後の「前衛」
- 10 第二次世界大戦後① —— メシアンから全面的セリー主義へ
- 11 第二次世界大戦後② —— プーレーズとシュトックハウゼン
- 12 偶然性の音楽
- 13 ミニマリズムと民族音楽の新たな影響
- 14 新しい地平：作曲とは、音楽とは？
- 15 まとめ（後期全体）と試験

授業時間外の学習

予習は特に必要ないが、復習に力を入れること。また、普段から現代の文化的・社会的現象についてアンテナを広く張っていること。現代音楽のコンサートはもちろん、各種の美術展や講演会などにも積極的に足を運び、様々なジャンルの本を読むこと。これらを習慣づけることが、20世紀以降の音楽の複雑な様相を考える上で、重要な下地となる。

教科書・参考書等

毎回プリントを配布する。参考文献等は講義で紹介する。

成績評価

受講態度40%、レヴュー・シートの記入内容30%、期末試験30%で判定。期末試験は記述式（ノート持ち込み可）を予定。

- S 総合点100～90点
 A 総合点89～80点
 B 総合点79～60点
 C 総合点59～50点
 D 総合点50点未満

科目名 音楽史演習B

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大津 聡

期間 後期

1

◎

—

履修条件

条件は特にないが、授業内容への関心、参加意欲は必須である。

授業の概要

テーマは「オペラの歴史」。オペラは400年以上の歴史を持ち、私たちが思い浮かべる西洋芸術音楽において、すぐれて代表的なジャンルであった。本授業ではオペラの壮大、かつ濃密な歴史にアプローチし、その起源から20世紀初頭までを視野に入れる。多様な作品に触れることを目標とするが、原則として、一回の授業につき、各国、各時代から代表的な作品を一つ取り上げ、オペラ史を再構成していく。後期は演習である。本格的なゼミ発表を課すことはないが、各受講者に作品についての簡単な事前調査と授業中のレポートを担当してもらう。具体的な方法や打ち合わせについて事前に説明するので、受講予定者は初回のガイダンスに必ず出席すること。

授業の到達目標

オペラの歴史の大局的な流れと、それを彩る諸作品について、リアリティーをもって知ることができる。

授業計画

- 音楽史に鑑み、以下に各回で扱う予定のトピック、及び便宜上、代表する作曲家名を示すが、可能な限り受講者の興味や要望を取り入れていく。
- 1 ガイダンスと導入：
プッチーニ《ジャンニ・スキッキ》の鑑賞
 - 2 バロック時代1:オペラの起源イタリア（モンテヴェルディ）
 - 3 バロック時代2:イタリアから各国へ（パーセル、ヘンデル）
 - 4 古典派1:近代オペラの始まり（モーツァルト1）
 - 5 古典派2:宮廷社会から市民社会へ（モーツァルト2）
 - 6 古典派3:オペラと革命（ベートーヴェン）

- 7 第7回 ロマン派1:オペラ・ブッフアとイタリアの復権（ロッシーニ）
- 8 第8回 ロマン派2:
ジャンルの多様性とオペラ・ブッフアの終焉（ドニゼッティ）
- 9 第9回 ロマン派3:19世紀イタリアオペラの精華（ヴェルディ）
- 10 第10回 ロマン派4:「総合芸術作品」としてのオペラ（ヴァーグナー）
- 11 第11回 ロマン派5:
フランスオペラの諸相とオペラの写実主義（ビゼー）
- 12 第12回 ロマン派6:ヴェリズモ・オペラ（プッチーニ）
- 13 第13回 19世紀末以降1:オペラにおける前衛（R. シュトラウス1）
- 14 第14回 19世紀末以降2:
古典への回帰と一つの時代の終焉（R. シュトラウス2）
- 15 第15回 まとめ:音楽メディアとオペラ史

授業時間外の学習

授業時間内に鑑賞出来るのは、大規模であるというオペラの属性から一部に過ぎない。図書館等に所蔵されたメディアを使って積極的に作品に触れ、理解を深めてもらいたい。また、各回の授業に関連した作曲家や作品についても、自主的に調べておくこと。

教科書・参考書等

教科書は特に指定しない。随時プリントを配布する。参考書については、参考文献表を配布する他、授業中に適宜指示する。

成績評価

受講態度（30%）と学期内担当分の準備作業、及び発表内容（70%）による。総合評価100%中、90%以上をS評価、80%以上をA評価、60%以上をB評価、50%以上をC評価、それ以下はD評価とする。尚、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。

科目名 音楽療法概論

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 鈴木 千恵子

期間 前期

2

◎

—

履修条件

特になし。

授業の概要

音楽療法とは、心身に障害のある方、発達の遅れや問題を持った方々へ治療・援助の手段として音楽を役立てることであるが、最近では病気や障害に限らず人間の健康な生活に役立てる音楽療法としてのアプローチまで幅広い考え方も広まっている。

本講義では、療法(セラピー)を考える前に、人間の生活と音楽との関わりや人間の健康とは何かを学ぶ。次に音楽療法の様々な背景を考えながら、基本的な知識を学んでいく。

授業の到達目標

人間の生活と音楽の関わりを理解し、さらに療法として音楽を用いる意義とその方法を理解する。

授業計画

- 1 ガイダンス(授業内容と目的等)
- 2 人間の生活と健康・音楽
- 3 音楽療法とは何か①
- 4 音楽療法とは何か②
- 5 療法としての音楽
- 6 緩和ケアの音楽療法(カナダ)
- 7 緩和ケアの音楽療法(日本)

- 8 高齢者の音楽療法①
- 9 高齢者の音楽療法②
- 10 児童の音楽療法①
- 11 児童の音楽療法②
- 12 音楽療法の技術
- 13 音楽の治療的機能
- 14～15 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で課題に対する感想を書いたり、音楽療法のプログラムを作成したりするので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著(牧野出版)
「音楽療法の実践」松井紀和、鈴木千恵子他著(牧野出版)
以上 参考書
教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。

成績評価

- (1) 授業の取組みと態度 (2) 期末試験の総合評価
- S 総合点90点以上
A 総合点80点以上
B 総合点60点以上
C 総合点50点以上
D 総合点49点以下

科目名 演奏解釈(1) ピアノ楽曲

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 荻野 千里

期間 後期

2

/

—

履修条件

ピアノ専修必修。他専修も積極的に履修してほしい。

授業の概要

音楽表現における大切なことの一つに「わかりやすさ」があると思う。わかりやすい演奏をするために、ぜひ知っておいてほしい基本的ないくつかの事柄、楽譜の読み方や曲の構成、フレーズングやアーティキュレーション、その他約束事等、身近な作品を使って、いっしょに学んでいく。授業で学んだことがその場限りで終わらず、先々勉強していく上で幅広く応用でき、自身の演奏のヒントになるような内容にしていきたい。ピアノ曲を主に取り扱うが、声楽や管楽器、弦楽器等の作品にも自然になじめるよう工夫したい。授業の内容は次々と積み重なっていくので、できるだけ欠席しないよう心がけること。

授業の到達目標

楽曲に向かう際、無意識に音にするのではなく、音楽史の流れを理解し、作曲家の意図や思いを大切にしながら演奏する習慣を身につける。

授業計画

1. ガイダンス
2. バロック時代の音楽～一般の知識の確認
3. 純正律と平均律、バロック時代の楽器
4. バッハ平均律の成り立ち、フーガについて
5. モーツァルト～ピアノを含む作品について
6. モーツァルト～ピアノソナタ、楽譜の読み方、強弱やアーティキュレーション

7. ベートーヴェン～知っておくべき名曲の数々
8. ベートーヴェンのピアノソナタ～年代を追いながら
9. ロマン派について～同時代に生きた作曲家たち
10. シューベルト～歌曲、後期ピアノ作品を取り上げながら
11. シューマン～ピアノ作品、歌曲
12. リスト～音楽界における大きな役割
13. ショパン～時代背景と作品
14. ショパン～各作品ジャンルの特徴
15. まとめ

授業時間外の学習

音楽史上重要な役割を果たした作曲家について、ある程度各自調べておくこと。
各回の内容は次につながるため、しっかり復習をするように。

教科書・参考書等

その都度、配布。必要に応じて各自準備する。
それぞれの作曲家にふさわしい出版社等も、授業内で指導していく。

成績評価

- (1) 授業態度 (2) レポート等の総合評価。
- S 総合点90点以上
A 総合点80点以上
B 総合点60点以上
C 総合点50点以上
D 総合点49点以下

科目名 演奏解釈(2) 声楽曲

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 相田 麻純

期間 前期

2

◎

—

履修条件

声楽専修必修。他専攻の履修も可。

授業の概要

声楽が他の演奏分野と決定的に違うのは、音楽に言葉が付属している点にある。この授業では歌詞の理解と、その歌詞に音楽をつけた作曲家の意図を探っていく。歌唱する上で声を鍛錬することは重要だが、音楽表現を追求することも同様にとっても大切なことである。ただ歌うだけの演奏ではなく、きちんと曲を理解することで、演奏する上での表現力を引き出すプロセスを一緒に学んでいく。

前半は、全4期に分類されている日本歌曲の作曲家の作品を取りあげ、後半はオペラの代表的作品であるモーツァルト作曲の《フィガロの結婚》を登場人物に分けて解釈していく。

授業の到達目標

楽譜と歌詞から曲に込められた想いを読みとり、演奏する上での理解を深める。

授業計画

1. 授業ガイダンス。日本歌曲の変遷について
2. 日本歌曲：第1期の代表的な作曲家とその作品について①
3. 日本歌曲：第1期の代表的な作曲家とその作品について②
4. 日本歌曲：第2期の代表的な作曲家とその作品について①
5. 日本歌曲：第2期の代表的な作曲家とその作品について②

6. 日本歌曲：第3期の代表的な作曲家とその作品について①
7. 日本歌曲：第3期の代表的な作曲家とその作品について②
8. 日本歌曲：第4期の代表的な作曲家とその作品について
9. オペラ：モーツァルト作曲《フィガロの結婚》における原作と台本について
10. フィガロの人物像と音楽について
11. スザンナの人物像と音楽について
12. 伯爵の人物像と音楽について
13. 伯爵夫人の人物像と音楽について
14. ケルビーノの人物像と音楽について
15. その他の役柄の人物像と音楽について
まとめ

授業時間外の学習

日本歌曲においては、一人一曲を担当し、作曲家と作詞家の関係性や歌詞の意味などを調べておくこと。オペラにおいては《フィガロの結婚》のあらすじや登場人物について予習しておくこと。

教科書・参考書等

授業時に毎回楽譜とプリントを配布する。

成績評価

授業への取組み、レポートによって評価する。

科目名 演奏解釈(3) 室内楽曲

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 寺岡 有希子

期間 前期

2

/

—

履修条件

弦楽器専修必修。
他専攻の積極的な履修を望む。

授業の概要

この授業は他の専攻学生にも広く開放している。古典派の弦楽による室内楽作品を中心とするが、履修者の状況により、声楽ピアノ、管楽器等も含まれる作品も取り上げ授業を進めていく。授業形態としては学生の演奏を基本とし、作曲家とその作品に対してより知識を深め、「演奏」という実践にどのようにしたら結び付いていくか考えていく。学生全員参加の活発な意見交換の場になるよう、望んでいる。

授業の到達目標

スコアから作曲家の意図するものをはじめ、様々なことを読み取れるようになること。またそれらを表現につなげていけることを目標とする。

授業計画

ハイデン・モーツァルト・ベートーヴェンの弦楽による室内楽作品を基礎課題とするが、履修者の状況を考慮しつつ様々な形態(例えば、声楽曲、フルート四重奏曲やピアノ五重奏曲等)の室内楽作品を取り上げていく。

授業時間外の学習

授業で演奏するメンバーは事前リハーサルしておくこと。
またその曲の作曲者についてや作曲された背景、各自の楽器の詳細についても調べておくこと。

教科書・参考書等

課題となる曲のスコアをプリントして配布するので、必ず授業に持参すること。

成績評価

授業への取組み、授業態度、レポート。

科目名 音楽理論[楽式] I ①・II ①

対象 音楽専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 穴戸 里佳

期間 前期・後期

2・2

○

—

履修条件

なし。
日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

音楽形式の基礎。バロック・古典派の主な形式についての説明を行い、楽曲の分析を試みる。
授業は講義形式で行うが、自分の頭で考え、授業に積極的に参加することが求められる。

授業の到達目標

音楽形式の基本を理解し、簡単な楽曲を自分で分析できるようになること。

授業計画

[前期]

- 1 音楽形式とは
- 2 二部形式 (バッハ)
- 3 三部形式 (シューマン)
- 4 複合三部形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
- 5~7 ロンド形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
- 8~14 ソナタ形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
- 15 前期試験、まとめ

[後期]

- 1~2 歌曲の分析 (ベートーヴェンなど)
- 3~6 変奏曲形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
- 7~10 フーガ形式 (バッハ)
- 11~14 自由形式 (バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン)
- 15 後期試験、まとめ

授業時間外の学習

- ・知らない曲は事前にCDなどで聞いておくこと (= 予習)
- ・次の授業までに、一度は授業内容に目を通しておくこと (= 復習)

教科書・参考書等

プリント配布。

成績評価

それぞれ学期末に筆記試験を行い、ボーダーライン上の場合には受講態度、レポート提出 (任意)、小テスト (適宜) 等を加味して評価する。

- S およそ90点以上
- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 音楽理論[楽式] I ②・II ②

対象 音楽専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 森下 俊一

期間 前期・後期

2・2

○

—

履修条件

日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

ヨーロッパ音楽の基本的な形式を具体的な作品を通して学ぶ。
基本的な音群の考察に始まり、徐々に既存の楽曲を通してアナリゼの方法を身につける。

授業の到達目標

楽曲分析を通して、作曲技法・形式構造・様式・語法等を理解する。

授業計画

【楽式I】

- 1 音楽理論基礎をめぐって
- 2 音楽形式論への導入
- 3 基本的な音群の考察
- 4 二部形式・三部形式
- 5 複合三部形式
- 6 声楽諸形式

【楽式II】

- 1 フーガ形式
- 2 変奏形式
- 3 ロンド形式
- 4 ソナタ形式
- 5 楽曲としてのソナタ
- 6 まとめ

以上の内容を各2~4回の時間配当で取り扱う予定。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

筆記試験・レポート・授業への取り組み姿勢等を総合的に勘案して評価する。

科目名 S. H. M. III・IV

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 塩崎、池原、坂田晴、三瀬、長谷川

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

● 音2必修。「S.H.M.I・II」の単位を修得していること。
各自、能力を向上させる努力を、常に実践すること。遅刻をせずに、きちんと出席すること。

- ・正確な音程を身につける
- ・より高度なメロディの書き取り
- ・2声、3声等同時に鳴る音への理解
- ・種類の違う和音がもたらす響きの色彩を感じ取る
- ・和音の機能の理解と聴き分け
- ・四声体の書き取り、その重唱
- ・多様な調への挑戦
- ・転調を伴う課題における調の判定
- ・移調奏
- ・多様な音階による課題

授業の概要

● 授業内容は「S.H.M.I・II」の延長上にある。
能力に応じて、基礎力の充実から、より音楽的な応用まで、各自、力をつけていく。

授業時間外の学習

● 各クラスの教官の指示に従い自習すること。

授業の到達目標

● 音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につける。

教科書・参考書等

● クラスの担当教員から指示される場合もある。

授業計画

● 前期は一年次の成績により能力別クラス編成で授業を行う。
前期終わりに後期のためのクラス分けテストを行う。
主な授業項目。クラスにより内容、進度は異なる。

- ・多様なリズムの習得
- ・多様な拍子の理解
- ・ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号の理解
- ・正しい読譜による初見視唱の練習

成績評価

● 学年末に実施する一斉テストで、単位評価する。(出席は2/3以上満たすことが必須)
S・H・M各100点の合計300点満点を100点に換算する。

S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 指揮法 I・II

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 樋本 英一

期間 前期・後期

1・1

/

—

履修条件

● 指揮、指揮することに興味を持つ者。
教職受講者必修。

授業の概要

● 指揮とは何か、指揮者とは何かについて「指揮法」というものを通して学ぶ。また総譜(スコア)の読み方にも触れる。

授業計画

● 第1講 指揮、指揮者の成り立ち

- 2 指揮の二大要素、運動と図形について
- 3 音を出すこと、とること及びへの扱い
- 4 アクセント(表情の変化)、及び「予備」について
- 5 Tempo、ダイナミックの変化、左手(指揮棒を持たない方の手)の扱い

6~10 第11講以降の課題(Beethoven Sym No.5他)の概説と指揮

11以降 上記の課題について個人レッスン形式で授業を進める。

30 まとめ

授業時間外の学習

● 第6講以降の課題曲についてはCDを聴くこと。

教科書・参考書等

● Beethoven Sym No.5(ミニチュアスコアでよい。版は問わない)
他の課題についてはコピー譜を配布。
指揮棒を用意すること(第1講でそれについて解説する)。

授業の到達目標

● 指揮することにおいていかに息づかいが重要であるか、そして指揮者自らが息で演奏していることが良い指揮につながるということを知る。

成績評価

● 上記課題による実技試験及び授業への取り組み。
出席評価の明確な基準は示さない方が良しと考える。
実技試験の明確な基準を言葉にはできない。
授業での課題をいかに理解、体現しているかにかかる。

科目名 室内楽 A a

対象 音楽専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 荻野 千里・野口 千代光

期間 前期

1

/

—

履修条件

積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。

12. ~ 13. 声楽を含む室内楽

14. ~ 15. 7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて

授業の概要

ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲、ピアノ五重奏曲を中心に取上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。

授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

授業時間外の学習

授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。

また、お互いの楽器の特徴なども調べておくこと。

日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。

授業の到達目標

様々な時代及び編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術を習得する。アンサンブルの体験を通して、音楽を共有する喜びを味わうこと。

教科書・参考書等

シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲、ベートーヴェン、メンデルスゾーンのピアノ三重奏曲。モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

授業計画

1. ガイダンス、学習曲目の検討
2. ~ 5. 古典派の室内楽
(ピアノ・弦楽器を中心に)
モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等
6. ~ 8. ロマン派の室内楽
(ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に)
メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等
9. ~ 11. 近現代の室内楽(様々な楽器を含む)

成績評価

- S 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好で各種コンサートに出演した者
- A 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好の者
- B 事前準備、授業への参加意欲が中程度の者
- C 事前準備が不十分で、授業への参加意欲があまり認められない者
- D 出席が3分の2に満たない者

科目名 室内楽 A b

対象 音楽専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 北本 秀樹

期間 前期

1

/

—

履修条件

室内楽に興味と意欲のある方。

授業計画

初回はガイダンス。

2回目以降は室内楽を生徒同士で演奏します。必要な楽器のメンバーがいない時は、私が(チェロだけ)一緒に弾いたり、演奏要員の方をお願いします。

授業の概要

あなた達が今演奏してみたい室内楽。
将来演奏してみたい室内楽を授業で行っていきます。

授業時間外の学習

各自、十分な練習を行う事。

教科書・参考書等

なし。

授業の到達目標

アンサンブルの向上。

成績評価

出席・授業態度重視。授業への取り組み重視。

科目名 室内楽B a

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 阪本 奈津子

期間 後期

1

/

—

履修条件

特になし。

授業の概要

学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。

授業の到達目標

互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中でアンサンブルの基本を習得する。

授業計画

1. ガイダンス及び曲目の検討
- 2～5. 古典派の室内楽作品
- 6～9. ロマン派の室内楽作品
- 10～13. 近現代作品
- 14～15. 発表演奏

授業時間外の学習

課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み、授業態度、実技等平常点。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽B b

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 蓼沼 恵美子

期間 後期

1

/

—

履修条件

ピアノ専修の学生を対象とするが、他の器楽専修の履修も可。

授業の概要

ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。

アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性をふまえた上での音色作りや響きのバランス、呼吸感等、ピアノパートの役割を果たすために必要な具体的な奏法を実践で学ぶ。

異なる楽器の響きの融合を体験したり、楽曲に対するそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げ、曲の理解を深めると共に、より幅広い表現を目指していきたい。演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。

授業の到達目標

アンサンブルにおける奏法を修得し、相手の音をよく聴きながら、共に音楽をつくり上げる楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。

授業計画

- 1 ガイダンス及び曲目の検討。
 - 2 曲目とメンバーを決定。
 - 3 パート練習。(レッスン)
 - 4～7 アンサンブル実習。
 - 8 楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
 - 9 パート練習。(レッスン)
 - 10～14 アンサンブル実習。
 - 15 発表演奏。
- ※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。

授業時間外の学習

自分のパートをよく練習して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことは出来ない。事前にCDを聴いたり、スコアを見るなど、他のパートにも目を向けておくこと。

教科書・参考書等

必要に応じて、楽譜を各自準備する。

成績評価

授業への取り組み方、意欲、成果など総合的に評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽B c

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 白尾 隆

期間 後期

1

/

—

履修条件

フルート専修の学生を対象とする。

授業の概要

フルートによる二重奏～五重奏（他の楽器を含まない）の重要なレパートリーの習得。

授業の到達目標

仲間と協調しながら自己をよく主張し音楽を表現するという、アンサンブル力の基本的な強化を目指す。

授業計画

課題曲の編成により、数グループに分け、状況を見ながら、期間内に、出来るだけ多くのレパートリーを勉強する。

クーラウ、クンマー等の古典から、ロレンツォ、デュボワ、ボザ等の近代作品を習得する。

授業時間外の学習

個人レッスン同様、可能な限り仲間と練習し、授業までによく準備し、また復習すること。

教科書・参考書等

楽譜をその都度貸し出すので、各自コピーすること。

成績評価

授業中の熱意、注意力、反応を考慮して評価する。

科目名 室内楽B d

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 菊池 カナエ

期間 後期

1

/

—

履修条件

なし。

授業の概要

本授業では、バロック時代の音楽を題材とし、ひとつの曲を仕上げる時に必要となる要素を明らかにして行く。それぞれの時代の様式感とは何か。バロックの演奏習慣を音楽と結びつけて、音楽学的見知から、また現代の実践の現場から見えて来る様々な方面からのアプローチを知り、実際のアンサンブルで試みる。各回の授業内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えて行く可能性あり。各授業の初めに講義をし、後半はアンサンブル実践をして行く。アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。

授業の到達目標

ひとつの曲を仕上げる時に、どのように演奏するべきか自分で考え、様々な情報の中から選択する能力を身に付ける。

授業計画

- 1、バロック時代の音楽について
- 2、楽譜について
- 3、通奏低音について1
- 4、通奏低音について2
- 5、アンサンブル組み
- 6、フルートの変遷
- 7、バロック時代周辺の楽器について
- 8、バロック時代周辺の音楽について
- 9、舞曲、組曲について
- 10、演奏習慣について
- 11、当時の文献を読む
- 12、音楽修辭学について
- 13、アンサンブル仕上げ1
- 14、アンサンブル仕上げ2
- 15、発表

授業時間外の学習

アンサンブル曲の個人練習、またグループでの練習を充分して行くこと。

自分の参加していないアンサンブルに関しても興味を持って聴くこと。

教科書・参考書等

プリントを配布。

成績評価

平常時と演奏発表への取り組み、最終授業での実際の演奏を総合して評価。

科目名 伴奏法Ⅱ

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 揚原 さとみ

期間 前期

1

/

履修条件

教職課程受講者は必修とするが、そうでない学生もアンサンブルに関心を持つ者は歓迎する。

授業の概要

主として音楽教育場面に必要とされるピアノ伴奏のあり方について、実技レッスン・オーディオ資料鑑賞・講義により、研究する。具体的には歌唱・合唱・器楽合奏形態の教授に最適なピアノ伴奏の技法、練習方法、呼吸法などを理解し、実践形式で習得していく。初見ピアノ伴奏、ピアノ弾き語り、コードネームでの即興伴奏、スコアリーディングについてもふれたい。

教職課程必修科目のため対象場面は学校教育現場としているが、様々な音楽活動においてのピアノ伴奏の在り方を探る。

授業の到達目標

- ・教育場面において、音楽指導を伴うピアノ伴奏が出来る。
- ・効果的なピアノ伴奏が出来る音感を養う事が出来る。
- ・コードネームを把握し、即興でシンプルな伴奏付けが出来る

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 初見のピアノ伴奏1
- 3 初見のピアノ伴奏2
- 4 初見のピアノ伴奏3
- 5 コードネームについて1
- 6 コードネームについて2
- 7 コードネームにおける伴奏付け1
- 8 コードネームにおける伴奏付け2
- 9 コードネームにおける伴奏付け3
- 10 弾き語りの練習1
- 11 弾き語りの練習2
- 12 課題曲レッスン1
- 13 課題曲レッスン2
- 14 課題曲発表1
- 15 課題曲発表2

*受講生の人数等により内容変更の可能性がります。

授業時間外の学習

- ・毎回課題が出されるので予習、復習に努めること。
- ・グループやペアを組んでのレッスンがあるのでお互いに協力を深めること。

教科書・参考書等

- ・五線紙を毎時間持参する事。
- ・授業時にプリントを配布します。

成績評価

- ・実技試験、レポート提出、平常の授業態度、これらを総合的に評価する。

科目名 初見演奏(応用)

対象 音楽専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 吉田 真穂

期間 後期

1

/

○

履修条件

他専修生でも、ピアノに興味と意欲があれば受講可。

授業の概要

バロックから現代にいたる作品をテキストとして、初見奏で求められる読譜力、想像力、集中力を養い、それらが日頃のピアノ演奏の基礎能力の向上につながることをめざし、実習する。楽譜を丁寧に読み、その曲にふさわしいイメージを感じ取ることが出来るセンスを磨いていきたい。毎回の授業でなるべく多くの演奏ができるよう、積極的に参加してほしい。[初見演奏(基礎)]よりもさらに難易度の高い曲に取り組み、演奏のレベルアップをめざす。

授業の到達目標

短い時間で曲の構成や特徴を把握し、ただ音を弾くばかりではなく、テンポ、フレーズ、ペダリングなどにも考慮して、表現豊かな演奏ができるようになること。

授業計画

- (1) ガイダンス、レベルチェック
- (2)~(5) 小品
- (6)~(8) バロック、古典派の作品
- (9)~(12) ロマン派、近代・現代の作品
- (13)~(14) 協奏曲、オーケストラの編曲作品
- (15) まとめ

※上記以外にも随時多様な作品を取りあげる。

授業時間外の学習

- ・授業で配布したテキストでの復習、また、指示する曲集、曲目などを参考に予習するよう努めてほしい。

教科書・参考書等

- ・その都度配布。

成績評価

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 日本音楽概論

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 森重 行敏

期間 前期・後期

2

○

—

履修条件

特になし。演劇専攻者も歓迎する。授業への取組みは重視する。教職課程受講者は必修。

- 12回目 箏曲
- 13回目 三曲
- 14回目 明治以降の邦楽
- 15回目 現代の邦楽

授業の概要

日本で音楽や舞台芸術に関わるものにとって必要な、伝統芸能に関する基礎知識を身につけることを目標とする。教職をめざす者は必修としたい。将来教育の現場で活用できる知識はもとより、日本の音楽教育にとって重要な日本文化全般へのまなざしと伝統音楽との関係を感じていくことの重要性を認識したい。

授業時間外の学習

歌舞伎などの舞台上演、邦楽演奏会などに積極的に足を運ぶようにして欲しい。

授業の到達目標

日本の音楽や楽器についての基礎知識を身につけるとともに、伝統芸能に親しむ方法をさぐる。

教科書・参考書等

「日本音楽との出会い」月溪恒子著（東京堂出版）
随時プリントも配布

授業計画

- 1回目 オリエンテーション
- 2回目 古代の芸能
- 3回目 雅楽（舞楽）
- 4回目 雅楽（管絃）
- 5回目 雅楽（国風歌舞）
- 6回目 能
- 7回目 狂言
- 8回目 中世芸能
- 9回目 歌舞伎
- 10回目 日本舞踊
- 11回目 文楽

成績評価

授業への取組み・態度50%、課題50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 合奏基礎（和楽器）

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 滝田 美智子

期間 前期

1

/

履修条件

日本音楽専修必修。他専修も是非履修してほしい。予習を必ずすること。

授業計画

- 第1回 二つの個性（藤井凡大作曲） I章 箏二重奏
- 第2回 / II章 箏二重奏
- 第3回 / I・II章 仕上げ
- 第4回 箏と笛 合奏（曲未定）
- 第5回 / 仕上げ
- 第6回 箏と尺八 合奏（曲未定）
- 第7回 / 仕上げ
- 第8回 二つの田園詩（長沢勝俊作曲） 箏、17絃箏、尺八（笛）、合奏
- 第9回 /
- 第10回 /
- 第11回 五段砧（光崎検校作曲） 箏 二重奏 古典曲
- 第12回 /
- 第13回 /
- 第14回 / 仕上げ
- 第15回 まとめ

授業の概要

基本的には、日本音楽の楽器合奏の習得であるが、洋楽器との合奏も希望があれば取り入れていく、古典曲から現代曲まで幅広く学んでいく、楽譜の読み方、解釈を初め、二重奏から合奏まで実際に演奏したり、又は譜面を読みながら、合奏の全体像をつかむ訓練をする。

合奏においての自分のパートの役割、他の音を聴き、音の流れを感じながら演奏する事を徹底的に身につける。

授業時間外の学習

合奏に参加する場合は、練習をする事。出来れば合奏の場合は、合奏練習も望ましい。参加しない場合は、楽譜をよく予習しておく事。

授業の到達目標

合奏する上で、まわりの音と、音の流れ、空気感を感じながら自由に演奏できる事。合奏の中での自己表現を楽しく感じたい。

教科書・参考書等

教材は各自で用意すること。プリント配布の場合もある。

成績評価

- 1. 授業態度 2. 課題に取組む積極性 3. 授業の成果
- (S) 総合点90点以上 (A) 総合点80点以上
- (B) 総合点60点以上 (C) 総合点50点以上
- (D) 総合点49点以下

科目名 演奏解釈(4) 日本音楽

対象 音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 たかの 舞俐

期間 前期

2

/

—

履修条件

日本音楽専修必修。その他の学生は、特に条件はないが、自分の専攻以外の楽器や音楽に興味や意欲があること。

授業の概要

演奏するということにおいては、譜面通りに演奏するということだけではなく、各自がその作品を通して、自分の音楽性や個性を表現できる事が重要であると考えます。

この授業では、様々な邦楽器のための音楽を中心として題材に選び、それについて分析をし、演奏解釈や演奏方法について模索してみるなど、積極的な意見交換も交えて進めていきたいと思っています。

最初にアンケートをとり、可能なかぎり受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えています。また、中間と最後にそれまでの講義で学んだ事をもとにした発表の場をもうけたいと思っています。

授業の到達目標

この授業では以下のことを到達目標とします。

1. それぞれの楽曲に対して、作曲者の意図を理解し、それを自分なりに表現することを考え、実践することを試みる。
2. 音楽の様々なジャンルでも自分の音楽表現ができる演奏を考えて、実践してみること。
3. 学期の最後に、自分が今まで演奏した曲や、現在演奏している曲、また講義内で提示された曲などを演奏するレクチャーコンサートを行う事によって講義で学んだことを発表する。

授業計画

前期(編曲)

- 第1回 オリエンテーション、アンケート
- 第2回 邦楽の原点 雅楽
- 第3回 箏曲「六段の調」分析&派による演奏相違点について
- 第4回 地歌「ままの川」 その他DVD鑑賞

- 第5回 西洋音楽における様々な新しい楽器奏法について
- 第6回 現代邦楽で取り上げられている様々な奏法について
- 第7回 受講生による中間発表、意見交換
- 第8回 箏のプリベアド方法についてのレクチャー。即興指導など。
- 第9回 たかの編曲作品の演奏解釈指導
- 第10回 邦楽器演奏の新たな可能性 ジャンルを超えて
- 第11回 邦楽器演奏の新たな可能性 ジャンルを超えて
- 第12回 実習1(最終日のコンサートのための準備を含める)
- 第13回 実習2(最終日のコンサートのための準備を含める)
- 第14回 実習3(最終日のコンサートのための準備を含める)
- 第15回 レクチャーコンサート

順序、及び内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性があります。

授業時間外の学習

授業内容においては、自主練習が必要な場合があります。

教科書・参考書等

授業で毎回プリントを配布

成績評価

- S 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート課題において卓越した評価を得ている。
- A 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート提出において高い評価を得ている。
- B 授業の欠席が少なく、まじめに授業に参加し、試験ないしレポート提出をこなしている。
- C Bに次ぐ。
- D 授業参加日数が十分ではなく、試験不参加ないしレポート未提出である。

Toho Gakuen College of Drama and Music

芸術科演劇専攻

科目名 基礎演劇演習 A a

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 越光 照文

期間 前期

2

/

—

履修条件

a組必修。授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。
「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、各自が有する資質の伸ばすべき長所と克服すべき短所を見極め、俳優を目指すための確かな動機づけと学習習慣を確立させることを目的とする。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノローグドラマ」として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノローグドラマ」の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 課題へむけてのウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 「シーンワーク」の本読み、その①
- 7 「シーンワーク」の本読み、その②

- 8 「シーンワーク」の本読み、その③
 - 9 「シーンワーク」のオーディション
 - 10 「シーンワーク」の立ち稽古、その①
 - 11 「シーンワーク」の立ち稽古、その②
 - 12 「シーンワーク」の立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

「自画像」は個人、「シーンワーク」ではグループでの自主稽古を徹底しておくこと。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

毎回の授業への取り組み、発表内容の質を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。

- S 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる。
- A 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる。
- C 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した。
- D 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 基礎演劇演習 A b

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 前期

2

/

—

履修条件

- ① a組必修
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
- 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3

- 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ② 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ① 授業態度
 - ② 課題の成果
 - ③ 表現者としての真摯な姿勢
 - ④ 自らを研鑽する意欲
 - ⑤ 身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 基礎演劇演習 A c

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 前期

2

/

—

履修条件

c組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズムースシアター・カルガリー）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

- 1 導入
- 2-4 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 5-13 シーンワーク
- 14 発表会と反省
- 15 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著（英語版）

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
 A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
 B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
 C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
 D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 基礎演劇演習 A d

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 前期

2

/

—

履修条件

d組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

基本的な呼吸法、発声、動きを身につける。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、基本的な所作を身につけることに重点を置き、次に、共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探求する。

後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 演技の基礎となる発声を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を身につける。
- ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現 1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現 2
- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古

- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャストイング発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「オセロー」小田島雄志訳(白水社版) 学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。
 A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
 B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
 C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
 D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 基礎演劇演習 B a

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 前期

2

/

—

履修条件

a組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意がありプロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズムスシアターカルガリー）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

- 1 導入
- 2-4 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 5-13 シーンワーク
- 14 発表会と反省
- 15 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著（英語版）

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
 A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
 B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
 C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
 D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 基礎演劇演習 B b

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 前期

2

/

—

履修条件

b組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

基本的な呼吸法、発声、動きを身につける。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、基本的な所作を身につけることに重点を置き、次に、共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点=舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探究する。

後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 演技の基礎となる発声を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を身につける。
- ③ 集団創作を理解し、上演中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2
- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解

- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャスト発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上舞台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。
 「オセロー」小田島雄志訳（白水社版）学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。
 A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
 B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
 C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
 D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 基礎演劇演習 B c

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 越光 照文

期間 前期

2

/

—

履修条件

c組必修。授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、各自が有する資質の伸ばすべき長所と克服すべき短所を見極め、俳優を目指すための確かな動機づけと学習習慣を確立させることを目的とする。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノログドラマ」として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノログドラマ」の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 課題へむけてのウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 「シーンワーク」の本読み、その①
- 7 「シーンワーク」の本読み、その②

- 8 「シーンワーク」の本読み、その③
- 9 「シーンワーク」のオーディション
- 10 「シーンワーク」の立ち稽古、その①
- 11 「シーンワーク」の立ち稽古、その②
- 12 「シーンワーク」の立ち稽古、その③
- 13 「シーンワーク」の作品発表
- 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
- 15 他者の「自画像」を演じ発表する。

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

「自画像」は個人、「シーンワーク」ではグループでの自主稽古を徹底しておくこと。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

毎回の授業への取り組み、発表内容の質を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。

- S 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる。
- A 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる。
- C 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した。
- D 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 基礎演劇演習 B d

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 前期

2

/

—

履修条件

- ①d組必修
- ②授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
- 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2

- 8 訓練・課題立ち稽古3
 - 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ②課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
 - ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち全てを獲得した者
B：①～⑤のうち4つを獲得した者
C：①～⑤のうち3つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 身体トレーニングabcd

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 山本 光二郎

期間 前期

1

/

—

履修条件

必修。
カラダを動かすことをいとわない者。

授業の概要

- ・カラダで表現することに気づき、可能性を確かめる授業である。テクニックの習得もさることながら、受講者個人のカラダに対する許容範囲を広げることを目的とする。
- ・カラダの柔軟性、カラダの持っているリズムを確認する。
- ・ダンスカンパニーコンドルズの持つ不思議な世界を紹介する、そこから舞台人として自身の見せ方、見られ方を学ぶ。
- ・楽器を使える人、声を使える人はコンテンポラリーダンスを自身のパフォーマンスと融合することを学ぶ。

授業の到達目標

カラダを動かすことによって気付く自身の可能性を発見、認識、利用、表現する。

授業計画

- 第1週 ガイダンスを受ける
- 第2週～第6週 ストレッチする
カラダで遊んでみる
踊るを遊ぶ
- 第7週～第10週 振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する
雑誌、絵本などメディアを使って踊ることを学ぶ
- 第11週～第15週 コンドルズのダンスを踊ってみる
演出を含めた小作品をつくる

授業時間外の学習

授業に参加するには健康であることが大前提であるので、日常的に怪我や病気に注意し、健やかな状態を維持すること。

教科書・参考書等

動きやすい、床に転がってもよい服装
裸足もしくは靴下

成績評価

授業への取り組み重視(90%)、レポート提出(10%)を10点に換算
 S: 90点以上
 A: 80点以上
 B: 60点以上
 C: 50点以上
 D: 50点未満

科目名 ボイス・トレーニング(歌唱)abcd

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 信太 美奈

期間 前期

1

/

—

履修条件

必修。
素直に何でもトライしたい意欲のある者。
顔面が見えるヘアースタイルで参加。

授業の概要

芝居の為、歌の為の呼吸・筋肉・声の出し方・歌い方などを学ぶ。
 「ヴォイス」声とはどんな物なのかを知る。
 声と心と筋肉の関係を知る。
 声について色々な角度から試す。

授業の到達目標

身体を使った声で、芝居も歌も舞台にたてるようになりたい。
 完全にはできなくとも、意識は持てるように。
 筋肉と感情がコントロールできるようになりたい。

授業計画

- 1 自己紹介(ひとりひとり歌ってもらう)
- 2 //
- 3 呼吸と声
- 4 声と筋肉と心
- 5 //
- 6 発声と感情

- 7 身体の意識
 - 8 発声しながら気持ちを出す
 - 9 //
 - 10 台詞を言いながらの気持ちと筋肉について意識する
 - 11 //
 - 12 台詞、歌を通しての気持ちと筋肉について意識する
 - 13 //
 - 14 //
 - 15 課題出して試験、まとめ
- ⑨ 予定通りに進まない場合もある。

授業時間外の学習

授業でやったことを必ず復習。次の授業の時にはそれが無意識でもできるようにしてくる。
 たくさんの音楽を聞く。たくさんの舞台人の声を聞く。
 他の授業でも、この授業で習った事を利用して、コラボしあうように。

教科書・参考書等

授業中にプリントあるいは楽譜を配布。

成績評価

- S 出席 100% 意欲があり、課題の予習、復習をしっかりと行い成果がある人。
- A 出席 90% 意欲はある。課題をやってまあまあ成果が見られた人。
- B 出席 80% 課題には向き合うが、向上していない人。
- C 出席 70% 課題に向き合う精神がみられない。
- D 出席率が悪く、態度も悪い。

科目名 演劇演習 A a

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 後期

2

/

—

履修条件

- ① a組必修
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋(地下足袋は不可)を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
- 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2

- 8 訓練・課題立ち稽古3
 - 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ② 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布(戯曲)
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ① 授業態度 ② 課題の成果 ③ 表現者としての真摯な姿勢
 - ④ 自らを研鑽する意欲 ⑤ 身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 A b

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 越光 照文

期間 後期

2

/

—

履修条件

- b組必修。
- 授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機づけと学習習慣の確立、さらには良きアンサブルの取り方を学ぶ。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノローグドラマ」として完成させるといった方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲(台詞劇)の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ① 「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノローグドラマ」の完成とその発表。
- ② 戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 課題へむけてのウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 「シーンワーク」の本読み、その①

- 7 「シーンワーク」の本読み、その②
 - 8 「シーンワーク」の本読み、その③
 - 9 「シーンワーク」のオーディション
 - 10 「シーンワーク」の立ち稽古、その①
 - 11 「シーンワーク」の立ち稽古、その②
 - 12 「シーンワーク」の立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- 「自画像」は個人、「シーンワーク」ではグループでの自主稽古を徹底しておくこと。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

- 毎回の授業への取り組み、発表内容の質を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。
- S 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる。
- A 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる。
- C 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した。
- D 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 演劇演習 A c

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 後期

2

/

—

履修条件

c組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

前期で学んだ基本的な呼吸法、発声、動きを、より深く体得する。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、前期で学んだ基礎を応用し、様々な表現を可能にする。共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。前期に発見した自分の癖を直し、自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探究する。後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 前期に学んだ演技の基礎となる発声を定着させ、幅広い科白の表現を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を組み合わせ、応用し、自由に自分の身体を使いこなせるようにする。
- ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2

- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャスト発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「マクベス」小田島雄志訳(白水社版) 学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。

A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。

B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。

C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。

D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演劇演習 A d

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ベーター・ゲスナー

期間 後期

2

/

—

履修条件

d組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムシアター・カルガリー)によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

- 1 導入
- 2-4 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 5-11 シーンワーク
- 12 発表会
- 13-15 反省と復習シーンワーク

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

S (1)~(5)まで90%以上獲得した者

A (1)~(5)まで80%以上獲得した者

B (1)~(5)まで60%以上獲得した者

C (1)~(5)まで50%以上獲得した者

D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 B a

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 後期

2

/

—

履修条件

a組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

前期で学んだ基本的な呼吸法、発声、動きを、より深く体得する。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、前期で学んだ基礎を応用し、様々な表現を可能にする。共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。前期に発見した自分の癖を直し、自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探求する。後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 前期に学んだ演技の基礎となる発声を定着させ、幅広い科白の表現を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を組み合わせ、応用し、自由に自分の身体を使いこなせるようにする。
- ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2

- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャスト発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「マクベス」小田島雄志訳(白水社版) 学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。
 A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
 B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
 C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
 D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演劇演習 B b

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ベーター・ゲスナー

期間 後期

2

/

—

履修条件

b組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムスシアター・カルガリー)によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

- 1 導入
- 2-4 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 5-11 シーンワーク
- 12 発表会
- 13-15 反省と復習シーンワーク

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
 A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
 B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
 C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
 D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 B c

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 後期

2

/

—

履修条件

- ① c組必修
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋(地下足袋は不可)を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
- ・相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- ・「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3

- 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ② 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布(戯曲)
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ① 授業態度
 - ② 課題の成果
 - ③ 表現者としての真摯な姿勢
 - ④ 自らを研鑽する意欲
 - ⑤ 身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 B d

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 越光 照文

期間 後期

2

/

—

履修条件

d組必修。
授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機づけと学習習慣の確立、さらには良きアンサブルの取り方を学ぶ。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な“モノローグドラマ”として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲(台詞劇)の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ① 「自画像を演ずる」というテーマの基に“モノローグドラマ”の完成とその発表。
- ② 戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 課題へむけてのウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 「シーンワーク」の本読み、その①

- 7 「シーンワーク」の本読み、その②
 - 8 「シーンワーク」の本読み、その③
 - 9 「シーンワーク」のオーディション
 - 10 「シーンワーク」の立ち稽古、その①
 - 11 「シーンワーク」の立ち稽古、その②
 - 12 「シーンワーク」の立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

「自画像」は個人、「シーンワーク」ではグループでの自主稽古を徹底しておくこと。

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

- 毎回の授業への取り組み、発表内容の質を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。
- S 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる。
- A 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる。
- C 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した。
- D 授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 演劇演習C a

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 前期

2

/

—

履修条件

a組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

ひとつの演劇作品のワンシーンを用いて、演技の基礎をさらに深める。以下のことを学ぶ。

- ・「サブテキスト」をどのように創出するのか
- ・「なりゆき」の重要性を理解する
- ・「ターニングポイント」のぎっ掛けを掴む
- ・困難な状況において自分の演技を維持する

さらに、実に些細な個人的状況が、より大きな「世界の諸問題」とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を、独自の方法によって表現することを身につけて欲しい。以上を通じて、役に「なる」のではなく、役を「演じる」ことを学んでいく。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

- 1-2 自分の役の準備（コンテキスト、キャラクター、アナライズ）
- 3-5 衣装、舞台、小道具等セット、プランニング
- 6-13 シーン練習、エチュード
- 14-15 ワンシーンを上演する。

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

戯曲、戯曲のコンテキスト本

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みようとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
 A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
 B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
 C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
 D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習C b

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 前期

2

/

—

履修条件

b組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

1年で学んだシェイクスピアの戯曲は「悲劇」の「オセロー」と「マクベス」である。2年目は喜劇「お気に召すまま」を通じて、人間の愚かさを客観的に観察し、笑いのもつ力を活かし、喜劇が演じられるだけの演技力を身につけることを目的とする。戯曲、科白をきちんと読解する訓練を積み、それを、声と身体を使って表現にする稽古、戯曲、の背景にある歴史や社会の構造を理解すること、キャラクター作りをする方法を身につけていく。演技において、自分を客観的に観察し、1年時から引き続き、癖を直し自分の個性を明確にする。演出的な視点=舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、一番輝くことの出来る自分の見せ方、観客をどのように意識するか、等、具体的に客観性を持ってみる人を感動させ、笑わせる演技術を探索する。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 自分を客観視する精神力と観察力を身につけ、悪い癖は直し、持っている魅力を舞台上で発揮できるようにする。
- ② 戯曲の読解力を身につけ、奥行きのあるキャラクター作りができるようになる。
- ③ 集団創作を理解し、戯曲の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解1
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1

- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解2
- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解3
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解4
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解5
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表5
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解6
- 13 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表6
- 14 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解7
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「ヴェニス商人」小田島雄志訳（白水社版）学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。
 A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
 B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
 C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
 D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演劇演習 C c

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 前期

2

/

—

履修条件

- ① c組必修
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・ 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- ・ 相手役との「関係性」を重視し、60分程度の中編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- ・ 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

- 課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな可能性、追求目標を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2

- 8 訓練・課題立ち稽古3
 - 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ②課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

- 教科書：授業時に配布（戯曲）
- 参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 C d

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大塚 幸太

期間 前期

2

/

—

履修条件

- 授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。稽古着・稽古靴着用。

授業の概要

- 俳優という表現者として与えてもらうのではなく、表現したいこと、しなければならぬことを明確にして演技プランを構築していく。本授業のメソッドでは各自がこれまでの人生で感じた事が反映されるセンスメモリーなどのトレーニングを用いることで新たな表現の発見が期待できる。シーンワークでは役の「役割」と「心理描写」を追求、探求しながら嘘のないリアリティある演技を目指し「役として生きる」。他の演者から影響されて動く感情「受け芝居」を繊細に表現しオリジナリティある創造性で作り上げていく。舞台、映像問わず俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。

授業の到達目標

- 各自が新たな発見をすること。

授業計画

1. シアターゲーム・シーンワーク①（力量チェック）
※アップとしてシアターゲームは以降もあり。
2. シーンワーク②（力量チェック）自己分析
3. 身体表現（創造）
4. 身体表現（創造）
5. センスメモリーワーク
6. センスメモリーワーク

7. インプロ
8. インプロ
9. シーンワーク（以降、分解して進行）
10. シーンワーク
11. シーンワーク
12. シーンワーク
13. シーンワーク発表（衣裳・大道具・小道具あり）
14. シーンワーク発表（衣裳・大道具・小道具あり）
15. まとめ

授業時間外の学習

- 授業に向けての予習・復習。

教科書・参考書等

- 授業で配布されるプリント。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 D a

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 後期

2

/

—

履修条件

- ① a組必修
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- ・相手役との「関係性」を重視し、60分程度の中編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
- ・「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

- 課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな可能性、追求目標を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング
- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2

- 8 訓練・課題立ち稽古3
 - 9 訓練・課題立ち稽古4
 - 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
 - 11 訓練・課題上演1
 - 12 訓練・課題上演2
 - 13 訓練・課題上演3
 - 14 訓練・課題上演4
 - 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ② 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

- 教科書：授業時に配布（戯曲）
- 参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ① 授業態度 ② 課題の成果 ③ 表現者としての真摯な姿勢
 - ④ 自らを研鑽する意欲 ⑤ 身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 D b

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大塚 幸太

期間 後期

2

/

—

履修条件

- 授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。稽古着・稽古靴着用。

授業の概要

- 俳優という表現者として与えてもらうのではなく、表現したいこと、しなければならないことを明確にして演技プランを構築していく。本授業のメソッドでは各自がこれまでの人生で感じた事が反映されるセンスメモリーなどのトレーニングを用いることで新たな表現の発見が期待できる。シーンワークでは役の「役割」と「心理描写」を追求、探求しながら嘘のないリアリティある演技を目指し「役として生きる」。他の演者から影響されて動く感情「受け芝居」を繊細に表現しオリジナリティある創造性で作り上げていく。舞台、映像問わず俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。

授業の到達目標

- 各自が新たな発見をすること。

授業計画

16. シアターゲーム・シーンワーク①（力量チェック）
※アップとしてシアターゲームは以降もあり。
17. シーンワーク②（力量チェック）自己分析
18. 身体表現（創造）

19. 身体表現（創造）
20. センスメモリーワーク
21. センスメモリーワーク
22. インプロ
23. インプロ
24. シーンワーク（以降、分解して進行）
25. シーンワーク
26. シーンワーク
27. シーンワーク
28. シーンワーク発表（衣裳・大道具・小道具あり）
29. シーンワーク発表（衣裳・大道具・小道具あり）
30. まとめ

授業時間外の学習

- 授業に向けての予習・復習。

教科書・参考書等

- 授業で配布されるプリント。

成績評価

- ① 授業態度 ② 課題の成果 ③ 表現者としての真摯な姿勢
 - ④ 自らを研鑽する意欲 ⑤ 身体的、精神的健康の維持
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 D c

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 後期

2

/

—

履修条件

c組必修。
自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。

次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズムースシアターカレッジ）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに對する理解を深める。

授業計画

- 1-2 自分の役の準備（コンテキスト、キャラクター、アナライズ）
- 3-5 衣装、舞台、小道具等セット、プランニング
- 6-8 シーン練習、エチュード
- 9-15 ワンシーンを上演する

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

- 「インプロ・ゲーム」 絹川友梨著
研究旅行（キース・ジョンストン ルーズムースシアター）で集めた書類
- 「シアタースポーツ」（英語版）キース・ジョンストン著

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 D d

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 真子

期間 後期

2

/

—

履修条件

d組必修。
遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

1年で学んだシェイクスピアの戯曲は「悲劇」の「オセロー」と「マクベス」である。2年目は「ヴェニスの商人」を通じて、人間の愚かさを客観的に観察し、シェイクスピアの戯を演じられるだけの演技力を身につけることを目的とする。戯曲、科白をきちんと読解する訓練を積み、それを、声と身体を使って表現にする稽古、戯曲、の背景にある歴史や社会の構造を理解すること、キャラクター作りをする方法を身につけていく。演技において、自分を客観的に観察し、1年時から引き続き、癖を直し自分の個性を明確にする。演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、一番輝くことの出来る自分の見せ方、観客をどのように意識するか、等、具体的に客観性を持ってみる人を感動させ、笑わせる演技術を探求する。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 自分を客観視する精神力と観察力を身につけ、悪い癖は直し、持っている魅力を舞台上で発揮できるようにする。
- ② 戯曲の読解力を身につけ、奥行きのあるキャラクター作りができるようになる。
- ③ 集団創作を理解し、戯曲の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解1
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解2
- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解3

- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解4
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解5
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表5
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解6
- 13 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表6
- 14 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解7
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

- 授業時に配布するプリント。
- 「ヴェニスの商人」 小田島雄志訳（白水社） 学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業への取組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者。
- A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
- B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
- C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
- D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演技演習 A (ダイアログ) a b

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大谷 賢治郎

期間 前期・後期

2

/

—

履修条件

ストレートプレイ必修。授業時間外での自習、自主稽古を必要とする。アーティストとしての自立、ならびに共同作業の二つを両立させること。稽古着を着用すること。

授業の概要

ダイアログ=対話の演劇創造を可能とするための「相手と関わる」ことの出来る俳優の心身の確立。

アーティスト自身の想像力を以て、即興からグループワークでシーンを作る。ディバイジングの用法を用いて自分自身と客観的に向き合うシーンを創る。

ダイアログをメインにしたシーンを既存の戯曲から抜粋、「シーンワーク」を行なう。創造過程を学習し、最終発表を行なう。

シーンの中の対話に留まらず、演劇活動に於ける全ての対話、「アーティスト同士の対話」「観客との対話」「社会との対話」にも創造過程に於いて目を向ける。

授業の到達目標

1. ディバイジングによるシーンの発表 (グループワーク)
2. 課題で与えられたシーンの発表 (二人一組)
3. 自分で見つけたシーンの発表 (二人一組)
4. 創造過程に於ける自分自身について、そして他者についての発見の報告 (個人)

授業計画

1. 授業ガイダンス/目標設定
2. 身体訓練について/演劇的自己紹介①
3. 演劇的自己紹介②
4. サブテキストによる対話シーンの創造①
5. サブテキストによる対話シーンの創造②
6. フィジカルシアター (身体表現) ①

7. フィジカルシアター (身体表現) ②
 8. ディバイジング (グループワークの創造) ①
 9. ディバイジング (グループワークの創造) ②
 10. ディバイジング (グループワークの創造) 発表
 11. 課題戯曲によるシーンワーク①
 12. 課題戯曲によるシーンワーク②
 13. 課題戯曲によるシーンワーク発表①
 14. 課題戯曲によるシーンワーク発表②
 15. 総評/自己と他者に関する発見の報告
- ※授業内容に関しては、その進捗具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

各シーンワーク発表に向けての自習ならびに自主稽古。

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

1. 出席日数
 2. 授業への取組み
 3. 発表の内容の総合的評価
- S 全出席。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- A 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定日数に達している。各課題の発表まで達している。
- D 出席が規定日数に達していない。各課題の発表が評価できない。

科目名 演技演習 B (アンサンブル) a b

対象 演劇専攻 2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 シライ ケイタ

期間 前期・後期

2

/

—

履修条件

自分に興味があること。他者に興味があること。表現に興味があること。演技に興味があること。つまり、人間に興味があること。

授業の概要

演劇におけるアンサンブルとは、没個性を意味しない。突出した個性の集合体としてのアンサンブルを探究する。

言葉にできる「感情」を起点とする演技ではなく、言葉にできない「衝動」「本能」「生理現象」を起点とする演技を学ぶ。

「衝動」が、具体的な「目的」を生み、「行動」に至るという人間の仕組み、つまり演技の仕組みを理解する。

演技における「目的」とは、自分の役柄の感情や状態の説明ではなく、常に他者を変化させるために設定するべきであることを理解する。

演技における「行動」とは、「台詞」と「動作」であることを理解し、具体的に「話す」「動く」ことを学ぶ。

授業の到達目標

演技は楽しいものだを知る。
戯曲を「感情」ではなく「目的」で読む癖をつける。
演技は抽象的なものではなく、具体的なものであることを理解する。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2～14 座学と実技を並行して行っていく。
座学は、演劇の歴史、演技術の変遷、現代リアリズム演技の基本、日本の演劇界の現在、戯曲の読み方、などを話す。
実技は、テキストを使い集団創作を行う。
- 15 授業の総括

授業時間外の学習

とにかく、様々な体験をすること。日常を生き生きと、貪欲に生きること。演劇を沢山見ること。同年代のプロフェッショナル達が、どんなレベルで仕事をしているかを知ること。

教科書・参考書等

テキストは適宜、授業時に配布する。
「俳優のためのハンドブック」(フィルムアート社)を参考書として勧める。が、これを元に授業を行うわけでは無いので、無理に買うことはない。しかし読めばかなり役に立つ。

成績評価

出席日数。授業態度。課題の成果。
を総合的に判断する。

科目名 ショーダンスⅠ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三村 みどり

期間 前期

1

/

—

履修条件

ミュージカルコース必修。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振り付けを覚えて、表現、感性を磨き、作品を創っていく。

授業の到達目標

実技公開試験に向けて、作品を踊り込むことにより、肉体、感性、表現を磨いていく。

授業計画

前半は1学年で学んだ事を復習、確認、さらに表現を広げ、自分の個性が活かされるよう肉体の訓練を行う。

後半は実技公開試験に向けて、振り付けを覚え、踊り込んで作品を創り上げていく。

授業時間外の学習

実技公開試験の振付・練習を行う為、時間外の練習にも参加すること。

出来ない振り付けは自主トレーニングして参加すること。

欠席した場合も事前に習っておくこと。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

授業への取組み授業態度及び実技試験で評価する。

科目名 ショーダンスⅡ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三村 みどり

期間 後期

1

/

—

履修条件

ミュージカルコース必修。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振りを覚えて、表現、感性を磨く。

授業の到達目標

前期で学んだこと、実技公開試験の反省点、自分に不足していることを考え、自分の目標を新たに持つ。踊りの技術を高め、感性、表現の幅を広げていく。

授業計画

今まで学んだ事を復習、確認。

より、技術を向上させ、肉体訓練を行う。

得意分野だけでなく、いろんな踊りのジャンルを体現し、感性、表現の幅を広げていく。

授業時間外の学習

出来ない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。

欠席した場合も事前に習っておくこと。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

授業への取組み授業態度及び実技試験で評価する。

科目名 ミュージカル唱法①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 信太 美奈

期間 前期

1

/

—

履修条件

- ・ミュージカルコース必修。
- ・日常のクラスはなるべく身体のラインが見える練習着を着用とする。
- ・LA（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。
「ミュージカル唱法①」履修者は「ミュージカル唱法-LA①」、
「ミュージカル唱法②」履修者は「ミュージカル唱法-LA②」に参加すること。
- ・シューズはジャズシューズと女子はヒールのあるダンスシューズが必要。
- ・ナンバーに合う練習着を着用。
- ・顔面が見えるヘアスタイルで参加。

授業の概要

ミュージカル作品の歌を、ストーリー、セリフの中からの流れで気持ちをもどように込めて歌うか。
呼吸法・発声法・筋肉の使い方。
最後に7月の高校生のためのワークショップを公開試験とする。

授業の到達目標

前年度より引き続き、呼吸、筋肉の意識を高める。
暗譜したミュージカルナンバーをダンスやステージングに取り入れながら表現していく。

授業計画

1. 前年度の反省と今学期の目標など語りあう
2. 曲選び
3. 具体的に選曲した楽曲を歌い込む
4. /
5. /
6. 歌の周囲のステージング、セリフなども練習
7. /
8. /
9. /
10. /
11. /
12. /

13. /
14. /
15. 公開試験
③オーディションにより出演の曲目決定

授業時間外の学習

- 呼吸・筋肉の使い方をマスターするように日々努力する。
- 楽譜が読めるように努力する。
- 課題を必ず次の授業までに暗譜する。
- グループで歌う場合は集まって練習する。
- 毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと）

教科書・参考書等

CD、ミュージカル作品を見たり聞いたりして欲しい。
授業中に資料配布。

成績評価

- S 出席 100% 意欲があり、課題の予習、復習をしっかりと行い成果がある人。
A 出席 90% 意欲はある。課題をやってまあ成果が見られた人。
B 出席 80% 課題には向き合うが、向上していない人。
C 出席 70% 課題に向き合う精神がみられない。
D 出席率が悪く、態度も悪い。
※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
「授業出席とLA補習参加の合計回数」が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

科目名 ミュージカル演習①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 大塚 幸太

期間 後期

1

/

—

履修条件

授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。稽古着・稽古靴着用。

授業の概要

「音」を「楽しみ」、心が動く「演技表現」と空間と空気を動かす「身体表現」を学ぶ。ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」とは何かを学ぶ。シーンワークでは(群像・ペア・ソロ)ミュージカル特有の「形だけの演技」ではない、演技をしっかり構築し「役として生きる」ことを体感する。俳優という職業として自分の「商品価値」を見出し、共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。

授業の到達目標

各自がそれぞれ得手不得手を素直に理解し、自らそれを更に伸ばし、克服しようとする努力をする。

授業計画

1. シアターゲーム・シーンワーク①(力量チェック)
※アップとしてシアターゲームは以降もあり。
2. シーンワーク②(力量チェック) 自己分析
3. 身体表現(創造)
4. 身体表現(楽曲を使用)
5. インプロ
6. インプロ
7. シーンワーク(演技・歌唱・振付を区分しながら進行)
8. シーンワーク

9. シーンワーク
10. シーンワーク
11. シーンワーク
12. シーンワーク
13. シーンワーク発表(衣装・大道具・小道具あり)
14. シーンワーク発表(衣装・大道具・小道具あり)
15. まとめ

授業時間外の学習

授業に向けての予習・復習。

教科書・参考書等

授業で配布されるプリント。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇特別演習Ⅰ①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 志賀 廉太郎

期間 後期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

演劇とは、言わば言葉の芸術である。もちろん身体表現が伴わなければ言葉も支えられないことは言うまでもないことだが、この授業では音声表現を主に考える。

私たちが普段使っている日本語にも当然、発声や発音に規則があり、その規則性に従って発話している。そうした基本をある程度理論として身に付けることは俳優にとって必要ではないだろうか。そうしたことを実践的に考えていきたい。

授業の到達目標

特に設定はしていないが、各々が自己の発話表現を自覚する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 戯曲の部分の読み合わせ
3. 日本語の音韻表
4. 外郎売りの台詞
5. /
6. /
7. 詩・短歌などの朗唱
8. /
9. /
10. 戯曲を読む
11. /

12. /
13. 音韻表を基に科白を創る
14. /
15. /

授業時間外の学習

芝居をよく観ること。

教科書・参考書等

参考書

- ・井上ひさし著「私家版 日本語文法」「自家製 文章読本」（新潮文庫）
- ・井上ひさし・平田オリザ共著「話し言葉の日本語」（小学館）
- ・田中千禾夫著「物言う術」（白水社・絶版）図書館が通販で。

成績評価

授業の取り組み、受講態度

科目名 演劇特別演習Ⅱ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 志賀 廉太郎

期間 前期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

「演じる」とは？

戯曲、演出、演技の役割分担のうち、俳優が担うのは演技であるが、俳優がその役割を果たすためには、何が必要とされるか、創作を通じて考える。

「私」が「どういう時代に生きているのか、何に興味があり、何が好きで、何が嫌いか」、俳優はそうした「私の日常」をも問われる。そして役を創造する上で、その「日常」を深く考える。

そして俳優の立場から、戯曲、演出の役割をも考える。

授業の到達目標

授業を通じて、演劇の役割や表現の可能性を考え、そして自己を認識する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 既存のテキストを使用した部分創作
3. /
4. /

5. /
6. あるテーマに即した創作
7. /
8. /
9. /
10. 自由創作 場所、プロットなどを決める。
11. 自由創作 背景、人物の設定
12. 自由創作 科白を創る
13. 自由創作 稽古、手直し
14. / / /
15. / 発表

授業時間外の学習

課題は早めによく考え、授業は基本的に発表の場と心得るように。

教科書・参考書等

参考書

- 平田オリザ著「演劇入門」「演出と演技」（講談社現代新書）

成績評価

授業の取り組み、出席日数。

科目名 マイム①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 江ノ上 陽一

期間 前期

1

○

—

履修条件

表現する身体に関心を持ち、表現者となるための熱意を行動で示すことが出来る。
意欲を持って取り組むこと。
稽古着、稽古履き着用のこと。
無断での遅刻、欠席は厳禁。

授業の概要

パントマイムとは言語という具象行為を意図的に廃し言葉さえも肉体化する芸術である。それは日常全ての言語を肉体化するという事。そのためには肉体の緊張と弛緩、分解、重心移動、動くスピードのコントロールなどを習得する事が必須である。また、肉体訓練を継続して行い、演技者として人前に立つ為には不可欠な、想いを表現できる身体の獲得を目指す。

同時に、観察を基に無意識な日常行動における身体的動作の認識作業を行い、「動き」に「想い」を込め、独自の魅力的な所作を手に入れる。基本的なテクニックを身につけた上で、「無声」、「何も無い空間」という状況の中で、想像力を駆使し身体だけの表現を体現出来るようにする。

授業の到達目標

正確なパントマイムテクニックの習得。自由で型破りな想像力を獲得する。身体だけで言葉を使わずに、自分の「想い」を他者に伝える術を知る。

授業計画

- ボディコントロールの訓練
身体のみで表現するために必要な筋力を強化する。思い描いた動きを体現するためには必要不可欠な要素なのである。
- 重心移動を学ぶ
その場で歩行（移動）を表現する方法の取得。
- 緊張と弛緩を身につける
テクニックのスキルアップは勿論、多様な感情表現を体現する。また、呼吸との関係も学ぶ。
- 観察力を養う
生徒同士の発表の場において、お互いの演技の感想を述べあうことで見聞を養う。眼で覚えるという感覚を磨く。
- 間の取り方を知る
文章に「、」や「。」があるように、身体言語にも必要不可欠な「、」や「。」を知り、活用する。

- デフォルメ
ある動きを誇張し、その事で強く印象付ける術を学ぶ。
- 既存のイメージからの脱却
発想の転換をはかり、独自の表現を生み出す。
- 仕草
様々なちょっとした動作や表情(仕草)、所作にて魅力的なキャラクターを創る。
- アンサンブル
無声での会話、ルール（時間）がある上での表現の完成。
- パフォーマンス
与えられたテーマ、音楽、時間にて短い物語をつくり表現として成立させる。

授業時間外の学習

日常生活の中で反復、復習すること。「読む」「見る」「触れる」「食べる」…全ての経験を糧にするよう、感性を研ぎ澄ませて生活すること。
基本的なストレッチや身体訓練を自主的に行うこと。

教科書・参考書等

なし。参考資料等は必要時に配布。

成績評価

- (1) 出席日数 (2) 授業への取り組み方 (3) 課題に対する評価
上記の3点を基準に下記の点を加味し総合的に判断する。
- S: ①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方の理解度が非常に高い。
②テクニックのスキルレベルが非常に高い。
③作品創作にあたりストーリー構築にオリジナリティがある。
- A: ①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方の理解度が高い。
②テクニックのスキルレベルが高い。
③独自の発想による表現ができる。
- B: ①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方をある程度理解している。
②テクニックのスキルレベルが高い。
③既存のイメージではない発想にて表現ができる。
- C: Bの①②③のうち1つは身につけている者。
- D: Bの①②③が全く身につけていない者。

科目名 アクション①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 藤田 けん

期間 後期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

現代アクション・時代アクション（殺陣）を隔週で行なう。
立ち廻りによって身体を動かすことにより、わかあがる感情を自然に表現できるよう基本を指導する。
現代アクションは、表現者として身体をつかって感情を出せるように指導する。
時代アクションは、刀など武器に感情がのるように指導する。

授業計画

- 現代アクション、時代アクションとも体をあたためることからはじめる。
- 現代アクションの基本練習
 - 殴り、蹴り、受け、よけ方など
 - 1対1での基本練習
 - 基本的な立ち廻り
 - 時代アクションの基本練習
 - 正眼、真っ向、袈裟、突き、体裁きなど
 - 1対1での基本練習
 - 基本的な立ち廻り
- 回数によってレベルを上げていく。

授業時間外の学習

自己の体調管理、体力の増進を行なう。

教科書・参考書等

動きやすい格好。

授業の到達目標

俳優として最小限の基本を身につけることや、人を怪我させないように立ち廻りをできることを目標にする。

成績評価

- S. 立ち廻りが指導でき表現もできるもの。
A. 立ち廻りが十分に表現できるもの。
B. 立ち廻りがほぼ表現できるもの。
C. 立ち廻りがあまり表現できないもの。
D. 立ち廻りが表現できないもの。

科目名 日本舞踊Ⅰ①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 藤間 希穂

期間 後期

1

○

—

履修条件

- ①稽古着は浴衣を含む和服、足袋着用、舞踊扇子持参の上参加。
- ②授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。(目安:週2~3時間程度(個人差あり))
- ③授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、肩まで届く髪の長さがあれば必ず結ぶこと。
- ④授業内に座学と実技があるが必ず両方参加のこと。
- ⑤遅刻・欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

1. 表現者として唯一無二の存在になることを確認する
 2. プロフェッショナルとしての心得とマナーの体得
 3. グローバルに活躍するために、日本人としての価値観を見出し磨く
 4. 古典芸能を通して、現場で説得力を増すスキルを身に付ける
 5. 「人前へ出ること」に必要な美意識を向上させる
- 以上を目標に「座学」と「実技」の二部構成で行う。
- ・座学では活躍しつづける表現者として必要な「価値を生む素養〜健康・品性・コミュニケーション〜」について学ぶ。美意識を高めるとともに、表現者として必須の精神性を学ぶ。また「コミュニケーションシート」を毎時間記入し、講師の助言を通して課題や解決策を見出し、自立自走を目指す。
 - ・実技では「人前で表現する者として必要な所作」を古典芸能を通じて体得する。座学で深めた理解を実際に表現する手法を学ぶ。
- 曲目 立方(たちかた) 長唄「松」
女形(おんながた) 長唄「新曲娘道成寺」または「京の四季」
(受講人数等によりどちらか1曲を講師が選定)

授業の到達目標

- ・座学を元にした筆記試験にて8割以上得点すること。
- ・実技は課題曲を人前で発表できるスキルを身に付けること。
- ・授業態度は積極的に発言するとともに傾聴を重んじ、自ら考え行動すること。
- ・コミュニケーションシートでは自己成長を促す「得意分野」と「改善点」を見出し表現できること。
- ・出席日数に関しては大学の規定に準ずる。

授業計画

◆授業タイムスケジュール

10:	20:	30:	40:	50:	60:	70:	80:	90:
出席(10分)	座学(25分)	知恵袋(5分)	所作(10分)	男子 松(40分)				
				女子 松+新曲娘道成寺(40分)				

※座学がない進行の場合、知恵袋が繰り上がり、実技時間が25分長くなります

◆授業進行表

日付	座学	実技	所作
第1回	オリエンテーション	松、新曲娘道成寺の助手による実演	着付け、着み方、立ち居振る舞い
第2回	価値観 choice 自己紹介 知恵袋1	男子:松 10C+手振り 女子:松 10C+新編 基本動作	着付け着み方チェック、立ち居振る舞い、開閉、構え、すり足
第3回	自己分析シート 知恵袋2	男子:松 20C+手振り 女子:松 20C+新編 基本動作	立居振舞、帯結びテスト
第4回	価値を生む 知恵袋3	男子:松後向き左手振り+手振り 女子:松後向き左手振り+新編伊達者	立居振舞、構え
第5回	ディスプレイルール 知恵袋4	男子:松前半最後+手振り 女子:松前半最後+新編 1番	立居振舞、指足
第6回	継続と行動1 知恵袋5	男子:松前半復習+手振り 女子:松前半復習+新編1番復習	立居振舞、扇開閉
第7回	継続と行動2 知恵袋6	男子:松らし髪髷松+新編 封じ文 女子:松らし髪髷松+新編 封じ文	立居振舞、扇振り方確認
第8回	継続と行動3 知恵袋7	男子:松さつ+手振り 2番最後 女子:松さつ+手振り 2番最後	立居振舞、裏返し
第9回	継続と行動4 知恵袋8	男子:松らし最後+手振り 女子:松さつ+手振り 3番	立居振舞、要ほどき
第10回	コミュニケーションワーク 知恵袋9	フォーメーション練習1	振りに役立つ立居振舞技1
第11回	プライオリティセーリング 知恵袋10	フォーメーション練習2	振りに役立つ立居振舞技2
第12回	自己計画表作成提出 知恵袋11	フォーメーション練習3	振りに役立つ立居振舞技3
第13回	コミュニケーションワーク 知恵袋12	実技テスト用練習1	
第14回	プレテスト	実技テスト用練習2	
第15回	本テスト	実技テスト(スタジオ発表)	

※予定は進行状況により変更される場合があります

授業時間外の学習

- ・着付け、所作が正しく出来るように稽古する。
- ・習った曲と振りが一致するように稽古する。
- ・振り入れが終了したら、全員で1作品を作る意識を持ち稽古する。

教科書・参考書等

どちらも授業時間内に配布。

成績評価

筆記試験・実技試験・授業態度(取組み)・コミュニケーションシート・出席日数を総合して満点100点にて評価。
S 100点~95点 A 94点~90点
B 89点~80点 C 79点~70点
D 69点以下
※値は絶対値ではなく相対値のため変化する場合あり。

科目名 日本舞踊Ⅱ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 藤間 希穂

期間 前期

1

○

—

履修条件

- ①日舞Ⅰを履修済の方に限る。
- ②稽古着は浴衣を含む和服、足袋着用、舞踊扇子持参の上参加。
- ③授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。(目安:週2~3時間程度(個人差あり))
- ④授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、肩まで届く髪の長さがあれば必ず結ぶこと。
- ⑤授業内に座学と実技があるが必ず両方参加のこと。
- ⑥遅刻・欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 日舞Ⅱで目標にした1~5の目標をさらに深耕し、「座学」と「実技」の二部構成で行う。
- ・座学では「日本舞踊Ⅰ」にて学んだ表現者の心得(品性・健康・コミュニケーション能力・美意識)をさらにパーソナルブランディングの構築を意識したプロフェッショナルとしての素養を身に付ける。また「コミュニケーションシート」を毎時間記入し、講師の助言を通して課題や解決策を見出し、自立自走を目指す。
 - ・実技では座学で学ぶロジックに加え、実技公開テストで発表する古典(全員参加)と創作(自由参加)の演目の構築を通して表現者に必要な所作を学ぶ。
- 曲目 立方(たちかた) 長唄「青海波」
女形(おんながた) 長唄「あやめ浴衣」または常磐津「紅売り」
(受講人数等によりどちらか1曲を講師が選定)
創作 講師が企画・振付・演出する創作舞踊
(例:「櫻姫」「かぐやの君」等)

授業の到達目標

- ・座学を元にした筆記試験にて8割以上得点すること。
- ・実技は課題曲を舞台上で発表できるスキルを身に付けること。
- ・授業態度は積極的に発言するとともに行動変容も伴い、傾聴の結果共同作品に良い効果を生むこと。
- ・コミュニケーションシートでは自己課題の抽出、課題解決提案が出来、実行及び言語表現できること。
- ・出席日数に関しては大学の規定に準ずる。

授業計画

◆授業タイムスケジュール

10:	20:	30:	40:	50:	60:	70:	80:	90:
出席(10分)	座学(25分)	知恵袋(5分)	所作(10分)	男子 青海波(40分)				
				女子 あやめ浴衣 or 紅売り or 菊の榮				

※座学がない進行の場合、知恵袋が繰り上がり、実技時間が25分長くなります

◆授業進行表

日付	座学	青海波	※菊の榮の進行は状況を見て考慮 あやめ浴衣 or 紅売り
第1回	自己価値観復習	松島の一かつしき	あ:飾り兜の~白鹿ね 紅:紅丸の~たしなみはの前
第2回	礼儀1・1分間スピーチ	梅の花見~あかぬなる	あ:暮さし~浴衣浴衣 紅:たしなみは~意の色
第3回	礼儀2・1分間スピーチ	花の跡~船の中	あ:古代様様の~浴衣浴衣 紅:意の色の後~京舞
第4回	礼儀3・1分間スピーチ	あらめで鯛は~初めしより	あ:髪の色つぎ~好いた同士 紅:船の貝~洗しあり
第5回	礼儀4・1分間スピーチ	蛭子の神の~漁火の	あ:命と鯛に~糸柳 紅:懐けを~舞こきな
第6回	礼儀5・1分間スピーチ	ちらりちらら~様に	あ:めくる杯~雲村と 紅:足毛~伊達のの前
第7回	礼儀6・1分間スピーチ	波も静かに~栄ゆく寿の春を	あ:染るる~最後 紅:伊達の~最後
第8回	礼儀7・1分間スピーチ	なほ幾千代も~最後	あ:全体通し 紅:全体通し
第9回	礼儀8・1分間スピーチ	フォーメーション組み	フォーメーション組み
第10回	礼儀9・1分間スピーチ	フォーメーション練習1	フォーメーション練習1
第11回	礼儀10・1分間スピーチ	フォーメーション練習2	フォーメーション練習2
第12回	テスト直前対策	フォーメーション練習3	フォーメーション練習3
第13回	プレテスト	実技公開テスト用練習1	実技公開テスト用練習1
第14回	本テスト	実技公開テスト用練習2(場当たり・通し稽古)	実技公開テスト用練習2
第15回	オーディション対策	オーディション授業 1分間の見栄えがする振付	オーディション授業 現場で望まれる所作の勉強

※予定は進行状況により変更される場合があります
※7月に行われる実技公開テストに参加の方のみ単位取得となります。
不参加の場合単位取得となりませんのでご注意ください

授業時間外の学習

- ・課題に沿って1分間スピーチをオーディション対策を意識して構築・行動できるように稽古する。
- ・実技公開試験に向けて、振りや構成はもとより、お客様を楽しませるための美意識を持って稽古する。
- ・個人のスキルアップも勿論だが、発表する演目全体のボトムアップを考慮し稽古する。

教科書・参考書等

どちらも授業時間内に配布。

成績評価

筆記試験・実技試験・授業態度(取組み)・コミュニケーションシート・出席日数を総合して満点100点にて評価。
S 100点~95点 A 94点~90点 B 89点~80点 C 79点~70点
D 69点以下
※値は絶対値ではなく相対値のため変化する場合あり。

科目名 狂言Ⅰ①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 善竹 富太郎

期間 後期

1

○

—

履修条件

特になし。
音楽専攻日本音楽専修は必修。

授業の概要

- ・腹式呼吸でしっかり声を出す訓練から始める。
- ・狂言の謡を謡い、身体を動かす訓練の舞を舞う。
- ・狂言「附子」または「呼声」を実習する。
- ・三次元の空間に自分の体がどのようにあるべきか演劇の基本が感得できるだろう。

授業の到達目標

大きな声を出すこと。
まっすぐ前を向いて(下、横を見ずに)摺り足で前に進み元の位置に正しく戻ることができること。
「左右」の完成。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(声の出し方)「盃」の謡①
- 第2回 「盃」の謡② お話「声楽と謡」のちがひ
- 第3回 「盃」の謡③ お話「すりについて」「盃」の舞①
- 第4回 「泰山府君」謡① 「盃」謡④ 「盃」の舞②
- 第5回 「泰山府君」謡② 「盃」謡⑤ 「盃」の舞③
- 第6回 「土車」の謡① 「泰山府君」謡③ 「盃」の舞④
- 第7回 「土車」の謡② 「泰山府君」謡④ 舞の試験⑤
- 第8回 「土車」の謡③ 「泰山府君」謡⑤ 泰山府君の舞①
- 第9回 「土車」の謡④ 泰山府君の舞②
- 第10回 「土車」の謡⑤ 泰山府君の舞③
- 第11回 土車の舞① 泰山府君の舞④
- 第12回 土車の舞② 泰山府君の舞⑤
- 第13回 土車の舞③
- 第14回 土車の舞④
- 第15回 「土車」試験

授業時間外の学習

授業内容をふまえ、自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

「狂言」ガイドブック(三省堂)

成績評価

平常点(授業への取組み・受講態度)と実技。

- | | | |
|---|----------|----------|
| S | 出席点90%以上 | 実技点90点以上 |
| A | 出席点80%以上 | 実技点80点以上 |
| B | 出席点70%以上 | 実技点65点以上 |
| C | 出席点50%以上 | 実技点50点以上 |
| D | 出席点49%以下 | 実技点49点以下 |

科目名 狂言Ⅱ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 善竹 富太郎

期間 前期

1

○

—

履修条件

「狂言Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
音楽専攻日本音楽専修は必修。

授業の概要

- ・腹式呼吸でしっかり声を出す訓練から始める。
- ・狂言の謡を謡い、身体を動かす訓練の舞を舞う。
- ・狂言「附子」または「呼声」を実習する。
- ・三次元の空間に自分の体がどのようにあるべきか演劇の基本が感得できるだろう。

授業の到達目標

大きな声を出すこと。
まっすぐ前を向いて(下、横を見ずに)摺り足で前に進み元の位置に正しく戻ることができること。
「左右」の完成。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
1年後期からの復習「盃」「泰山府君」「土車」の謡
- 第2回 「雪山」の謡 「土車」の舞の復習
- 第3回 「雪山」の謡 「土車」の舞の復習 「雪山」の舞①
- 第4回 「十七八」の謡 「雪山」の謡の復習 「雪山」の舞②
- 第5回 「十七八」の謡の復習 「雪山」の舞③
「雪山」の謡の復習

- 第6回 「宇治の晒あび」の謡① 「雪山」の舞試験
- 第7回 「宇治の晒」の謡② 「十七八」の舞①
- 第8回 狂言「呼声こゑ」の詞①=本読み① 「十七八」の舞②
- 第9回 狂言「呼声」の詞② 「宇治の晒」の謡③
「十七八」の舞③
- 第10回 狂言「呼声」の詞③ 「暁の明星」の謡①
「十七八」の試験
- 第11回 狂言「呼声」の立ち稽古① 「暁の明星」の謡②
- 第12回 狂言「呼声」の立ち稽古② 「暁の明星」の舞①
- 第13回 狂言「呼声」の立ち稽古③ 「暁の明星」の舞②
- 第14回 狂言「呼声」の立ち稽古④ 「暁の明星」の舞③
- 第15回 「暁の明星」試験

授業時間外の学習

授業内容をふまえ、自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

「狂言」ガイドブック(三省堂)

成績評価

平常点(授業への取組み・受講態度)と実技。

- | | | |
|---|----------|----------|
| S | 出席点90%以上 | 実技点90点以上 |
| A | 出席点80%以上 | 実技点80点以上 |
| B | 出席点70%以上 | 実技点65点以上 |
| C | 出席点50%以上 | 実技点50点以上 |
| D | 出席点49%以下 | 実技点49点以下 |

科目名 ドラマリーディング A

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 前期

1

○

—

履修条件

朗読、朗読劇、アフレコ（アテレコ）、ラジオドラマ、リーディング劇など幅広く興味があり、「声による表現の基礎」を学びたい者。声優のスキルを身につけたい者。

授業の概要

俳優として、リーディング劇に対応できるスキルを身につける。そのための「声による表現の基礎」を学ぶための授業を展開する。様々なジャンルを体験しながら、表現力を身につける。

授業の到達目標

台詞の①明瞭さ②感情表現③間の取り方④デフォルメの仕方⑤強弱のつけ方⑥遅速のつけ方などのスキルを身につけることができる。授業への真摯な取り組みができる。協力する姿勢をつけることができる。

授業計画

※状況を見て、順番が入れ替わる場合もあります。

- 1、ガイダンス
- 2、朗読①「童話」の読み聞かせ
- 3、朗読②「小説」の読み聞かせ
- 4、朗読③「詩」の読み聞かせ
- 5、朗読劇①「漫画」を用いた実習
- 6、朗読劇②「台本」を用いた実習
- 7、朗読劇③「台本」を用いた実習
- 8、アフレコ①「洋画」を用いた実習
- 9、アフレコ②「洋画」を用いた実習
- 10、ラジオドラマ① 課題発表・読み
- 11、ラジオドラマ② キャスティング
- 12、ラジオドラマ③ 稽古1
- 13、ラジオドラマ④ 稽古2
- 14、ラジオドラマ⑤ 上演・収録
- 15、まとめ

授業時間外の学習

与えられた課題を真摯にこなし、予習・復習し、自らのスキルアップを図ること。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 ドラマリーディング B

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 後期

1

/

—

履修条件

ドラマリーディングA（基礎クラス）を受講していることが望ましい。俳優としてのリーディングスキルを身につけ、「声による表現の応用力」を学びたい者。声優のスキルを身につけたい者。

授業の概要

俳優として、リーディング劇に対応できるスキルを身につける。そのための「声による表現の応用力」を学ぶための授業を展開する。リーディング劇の上演を行う。

授業の到達目標

台詞の①明瞭さ②感情表現③間の取り方④デフォルメの仕方⑤強弱のつけ方⑥遅速のつけ方などのスキルをより高度に身につけることができる。授業への真摯な取り組みができる。協力する姿勢をつけることができる。

授業計画

※状況を見て、順番が入れ替わる場合もあります。

- 1、ガイダンス
- 2、リーディング劇のスタイル・方法について
- 3、リーディング劇①課題発表・稽古（個人練習）
- 4、リーディング劇②稽古（個人練習）
- 5、リーディング劇③キャストイング
- 6、リーディング劇④稽古1
- 7、リーディング劇⑤稽古2
- 8、リーディング劇⑥稽古3
- 9、リーディング劇⑦中間発表会（グループごとの鑑賞会）
- 10、リーディング劇⑧稽古4
- 11、リーディング劇⑨稽古5
- 12、リーディング劇⑩稽古6
- 13、リーディング劇⑪稽古7
- 14、上演・収録
- 15、まとめ

授業時間外の学習

与えられた課題を真摯にこなし、予習・復習し、自らのスキルアップを図ること。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 アフレコ実技Ⅰ

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 小金丸 大和

期間 前期

1

○

—

履修条件

健康管理に十分留意し、遅刻・欠席のないようにすること。受け身の姿勢ではなく、積極的な研究心を持って講義を受講すること。受講人数によっては実技指導を受けられない回も有り得るが、その際は他者に対する指導・ダメ出しを良く聞き、「見取り稽古」を行う事。

収録でより良い演技が出来るよう、講師の指導に基づく自主学習を行う事が望ましい。

声優演技を題材にした講師の著書「VOICE CUSSION」(小学館クリエイティブ刊)を読んでおく事。

授業の概要

声優として必要な演技術を学ぶ。
具体的には発声・発音・アーテュレーションの見直しから始まり、基礎訓練の方法を知り、アフレコ(アフターレコーディング)における台詞術、役作り、脚本の読解、演技プランの方法について研究を進めて行く。

また、現場での礼儀作法、マイクワーク、専門用語の理解など、実践的な技術の習得を目指す。

「空間感覚・距離感の確立」

「呼吸領域を意識し、身体を鳴らす事を覚える」

「声にパーソナリティを持たせる」

上記三点を柱とし、実際にアニメーション映像にアフレコを行ない、それを視聴してみる事で、アフレコにはどのような技術・能力が必要かを考える。

授業の到達目標

将来、プロの声優として活動する為の演技術を身につける。

授業計画

- 1 声優演技について
- 2 発声・発音・アーテュレーションの見直し
- 3 声優の基礎訓練の方法
- 4 呼吸領域の理解

- 5 基礎能力テスト
- 6 マイクワークの練習
- 7 アフレコ脚本の読み方 特殊表記の解説
- 8 キャラクター表現について
- 9 声優に必要な専門知識のまとめ
- 10 アフレコ実習①
- 11 アフレコ実習②
- 12 アフレコ実習③
- 13 アフレコ実習④
- 14 アフレコ実習⑤
- 15 前期のまとめ

教科書・参考書等

教科書 教材プリント、台本は授業時に配布。
参考資料 「VOICE CUSSION」(小学館クリエイティブ刊)を読んでおく事。
「さんいんのかい」DVD「新選組」「孫悟空」(VAPより発売)

成績評価

受講態度、及び実技試験における技術の習得状況において評価する。追加試験、補習授業は原則的に行わないものとする。

- ・成績は、実技試験の得点を元に、ボーダーライン上の場合は出席状況、受講態度等を加味して評価する。
- S: 90～100点(講義内容をほぼ完璧に理解し、声優演技技術の基礎を応用出来ている)
- A: 80～89点(講義内容を理解し、かつ実践出来るレベルに達している)
- B: 60～79点(講義内容を理解する事が出来ている)
- C: 50～59点(講義内容を理解するに至っては無いが、努力と研究が見られる)
- D: 50点未満(講義内容を理解していない、出席状況にも問題がある)

科目名 アフレコ実技Ⅱ

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 小金丸 大和

期間 後期

1

○

—

履修条件

健康管理に十分留意し、遅刻・欠席のないようにすること。
前期にアフレコ実技Ⅰを履修し、単位を取得していること。
アフレコ実技Ⅰの単位を取得していない者は、別途レポートの提出を条件とする。

受講人数によっては実技指導を受けられない回も有り得るが、その際は他者に対する指導・ダメ出しを良く聞き、「見取り稽古」を行う事。

収録でより良い演技が出来るよう、自主学習を行う事が望ましい。
声優演技を題材にした講師の著書「VOICE CUSSION」(小学館クリエイティブ刊)を読んでおく事。

授業の概要

声優として必要な演技術を学ぶ。
アフレコ実技Ⅰで習得した技術論を分析し、応用し、より具体的にしていく。
「空間感覚・距離感の確立」
「呼吸領域を意識し、身体を鳴らす事を覚える」
「声にパーソナリティを持たせる」

上記三点を柱とし、実際にアニメーション映像にアフレコを行ない、それを視聴してみる事で、アフレコにはどのような技術・能力が必要かを考える。
ボイスサンプルを実際に作成し、収録、配布する。
自分の声の持っている特質、長所、弱点を知る。

授業の到達目標

将来、プロの声優として活動する為の演技術を身につける。
プロの現場オーディション、所属オーディションで合格出来る実力を養成する。

授業計画

- 1 声優演技について 復習
- 2 神経の多数化について(座学)
- 3 アフレコ実習①(基本理論)
- 4 アフレコ実習②
- 5 アフレコ実習③
- 6 オーディオドラマ演技① マイクワークの実践

- 7 オーディオドラマ演技②
- 8 オーディオドラマ演技③
- 9 アフレコ実習④(キャラクター表現理論)
- 10 アフレコ実習⑤
- 11 アフレコ実習⑥
- 12 プロダクションマネージャーによる質疑応答
- 13 ボイスサンプル原稿作成
- 14 ボイスサンプルリハーサル、収録
- 15 ボイスサンプル視聴と講評

授業時間外の学習

目標とするプロの声優・俳優の出演しているアニメーション作品を複数視聴する。

各プロダクション・養成所・研究所の情報を集め、どの事務所がどの方面の仕事に強いかを研究しておく、卒業後の進路を決定する時の指針とする。

教科書・参考書等

教科書 教材プリント、台本は随時授業時に配布
参考資料 「VOICE CUSSION」(小学館クリエイティブ刊)を読んでおく事。「さんいんのかい」DVD「新選組」「孫悟空」(VAPより発売)

成績評価

受講態度、及び実技試験における技術の習得状況において評価する。追加試験、補習授業は原則的に行わないものとする。

- S: 90～100点(講義内容をほぼ完璧に理解し、覚えた声優演技技術を応用出来ている)
- A: 80～89点(プロの声優として作品に出演出来るレベル)
- B: 60～79点(プロダクション所属オーディション等に合格出来るレベル)
- C: 50～59点(講義内容を理解し、理論としての声優演技基本を理解出来た者)
- D: 50点未満(講義内容を理解出来ない、実践する事が出来ない者)

科目名 クラシック唱法Ⅰ①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司

期間 後期

1

/

—

履修条件

なし。

第8回～第15回 全員でのヴォイストレーニング及び個々のヴォイストレーニング
各回、合唱曲を教材とし、ハーモニー感覚を身につける。

授業の概要

クラシックの発声の基本は「響き」にある。大オーケストラの伴奏であっても、マイクも使わずに声を通るのは全身が響いているからである。いかに声を響かせ遠くに飛ばすか、それは芝居のセリフにおいても同じである。

この授業では、響きを意識することに重点を置いて発声を学んでいく。なお、独唱曲ばかりでなく、ハーモニー感覚を身につけるため、合唱曲も取り上げる。

授業時間外の学習

各授業のテーマについて、次の授業までに、各自実践的に復習しておくこと。

また、個人ヴォイストレーニングで与えられた課題は日々の訓練として活用していくこと。

授業の到達目標

日本語による歌唱のハーモニー感覚を身につける。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 ヴォイス・トレーニング 歌うための呼吸について
- 第3回 ヴォイス・トレーニング 声と響きについて
- 第4回 ヴォイス・トレーニング 発音(母音)について
- 第5回 ヴォイス・トレーニング 発音(子音)について
- 第6回 ヴォイス・トレーニング 言葉について
- 第7回 ヴォイス・トレーニング 声&言葉&表現

成績評価

- S 授業に全て参加し、声作りのための努力を継続的に行った者。
- A 授業に積極的に参加し、声作りのための努力を継続的に行った者。
- B 授業に参加し、声作りの努力をした者。
- C 授業への欠席はあったが、声作りの努力をした者。
- D 授業への欠席が目立った者。

科目名 クラシック唱法Ⅱ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司

期間 前期

1

/

—

履修条件

「クラシック唱法Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業計画

- 1 ガイダンス、試聴会
- 2 試聴会
- 3 合唱曲の練習
- 4 実技公開試験の選曲決定、公開レッスン形式の個別指導
- 5～8 公開レッスン形式の個別指導及び合唱練習
- 9～13 演技パフォーマンスを加えた歌唱指導及び合唱練習
- 14 通し稽古
- 15 G.P

授業の概要

「クラシック唱法Ⅰ」で学んだことを基礎に、発声することから表現することへレベルアップしていく。日本語の歌を取り上げ、いかに良い発声で日本語を美しく歌えるようにしていくかを研究する。実技公開試験に向けては、2～3人で1曲を割り振るので、与えられた曲を協力して演出し、歌と演技によるパフォーマンスとして発表する。

授業時間外の学習

与えられた曲に対し、各グループごとに予習復習を必ず行うこと。また、その曲に対するイメージをしっかりと持ち、演出を考えていくこと。

授業の到達目標

ひとりひとりが歌うことに自信を持てるようにする。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。

成績評価

- S 授業に100%出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- A 授業に90%以上出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- B 授業に80%以上出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- C 授業に70%以上出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- D 授業への出席が悪く、与えられた曲も消化できなかった。

科目名 ミュージカルトレーニングA①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 信太 美奈

期間 後期

1

○

—

履修条件

- ・譜面が読めなくても、課題に対して譜面を読む努力ができる人
- ・LA(レッスンアシスタント)による補習に毎週参加すること
「ミュージカルトレーニング①」履修者は「ミュージカルトレーニング-LA①」、
「ミュージカルトレーニング②」履修者は「ミュージカルトレーニング-LA②」
に参加すること
- ・課題のナンバーは次週には暗譜で歌えるようにする
- ・身体のラインがわかる練習着を着用
- ・ナンバーに合う練習着を着用(練習用スカートなど)
- ・シューズはジャズシューズと女子はヒールのあるダンスシューズ
- ・顔面が見えるヘアスタイルで参加

- 9. /
- 10. /
- 11. /
- 12. /
- 13. /
- 14. /
- 15. 試験、まとめ

注:毎回の計画の他に、感覚をときずまずトレーニングもおこなう

授業の概要

ミュージカルというジャンルにおいて重要な「歌」と「動き」を中心に学んでいく。

筋肉と心(身体を)十分に使った発声でミュージカルナンバーを歌えるように。2年次で選ぶコースとは関係なく、声・歌・身体を使った表現方法を学ぶ。ナンバーによってはセリフ、ダンスも共に学習する。

授業時間外の学習

復習は必須。毎日歌う。毎日踊る。日々の個人でやるレッスンは、あたり前になるまで。舞台を見る。CDを聞く。あらゆるジャンルの音楽を聞きセンスを取り入れる努力をする。

教科書・参考書等

授業中に資料配布。
CD、ミュージカル作品を見たり聞いたりして欲しい。

授業の到達目標

- ・筋肉と心が組み合わさった、表現力のある歌、ダンスへ。
- ・ナンバーによってはダンス、ステージングなどの動きを伴った表現をする。
- ・試験は公開になる場合もある。

成績評価

- S 出席率100% 意欲があり、課題の予習、復習をしっかり行い、成果がある人。
A 出席率90% 意欲はある。課題をやってまあまあ成果が見られた人。
B 出席率80% 課題には向きあうが、向上していない人。
C 出席率70% 課題に向き合う精神が見られない。
D 出席率が悪く、態度も悪い。

授業計画

1. 自己紹介
2. 課題とするナンバーを、身体を使った歌い方で歌えるようにする
3. ナンバーの歌詞の理解を深めて歌う
4. ナンバーに必要なステージング、ダンスなども含めた表現
5. 以降2~4のくり返し
6. /
7. /
8. /

科目名 ジャズダンスA①③

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三村 みどり

期間 前期

1

○

—

履修条件

LA(レッスンアシスタント)による補習に毎週参加すること。
〔「ジャズダンスA①」履修者は「ジャズダンスA-LA①」、「ジャズダンスA③」履修者は「ジャズダンスA-LA③」に参加すること〕

授業計画

- ・自分の肉体の長所、短所を知る。
- ・全身または部分でリズムをとる。
- ・床を踏む、身体を引き上げるといった事を学ぶ。
- ・身体の軸を覚え、身体をコントロールして動くことを知る。
- ・筋肉を張ったり、緩めたり、表現の幅を広げる。
- ・基本的なステップを覚え、全身を使って動けるようにする。
- ・振り付けを覚えて、音、振り付けで感じた感性をプラスし、踊りで自分や作品を表現していく。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- ・身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- ・部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ・ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- ・振りを覚えて、表現、感性を磨く。

授業時間外の学習

出来ない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。欠席した場合も事前に習っておくこと。
毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと)

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

授業の到達目標

それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性表現を習得する。

成績評価

授業への取組み・授業態度及び実技試験で評価する。
※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
「授業出席とLA補習参加の合計回数、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていないと正しく理解すること」

科目名 ジャズダンス A ②④

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 畔柳 小枝子

期間 前期

1

○

—

履修条件

LA (レッスンアシスタント) による補習に毎週参加すること。
〔「ジャズダンスA②」履修者は「ジャズダンスA-LA②」、「ジャズダンスA④」履修者は「ジャズダンスA-LA④」に参加すること〕

授業の概要

最近、ダンスは身近なものになり、殆んどの人々が経験をしたことがある・得意である。という状況になっている。その為、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の訓練を行う。授業で使用する曲等で、ジャズダンスの特長であるリズム感を養い、コンビネーションで振付を覚えて、音楽に合った表現を踊り、どう見せるか?見せたいか?見えたか?を考えながら、身体表現の訓練を行う。

授業の到達目標

到達目標は各自のスキルアップが目標であるが、基礎知識・基礎訓練が中心でもあるため、自分自身の身体を知り、自信をつける反面欠点を認識し、トレーニング方法を見つける事も重視したい。数回、小テストを行う事により、本人の得意・不得意を知り、自分自身の成長に気付くことができる。

授業計画

- ①ストレッチ・エクササイズ中心 (正しいストレッチの仕方)。音のとおり方・のり方。コンビネーション①
- ②ストレッチ・エクササイズ中心。音のとおり方・のり方。コンビネーション①
- ③アイソレーション・クロスフロアー重視。ストレッチ・エクササイズ。軸のとおり方。コンビネーション①
- ④アイソレーション・クロスフロアー重視。ストレッチ・エクササイズ。軸のとおり方。コンビネーション①
- ⑤コンビネーション①重視
- ⑥ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑦ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑧ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑨ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。

- コンビネーション②
⑩コンビネーション②重視
⑪基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
⑫基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
⑬基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
⑭基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
⑮まとめ
※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがあります。

授業時間外の学習

- 各自、柔軟、筋力トレーニングは行ってほしい。
- 小テストを行うので各自練習をしておくこと。
- 毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと)

教科書・参考書等

- ・稽古着を着用。 ・ダンスシューズ (ジャズシューズ等) を使用。

成績評価

- 授業への取組み・授業態度・小テスト・期末テストの状況で評価する。
- S 振付を正確に覚え、優れた技術・表現力を活かし踊れた者。
- A 音に合わせて表現でき、研究、練習した者。
- B 音に合わせて表現できた。注意点を意識できた者。
- C 振付を覚えた。又は努力した者。
- D 振付を覚え、努力しなかった者。出席日数が足りず受験資格がない者
- ※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
- LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
- 「授業出席とLA補習参加の合計回数が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

科目名 ジャズダンス B ①③

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三村 みどり

期間 後期

1

○

—

履修条件

LA (レッスンアシスタント) による補習に毎週参加すること。
〔「ジャズダンスB①」履修者は「ジャズダンスB-LA①」、「ジャズダンスB③」履修者は「ジャズダンスB-LA③」に参加すること〕

授業の概要

- 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
- ・身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う
 - ・部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う
 - ・ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ
 - ・振りを覚えて、表現、感性を磨く

授業の到達目標

前期の取得した技術をより高め、踊りの質を高める。

授業計画

- ・前期の授業の確認
- ・より軸を強くし動きが大きく、安定した踊りが出来るようになる
- ・曲調や動きの流れ等を感じ取り、表現の幅を広げていく
- ・同じ振りを踊り込む事により、作品と向かい合い自分の感性をプラスした表現が出来るようになる

授業時間外の学習

- 出来ない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。欠席した場合も事前に習っておくこと。
- 毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと)

教科書・参考書等

- ・稽古着を着用すること。

成績評価

- 授業への取組み・授業態度及び実技試験で評価する。
- ※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
- LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
- 「授業出席とLA補習参加の合計回数が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

科目名 ジャズダンスB②④

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 畔柳 小枝子

期間 後期

1

○

—

履修条件

LA (レッスンアシスタント) による補習に毎週参加すること。
〔「ジャズダンスB②」履修者は「ジャズダンスB-LA②」、「ジャズダンスB④」履修者は「ジャズダンスB-LA④」に参加すること〕

授業の概要

最近、ダンスは身近なものになり、殆んどの人々が経験したことがある・得意であるという状況になっている。その為、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとてども大切になる。この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の訓練を通して、表現方法を見つけていく。

ストレッチエクササイズ・アイソレーション・クロスフロアー・コンビネーションで行う。

授業の到達目標

到達目標は、各自のスキルアップが目標である。

柔軟・筋力トレーニングを通して、各自のトレーニング方法を見つけ、動きの範囲を広げることで、表現方法に生かし、更にテクニックをつける事も目標とする。小テストを行うことにより、自分自身の成長に気付くことができる。

授業計画

- ①ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ②ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ③ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ④ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ⑤コンビネーション①中心。
- ⑥クロスフロアー中心 (ステップ・ターン・ジャンプ)。基礎トレーニング。コンビネーション②
- ⑦クロスフロアー中心 (ステップ・ターン・ジャンプ)。基礎トレーニング。コンビネーション②
- ⑧クロスフロアー中心 (ステップ・ターン・ジャンプ)。基礎トレーニング。コンビネーション②
- ⑨クロスフロアー中心 (ステップ・ターン・ジャンプ)。基礎トレーニング。コンビネーション②

- ⑩コンビネーション②中心。
 - ⑪動きの見せ方について考えて踊る。
 - ⑫動きの見え方について考えて踊る。
 - ⑬音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を考える。
 - ⑭音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を表わす。
 - ⑮まとめ
- ※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがあります。

授業時間外の学習

各自、柔軟・筋力トレーニングは行ってほしい。
小テストを行うので、各自練習をしておくこと。
毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと。)

教科書・参考書等

・ダンスシューズ (ジャズシューズ等) を使用。 ・稽古着を着用。

成績評価

授業への取組み・授業態度・小テスト・期末テストの状況で評価する。
S 身体と精神のコントロールができ、振付を正確に覚え、優れた技術・表現力で踊ることができた者。
A 音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者。
B 音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者。
C 振付を覚えて踊れる。又は成果がでた者。
D 振付を覚え練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者。
※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
「授業出席とLA補習参加の合計回数が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていないといけない」と正しく理解すること。

科目名 ジャズダンスC①③

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 渡辺 美津子

期間 前期

1

○

—

履修条件

LA (レッスンアシスタント) による補習に毎週参加すること。
〔「ジャズダンスC①」履修者は「ジャズダンスC-LA①」、「ジャズダンスC③」履修者は「ジャズダンスC-LA③」に参加すること〕

授業の概要

ストレッチ、筋肉トレーニング、アイストレーションで基本的な動きをマスターしたら、重心の移し方、体の引き上げ方、ハイレベルなバランス感覚を身につけ、質のよいターン (回転)、より確実なビルドアップを目指していく。クラシックバレエ、ジャズダンス、タップダンス、HIPHOP等の基本的なステップを使って、個人のレベルに合わせた振付を覚えてもらうが、最終的にはテクニックのみならず、表現力も身につけていきたい。表現力の幅を広げる意味でも、HIPHOPジャズ、シアタージャズ、モダンジャズなどいろいろなジャンルに挑戦していきたい。

授業の到達目標

振付を正確に踊る。ニュアンスを感じることが出来る。自己表現が出来ること。

授業計画

- 1 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-1
- 2 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-2
- 3 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-3
- 4 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-4
- 5 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-5
- 6 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-まとめ
- 7 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-1
- 8 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、

- 9 コンビネーション②-2
- 10 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-3
- 11 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-4
- 12 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-5
- 13 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-まとめ
- 14 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②
- 15 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②
- 16 実技試験、コンビネーション①、②

授業時間外の学習

毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと)

教科書・参考書等

稽古着を着用。バレエ基礎、コンビネーションは裸足で行うこともあるのでフータータイツ不可。ジャズダンスシューズ、ジャズスニーカー着用。

成績評価

(1)授業への取組み、(2)授業態度、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。
S 実技試験において、評価が90点以上で、優れた表現力のある者。
A 実技試験において、評価が80点以上で、表現力のある者。
B 実技試験において、評価が60点以上の者。
C 実技試験において、評価が50点以上の者。
D 実技試験において、評価が49点以下の者。
※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
「授業出席とLA補習参加の合計回数が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていないといけない」と正しく理解すること。

科目名 ジャズダンスC②④

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 畔柳 小枝子

期間 前期

1

○

—

履修条件

LA(レッスンアシスタント)による補習に毎週参加すること。
 「ジャズダンスC②」履修者は「ジャズダンスC-LA②」、「ジャズダンスC④」履修者は「ジャズダンスC-LA④」に参加すること

授業の概要

欧米で一般的に実施しているレッスン方法を採用。
 ダンスに必要な柔軟性・筋力トレーニング・基本的な身体の使い方・リズムのとり方・乗り方を学ぶ。
 色々な種類の音楽を用いて、その音色・リズム・アクセントを身体を使って表現することを考える。
 ダンスを通して、身のこなしと感受性豊かな表現力を身につける。

授業の到達目標

肉体・精神共にコントロールすることを身につけ、踊ることを通して表現豊かなパフォーマーを目指す。

授業計画

- ① ストレッチ・エクササイズ(正しいストレッチの仕方)・コンビネーション①
- ② ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(リズムのとり方・乗り方)・コンビネーション①
- ③ ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(正しい姿勢・軸のとり方)・コンビネーション①
- ④ ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(軸、バランスのとり方)・コンビネーション①
- ⑤ コンビネーション①重視
- ⑥ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑦ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑧ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑨ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑩ コンビネーション②重視
- ⑪ 音の音色・アクセントのつけ方、見せ方。コンビネーション③

- ⑫ 音の音色・アクセントのつけ方、見せ方。コンビネーション③
 - ⑬ 更に踊りの表現方法を考える。コンビネーション③
 - ⑭ 更に踊りの表現方法を考える。コンビネーション③
 - ⑮ コンビネーション③重視
- ※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがあります。

授業時間外の学習

各自、柔軟、筋力トレーニングは行なってほしい。
 小テストを行うので振付の練習をし、その音やイメージの表現を研究しておく。
 毎回、授業と並行して「LA補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(LA補習はLAが指導・監督するのでその指示に従うこと)

教科書・参考書等

稽古着を着用。ダンスシューズ(ジャズシューズ等)を使用。

成績評価

授業への取り組み・授業態度・小テスト・期末テストの状況で評価する。
 S 身体と精神のコントロールができ、振付の意図を考え、優れた技術・表現力で躍ることができた者。
 A 音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者。
 B 音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者。
 C 振付を覚えて踊れる。又は成果がでた者。
 D 振付を覚えて練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者。
 ※LA補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。
 LA補習への参加が3分の2に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
 「授業出席とLA補習参加の合計回数が、二つの総合計回数の3分の2以上であればよい」のではなく、「授業の3分の2以上の出席、LA補習の3分の2以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

科目名 バレエ・ムーヴメント①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中農 美保

期間 前期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して
 1. 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
 2. あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
 3. 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
 4. 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通ずる感覚
 等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業の到達目標

初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンが全員できるようになること。

授業計画

- 毎回、床上のフロアストレッチから始める。
- ① 姿勢とプレイスメント、5つの足のポジション、ボール・ド・ブラ
 「バーの基本レッスン」
 - ②から⑤ プリエ、バットマン・タンジュ、バットマンデガジェ
 ロンドジャンプ・ア・テール、グランバットマン

- ⑥から⑧ 加えて、バットマン・フラッペ、バットマンフォンジュ、デヴロップ
 「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは次の基本ステップを加えていく。」
- ⑨から⑪ アダージョ、バットマン・タンジュ、シャンジュマン・エシャッペ
- ⑫から⑬ グリッサード、アッサンブレ、シソヌ、ピルエット等
- ⑭ 試験のアンシェヌマン
- ⑮ 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着(レオタード・タイツ)を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①授業への取り組み②授業の状況③期末試験 を総合的に100点満点で評価する。
 S 総合点が90点以上の者
 A 総合点が80点以上の者
 B 総合点が60点以上の者
 C 総合点が50点以上の者
 D 総合点が49点以下の者

科目名 クラシックバレエⅠ①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中農 美保

期間 後期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

1. 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイズメント
2. あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
3. 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
4. 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通ず感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業の到達目標

初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンが全員できるようになること。

授業計画

1限 初心者クラス、2限 経験者クラスとしてレベルに応じたレッスンを行う。

- ① 姿勢とプレイズメント、足の5つのポジション、ポール・ド・ブラ
「バーの基本レッスン」
- ②～④ プリエ、バットマン・タンジュ、バットマンデガジェ、ロンド・ジャンプ・ア・テール、グランバットマン、ルルベ
- ⑤～⑦ 加えて、バットマン・フラッペ、バットマンフォンジュ、デヴロッパ、ロン・ド・ジャンプ・アン・レール
「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは次の基本ステッ

プを加えていく。」

- ⑧～⑩ アダージョ、バットマン・タンジュ、バランセ（ワルツステップ）、ピルエット、小さいジャンプ、グリッサード等
- ⑪～⑬ アッサンブレ、ジュッテ、シソヌヌ、ジュッテアントラセ移動する回転等
- ⑭ 試験のアンシェヌマン
- ⑮ 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①授業への取り組み②授業の状況③期末試験 を総合的に100点満点で評価する。

S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 クラシックバレエⅡ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中農 美保

期間 前期

1

○

—

履修条件

「クラシックバレエⅠ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

1. 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイズメント
2. あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
3. 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
4. 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通ず感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業計画

1限 初心者クラス、2限 経験者クラスとしてレベルに応じたレッスンを行う。

- ① クラス分け
- ②から⑤ 初心者クラスでは1年後期の授業で学んだことを深め、次の段階に進む。中・上級クラスレッスンを行う。
- ⑥から⑨ バーレッスン、センターレッスン、実技公開試験のアンシェヌマン（アダージョ、バットマン・タンジュ、ピルエット、グラン・バットマン等）
- ⑩から⑬ バーレッスン、センターレッスン、実技公開試験のアンシェヌマン（アレグロ、ワルツ、グラン・アレグロ、コーダ等）
- ⑭ クラスレッスンと実技公開試験のアンシェヌマンのまとめ
- ⑮ 実技公開試験

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①授業への取り組み②授業の状況③期末試験 を総合的に100点満点で評価する。

S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

授業の到達目標

それぞれが自分の体と向き合い、豊かな表現ができる体を作る。
バレエのアカデミックなムーブメント、テクニックを学び、音楽的に踊れるように感性を磨く。

科目名 タップダンスⅠ①

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中谷 諭紀

期間 後期

1

○

—

履修条件

特になし。

授業の概要

リズム感(音の強弱・音色・アクセント等)はダンスの基本としてはもとより、芝居や唄を唄う事においても大変重要な事である。基礎～テクニックを学び、耳だけでなく身体全体で感じる事や表現する事を学ぶ。

授業の到達目標

基本ステップを学び、数曲の振り付けも仕上げていく。

授業計画

- ① タップシューズと床の感触をつかんではっきりと大きな音を出す事を覚える。
- ② 正確に基礎ステップを覚える。
- ③ 自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える。
- ④ スタンダードな曲に合わせて、ステップを踏む。
- ⑤ 試験・まとめ

授業時間外の学習

復習・自主練習に努める事。

教科書・参考書等

タップシューズ。

成績評価

授業への取組みを重視し授業態度と試験で評価する。

科目名 タップダンスⅠ②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 近藤 淳子

期間 後期

1

○

—

履修条件

基本が大切なので欠席をしないこと。体調不良の場合でもなるべく見学すること。

授業の概要

タップダンスの楽しさからプロになるための本格的なテクニックまでを基礎からしっかりと学ぶ。リズム感(音の強弱・音色・アクセント)ダンスの基本としてはもとより芝居や歌を唄うことにも大変重要なことである。タップダンスのレッスンを通じて身体全体で感じることや表現することを体得してもらったらと思う。

授業の到達目標

基本のステップを覚え、数曲の振付を仕上げていく過程で各自のスキルアップと幅広い表現力を身につけていく。

授業計画

1. 音の出し方、タップシューズとチップの床の感触のつかみ、重心移動について
- 2～4. ウォーミングアップ、基礎ステップのパターン、リズムバリエーション
- 5～10. ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション課題曲①、アカペラ
- 11～13. ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自+グループ課題復習、課題曲①+アカペラ
- 14～15. 学習到達度の確認

授業時間外の学習

常に復習、練習をすること。
欠席した時のステップ等授業前に学んでおくこと。

教科書・参考書等

稽古着、タップシューズを使用。

成績評価

授業への取組み、授業態度、課題の成果、試験の総合評価。

科目名 タップダンスⅡ①

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中谷 諭紀

期間 前期

1

○

—

履修条件

「タップダンスⅠ」を履修し、単位を修得している事。

授業の概要

基礎～テクニックのステップを用い、より表現力を豊かにする為、様々なジャンルの曲に合わせて振り付けをしていく。
また、発表の場を体験し、舞台創りの楽しさと厳しさを学ぶ。

授業の到達目標

リズム感・テクニックとより幅広い表現力を身に付ける。

授業計画

- ① 基礎ステップ・テクニカルステップの練習
- ② 自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える。
- ③ 様々なジャンルの曲に合わせて、より多くの表現力を身に付ける。
- ④ 試験・まとめ

授業時間外の学習

復習・自主練習に努める事。(欠席した場合は、友人にステップ振りを教えてもらい学んでおく事。)

教科書・参考書等

タップシューズ

成績評価

授業への取組みを重視し授業態度と試験で評価する。

科目名 タップダンスⅡ②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 近藤 淳子

期間 前期

1

○

—

履修条件

「タップダンスⅠ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

より表現力を豊かにするため様々な曲に合わせてジャズ、ヒップホップ等のステップを使って振付していく。
音の強弱。アクセント、リズムを身体を使って踊りこみタップダンスの奥深さを学んでほしい。また、発表会を体験し、舞台創りの楽しさと厳しさを学び技術のみならず表現者としての骨格を骨太にしていきたい。

授業の到達目標

幅広い表現方法を身につけること。真摯に探究心を持って全体を使って表現できること。

授業計画

1. ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲①、アカベラ、レベルアップコンビネーション
- 2～5. ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲②
- 6～9. ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲③
- 10～11. ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自+グループ課題復習、課題曲①、②、③、アカベラ
- 12～14. 復習、通し稽古
15. 実技公開試験、学習到達度の確認

授業時間外の学習

常に復習、練習をすること。
欠席した場合、事前にステップを学んでおくこと。

教科書・参考書等

稽古着、タップシューズを使用。

成績評価

1. 授業への取組み
2. 授業態度
3. 課題の成果
4. 試験の総合評価

科目名 舞台芸術概論

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 前期

2

○

—

履修条件

必修。遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

日本の近代の演劇史をベースにしなが、演劇というものを考える。われわれが現在考えている、「演劇」の概念は、いかに日本において作られたのか、また何のために近代演劇は西洋社会から導入されたのか。それら社会と演劇の位置を始点として考える。そして、演劇というものが娯楽的な要素をこえて、社会とどのように関わり、人々は翻弄されながらも、その社会に介入しようとしたのか。戦前、戦間期という激動の日本の歴史を通して考える。そのため、19世紀末から20世紀にかけての、世界史と日本史の高校教科書程度の知識は再度準備しておくこと。

授業の到達目標

たんに演劇史をなぞるのではなく、当時の人々が社会とどのように接点をもち、なにを考えて行動していたのか、その可能性と限界を問う。そこから自分自身で、ある事柄について考える力をみにつけることを目標とする。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 演劇の概念とはなにか
- 3 「明治」と演劇
- 4 「明治」と近代演劇
- 5 労働演劇
- 6 築地小劇場の時代
- 7 戯曲の時代
- 8 戯曲の時代
- 9 プロレタリア演劇

10 プロレタリア演劇

11 戦中の演劇

12 戦後の演劇

13 1950年代の演劇

14 自立演劇

15 まとめ

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。

教科書・参考書等

教科書：日本史の教科書と世界史の教科書。

参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が59点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 日本演劇史A(古典)

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安富 順

期間 前期

2

○

—

履修条件

必修。

授業の概要

日本で俳優修行を積み、将来的に日本または外国において俳優或いは演劇関係の仕事に関わることを天職に選んだ若きプロアーティスト諸君へ、必須と思われる日本古典芸能史・演劇史に関する知識を伝える。本講義ではまず芸能・演劇の概念規定とその本質論について論じ、特に芸能が我々の文化・文明に如何なる影響を残しているかを考察する。次いで能・狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃(文楽)の生成、発展史と各々の特質等を論じる。上記古典演劇を観た経験が無い諸君もあるかと思うので、ビデオ等を用い基本的鑑賞知識も伝える。講義では諸君らが今まで耳にしたことがない、人物名・作品名・学術用語等が頻出する。それらを理解し記憶することは苦痛であろうが、本講義が本学教育課程に設置された目的が幅広い知見を有した俳優養成を目指すものであることから、それは甘受してほしい。その上で俳優という職業人である以前に、一個の自律した人間として生きるための智慧となるべきものを伝えられればと願っている。

授業の到達目標

講義を通じ、日本古典芸能史および演劇史に関する基本的必須知識、教養を習得し、それらを説明することができる。

授業計画

- 第1回 講義概要・事務的連絡
- 第2回 芸能とは何か、演劇とは何か
- 第3回 3・11の記憶
- 第4回 神と人間—折口信夫「マレビト論」
- 第5回 神と人間—反「マレビト論」柳田国男の靈魂観
- 第6回 ハレとケ—芸能としての祭り

第7回 能・狂言発生史概論

第8回 能・狂言成長・展開史概論

第9回 劇人世阿弥

第10回 飾ることと見立てること—風流・歌舞伎

第11回 身体的表象の変化—古代・中世の身体表現から近世的身体表現へ

第12回 怨み・笑い—鶴屋南北の世界

第13回 七五の律動—河竹黙阿弥の世界

第14回 慰み—近松門左衛門

第15回 総論・統括

授業時間外の学習

指定文献を事前に読むこと。

教科書・参考書等

プリントを配布する。参考となる書籍等については適宜紹介する。

成績評価

授業への取組み15%、筆記試験85%。

- S 総合点90点以上
(講義内容の理解度が極めて優れていると認められる者)
- A 総合点80点以上
(講義内容の理解度が優れていると認められる者)
- B 総合点60点以上
(講義内容の理解度が一定以上には達したと認められる者)
- C 総合点50点以上
(講義内容の理解度にやや不安を覚えるが最低限の段階には一応達したと認められる者)
- D 総合点49点以下
(講義内容の理解度が極めて不十分と判断せざるを得ない者)

科目名 日本演劇史 B(近現代)

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 後期

2

○

—

履修条件

前期：演劇専攻2年ストレートプレイコース必修
後期：演劇専攻1年必修
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

日本の現代演劇史を概括して講義する。半期のため、生徒は授業時間外で、戯曲や演劇論、そして時代背景についての読書を行うことが求められる。われわれが現在考えている、「演劇」の概念は、いかに日本において作られたのか。それら社会の制度と演劇の位置を見る。そして、演劇というものが娯楽的な要素をこえて、社会とどのように関わり、どのように人々が翻弄されながらも、社会に介入しようとしたのか、戦後日本の歴史を通して考える。そのため、世界史と日本史の高校教科書程度の知識は再度準備しておくこと。

授業の到達目標

たんに演劇史の授業ではなく、作品と人々が社会とどのように接点を持ち、なにについて考えて行動していたのか、その可能性と限界を問う。自分自身で、ある事柄について考える力をみつけることを目標とする。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 戦後の動向
- 3 1950年代の演劇
- 4 1960年、安保と演劇
- 5 アンダーグラウンド演劇
- 6 アンダーグラウンド演劇
- 7 アンダーグラウンド演劇
- 8 1970年代の演劇

- 9 1980年代の演劇
- 10 1990年代の演劇
- 11 1990年代の演劇
- 12 2000年代演劇の動向
- 13 最近の演劇の動向
- 14 最近の演劇の動向
- 15 まとめ

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

- 発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が59点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 西洋演劇史 A (古典)

対象 演劇専攻 1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安宅 りさ子

期間 前期

2

○

—

履修条件

演劇専攻1年必修。
予習・復習に努め、演劇の基礎知識を習得する意志のある者。

授業の概要

ギリシャ悲劇やシェイクスピア劇は、現在も数多く上演されている。この授業では、紀元前5世紀の古代ギリシャ劇から17世紀のフランス古典劇にいたるまでの西洋演劇史を概観し、演劇人に求められる基礎的な知識を習得する。各項目において、時代背景、文化状況をふまえながら、劇場構造、上演形態、作品等を考察していく。

また、各時代の演劇が後世の演劇にどのような影響を与え、どのような要素が継承されたのかを、それぞれの事象を関連づけながら探っていききたい。さらに、現代における古典作品の上演についても言及し、その芸術的価値を論じていきたい。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標にする。
- 代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
 - 劇場構造や上演形態について、その特色を説明することができる。
 - 紀元前5世紀から17世紀までの西洋演劇史の流れを説明することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 古代ギリシャの演劇
3. ギリシャ悲劇Ⅰ アイスキュロス
4. ギリシャ悲劇Ⅱ ソポクレス
5. ギリシャ悲劇Ⅲ エウリピデス
6. ギリシャ喜劇/ローマ演劇
7. 中世の宗教劇
8. コメディア・デラルテ
9. フランス古典悲劇

10. フランス古典喜劇
11. エリザベス朝演劇
12. シェイクスピアⅠ 悲劇
13. シェイクスピアⅡ 史劇
14. シェイクスピアⅢ 喜劇
15. 総括と学習到達の確認

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と宿題に関する小テストを行うので、履修者は各自でノートをまとめ、予習と復習に努めること。第3回までに「アガメムノン」(アイスキュロス)、第4回までに「オイディプス王」(ソポクレス)、第5回までに「メディア」(エウリピデス)、第12回までにシェイクスピアの四大悲劇、第14回までに「夏の夜の夢」「十二夜」「テンペスト(あらし)」を読むこと。

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。参考書は、適宜授業内で紹介する。

成績評価

- 授業内テストの成績を100点に換算(小テスト成績30%、学習到達の確認70%)
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、関連づけて説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 西洋演劇史B(近現代)

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安宅 りさ子

期間 後期

2

○

—

履修条件

演劇専攻1年必修。
予習・復習に努め、演劇の基礎知識を習得する意志のある者。

授業の概要

西洋における近代劇運動から現代までの流れを概観し、演劇人に求められる基礎的な知識を習得する。各項目において、時代背景、文化状況をふまえながら、劇場構造、上演形態、作品、演劇論等を考察していく。

また、各国の演劇が他国にどのような影響を与え、どのような発展を遂げたのかを、それぞれの事象を関連付けながら探っていく。

授業の到達目標

この授業の到達目標は以下の3点である。
○代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
○代表的な演劇理論について、その要点を説明することができる。
○19世紀の自然主義演劇から現在までの西洋演劇史の流れを説明することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 自然主義演劇
3. イブセン
4. モスクワ芸術座とスタニスラフスキー
5. チューホフ
6. 英米の近代劇
7. アルトー
8. プレヒトI
9. プレヒトII
10. 不条理演劇I
11. 不条理演劇II
12. ウィリアムズとミラー

13. ピンターとストップパート
14. 多文化の演劇
15. 総括と学習到達度の確認

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容に関する小テストを行うので、履修者は各自でノートをまとめ、予習と復習に努めること。第3回までに「人形の家」「幽霊」(イブセン)第5回までに「チューホフの四大劇」第8回までに「三文オペラ」(プレヒト)、第12回までに「ガラスの動物園」「欲望という名の電車」(ウィリアムズ)、第10回までに「ゴドーを待ちながら」(ベケット)を読んでおくこと。

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

授業内テストの成績を100点に換算(小テスト成績30%、学習到達度の確認70%)

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、関連づけて説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 ミュージカル概論

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 橋爪 貴明

期間 前期

2

○

—

履修条件

ミュージカルコース必修。
遅刻、欠席厳禁。プロの表現者になる熱意があり、学ぶ欲求があること。

授業の概要

比較的新しい表現形式であるミュージカルの歴史を研鑽し、他の演劇形式との違い、共通点を学び、ミュージカルの可能性を探っていく。理論と実技、そして映像。それぞれの角度からミュージカルという表現形式の理解を深めていく。

ミュージカルの原点は何処にあるのか? どんなルートを辿ってこの芸術、文化が日本に入ってきたのか? オペラからミュージカルが派生したのはどの時点か?

フランス~ニューオリンズ~ブロードウェイへと至る変遷、またウエストエンドの状況も同時に学んでいく。また、日本のミュージカルの派生、発展も見えていく。

授業の到達目標

ミュージカルの作品分類ができ、歴史を理解し、作品の時代背景、社会的な力関係を把握する。

授業計画

1. ガイダンス
2. 自己受容、自己表現
3. 歌の原点を知る。歴史を学ぶ。
4. 芝居の原点を知り、歴史を学ぶ。
5. 身体表現の原点を知り、歴史を学ぶ。ミュージカル作品の分類の仕方。
6. オペラ~ミュージカル、派生の場所と時期。
7. ボードビルショー、 minstrel、ニューオリンズで花開くものは…。

日本のミュージカルの歴史。浅草オペラ~商業演劇への変遷。

8. DVD鑑賞
9. 作品の分析
10. レ・ミゼラブル、サウンドオブミュージック、ウエストサイドストーリー これらの作品の分析と解説及び時代背景、作品が社会に与えたものは?
11. ミュージカルにおける作詞、その作品ごとの研鑽。
12. 日本のミュージカルの創成→宝塚、東宝ミュージカルズ等。
13. DVD鑑賞
14. 作品の分析
15. まとめ

授業時間外の学習

与えられた課題の準備を授業前に行うこと。
授業中に学んだことを検討し、改善・研究に努めること。
授業の最初に小テストを適時実施するので、前回の授業内容をよく復習しておくこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。

成績評価

- レポートにより評価。
- S 講義内容を元にミュージカルの歴史、作品の時代背景を把握、理解し、的確に自論を展開できた者。
- A 講義内容を元に的確に自論を展開できた者。
- B 講義内容を元に自論を展開できた者。
- C 講義内容は把握できているが、自論を展開できなかった者。
- D レポート未提出、授業への出席不足の者。

科目名 ミュージカル論

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 藤原 麻優子

期間 後期

2

○

—

履修条件

なし。

授業の概要

ミュージカルは、日本を含め現在世界各地で最も人気のある音楽劇のひとつと呼ぶことができる。では、様々な音楽劇の中で、ミュージカルの音楽劇としての特徴とは一体何なのだろうか。語り、歌い、踊るという演技は、どのように作品に組み込まれているのだろうか。わたしたちが思い浮かべる「ミュージカル」は、どのように現在の広がりをもつにいったのだろうか。この授業では、ブロードウェイ・ミュージカルを中心に、ミュージカルというジャンルの歴史と展開について概観し、ミュージカルを理解するための基礎的な知識を学ぶ。また、さまざまなサブ・ジャンルについて、作品分析を通して考察していく。適宜映像・音声資料を利用する。

授業の到達目標

- ・ミュージカルの歴史について、各年代の特色と大まかな流れを説明することができる。
- ・ミュージカルのさまざまなサブ・ジャンルについて、その特色を説明することができる。
- ・ミュージカルに対する自分の考えを説明することができる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 ミュージカルの歴史1
- 第3回 ミュージカルの歴史2
- 第4回 ミュージカル・プレイ『オクラホマ!』1
- 第5回 ミュージカル・プレイ『オクラホマ!』2
- 第6回 ミュージカル・プレイ『オクラホマ!』3
- 第7回 ミュージカルの劇作術1

- 第8回 ミュージカルの劇作術2
- 第9回 コンセプト・ミュージカル1
- 第10回 ロック・ミュージカル
- 第11回 メガ・ミュージカル
- 第12回 ジュークボックス・ミュージカル
- 第13回 日本のミュージカル1
- 第14回 日本のミュージカル2
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

予習・復習として、授業で取りあげる作品の映画版を見せよう。授業後に簡単な感想や小レポートの提出を求める場合がある。

教科書・参考書等

教科書は指定しない。授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業時に紹介する

成績評価

- 平常点(授業への取り組み、授業態度および感想提出等)40%、期末試験60%で100点に換算する。
- S 総合点が90点以上の者(基本的な諸事項をよく理解し、優れた説明ができる)
 - A 総合点が80点以上の者(基本的な諸事項を理解し、説明ができる)
 - B 総合点が60点以上の者(基本的な諸事項をほぼ理解し、説明ができる)
 - C 総合点が50点以上の者(基本的な諸事項の理解に欠け、説明が不足する)
 - D 総合点が49点以下の者(極端に出席が少ない、講義内容を理解しておらず説明ができない)

科目名 ソルフェージュ基礎①②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 永井 由比

期間 後期

2

/

—

履修条件

音楽(楽譜を正確に読む等)、歌うことに興味のあるもの。五線ノート、筆記用具を持参。

授業の概要

音楽の基礎力をつけることを目的とする。楽典基礎を学び正確な譜面の読み方、リズム感、音感などソルフェージュ力を養うことで、音楽への理解を深め各々のパフォーマンスの向上につなげる。

授業の到達目標

譜面を読んで歌えるようになる。
フレーズ感、リズム感、音感を育てる。

授業計画

- 1. 楽典基礎 音符の読み方①
- 2. 楽典基礎 音符の読み方②
- 3. 楽典基礎 音楽用語について
- 4. 楽典基礎 リズムを読む
- 5. 楽典基礎 譜面を読む
- 6. 視唱①
- 7. 視唱②
- 8. 新曲視唱
- 9. 聴音①
- 10. 聴音②
- 11. 視唱 ハーモニー ①
- 12. 視唱 ハーモニー ②
- 13. 学習到達度確認 譜面の読み方
- 14. 学習到達度確認 新曲視唱
- 15. まとめ

授業時間外の学習

授業中課題があれば、予習、復習に努めること。
楽譜を通して歌う訓練をする。

教科書・参考書等

授業中に資料配布。

成績評価

- 事業への取り組み姿勢、提出物、視唱等実技等で判断する。
- S 総合点が90点以上のもの
 - A 総合点が80点以上のもの
 - B 総合点が60点以上のもの
 - C 総合点が50点以上のもの
 - D 総合点が49点以下のもの

科目名 ソルフェージュ①②

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 岩崎 廉

期間 前期

2

/

—

履修条件

ミュージカルコース必修。

授業の概要

「ソルフェージュ基礎」で学習した知識を更に深め、コードを使い作曲する。覚える事、考える事、感じる事、脳の力をしっかり切り分けて使い、感性を高めて行く。実際に自分で作曲する事により、他者の作った作品への理解力を上げて行く。

授業の到達目標

カデンツを理解し、モチーフを作る。普通の生活の中から身近なテーマを選び作詞する。
詩先の作曲、曲先の作詞が出来るようになる。

授業計画

15回の授業を、下記のような流れで行う。

- 1 ガイダンス
- 2 カデンツを学ぶ
- 3 コードを連結しピアノで弾く
- 4 旋律を考える(モチーフの創作)
- 5 詩を書く
- 6 アナリゼ
- 7 詩先の作曲
- 8 曲先の作詞
- 9 小試験
- 10 小発表会
- 11 演習
- 12 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回の授業でモチーフ、詩の提出がある。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

提出物評価…40点満点
小試験…20点満点
期末試験…40点満点
3つの点数の総合で評価される。

科目名 演劇史特講

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安宅 りさ子

期間 後期

2

/

—

履修条件

特になし。

授業の概要

アメリカを代表する劇作家テネシー・ウィリアムズは、ロシアのアントン・チェーホフの作品を愛読し、多大な影響を受けたといわれる。本講では、アントン・チェーホフの『桜の園』(1904)とテネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』(1947)を比較しながら読み解いていく。どちらの作品においても、社会制度や産業構造の変化によって階級間の勢力が大きく変容する様が描かれているが、時代や文化の違いを超えて現在も世界中で上演され続けている。両作品の持つ普遍性を探り、現代人の視点から作品の魅力を明らかにしていきたい。ディスカッションを交えながら講義を進めるので、テーマごとに事前学習をしておくこと。

授業の到達目標

- 以下の2点を授業の到達目標とする。
- 歴史的背景を説明することができる。
 - 作品の特徴を説明することができる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 アントン・チェーホフについて
- 第3回 『桜の園』について 1
- 第4回 『桜の園』について 2
- 第5回 『桜の園』について 3
- 第6回 『桜の園』について 4
- 第7回 『桜の園』について 5
- 第8回 テネシー・ウィリアムズについて
- 第9回 『欲望という名の電車』について 1

- 第10回 『欲望という名の電車』について 2
- 第11回 『欲望という名の電車』について 3
- 第12回 『欲望という名の電車』について 4
- 第13回 『欲望という名の電車』について 5
- 第14回 発表
- 第15回 総括

授業時間外の学習

『桜の園』と『欲望という名の電車』を読み、それぞれの時代背景を調べておくこと。

教科書・参考書等

『桜の園・三人姉妹』 チェーホフ著 神西清訳 新潮文庫
『欲望という名の電車』 テネシー・ウィリアムズ著 小田島雄志訳 新潮文庫

成績評価

- 発表(50%)、授業態度(50%)を総合評価
- S 総合点が90点以上の者(授業に積極的に参加し、根拠に基づいて自らの考えを述べる事ができる)
 - A 総合点が80点以上の者(授業に積極的に参加し、調べた内容を説明することができる)
 - B 総合点が60点以上の者(授業にやや受動的に参加し、授業で扱った内容を説明することができる)
 - C 総合点が50点以上の者(授業に受動的に参加し、授業内容を十分に説明することができない)
 - D 総合点が49点以下の者(授業に消極的に参加し、授業内容を把握することができない)

科目名 演劇批評論

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 前期

2

/

—

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

演劇を観るために、もしくは実践的に活動するために、必要な理論について考える。理論を学びながら、それをベースに実際に舞台を観に行く。舞台が理論によって鮮やかに見える場合もあれば、理論そのものをゆるがすこともあるだろう。その双方向的な視点をもって、舞台について考える。

授業の到達目標

たんに舞台をみる授業ではなく、演劇が社会とどのように接点を持ち、作品からなにを見つかるべきなのか、その可能性を問う。そこから自分自身で、ある事柄について考える力をみつけることを目標とする。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 批評理論とはなにか
- 3 批評理論の解説
- 4 作品と社会性 1960年代を例に
- 5 作品と時代性 1960年代を例に
- 6 作品を取りまく環境
- 7 記憶の装置としての劇場
- 8 実際に書く1
- 9 実際に書く2
- 10 ディスカッション
- 11 舞台を見る1
- 12 舞台を見る2

13 批評の講評

14 批評の講評

15 まとめ

※授業内容に関しては、その進具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。

参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が59点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 パフォーミングアーツ論

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 後期

2

/

—

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

私たちが「演劇」というものを考えた際に、どのようなものをイメージするだろうか。いわゆる舞台のみにとどまらない、「演劇」的な要素とはなにか。演劇を幅広いコンテキストで捉え直してみるというのが、この授業の目標である。そのために、パフォーマンス・スタディーズ、ポストドラマ演劇、文化人類学などのいくつかのコンセプトを駆使して幅広い要素によって、演劇的なものを再考する。

授業の到達目標

私たちの既存概念としての「演劇」というものはどのように基底されたか。自明なるものを疑うという問題意識をもつこと。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 パフォーマンス・スタディーズとはなにか
- 3 リチャード・シェクナーについて
- 4 ゴッフマンについて
- 5 ターナーについて 1
- 6 ターナーについて 2
- 7 ローズリー・ゴールドバーグ 「パフォーマンス」
- 8 ローズリー・ゴールドバーグ 60年代以後のパフォーマンス
- 9 ピーター・ブルックについて
- 10 日本のパフォーマンス 1
- 11 日本のパフォーマンス 2

12 他国のパフォーマンス 1

13 他国のパフォーマンス 2

14 まとめ

15 レポート総評

※授業内容に関しては、その進具合により、前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。

参考書：同様に授業時に指示する。

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が59点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 演劇文化論A

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 前期

2

○

—

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

東と西に遠く離れながら、歌舞伎とシェークスピアが、そしてオペラが、ほぼ同時期に生まれ、発展してきたことは思いのほか知られていない。縦の歴史ではなく、横に視点を広げ、舞台芸術と社会との関わり方、その表現者について比較検証していく。さらに、明治維新以降の近代、日本人の海外留学や巡業を通して、何を見、何を移入し、何を移入しなかったのかを探る。また同時に、急速に広がったジャポニズムを追いながら、近代における演劇のインターカルチュラリズムの意味を探る。

授業の到達目標

- ・舞台芸術の歴史的展開を理解する。
- ・演劇の相互交流の意味と異文化の翻訳の不可能性を理解する。
- ・国際的な視野を持つ。

授業計画

1. オリエンテーション—シェークスピアと歌舞伎
2. 渡来人と芸能
3. 劇場という異界と興行
4. 歌舞伎とオペラ
5. 19世紀後半の俳優の社会的地位の日英比較
6. 岩倉視察団と芸術教育

7. 演劇改良論者が求めたもの
8. 海外留学と近代劇1—官僚が見てきたもの
9. 海外留学と近代劇2—芸術家が見てきたもの
10. 翻案劇の誕生
11. 翻訳劇の誕生
12. 外国人教師という存在
13. ジャポニズム1
14. ジャポニズム2
15. インターカルチュラリズムをめぐって

授業時間外の学習

翻訳劇を積極的に鑑賞する。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 演劇文化論B

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 中山 夏織

期間 後期

2

○

—

履修条件

遅刻・欠席をしない。演劇文化論A履修者が望ましい。

授業の概要

本科目は次の2つの柱を追求することにより、グローバルな時代における創造者・表現者として演劇の国際交流、異文化理解の役割と課題を、重層的かつ体験的に探っていく。

1. 戦後の「翻訳劇」の展開から、翻訳という作業と異文化の受容の課題を検証すると同時に、日本の現代演劇の国際化の問題を考える。
2. 英国の現代演劇から、とりわけ若い世代をターゲットとした戯曲や映像を用いながら、若い創造者・表現者として、演劇がいかに社会問題に関わり、表現するのかを考察するとともに、日本での上演に際していかにリサーチ、解釈、表現するのかを議論する。

授業の到達目標

- ・創造者・表現者として異文化の翻訳という作業、翻訳劇の意味を理解する。
- ・現代における演劇の社会的役割を言葉にすることができる。
- ・翻訳劇を上演する際のリサーチの方策を獲得する。

授業計画

1. 翻訳劇の展開
2. 翻訳が作る日本語
3. 「異文化」の翻訳という作業
4. 日本の現代演劇の国際化を阻むもの

5. 国際共同製作の現場
6. 翻訳による差異を探る1
7. 翻訳による差異を探る2
8. 演劇の役割を再考する
9. 演劇が描く社会1- Noughts & Crosses
10. 演劇が描く社会2- The Monster in the Hall
11. 演劇が描く社会3- Glasgow Girls
12. 演劇が描く社会4- Hannah & Hanna
13. 演劇が描く社会5- American Pilot
14. 演劇が描く社会6- Permanent Way
15. 演劇と社会—まとめ

授業時間外の学習

翻訳劇を積極的に鑑賞する。戯曲の描く社会について下調べを行う。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布（戯曲の日本語版についても）。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 演出論

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 川村 毅

期間 前期集中

2

○

○

授業の概要

戯曲のリーディングのシミュレーションを行ない、演技と演出の知識と技術の幅を広げる。

授業計画

川村の戯曲2本のリーディングの実践を川村指導の下に行う。

授業の到達目標

リーディングという表現行為の理解とそれを応用しての将来の展望を獲得すること。

成績評価

出席数。授業態度。

科目名 演劇論

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 高橋 宏幸

期間 後期

2

○

—

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

- 13 日本の近代戯曲2
- 14 日本の現代戯曲1
- 15 日本の現代戯曲2

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業の概要

西洋演劇史と日本演劇史に名を残す名作とされる戯曲を、多読することを目標とする。最低でも週に1〜2本は戯曲を読み、授業で発表して議論する。そのため、議論に参加していないものは、出席とは認めない。とにかく戯曲をたくさん読んで、戯曲を読むことになれること。そのために、授業以外での読書は必須である。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

授業の到達目標

たんに戯曲を読む授業ではなく、ある時代のなかで、その当時の人々が、社会とどのように接点を持ち、なにを考えて行動していたのか。戯曲を通して、その可能性と限界を問う。そこから自分自身で、ある事柄について考える力を身につけることを目標とする。

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：同様に授業時に指示する。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 ギリシャ悲劇の戯曲1
- 3 ギリシャ悲劇の戯曲2
- 4 シェイクスピアの戯曲1
- 5 シェイクスピアの戯曲2
- 6 フランス古典の戯曲1
- 7 フランス古典の戯曲2
- 8 近代戯曲1
- 9 近代戯曲2
- 10 現代戯曲1
- 11 現代戯曲2
- 12 日本の近代戯曲1

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が59点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 戯曲講読演習 A (古典)

対象 演劇専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安宅 りさ子

期間 前期

1

○

—

履修条件

「オイディプス王」(ソポクレス作)と「ハムレット」(シェイクスピア作)を事前に読んでおくこと。

授業の概要

西洋の古典劇の理解に必要な基礎知識(歴史、文化、演劇の様式等)を習得しながら、ギリシャ古典劇の傑作「オイディプス王」とシェイクスピアの不朽の名作「ハムレット」を講読する。時代・文化の違いを超えて、現代人の心を揺さぶり続けるドラマの真髄を探っていききたい。ディスカッションを重ねながら授業を進めるので、受講生は各自指定されたテキストを購入の上、作品の内容をよく把握しておくこと。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標にする。
- ギリシャ古典劇、エリザベス朝演劇の特徴を説明することができる。
- 各作品の特徴を説明することができる。
- 各作品が後世の演劇に与えた影響について説明することができる。

授業計画

- 第1回 ギリシャ劇について
- 第2回 ギリシャ神話とテバイ伝説
- 第3回 「オイディプス王」 I
- 第4回 「オイディプス王」 II
- 第5回 「オイディプス王」 III
- 第6回 「オイディプス王」 IV
- 第7回 発表
- 第8回 エリザベス朝演劇について
- 第9回 「ハムレット」 I
- 第10回 「ハムレット」 II

- 第11回 「ハムレット」 III
- 第12回 「ハムレット」 IV
- 第13回 「ハムレット」 V
- 第14回 発表
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

第3回までに「オイディプス王」、第9回までに「ハムレット」を読んでおくこと。授業内で作品の理解に必要な事項に関する発表を行うので履修者は準備に努めること。

教科書・参考書等

「オイディプス王・アンティゴネ」ソポクレス 福田恒存訳(新潮文庫)
「ハムレット」シェイクスピア全集1 松岡和子訳(ちくま文庫)

成績評価

- 発表50% レポート試験50%
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な事項を十分に把握し、独自の視点から作品の説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、作品の説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、作品の説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、作品の説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、作品の説明ができない)

科目名 戯曲講読演習 B (近現代)

対象 演劇専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安宅 りさ子

期間 後期

1

○

—

履修条件

「かもめ」(チェーホフ作)と「ゴドーを待ちながら」(ベケット作)を事前に読んでおくこと。

授業の概要

近代劇・現代劇の理解に必要な基礎知識(歴史、文化、ドラマツルギー等)を習得しながら、近代リアリズムの傑作「かもめ」(チェーホフ)と不条理劇を代表する「ゴドーを待ちながら」を講読する。時代・文化の違いを超えて、観客の心をとらえる両作品の魅力を探っていききたい。チェーホフの「ポドテキスト」や「間」を駆使した作劇術は、近代の演技術の発展に大きく貢献した。一方、ベケットは、現実生活の再現を拒み、作品の思想を形式に表した。両者とも後世の演劇に多大な影響を与えている。ディスカッションを交えながら演習を進めるので、受講生は各自テキストを購入の上、作品の内容をよく把握しておくこと。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標にする。
- 各作品の歴史的背景を説明することができる。
- 各作品の特徴を説明することができる。
- 各作品が後世の演劇に与えた影響について説明することができる。

授業計画

- 第1回 アントン・チェーホフについて
- 第2回 チェーホフとモスクワ芸術座
- 第3回 「かもめ」 I
- 第4回 「かもめ」 II
- 第5回 「かもめ」 III
- 第6回 「かもめ」 IV
- 第7回 発表

- 第8回 サミュエル・ベケットについて
- 第9回 「ゴドーを待ちながら」 I
- 第10回 「ゴドーを待ちながら」 II
- 第11回 「ゴドーを待ちながら」 III
- 第12回 「ゴドーを待ちながら」 IV
- 第13回 「ゴドーを待ちながら」 V
- 第14回 発表
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

第3回までに「かもめ」、第9回までに「ゴドーを待ちながら」を読んでおくこと。授業内で作品の理解に必要な事項に関する発表を行うので履修者は準備に努めること。

教科書・参考書等

「かもめ」沼野充義訳(集英社)
「ゴドーを待ちながら」ベスト・オブ・ベケット1 安藤信也・高橋康也訳(白水社)

成績評価

- 発表50% レポート試験50%
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な事項を十分に把握し、独自の視点から作品の説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、作品の説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、作品の説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、作品の説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、作品の説明ができない)

科目名 劇作法

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 瀬戸山 美咲

期間 後期

1

/

—

履修条件

人間と社会に興味がある人。ディスカッションに積極的に参加できる人。

授業の概要

演劇の土台となる戯曲の書き方を学び、実際に書いてみる。目標を立て、取材・リサーチをおこない、戯曲を書く。書いた戯曲をリーディングし、それについてディスカッションして、ブラッシュアップしていく。

授業の到達目標

短編戯曲を書き上げる。

授業計画

- 1 書く前に
なぜ書くか、何を書くか、書くために何が必要か
- 2 自分が書くことを決める
「問い」の設定
- 3 素材を集める(取材・リサーチ)
- 4 素材からモノローグを書く
- 5 登場人物について
- 6 構成について
- 7 ダイアローグについて
- 8 テーマについて
- 9 演劇ならではの表現について
- 10 リーディング・ディスカッション その1
- 11 リーディング・ディスカッション その2

- 12 書き直す
ドラマターグについて
- 13 書き上げる
どこで終わらせるか
- 14 リーディング・ディスカッション その3
- 15 リーディング・ディスカッション その4

授業時間外の学習

講義の中で出てきた戯曲を読む。戯曲を書くためのリサーチ・取材をおこなう。戯曲の執筆をすすめる。

教科書・参考書等

授業時に指示もしくは配布する。

成績評価

- ①授業への取組み50% ②戯曲の完成度50% で100点換算
- S 総合点が90点以上
A 総合点が80点以上
B 総合点が60点以上
C 総合点が50点以上
D 総合点が49点以下

科目名 舞台照明実習①

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 石島 奈津子

期間 前期集中

1

○

○

履修条件

照明部以外の学生を対象とする。

授業の概要

- ・舞台照明の変遷
- ・舞台照明の基本的な設備と配置
- ・各種照明器材の説明
- ・仕込みから撤去まで、照明の基本的な作業内容
- ・照明デザインと表現者の関わり方

以上の事を、実際に小劇場の機構を使用して実習する。

授業の到達目標

これから、舞台で表現する立場になる方々が、照明効果を利用することによって、より良い表現ができるよう、また、舞台で行動する際に、怪我、事故から、自分の身を守るよう、舞台照明機構を理解してもらう。

授業計画

小劇場を実際の舞台に見立て、照明器材を、通常よく使われている位置に簡易に設置して、実物を前に説明をしたり、スポットに実際に接して、その効果を体感、理解してもらう。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- ①授業態度
②課題への取り組み
③表現者としての真摯な姿勢
④自らを研鑽する意欲
⑤課題の成果
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
A：①～⑤のうち4つを獲得した者
B：①～⑤のうち3つを獲得した者
C：①～⑤のうち2つを獲得した者
D：①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 舞台照明実習②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 兼子 慎平

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

実習が主になるので、稽古着・稽古履など動きやすい服装で受講すること。

また(舞台)照明に興味がある事。舞台照明作業に一度でも触れている事が望ましい。

授業の概要

参加者全体で取り組む舞台照明の作業を通して、各々の協調性・自立性、またそのバランスのとり方を体で認識すること。そしてその認識を頭と体で昇華し、それぞれの段階で作業に『実践』してみる所までこの実習では求めることとする。

作業の中で上記過程を繰り返すことにより、基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を学ぶことを目標とする。

また照明と演者の関係を考察してみる機会も提供する。

授業の到達目標

基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を身につける。

授業計画

1. 照明の仕込み作業を学ぶ①(午前)
2. 演者と照明(スタッフワーク)の関わりについて(ディスカッションを含めた考察)
3. 照明の仕込み作業を学ぶ②(午後)
4. 特殊機材を扱う
5. 舞台照明(シーン)を作る
6. 質疑応答

授業時間外の学習

舞台照明に触れる機会があれば積極的に参加してほしい。

また、『良い演技』あるいは『良いスタッフワーク』とは何か、機会があれば考察してほしい。

教科書・参考書等

教科書は特に無し。実習で使用する図面等は講義時に配布。また参考図書についても講義時にいくつか紹介する。

成績評価

- S. 講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性 両方が認められ、特にリーダーシップも発揮できる者
- A. 講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性 両方が認められた者
- B. 講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性どちらか一方でも認められた者
- C. 積極性にはやや欠けるが、講義内容を努めて真面目に理解しようと認められた者
- D. 積極性に欠け、講義内容も理解しようと認められなかった者

科目名 舞台音響実習①

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 佐藤 こうじ

期間 前期集中

1

○

○

履修条件

音響部以外の学生を対象とする。

授業の概要

舞台における俳優が知っておくべき音響の知識を学ぶ。

音響的なことではなく、俳優視点の授業である。

授業の最後に、実習を行う。

授業の到達目標

音響の仕事、機器の扱いを理解することにより、スタッフの意図を汲み、よりクオリティの高い作品づくりを目指す。

「伝える」ことの難しさを知る。

授業計画

- ・搬入、仕込み、サウンドチェックの見学
- ・ライブハウスPA、舞台音響、ミュージカル音響の違い
- ・スピーカーの向きの検証(モニターの必要性)
- ・カラオケボックスでキーンとなるのは何故か(ハウリングの検証)
- ・有線マイク、ワイヤレスマイク(ハンドマイク、ピンマイク)の取り扱い
- ・実際に音を出して音響の仕事を紹介、その効果
- ・サンプラーの紹介(刀の音、殴る、蹴るなどの音を動きと合わせる音響効果)
- ・実習(チームごとにわかれ、テキストを上演する)
- ・撤去

授業時間外の学習

実習で使用するプリントを事前配布するので、目を通し理解しておくこと。

教科書・参考書等

プリントを配布する。

筆記用具、舞台上で動けるようなシャツ、ズボン着用のこと。

小劇場で作業をするために必要な上履き、運動靴着用のこと。

成績評価

授業への取組み50%、実習への取組みと態度50%を100点換算して評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 舞台音響実習②

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮崎 淳子

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

音響部の学生を対象とする。

授業の概要

基本的な音響機材の使用方法、効果を知り、学内イベントや稽古でのセッティング、オペレートに役立てる。

授業の到達目標

- 音響機材の信号の流れを理解し、基本的な結線がスピーディーに行える。
- 簡単なトラブルシューティングができる。

授業計画

- 機材の用途、機能を知る。
 - ミキサー
 - エフェクター
 - 他、学生から前もって要望があれば応じる。
- ケーブルの名称を再確認、統一する。
- 信号の流れに沿った結線をする。
- 音が正常に出ない時の原因究明の方法。
- 仕込図(配線図)を読めるようにする。

授業時間外の学習

適宜指示する。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。

成績評価

実技試験70%、筆記試験30%で100点に換算。

- S 90点以上の者
- A 80点以上の者
- B 60点以上の者
- C 50点以上の者
- D 49点以下の者

科目名 舞台監督実習

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 鈴木 健介

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

なし。

授業の概要

演劇を構成する要素を理解する。俳優が集まるだけでは上演にこぎつけるのは難しい。

色々なセクションのスタッフが集まりチームを立ち上げることによって公演の初日を迎えることができ、上演の成果を得ることができる。限られた条件(稽古時間や公演予算、人手不足等)の中で最良の舞台を作るにはその作品に関わる俳優と全スタッフのチームワークが何よりも必要である。

舞台監督はチームワークの要であるので、その仕事の範囲を理解する。また演出の仕事との違いや制作の仕事も理解する。

授業の到達目標

小劇場の舞台を作り、客席を作り、そしてバラス。それを2度繰り返すことでクラス全員のチームワークを体現する。

授業計画

- 演劇を構成する要素
- 舞台監督の仕事の範囲(演出家との仕事の違い)
 - 舞台の総括責任者としての仕事
 - 稽古場を作る→進行する
 - 舞台の設営
 - 毎日の上演の安全管理
- 舞台(稽古場)の安全管理
 - 作業中の安全管理
 - 舞台進行上の安全管理
- 簡単な道具制作作業
- 小劇場の舞台の設営、客席を作る
- 小劇場の舞台のバラス、客席のバラス

授業時間外の学習

「履修届」を提出した時「プリント」を受け取り、集中講義の履修前に目を通しておく。

教科書・参考書等

必ず作業着を着用し、釘袋その他の作業道具を各自用意し、内履きシューズを使用。

成績評価

集中講義の授業への取組み30%、レポート70%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 ヘアメイク実習

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 鈴木 理絵

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

特になし。

授業の概要

舞台におけるメイクアップの基礎理論、基本技術を学ぶ。
主に演劇の上で必要となるステージメイクを劇場や照明、演出、役柄等に応じて理解し、舞台での効果的なメイクの基本を実践的に技術習得する。
メイク講義、デモンストレーションの後、テーマに合わせた舞台メイクの実習を行う

授業の到達目標

舞台メイクアップの基本技術習得。

授業計画

- 舞台メイクアップの基礎理論・基本実技
1. 舞台メイク基本概論
 - ・ステージメイクの種類、劇場、照明、演出とメイクの関連性。
 - ・顔の骨格と筋肉、顔の修正方法、舞台メイクで使用する化粧品説明及び使用方法。
 2. 男女別舞台メイク基礎デモンストレーション
 3. 舞台メイクアップ実習
 4. 役柄に合わせた顔づくり、デモンストレーション

授業時間外の学習

授業前の予習として、様々な舞台のメイクアップを意識して目しておくこと。
授業後は、授業中に理解した技術をより深める為に、反復練習すること。

教科書・参考書等

教材…ファンデーション、パウダー、スポンジ、パフ、アイライナーペンシル等。
その他用意するもの…鏡、ティッシュ、綿棒、タオル、基礎化粧品、その他お手持ちの化粧品。

成績評価

- S. 授業態度、講義内容への理解、メイク技術、向上心、全てに優れているもの。
- A. 授業態度、講義内容への理解、メイク技術、向上心、ほぼ優れているもの。
- B. 授業態度は良好、向上心が感じられるもの。
- C. 向上心が感じられないもの。
- D. 授業の妨げになるもの。

科目名 ワークショップ 1年次

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 後期集中

1

/

○

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。
ストレートプレイ系、ミュージカル系のどちらのワークショップを受講するか、希望をききとる面接あるいは調査を前期末頃、あるいは夏期休暇中に行うので、その日程を発表する掲示を見落とさないこと。面接あるいは調査で希望の意思表示のない学生は受講できない。

授業の概要

ストレートプレイ系、ミュージカル系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現・声による表現に関する理解を体験的に深める。

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 ワークショップ 2年次

対象 演劇専攻2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

ストレートプレイ系、ミュージカル系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。

授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深める。

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否

S：①～⑥のうち全てを獲得した者

A：①～⑥のうち5つを獲得した者

B：①～⑥のうち4つを獲得した者

C：①～⑥のうち3つを獲得した者

D：①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇研修(八ヶ岳合宿)

対象 演劇専攻1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 三浦 剛

期間 前期集中

1

/

○

履修条件

原則として演1全員参加。

授業の概要

演劇専攻の教育課程の基本は次の三つである。

- 1 戯曲が読めること。
- 2 からだを鍛えること。
- 3 集団行動が取れること。

この授業では、特に3の「集団行動が取れること」が課題となる。個人だけではできない演劇創造の実践を短期間のうちに、しかも限られた状況の中での集中作業で修得する実演発表形式をとる。

なお、この授業は三泊四日の合宿形式による集中講義でもある。

場所は本学の施設八ヶ岳高原寮を使用する。

授業の到達目標

合宿研修の全過程を通じて、アンサンブルの重要性を学ぶ。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 第一日目 出発
- 3 第一日目 課題の提示、課題作品を読み取り、理解する。
- 4 第一日目 レクリエーション アンサンブルの前提となるコミュニケーション能力を発揮する
- 5 第一日目 課題稽古① 課題作品の中からなにを表現の主題とするか、検討し、いったん台本としてまとめる
- 6 第二日目 沢登り アンサンブルの前提となる共同作業、共同の体験を積み、体験的に協力する意味を獲得する
- 7 第二日目 課題稽古② 台本の再検討、部分的に立体化を試みる
- 8 第二日目 課題稽古③ 立体化したシーンを検討することによって、さらに台本の再検討に進む
- 9 第二日目 課題稽古④ さらに台本をまとめ、完成させる
- 10 第三日目 課題稽古⑤ 台本をもとにして完全なる上演を作る。スタッフワークも検討する。
- 11 第三日目 舞台稽古 実際の発表会場をつかってスタッフワークと合

わせてリハーサルを行う。

12 第三日目 発表(劇上演) 参加者相互で創作した作品を鑑賞しあう。

13 第三日目 講評 教員から演技、構想、集団作業のすべての面についての講評を受け、自己分析をする

14 第三日目 反省会 お互いの苦勞と共同作業の成果を確認し、アンサンブルの意義を再確認する

15 第四日目 清掃、帰京 創作の会場に感謝を込めて原状復帰し、創作の全プロセスを締めくくる

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを確認し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書きとめ、その内容を復習するように努めること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次の時間帯のミーティングで発言できるように事前準備をすること。毎回合意された内容について作業を行い、着実に完成に向けて進めていくこと。稽古時間外のそうした思索が、発表する作品成果を左右するので、合宿生活を通して緊張感を維持すること。

教科書・参考書等

参考資料等：必要に応じて合宿時に配布。

成績評価

①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否

S：①～⑥のうち全てを獲得した者

A：①～⑥のうち5つを獲得した者

B：①～⑥のうち4つを獲得した者

C：①～⑥のうち3つを獲得した者

D：①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 海外研修

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 ペーター・ゲスナー・高橋 宏幸

期間 後期集中

1

/

○

履修条件

良好な体調で海外での研修を受けることができるもの。また、事前に複数回の説明会を課すが、必須でうけることができるもの。

授業の概要

海外の演劇教育機関でワークショップを受けて、俳優訓練などを勉強する。世界的なレベルで現在の自分のレベルを知り、足りないところを認識し、今後の発展の礎にする。また、それぞれの国の演劇を見たり、美術館、博物館をまわり、演劇はもちろん、異文化を理解する。また、海外のさまざまな演劇人と実際にふれあう機会があるので、臆することなく積極的に参加すること。昨今では、イタリアのテアトロ・アルセナーレ、オーストラリアの国立演劇学校であるNIDA、スイスのチューリッヒ芸術大学、カナダのカルガリのルーズムーズシアターなどで研修している。今年度も欧米の国々での研究を予定している。意欲のあるものを歓迎する。

授業の到達目標

海外での演劇研修を通じて、国際的な知見をもって視野を広めること。また、さまざまな人とふれあうことにより、文化の多様性を知ること。そして、自分のいる国や民族、文化を翻って見つめなおすこと。単なる旅行ではなく、あくまで研修としてさまざまなものを学ぶ機会としてこの授業はある。そのためには事前の学習として、下調べが必要である。またそのためのテキストなどは用意される。

授業計画

- 第1回 準備説明会
- 第2回 準備説明会
- 第3回 説明会
- 第4回 説明会

- 第5回 事前学習会
- 第6回 事前学習会
- 第7回 結団式
- 第8回 ワークショップ
- 第9回 ワークショップ
- 第10回 ワークショップ
- 第11回 ワークショップ
- 第12回 ワークショップ
- 第13回 ワークショップ
- 第14回 鑑賞会
- 第15回 鑑賞会

授業時間外の学習

訪問する国の文化、環境、演劇などを必ず調べておくこと。それぞれの国の劇作家、演劇などを知り、ワークショップにスムーズに参加できるように準備しておくこと。また帰国後のレポートを書く際に、体験したことをふまえて、さらに調べること。

教科書・参考書等

訪問国の舞台に関する戯曲やさまざまな資料をそのつど配布するので、読んでおくこと。

成績評価

- 1) 研修の予備調べ、および事前説明会や学習会への取り組み
 - 2) 研修中の態度、3) 帰国後のレポートにより評価する。
- S 上記の1・2・3、の総合点が90点以上のもの。
 A 上記の1・2・3、の総合点が80点以上のもの。
 B 上記の1・2・3、の総合点が70点以上のもの。
 C 上記の1・2・3、の総合点が60点以上のもの。
 D 上記の1・2・3、の総合点が60点以下のもの。

科目名 劇上演実習A(試演会)(ストレートプレイコース)

対象 演劇専攻2年
(ストレートプレイコース)

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 後期集中

4

/

—

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品、企画作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 パフォーマンスの稽古①
- 7 パフォーマンスの稽古②

- 8 パフォーマンスの稽古③
- 9 パフォーマンスの稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなげが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
 A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
 B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
 C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
 D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習A(試演会)(ミュージカルコース)

対象 演劇専攻2年
(ミュージカルコース)

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 後期集中

4

/

—

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

担当教員による授業時間(稽古時間)に加えて、LA(レッスンアシスタント)によるダンスの補習が週に2コマ、歌唱の補習が週に2コマ行われるので、欠席・遅刻・早退せずに参加すること。

- 8 パフォーマンスの稽古③
- 9 パフォーマンスの稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

毎週、授業と並行して「LA補習」に参加し、稽古で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってからその週の稽古に出席すること。LA補習はLAが指導、監督するのでその指示に従うこと。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品、企画作品を目指す。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 パフォーマンスの稽古①
- 7 パフォーマンスの稽古②

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習B(卒業公演)(ストレートプレイコース)

対象 演劇専攻2年
(ストレートプレイコース)

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 後期集中

4

/

—

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、広く演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

この実習では、卒業後演劇活動に従事することを想定し、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

- 6 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル①
- 7 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル②
- 8 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル③
- 9 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品・パフォーマンスを目指す。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

授業計画

実習のプロセスは作品・企画および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・パフォーマンスのために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演・パフォーマンスのために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習B(卒業公演)(ミュージカルコース)

対象 演劇専攻2年
(ミュージカルコース)

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 後期集中

4

/

—

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

担当教員による授業時間(稽古時間)に加えて、後期授業期間中は、LA(レッスンアシスタント)によるダンスの補習が週に2コマ、歌唱の補習が週に2コマ行われるので、欠席・遅刻・早退せずに参加すること。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、広く演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

この実習では、卒業後演劇活動に従事することを想定し、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品・パフォーマンスを目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品・企画および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・パフォーマンスのために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演・パフォーマンスのために必要なスタッフワークの役割分担、芸

術的方針の共有②

- 6 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル①
- 7 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル②
- 8 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル③
- 9 たち稽古あるいはパフォーマンスのためのリハーサル④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにか合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

後期授業期間中は毎週、稽古と並行して「LA補習」に参加し、稽古で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってからその週の稽古に出席すること。LA補習はLAが指示、監督するのでその指示に従うこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習C / D(学外出演)

対象 演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 専任教員

期間 集中

4

/

○

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)。企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義が認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合にのみ単位認定は可能。スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組みにも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任をもって管理すること。安易な参加はむしろ控えること。

学業を進めることが損なわれるような現場の日程、要求がされることがないか、事前に十分確認すること。学外出演する学生の単位認定や扱いを、他の学生とは例外扱いしたり、特別優遇するようなことはない。重々どのような条件の参加になるのか事前に確認して臨むこと。

授業の到達目標

プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。さまざまな現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。座組の一員としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画

一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①

- 5 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
 - 6 たち稽古①
 - 7 たち稽古②
 - 8 たち稽古③
 - 9 たち稽古④
 - 10 舞台の仮組み あるいは撮影セット内でのリハーサル
 - 11 舞台稽古① あるいはリハーサル①
 - 12 舞台稽古② あるいはリハーサル②
 - 13 舞台稽古③ あるいはリハーサル③
 - 14 本番 あるいは撮影
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- 作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにか合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 E / F(学内出演)

対象 演劇専攻 1・2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 担当教員

期間 集中

1

/

○

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)・企画内容の十分わかる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)への出演者としての参加。ただし出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。

稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組みにも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任もって管理すること。安易な参加はむしる控えること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

さまざまな実習、演習に出演者として参加し、さまざまな関係者、出演者、スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)に出演者として参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①

- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにか合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者として真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑥のうち全てを獲得した者
A: ①～⑥のうち5つを獲得した者
B: ①～⑥のうち4つを獲得した者
C: ①～⑥のうち3つを獲得した者
D: ①～⑥のうち2つしか獲得できなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

専攻科音楽専攻

科目名 音楽理論[和声]Ⅴ・Ⅵ

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 平井 正志

期間 前期・後期

2・2

/

履修条件

「和声Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の教程内容に習熟した上で、さらに高度な内容を求めていること。

授業の概要

音楽における旋律的要素―拍節、律動、非和声音とそれに伴う不協和音が和声法にあってどのように考慮されるべきかを詳察する。その上で、半音階的転調を伴う歌謡形式のソプラノ課題を実施し、実践的な和声法の能力を培う。

また、上記の内容がロマン派の小品にあってどのように現れているかを観察、分析し、さらに以上の教程を通じて修得された素養をもとに、最後に自作の旋律による簡単な歌謡形式の和声的小品を試作する。

授業の到達目標

前期：非和声音を含むソプラノ和声課題の実施を通して、和声法を実践する技術の習熟をはかる。

後期：実際の音楽作品総体における和声的側面を音楽的発想の一部として感得するための力を養う。

授業計画

前期：

第1～4回 内部変換

・非和声音とリズムの変化を伴う和声課題の実施に先立ち、同一和音内での配置の変更の際の諸作法に通暁する。

第5～9回 構成音の転位

・非和声音を含む旋律の和声的状態を把握する際の、音響的条件とその変化の可能性（和音進行、終止形の形成）を解析し、感覚的な把握をし得る素地を養う。

・非和声音を含むソプラノ課題を実施し、旋律が規定する状況下で、同時に旋律自体が内在的に含有する和声感を、直覚的に発見する能力を開発する。

第10～14回 遠隔転調を含むソプラノ課題の実施

・準関係調、副次関係調への転調について理解し、それらの転調を含むソプラノ課題を実施する。

第15回 最終課題の内容検討と、提出。

後期：

第16～19回 ロマン派のピアノ小品において、いかに上記の要件が実践されているかを詳細に分析する。

第20回以降、以上の教程において養われた能力と素養を発揮して、ロマン派的な和声様式による小品を試作する。

第20～22回 テーマ創作法の指導。旋律構成法、伴奏法の実践的経験をを通して。

第23～29回 自作曲の内容検討。楽曲構成法、転調法の指導を通して。

第30回 完成曲の最終内容検討と提出。

授業時間外の学習

後期の授業内容に備えて、ロマン派の和声様式によって作曲された小品に親しんでおくこと。

教科書・参考書等

教科書：課題、及び参考曲のプリントを配布

参考書：和声「理論と実習」第三巻 音楽之友社（執筆責任 島岡 譲）

成績評価

前期末、最終実施課題をレポートとして提出。後期末、自作の小品を完成し、譜面を提出する。

単位認定の可否については、提出課題内容の優劣のみならず、課題実施を通じて総合音楽力を伸長できた度合いを重視して勘案しつつ、可否を決定する。

S 90点～100点：前期の和声課題実施において独自の審美眼を反映でき、書法面の習熟度が高い。後期の自作曲において美的感覚と発想にすぐれ、独創性の感じられるレベルに到達している。

A 80点～89点：前期の和声課題において、原則に対する理解、和声法に対する洞察が確かである。後期の自作曲において、前期を通して身につけた和声的感覚を十分に発揮できている。

B 60点～9点：上記の条件において、まだ追求の余地が残されていた。

C 50点～59点：和声法に対する習熟度が足りず、自作品の内容に関する追求が十分でない。

D 50点未満：和声法への理解が到らず、自作品を満足な状態で完成できない。

科目名 楽曲分析（古典派）

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 池田 哲美

期間 前期

2

/

履修条件

基礎的な和声、および楽式に関する知識を有するもの。後期を含めて通年履修が、望ましい。

授業の概要

和声の歴史の変遷、及び楽式の変化・発展を考究する。

古典派の音楽を中心に楽曲分析を行う。和声の発展、ソナタ形式の拡大・複雑化とその完成の過程をハイドンからベートーヴェンの楽曲分析を通して学習する。そしてベートーヴェン後期の作品にも触れて、その独自性を検討する。

授業の到達目標

古典派のそれぞれの楽曲の和声・楽曲形式を、音楽史の歴史的観点から鑑みつつ、その特徴と位置を観取できるようにする。

授業計画

第1～2回 ソナタ形式の原型と発生史を検討。及び古典派初期の形態を知る。

第3～4回 古典派中期のモーツァルト及びベートーヴェン初期の作品を検討する。

第5～6回 ベートーヴェン中期の作品 1.

第7～8回 ベートーヴェン中期の作品 2.

第9～10回 ベートーヴェン後期の作品

第11～12回 ベートーヴェンと初期ロマン派

第13～15回 学生による作品分析の発表。

授業時間外の学習

特にベートーヴェンの作品において、自分の楽器専攻以外の楽曲に親しむことが望まれる。

教科書・参考書等

毎回の授業開始時などに、プリント類の配布を行う。

成績評価

小テストと学期末の学生による作品分析の発表。

科目名 楽曲分析（ロマン派以降）

対象 専攻科音楽専攻 1年

単位数

他専攻

担当教員 池田 哲美

期間 後期

2

/

履修条件

● 古典派までの楽式、及び和声の知識を有すること。また後半では印象派の作品を取り扱うため、教会旋法の知識も必要となってくるので、あらかじめ学習しておくことが望まれる。

授業の概要

● ロマン派初期の作品から、中期～後期にいたる変遷を具体的な楽曲を分析しながら学習し、さらにドビュッシー・ラヴェルといった印象派の作品、そして近・現代にいたる移り変わりを楽曲分析を通じて検討する。調性の複雑化と崩壊、楽曲創作における各作曲家の時代性を伴う意識の変化を追う、といった広い観点を含め考究したい。

授業の到達目標

● 特に、印象派以後の作品に親しみ、古典派・ロマン派の作品との関連性と差異性を具体的に知ることができるようになること。

授業計画

● 第1～2回 初期ロマン派の作品。
第3～4回 中期ロマン派の作品 1.
第5～6回 中期ロマン派の作品 2.
第7～8回 後期ロマン派の作品
第9～12回 印象派及び近現代の作品
第13～15回 履修学生自身による作品分析の発表。

授業時間外の学習

● 自分の専攻楽器以外の作品、特にオーケストラ作品などに日頃から親しんでおくこと。

教科書・参考書等

● ほぼ毎回の授業開始時にプリント類の配布を行う。

成績評価

● 小テストと学期末の学生による作品分析の発表。

科目名 コード論Ⅱ

対象 専攻科音楽専攻 1年

単位数

他専攻

担当教員 小林 真人

期間 前期

2

/

履修条件

● 特に無し

授業の概要

● より多くのコードを覚え、ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏や作編曲をする際のアイデアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。

● 譜面通りに演奏することだけでなく、コードを元にその場に応じて、どのように演奏（作編曲も含め）したらよいか、自分自身で柔軟に創出出来るようにする。

● コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。

授業の到達目標

● コードを覚え、その構成音を把握し、自由に転回できる。
メロディに対してコード付けできる。
コード付けしたものをもとに、それを発展、応用することができる。
それらをピアノなどで演奏、表現できる。

授業計画

● 1 ガイダンス
2 コード論 基礎編1 コードの仕組み／3和音と4和音
3 コード論 基礎編2 ダイアトニックコード／TSDの機能
4 コード論 基礎編3 ドミナントモーション／II^m7-V7／SD7
5 コード論 基礎編4 同じ機能内の代理／V7とII^b7
6 コード論 基礎編5 代理コードとリハモナイズ
7 コードパターンとコード付け1 循環コードと逆循環コード
8 コードパターンとコード付け2 ブルース
9 コード論 応用編1
10 コード論 応用編2
11 コード論 応用編3
12 コード論 応用編4
13 コードパターンとコード付け3
14 コードパターンとコード付け4
15 まとめ

授業時間外の学習

● 授業でやった事を復習しておく。
コードに慣れる。

教科書・参考書等

● 特になし。随時プリントを渡す。

成績評価

● 出席状況、授業態度、課題発表への取り組み姿勢、レポートなどで判断する。

科目名 S. H. M. V・VI

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 塩崎・池原・坂田晴・三瀬・長谷川

期間 前期・後期

1・1

/

履修条件

S. H. M. I・II・III・IVの単位を修得し、更なる音楽能力の向上を望むもの。

授業の概要

今までに学んできたことを活かし、より一層高度な能力を身に付ける。音楽における実践的な技術-アンサンブル、初見視奏、和声付けなど-の様々なより柔軟な音楽能力を習得する。

特にすでに学んできた楽典知識などを具体的な形で応用し、楽曲の理解を深めるための重要な手段としてのソルフェージュを学ぶ。

授業の到達目標

より高度で実践的な音楽能力の習得。総合的な力を具体的な題材を用い、訓練する。

授業計画

- ・変拍子を含む多様なリズムの学習
- ・ハ音記号などのクレ読みの実践
- ・楽典的知識の応用
- ・旋律の和声付け
- ・対位法的楽曲の聞き取り
- ・即興演奏
- ・移調能力の促進
- ・弾き歌い
- ・読譜力の強化
- ・暗譜力の促進
- ・既存の楽曲の聴音・聴き取り
- ・室内楽、及び管弦楽曲の読譜と聴音

授業時間外の学習

常に読譜力の向上をめざし、日頃から楽譜を読むことを習慣付ける。

教科書・参考書等

プリントの配布。

成績評価

平常点と期末試験。

科目名 音楽史研究

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 関野 さとみ

期間 通年

4

/

履修条件

オペラへの興味・関心をもっていること。

授業の概要

テーマは「オペラ史」。オペラは各時代・国の政治や社会背景と密接に結び付き、それらを反映しながら発達してきた芸術ジャンルである。この講義では17世紀から20世紀までのオペラ史を、各時代の代表的なオペラ作曲家やその作品だけでなく、演劇史や舞踏史、文学、劇場建築との関係も絡めながら多角的に考察することで、〈文化の総体〉としてのオペラについて理解を深める。

各回、オペラ史に沿う形で特定のテーマを設定し、そのテーマに関わる作曲家（1～2人）とその代表的作品を例として取り上げ、考察していく。19世紀後半以降、演出がオペラにおいてどのような意味をもつようになったのか、また映像・映画との関係など、オペラというジャンルをめぐる今日的な問題についても考える。

授業の到達目標

音楽専攻の学生として習得しておくべき、オペラ史の基本的な知識を身に付ける。また、あるオペラがその国や時代の文化をどのように反映しているかを探ることで、音楽そのものを文化的・社会的な文脈の中で広く捉えるための視点や思考を養う。

授業計画

<前期>

- 1 ガイダンス（「オペラ」という用語の定義／オペラ史概観）
- 2 オペラの誕生
- 3 カストラートの歌声：モンテヴェルディ
- 4 リュリとトラジェディ・リリック
- 5 ラモー①
- 6 ラモー②
- 7 グルックのオペラ改革
- 8 モーツァルト①
- 9 モーツァルト②
- 10 ドイツのロマンティック・オペラ：ウェーバー
- 11 グランド・オペラの確立：ロッシーニ、マイヤーベア
- 12 オペレッタと「ユーモア」の手法：オッフェンバック
- 13 19世紀オペラと女性像①：〈マリア〉と〈マгдаラのマリア〉
- 14 19世紀オペラと女性像②：ドニゼッティと〈狂乱の場〉
- 15 前期の総括

<後期>

- 1 異国趣味とオペラ：ビゼー、プッチーニ
- 2 ヴェルディ①
- 3 ヴェルディ②
- 4 オペラとヴェリスモ：マスカーニ、レオンカヴァッロ
- 5 ヴァーグナー①
- 6 ヴァーグナー②
- 7 ヴァーグナー③
- 8 近代オペラの転換点：ドビュッシー①
- 9 近代オペラの転換点：ドビュッシー②
- 10 20世紀オペラと「性」①：リヒャルト・シュトラウス、ベルク
- 11 20世紀オペラと「性」②：ショスタコヴィチ、コルンゴルト
- 12 20世紀オペラと「性」③：プリテンと「男たちの世界」
- 13 オペラと映画：アメリカの場合
- 14 「オペラは死んだ」？：現代のオペラ／音楽劇の多様な展開
- 15 総括（通年）と試験

授業時間外の学習

予習はとくに必要ないが、これまで学んできた西洋音楽史を一通り復習しておくこと。また、時間の制約上、講義で紹介する作品は抜粋での鑑賞が主となるので、図書館等の映像資料や音源を利用し、講義で扱った作品の全体を自主的に鑑賞すること。さらに実際のオペラの公演にも足を運び、学生のうちにオペラの舞台に接する機会をなるべく多く持つように心がけてほしい。

教科書・参考書等

特定の教科書は使用せず、毎回プリントを配布する。全体的な参考書としては以下の資料を薦める。その他の文献は講義で紹介する。
※スタンリー・セイディ編『新グローヴ オペラ事典（普及版）』（白水社、2010）、「キーワードで読む オペラ／音楽劇研究ハンドブック」（アルテスパブリッシング、2017）

成績評価

受講態度40%、期末試験40%、レヴュー・シート20%で判定。

- S 総合点100～90点
- A 総合点89～80点
- B 総合点79～60点
- C 総合点59～50点
- D 総合点50点未満

科目名 日本音楽史研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻 1 年

単位数

他専攻

担当教員 野川 美穂子

期間 通年

4

/

履修条件

とくに条件はないが、音楽のみでなく、日本文化全体に対する関心をもつことが基本。
今年度と来年度では、授業の内容が異なる。

授業の概要

日本音楽には様々な種目があり、使われる楽器、音楽の特徴などに違いがある。また、その多くは舞踊や演劇と結びついている。この授業では、江戸時代より前に成立した種目を中心に、その歴史と音楽的な魅力を紹介する。また、音楽以外の分野とどのように結びついてきたのか、社会や文化の中でどのように伝えられてきたのかを考える。毎回、視聴覚教材を活用しながら、授業を進める。

授業の到達目標

日本音楽の歴史と特徴を多面的に理解する。

授業計画

次のような流れで進める。

- (1) 日本音楽史の特徴、日本音楽を知るための資料
- (2) 正倉院の楽器
- (3) (4) (5) (6) 雅楽の歴史と特徴－雅楽の代表曲を楽しむ－
- (7) (8) 雅楽の伝承方法と現在
- (9) 雅楽から生まれた新しい日本音楽

- (10) (11) (12) (13) 声明の歴史と特徴－宗派による違い－
- (14) 声明の現在
- (15) 雅楽と声明のまとめ
- (16) (17) (18) 琵琶楽の歴史と特徴－琵琶楽の代表曲を楽しむ－
- (19) 琵琶楽の伝承と発展
- (20) 能楽の魅力
- (21) (22) (23) (24) 能楽の歴史と特徴－能楽の代表曲を楽しむ－
- (25) (26) (27) 能楽が後世の音楽に与えた影響
- (28) (29) 能楽の伝承方法と現在
- (30) 琵琶楽と能楽のまとめ

授業時間外の学習

授業でとりあげた種目や作品の特徴を整理し、より深く調べること。

教科書・参考書等

毎授業時にプリントを配布する。参考書については、その都度指示する。

成績評価

前期末と後期末に筆記試験を行う。出席状況50%、前期・後期末の筆記試験の成績50%の配分で評価する。

科目名 音楽療法概説 A / B

対象 専攻科音楽専攻 1・2 年

単位数

他専攻

担当教員 鈴木 千恵子

期間 通年

4

/

履修条件

特になし。

授業の概要

本講義では、音楽の様々な働きがどのように治療や援助に生かされるのかを理解し、さらに音楽が人間や社会に働きかける可能性を探っていく。

音楽という芸術を治療という科学の領域に入れること自体に難しさはあるが、この領域は20世紀に入り大きく発展してきた。音楽・患者(対象者)・治療者の三者から構築される治療技法の音楽療法は、医療、福祉、教育、保健領域で生かされ、また新しい学問としても現代社会において注目を浴びている。

前期では理論を中心に基本的概念を学ぶ。

後期では音楽療法に必要な治療技法について学ぶ。

現場実習としては、音楽療法視点の訪問コンサートへの参加を必修とする。

授業の到達目標

音楽療法の定義を理解し、音楽の治療的機能を把握する。基本的なプログラム作成ができるようになる。

授業計画

- | | |
|------------------|---------------|
| [前期] | [後期] |
| 1 ガイダンス、現場実習について | 1 後期実習について |
| 2 音楽療法の理論的背景 | 2 基本的プログラム作成① |
| 3 音楽療法と対象と病理① | 3 基本的プログラム作成② |
| 4 音楽療法と対象と病理② | 4 基本的プログラム作成③ |

- | | |
|--------------|---------------|
| 5 音楽療法の活動① | 5 基本的プログラム作成④ |
| 6 音楽療法の活動② | 6 音楽療法事例① |
| 7 音楽療法の枠組み | 7 実習リハーサル |
| 8 実習リハーサル | 8 実習リハーサル |
| 9 実習リハーサル | 9 実習 |
| 10 実習 | 10 実習 |
| 11 実習 | 11 フィードバック |
| 12 フィードバック | 12 他領域の臨床活動 |
| 13 評価①文章形式 | 13 海外の音楽療法① |
| 14 評価②スケール形式 | 14 海外の音楽療法② |
| 15 まとめ | 15 まとめ |

授業時間外の学習

理論と学習を行なうので、2つの柱が結びつくように授業の復習に努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著(牧野出版)
「音楽療法の実際」松井紀和、鈴木千恵子他著(牧野出版)
以上、2冊教科書。
参考書「松井紀和のスーパービジョン」編著 鈴木千恵子(音楽之友社)

成績評価

- (1) 授業の取組みと態度 (2) 期末試験の総合評価
- | | | |
|---|-----|-------|
| S | 総合点 | 90点以上 |
| A | 総合点 | 80点以上 |
| B | 総合点 | 60点以上 |
| C | 総合点 | 50点以上 |
| D | 総合点 | 49点以下 |

科目名 音楽療法演習A/B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 鈴木 千恵子

期間 通年

2

/

履修条件

「音楽療法概説」を履修していること。

授業の概要

この授業は音楽療法の実習を中心とし、実践に関する技術等も学ぶ。

実習現場は高齢者を予定しているが、可能であれば他領域もやりたいと考えている。

この授業での実習は、一般社会で行われている少人数対象の音楽療法セッションをイメージし、対象者とコミュニケーションを図りながら様々な音楽活動のアプローチを学んでいく。

授業の到達目標

音楽療法の実践に必要な臨床的音楽技術を身につける。
基本的なプログラム作成ができるようになる。

授業計画

[前期]	[後期]
1 ガイダンス	1 臨床現場についての理解
2 様々な音楽療法活動について	2 セッションの計画と準備①
3 楽曲について	3 セッションの計画と準備②
4 模擬セッション①	4 リハーサル①
5 模擬セッション②	5 リハーサル②
6 実習準備①	6 リハーサル③
7 実習準備②	7 実習
8 実習	8 実習

9 フィードバック	9 フィードバック
10 臨床的音楽技術①伴奏	10 臨床的音楽技術③身体
11 臨床的音楽技術②楽器	11 臨床的音楽技術④編曲
12 即興演奏	12 即興演奏
13 まとめ	13 まとめ
}	}
15	15

授業時間外の学習

音楽療法の実習に関しては、プログラム作成が最も大切である。
選曲等は深く調べ、練習もしっかり行うよう努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著(牧野出版)
「音楽療法の実際」松井紀和、鈴木千恵子他著(牧野出版)
以上、2冊教科書
参考書「松井紀和のスーパービジョン」編著 鈴木千恵子(音楽之友社)

成績評価

(1) 授業の取組みと態度 (2) 期末試験の総合評価

S	総合点	90点以上
A	総合点	80点以上
B	総合点	60点以上
C	総合点	50点以上
D	総合点	49点以下

科目名 演奏現場論A/B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 合田 香

期間 前期

2

/

履修条件

特になし。

授業の概要

この20年大小の音楽専門ホールが続々オープンし、都内では乱立気味。
一方、オーケストラの世界ではホールとのフランチャイズ提携が増えてきて、本番と同じ場所で練習ができるオーケストラが増えてきている。これはとりも直さず、日本の音楽界において「響き」(音響)の意識が向上して、それに呼応して周りの環境も整ってきたものであろう。

演奏者も、教育者も、聴衆も、音楽をプロデュースする立場の者も、そして当のホール関係者もホールでの音響、楽器同士の関係等に鈍感ではいられない。

演奏者は(声楽を含んで)自分の楽器の特性、別の楽器の特性をよく理解し、違ったホールにおいても即座に色々な状況を感じ取って対応していかなければならない。プロデュースする者やスタッフも演目合ったホールの選択が当然の時代になってきている。

この授業では個別の楽器の音響の個性の理解に始まり、ホールの響きとの関係、問題点の解消方法を学ぶ。

また一方、「演奏」という進路の他に「音楽業界」を視野に入れたい人にはこの授業中で行う、色々なケーススタディーや会場(現場)での体験の機会が自分の進路選択に役立つと思う。

授業の到達目標

- ・実技やアンサンブルの学習の段階において、また実際の演奏現場等で活用することのできる「響きや配置の『考え方』」の習得。
- ・クラシック音楽業界の理解と体験。

授業計画

受講学生の専攻や将来展望によって、系統1と系統2を織り交ぜながら授業を構成する。

[系統1] 楽器とホールと音響と配置

- 1 個別の楽器の音、指向性、伝播特性
 - 2 楽器間の音の干渉
 - 3 ステージ上の配置による響きと変化
 - 4 ホール内の位置による聞こえ方の相違
 - 5 響きの判断の材料
 - 6 楽曲や作曲者による配置の違いについて
- 上記を授業の中で取り上げ、授業参加者に実際の演奏で体験、検証してもらう。

[系統2] コンサートビジネスとその色々

- 1 コンサートの業界
- 2 働く人々とその職種
- 3 個別な仕事の内容
- 4 コンサート業界に必要な知識
- 5 出演者でもなく、聴衆でもない形でコンサートに関係する
- 6 ホスピタリティの考え方について

授業時間外の学習

この授業で理解した内容を、アンサンブル、オーケストラ、実技レッスン、他の授業などで試してみて、その経験をまた授業にフィードバックできることが望ましい。

教科書・参考書等

資料を配布する。
「はじめてのオーケストラ・スコア」野本由紀夫著(音楽之友社)

成績評価

授業への取組みを重視。期末にレポートを課す。

S	総合点	90点以上
A	総合点	80点以上
B	総合点	60点以上
C	総合点	50点以上
D	総合点	49点以下

科目名 アウトリーチ研究 A・B

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

担当教員 永井 由比

期間 通年

4

○

履修条件

特になし。

授業の概要

アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉などの分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービスなどの意味で対応される。

本講義では主に、現場実習を通して芸術分野でのアウトリーチが具体的にどのような社会貢献をできるか模索していく。

また、福祉施設、学校などを一年間通して定期的に訪問してアウトリーチによって利用者がどのように変わって行くか考察していく。

授業の到達目標

学校、福祉施設などそれぞれに適したアウトリーチコンサートの企画作り60分完結のワークショップを企画する。

授業計画

前期

1. ガイダンス
2. ワークショップについて
3. ワークショップ企画作り①
4. ワークショップ企画作り②
5. ワークショップ発表①
6. ワークショップ発表②
7. ワークショップ発表③
8. ワークショップ発表④
9. 学校訪問アウトリーチについて①
10. 学校訪問アウトリーチについて②
11. 学校訪問アウトリーチについて③
12. 学校訪問アウトリーチ発表
13. 学校訪問アウトリーチ発表②
14. 学校訪問アウトリーチ発表③
15. まとめ

後期

1. ガイダンス
2. 企画作り①
3. 企画作り②
4. 企画作り③
5. プログラム作成①
6. プログラム作成②
7. 実習①
8. 実習②
9. 実習③
10. 実習④
11. 実習⑤
12. 公共ホールにおけるアウトリーチ活動について①
13. 公共ホールにおけるアウトリーチ活動について②
14. フィードバック
15. まとめ

授業時間外の学習

演奏、ワークショップ発表に向けて個々、またはグループで練習をしっかりとすること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み姿勢、レポートなどの提出物で判断する。

- S 総合点が90点以上のもの
 A 総合点が80点以上のもの
 B 総合点が60点以上のもの
 C 総合点が50点以上のもの
 D 総合点が49点以下のもの

科目名 第一実技Ⅲ・Ⅳ／副科実技Ⅲ・Ⅳ／第二実技Ⅲ・Ⅳ

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

担当教員 各担当教員

期間 通年

6/2/4

/

履修条件

第一実技は全学生の専門実技として必修科目である。別途徴収になるが、副科実技・第二実技として専門実技以外の実技を履修することができる。副科実技・第二実技は他専攻の学生も履修することができる。

授業の概要

第一実技は、全学生が各自の専修実技の担当講師のもとで、週1回、60分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。試験は前期、後期と2回行い、また、後期には学内演奏会に出演する。尚、2年次後期の成績優秀者は修了演奏会に出演することができる。

第二実技は、週1回、40分のレッスンを受けることができ、前期、後期に試験を行う。副科実技は、レッスン時間が20分となる。

授業の到達目標

担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び課題の検討
 第2回～第21回 与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んで行くという形を繰り返して行く。
 第22回 試験曲の検討
 第23回 試験曲の決定
 第24回～第28回 試験曲のレッスン
 第29回～第30回 試験曲のまとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。

- S 演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
 A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
 B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者
 C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
 D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者
 あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて受験資格がなかった者

科目名 ピアノデュオ研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

担当教員 東井 美佳

期間 通年

4

/

履修条件

専1ピアノ専修必修。他専修の学生も履修可能。

授業の概要

自由に組んだペアで曲を準備し、毎回の授業で数組が演奏し、レッスン形式で進めていく。

履修者全員で楽譜を共有し、積極的に意見を出し合いながら、アンサンブルの一員としてパートナーと協力して仕上げていくことを実践的に学ぶ。

授業の到達目標

自分の出している音、相手の音もよく聴きながら、呼吸を合わせて演奏すること。その上でお互いの音をよく鳴らし合わせ、曲の構成もしっかり理解しながら仕上げられるようにしたい。前期末、後期末に成果発表の試演会を行う。

授業計画

- 1 ガイダンス
選曲及び組み合わせ決定
- 2～7 共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ
- 8～14 各ペア自由に選んだ曲による発表、研究
定期演奏会オーディションの準備
- 15 前期成果発表
前期の反省、後期自由課題の選択への準備
- 16～29 自由選択曲による研究、発表
- 30 授業の総括、成果発表

授業時間外の学習

事前の予習、授業後の復習において、自らの練習はもちろん、パートナーとの合わせを充分にしておくこと。

それぞれの曲の作曲家や時代背景についても充分に調べておくこと。

教科書・参考書等

その都度指示、配布。必要に応じて各自準備する。

成績評価

授業への取組み自らを研鑽、努力する姿勢、学習到達度などを総合的に判断する。

S：総合点90点以上

A：総合点80点以上

B：総合点60点以上

C：総合点50点以上

D：総合点49点以下

科目名 管楽アンサンブル研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

単位数

他専攻

担当教員 石橋 雅一

期間 通年

4

/

履修条件

特になし。
管楽器専修 (Sx以外) 必修。

授業の概要

木管五重奏を中心としたアンサンブルと、管楽アンサンブルを主体にピアノや弦楽器にもお手伝いいただき色々な編成の合奏を体験していただく。

夏休み中の宿題として木管五重奏編曲を課す(元曲は自由に選ぶこと)。後期最初の授業で発表してもらう。

授業の到達目標

他の楽器の特性を理解する。アンサンブルの基本を身につける。

授業計画

- [前期]
- 第1回 授業内容の説明と曲の選択
 - 第2回～第6回 ハイドン、モーツァルトを中心に演奏実習
 - 第7回～第14回 A.ライヒャ、F.ダンツィを中心に演奏実習
 - 第15回 前期のまとめ演奏と宿題の概要説明
- [後期]
- 第16回～第18回 提出された課題(木管5重奏編曲)の演奏実習と評価
 - 第19回～第29回 フランス、ドイツの近現代木管五重奏曲を中心に演奏実習
 - 第30回 実技試験(コンサート形式で)

授業時間外の学習

授業をスムーズに進行するためにも、自分のパートをしっかり予習して身に付ける様にしておくこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取組み、授業中の演奏を重視。

授業・実習への取組みと態度50%、実技試験、課題提出50%で100点に換算

S 総合点が90点以上の者

A 総合点が80点以上の者

B 総合点が60点以上の者

C 総合点が50点以上の者

D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究A / C a

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里・野口 千代光

期間 前期

2

/

履修条件

積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。

- 9. ~ 11. 近現代の室内楽 (様々な楽器を含む)
- 12. ~ 13. 声楽を含む室内楽
- 14. ~ 15. 7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて

授業の概要

ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲、ピアノ五重奏曲を中心に引き上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。

授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

授業時間外の学習

授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。

また、お互いの楽器の特徴なども調べておくこと。
日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。

授業の到達目標

様々な時代及び編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術を習得する。アンサンブルの体験を通して、音楽を共有する喜びを味わうこと。

教科書・参考書等

シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

授業計画

1. ガイダンス、学習曲目の検討
2. ~ 5. 古典派の室内楽
(ピアノ・弦楽器を中心に)
モーツァルト・ハイdn・ベートーヴェン等
6. ~ 8. ロマン派の室内楽
(ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に)
メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等

成績評価

- S 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好で各種コンサートに出演した者
- A 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好の者
- B 事前準備、授業への参加意欲が中程度の者
- C 事前準備が不十分で、授業への参加意欲があまり認められない者
- D 出席が3分の2に満たない者

科目名 室内楽研究A / C b

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 北本 秀樹

期間 前期

2

/

履修条件

室内楽に興味と意欲のある方。

授業計画

初回はガイダンス。

2回目以降は室内楽を生徒同士で演奏します。必要な楽器のメンバーがいない時は、私が(チェロだけ)一緒に弾いたり、演奏要員の方をお願いします。

授業の概要

あなた達が今演奏してみたい室内楽、将来演奏してみたい室内楽を授業で行なっていきます。

授業時間外の学習

各自、十分な練習を行なう事。

教科書・参考書等

なし。

授業の到達目標

アンサンブルの向上。

成績評価

出席・授業態度重視。授業への取り組み重視。

科目名 室内楽研究B / D a

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 阪本 奈津子

期間 後期

2

/

履修条件

特になし。

授業の概要

学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。

授業の到達目標

互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中でアンサンブルの基本を習得する。

授業計画

1. ガイダンス及び曲目の検討
- 2～5. 古典派の室内楽作品
- 6～9. ロマン派の室内楽作品
- 10～13. 近現代作品
- 14～15. 発表演奏

授業時間外の学習

課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取り組み、授業態度、実技等平常点。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究B / D b

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 蓼沼 恵美子

期間 後期

2

/

履修条件

ピアノ専修の学生を対象とするが他の器楽専修の履修も可。

授業の概要

ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。

アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性をふまえた上での音色作りや響きのバランス、呼吸感等、ピアノパートの役割を果たすために必要な具体的な奏法を実践で学ぶ。

異なる楽器の響きの融合を体験したり、楽曲に対するそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げ、曲の理解を深めると共に、より幅広い表現を目指していく。

演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。

授業の到達目標

アンサンブルにおける奏法を修得し、相手の音をよく聴きながら、共に音楽をつくり上げる楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。

授業計画

- 1 ガイダンス及び曲目の検討。
 - 2 曲目とメンバーを決定。
 - 3 パート練習。(レッスン)
 - 4～7 アンサンブル実習。
 - 8 楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
 - 9 パート練習。(レッスン)
 - 10～14 アンサンブル実習。
 - 15 発表演奏。
- ※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。

授業時間外の学習

自分のパートをよく練習して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことは出来ない。

事前にCDを聴いたり、スコアを見るなど、他のパートにも目を向けておくこと。

教科書・参考書等

必要に応じて、楽譜を各自準備する。

成績評価

授業への取り組み方、意欲、成果など総合的に評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究B / D c

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 白尾 隆

期間 後期

2

/

履修条件

フルート専修の学生を対象とする。

授業の概要

フルートによる二重奏～五重奏（他の楽器を含まない）の重要なレパートリーの習得。

授業の到達目標

仲間と協調しながら自己をよく主張し音楽を表現するという、アンサンブル力の基本的な強化を目指す。

授業計画

課題曲の編成により、数グループに分け、状況を見ながら、期間内に、出来るだけ多くのレパートリーを勉強する。

クーラウ・クンマー等の古典から、ロレンツォ、デュボワ、ボザ等の近代作品を習得する。

授業時間外の学習

個人レッスン同様、可能な限り仲間と練習し、授業までによく準備し、また復習すること。

教科書・参考書等

楽譜をその都度貸し出すので、各自コピーすること。

成績評価

授業中の熱意、注意力、反応を考慮して評価する。

科目名 室内楽研究B / D d

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 菊池 カナエ

期間 後期

2

/

履修条件

なし。

授業の概要

本授業では、バロック時代の音楽を題材とし、ひとつの曲を仕上げる時に必要となる要素を明らかにして行く。それぞれの時代の様式感とは何か。バロックの演奏習慣を音楽と結びつけて、音楽学的見知から、また現代の実践の現場から見えて来る様々な方面からのアプローチを知り、実際のアンサンブルで試みる。各回の授業内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えて行く可能性あり。各授業の初めに講義をし、後半はアンサンブル実践をして行く。アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。

授業の到達目標

ひとつの曲を仕上げる時に、どのように演奏するべきか自分で考え、様々な情報の中から選択する能力を身に付ける。

授業計画

- 1、バロック時代の音楽について
- 2、楽譜について
- 3、通奏低音について1
- 4、通奏低音について2
- 5、アンサンブル組み
- 6、フルートの変遷
- 7、バロック時代周辺の楽器について
- 8、バロック時代周辺の音楽について
- 9、舞曲、組曲について
- 10、演奏習慣について
- 11、当時の文献を読む
- 12、音楽修辞学について
- 13、アンサンブル仕上げ1
- 14、アンサンブル仕上げ2
- 15、発表

授業時間外の学習

アンサンブル曲の個人練習、またグループでの練習を充分して行くこと。

自分の参加していないアンサンブルに関しても興味を持って聴くこと。

教科書・参考書等

プリントを配布。

成績評価

平常時と演奏発表への取り組み、最終授業での実際の演奏を総合して評価。

科目名 室内楽特設クラス A / B / C / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中・後期集中

1・1

/

履修条件

室内楽作品を深く掘り下げて研究したい、アンサンブルに意欲的な学生。

授業の概要

弦楽器・管楽器・ピアノを含む室内楽曲（デュオ・ピアノトリオ・ピアノカルテット等）を中心に上げ、演奏助手の協力のもと、アンサンブル能力の向上を目指す。非常に柔軟性のある形態をもち、半期につき、5回程度個人レッスンの形で授業を行う。他の室内楽クラスを履修しつつ受講することも可能で、同じ曲目を別の観点から学ぶことも、良い勉強になるだろう。経験の有無や量を問わずに履修できるという利点があり、半期の間は同じメンバーで、お互いを理解し共演者と共に音楽を作り上げていく。主として担当教員が指導に当たるが、必要に応じてアンサンブル指導員（弦楽器・管楽器等）のレッスンを受講することもある。

受講希望者は、メンバー確定後履修登録をし、受講曲が決まり次第早目に担当教員に申し出ること。具体的な日程等については、演奏員とも相談の上、後日掲示する。前期受講希望者多数の場合は、後期に履修変更となることもあり得る。

授業の到達目標

共演者としてお互いを信頼し合い、ひとりひとりが積極的に音楽作りに参加できるようになること。

授業計画

基本的には、各グループの希望曲（複数可）を取り上げる。レッスンの進め方については、臨機応変に対応したい。例えば、経験の少ないグループの場合は各楽器の特徴の理解や、基本的な合わせ方等から入り、選曲のアドバイス等も行う。

定期演奏会のオーディション参加を希望するグループは、より深く音楽を掘り下げ、説得力のある演奏を目指す。

授業時間外の学習

レッスンに向けて、お互い迷惑にならないように、各自十分に練習を積んでおくこと。受講曲目についても、深く調べておくように。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

- S 規定のレッスン回数を受講し、事前準備が十分で学習意欲が強く認められ、各種コンサートに出演した者
- A 規定のレッスン回数を受講し、事前準備が十分で学習意欲が強く認められた者
- B 規定のレッスン回数を受講し、事前準備、学習意欲が中程度の者
- C 規定のレッスン回数を受講し、事前準備、学習意欲が不十分と思われる者
- D 規定のレッスン回数に満たない者

科目名 歌曲研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 松井 康司・東井 美佳

期間 通年

4

/

履修条件

特になし。

授業の概要

詩人の思いが言葉を通して詩となり、さらに作曲家がその詩に共感して音にする。そしてその詩と音楽を演奏家が感じ、表現して、聴衆の心に訴える。歌曲が聴衆の耳に届くまでにはこれだけ様々な人の心を通っていくのである。歌曲の奥深さはここにある。

この授業ではドイツ歌曲・日本歌曲を題材に、歌曲をどのように解釈し、演奏したら良いかを研究する。楽譜に込められた詩人や作曲家の思いを正しく受け止め自分自身の表現に結びつけること、またアンサンブルをする上で大切なこと等、受講者自身による演奏を通じて実践的に研究を進めていく。

また歌とピアノの組み合わせにとどまらず、本学の専修を生かし他の弦・管楽器、あるいは和楽器とのコラボレーションも随時取り上げる。

授業の到達目標

年度末の研究発表会（2月初旬）には受講者各自がドイツ歌曲または日本歌曲を少なくとも1曲演奏する。

授業計画

履修者の専修楽器が決まらなると取り上げる曲を決めることはできない。

曲を決定してからの授業の流れは下記の通りである。

- 1 第1組の曲を発表
 - 2 第2組の曲を発表
 - 3 第1組のレッスン。第3組の曲を発表
 - 4 第2組のレッスン。第1組の曲を発表。第4組の曲を発表
 - 5 第3組のレッスン。第2組の曲を発表。第5組の曲を発表
- この流れで30回の授業を行っていく。取り上げる曲については、短時間で準備をする訓練のため、2週間前の発表とする。

授業時間外の学習

翌週取り上げる曲を必ず各自譜読みをし、曲の内容を理解してから授業に臨むこと。

教科書・参考書等

- 「ドイツ・リート」の歴史と美学」 ヴィオーラ（音楽之友社）
- 「シューベルトの歌曲をたどって」 フィッシャー・ディースカウ（白水社）
- 「日本歌曲百選 詩の分析と解釈」 塚田佳男選曲・構成（音楽之友社）

成績評価

授業への取組み60%、レポート10%、年度末発表曲の演奏30%で100点に換算。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 オペラ実習A/B [演奏] [演技]

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 松井 康司・ペーター・ゲスナー

期間 前期

4

○

履修条件

● 声楽を履修していることを条件とする。コレペティトーアの養成としてピアノ専修の学生を若干名受け入れる。その他の専修、他専攻の希望者は要相談。

授業の概要

● オペラの上演では、多くの人に関わりひとつの作品を創り上げていく。そこにオペラの醍醐味があるが、同時に一人一人の責任感、協調性が必要であり、それは歌い演じること以上に大切なことである。

この授業では、オペラの上演がどのようにして創られてゆくのかを実体験を通して学ぶ。全授業に出席する覚悟を持って履修してもらいたい。欠席が多い者は途中で失格とすることもある。

授業の到達目標

● 身体表現を伴う歌唱表現を身につける。

授業計画

● 前期は「演奏」と「演技」を分けて授業を行う。「演奏」においては、レチタティーヴォの基本とアンサンブルを音楽的アプローチを中心に学んでいく。また、「演技」においては、身体表現の基本を学んでいく。

● なお、前期試験として、簡単な演技をつけた、アンサンブルの発表会を行う。

授業時間外の学習

● ここに書くまでもなく、授業時間以外の学習時間の方が多い授業である。

教科書・参考書等

● なし。

成績評価

● 授業への取り組み、演奏、演技を総合的に評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 オペラ実習A/B [上演]

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 松井 康司 ペーター・ゲスナー

期間 後期

2

○

履修条件

● 前期の「オペラ実習 [演奏] [演技]」を履修し、単位を取得することを条件とする。声楽以外の専修、他専攻の希望者は要相談。

授業の概要

● オペラの上演では、多くの人に関わりひとつの作品を創り上げていく。そこにオペラの醍醐味があるが、同時に一人一人の責任感、協調性が必要であり、それは歌い演じること以上に大切なことである。

この授業では、オペラの上演がどのようにして創られてゆくのかを実体験を通して学ぶ。全授業に出席する覚悟を持って履修してもらいたい。欠席が多い者は途中で失格とすることもある。

授業の到達目標

● 身体表現を伴う歌唱表現を身につける。
● 社会に出て必要な人間関係の構築を学ぶ。

授業計画

● 前期の「オペラ実習 [演奏] [演技]」で学んだことを基本に、オペラ作品を創り上げていくことを学ぶ。歌うということだけでなく、制作を含めた舞台創りを学んでいくことが、この授業の特徴でもあり、せんがわ劇場で行われる試演会においては、学生主体で、舞台を作っていくこととなる。

● 試演会に向けては、かなりの回数で追加稽古が行われるため、授業回数は15回を越える。

授業時間外の学習

● ここに書くまでもなく、授業時間外の学習時間の方が多い授業である。

教科書・参考書等

● なし。

成績評価

● 授業への取り組み、試演会に向けての取り組みを総合的に評価する。

- S 総合点が90点以上の者
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 邦楽アンサンブル研究A/B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 野坂 恵子

期間 通年

4

/

履修条件

日本音楽専修は必修。

授業の概要

邦楽器はそれぞれの楽器の特性が強く、音色が大切。又個性的なので、それを尊重しつつ、さまざまな可能性を追求したい。合奏を積み重ねる中で、他のパートを聴きつつ、自分の音を重ねていく訓練を続け、アンサンブルの醍醐味を体得してもらう。

授業の到達目標

邦楽器によるアンサンブルの可能性について各人が意見を持ち、その上でアンサンブルの楽しさを十分に味わってもらうこと。

授業計画

前期・後期

「風韻抄」金光威和雄作曲
「こより」二十五絃箏とギターのための 増本伎共子作曲
「赤光」西村朗作曲
古典曲の合奏
後は実力を見て、追加します。
十月と三月の学内演奏会の曲目。

授業時間外の学習

決定した曲目を予習すること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業への取組みと平常点で評価する。

科目名 オーケストラ・スタディC/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 志村 寿一

期間 前期

1

/

履修条件

弦楽器専修者は必修である。

授業の概要

後期「合奏」授業への準備段階とする。

- ①オーケストラプレイヤーとしての心がまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、CDなども聴き、作品を理解して臨む。
- ②演奏するためのテクニックやアンサンブル態力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えられるようにする。

授業の到達目標

オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。全員で1つの作品を作り上げる喜びを知る。

授業計画

曲目は4月に発表する。

11月定期演奏会（オーケストラ）の演奏曲目を課題とする。
毎回の練習スケジュールを作り、進める。しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

- 無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消し、失格の対象とするので注意すること。学期末に実技試験を行う。(9月を予定)
- S 授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかり把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者。
- A 自らのパートは把握できているものの、他のパートを把握することにおいて一層の努力が求められ、その能力向上が見込まれる者。
- B ところどころに技術向上、改善努力が必要に思われるが、後期合奏においてアンサンブル能力と技術向上が見込まれる者。
- C 後期合奏授業においてなんとかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者。
- D 後期合奏授業についていける能力が見込まれない者、遅刻、無断欠席をした者。

試験の結果により後期合奏授業へのレベルが達していないと思われる者には追試験を行い、場合によっては個人的指導も行う、合奏授業に向けて能力を引き上げる機会を持つ。

科目名 合奏C/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 志村 寿一

期間 後期集中

2

/

履修条件

前期授業「オーケストラ・スタディ」で単位認定を受けた者。弦楽器専修者は必修である。弦楽器奏者以外についてはオーディション等で選出された者。

授業の概要

黒岩英臣氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。

個々の力が合わさると、素晴らしい響き、音楽が生まれることを体感してほしい。演奏会当日まで、各自、練習・準備をすること。

授業の到達目標

オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めていく。

授業計画

第1回 オーケストラガイダンス(オーケストラ授業に対する心ごまえ、様々な準備などについての確認)

第2回～第7回 黒岩氏とのリハーサル

定期演奏会当日 ゲネプロ 本番

第8回 演奏会録画を鑑賞しながら、演奏について検証、反省を行い、意見交換の場とする

毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意のこと。演奏だけではなく、譜面台や椅子の準備も含めて成績評価の対象とする。

科目名 ギター・アンサンブルC/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 佐藤 紀雄

期間 通年

2

/

履修条件

ギター専修者必修。

授業の概要

古典から現代までのギターアンサンブル作品をオリジナル曲、編曲作品に加え学生自身の作品、学生自身による編曲作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの習得過程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会得ることは特に重要であり、将来、様々な楽器とのアンサンブルや、新しい作品の演奏の際に何れの楽器とも同等に演奏に加わり高いアンサンブルと一緒に楽しみながら達成出来るための準備として欠かせない経験である。

その経験のなかで、ギターと言う楽器がもつ独自の特性や個性を再認識するば場ともなるに違いない。

さらには、将来、様々な楽器とのコラボレーションなど多様な場に合わせた自在な編曲を自信で行えるようアレンジを試す貴重な場にもしてもらいたい。

授業の到達目標

年二回の発表会に向けて、アンサンブルの課題曲の演奏を完成させる。

授業計画

1～5回 カルメン組曲

6～10回 ロッシーニ『泥棒かささぎ』序曲

11～15回 バントウクイッカン

16～20回 ヴィヴァルディー四季より『春』

21～25回 ラヴェル『ラ・ヴァルス』

25～30回 レオ・ブローウェル『雨のあるキューバの風景』

授業時間外の学習

授業で学ぶ作品のスコアをよく読んで、他のパートと自分の受け持つパートとの関係をよく頭に入れておく。作品の背景や、作曲家についての知識を得ておく。

教科書・参考書等

開講時に楽譜を配布。
音楽史、楽典書、関係のある書物を紹介。

成績評価

授業への取組み、授業態度を重視する。

S 優れたオリジナル作品を創ったもの

A 100～75点以上

B 75～55点

C 55～41点 出席率75%以下

D 40点以下 出席率50%以下

科目名 伴奏C (1) (2) / D (1) (2)

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中・後期集中

1・1

○

履修条件

なし。

授業計画

各々の実技担当教員のレッスン計画による。

授業の概要

前期・後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表(実技試験・学内演奏会・修了演奏会)をもって各々単位認定を行う。“伴奏受講票”を使用のこと。

授業時間外の学習

「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。

授業の到達目標

伴奏の役割を学びつつ、また、アンサンブルの楽しみも感じてほしい。
それらを試験、演奏会という場につなげるようにする。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

決められたレッスン回数をクリアし、演奏発表を行った場合は「A」と認定する。
また演奏の評価が特に高いと認められた場合は、「S」と認定する。
上記条件を満たしていない場合は「D」と認定する。

科目名 伴奏研究A / B / C / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中・後期集中

1・1

/

履修条件

学内試験、学内演奏会等でピアノ(伴奏)を担当する学生。

授業の概要

主としてピアノと弦楽器または管楽器のデュオ作品を扱う。
学内試験の伴奏を担当するピアノの学生が、パートナーの実技担当教員のレッスンだけでなく、ピアノ専任教員からもレッスンを受け、助言を得ることで、伴奏にとどまらない「共演ピアニスト」としての自覚を持って、より積極的にふたりで音楽を創り上げていけるようなデュオを目指す。
授業はレッスン形式で行い、5回程度のレッスン受講とパートナーの学内試験や学内演奏会での演奏を以って単位を認定する。
受講希望者は、予め履修登録をした後、パートナーと受講曲が決まり次第届け出ること。
具体的な日程については、後日掲示発表する。

授業計画

前期は、5月中旬を目途にパートナー、受講曲を決定し、5月末～7月にレッスンを受ける。
後期は、11月中旬を目途にパートナー、受講曲を決定し、11月末～2月にレッスンを受ける。
授業時間は、他の授業と重ならないよう、6限目(17:30以降)や土曜日等に設定する。
必要に応じて、ピアノパートのみのレッスンも行うが、原則として、パートナーと一緒に出席すること。

授業の到達目標

共演者としての役割をしっかりと認識し、責任を持ってパートナーと共に学び、音楽を作り上げられるようになること。

授業時間外の学習

大事な試験や学内演奏会に向けての科目となるので、個人練習を充分に行なっておくこと。また、演奏曲目の内容についても深く理解しておくように。

教科書・参考書等

各自用意。教員用の楽譜(コピー可)も準備すること。

成績評価

規定回数のレッスンを受講し、本番の出演を以って「A」と認定する。
また本番の評価が特に高い者は「S」と認定する。
レッスンが規定回数に満たない場合、または本番出演がない場合は「D」となる。

科目名 海外特別演習 C / D

対象 専攻科音楽専攻 1 年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里

期間 前期集中

2

/

履修条件

研修旅行に参加して学ぶ意欲の高い者。

授業の概要

ハンガリー・ブダペストのリスト音楽院にて、1週間のレッスン研修を行う。後半は、ウィーン、クラクフ、ワルシャワなどを訪れる。リスト、バルトーク、モーツァルト、シューベルト、ベートーヴェン、ショパン等のそうそうたる音楽家の業績をたどる。

授業の到達目標

内容の濃い充実した旅行とする。そのためには早くから個人の実技練習を十分に積んでおく。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 旅行会社による説明会 I
- 3 訪問都市についての勉強会 I
- 4 〃 〃 II
- 5 旅行会社による説明会 II
- 6 訪問都市についての勉強会 III
- 7 受講曲による試聴会
- 8 研修旅行

授業時間外の学習

訪れる街の歴史や、関係する作曲家について深く学んでおく。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

- S 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加し、かつ高い成果を上げたと認められる者
- A 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加した者
- B 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に参加した者
- C 事前の授業に出席し、研修旅行に参加した者
- D 事前の授業に出席不良、研修旅行に参加できなかった者

科目名 コラボレイト実習 C (1) (2) / D (1) (2)

対象 専攻科音楽専攻 1・2 年

単位数

他専攻

担当教員 松井 康司

期間 前期集中・後期集中

1・1

/

履修条件

専攻主任からの指名により履修できる。

授業の概要

専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会、卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。コラボレイト実習受講票を使用のこと。

なお、単位認定は、前期・後期、1回ずつを限度とする。

授業の到達目標

演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶ。音楽専攻の催しの場合は、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶ。

授業計画

- 1 打ち合わせ
- 2 音楽のみの練習 I
- 3 音楽のみの練習 II
- 4
- 5 舞台稽古への参加 (1回が2コマ分)
- 8
- 9 通し稽古
- 10 G.P

授業時間外の学習

演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督に要望に応えるよう練習をしていかなければならない。

教科書・参考書等

公演台本等、各公演により異なる。

成績評価

- S 指定された稽古に全て参加し、本番での演奏が、公演の質を高めた者
- A 稽古に積極的に参加し、本番での演奏が、公演の質を高めた者
- B 予定された稽古に参加し、本番で力を発揮した者
- C 本番で演奏はしたが、稽古への参加が積極的ではなかった者
- D 専攻主任の指名による授業のため不適格者はいない

科目名 特別講義（音楽）

対象 専攻科音楽専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 松井 康司

期間 集中

1

/

履修条件

必修（専2も選択授業として履修可能）。

授業の概要

音楽を通しての仕事という観点から、音楽マネジメントについて、また、コンサートホールの舞台機構、ホールスタッフの仕事について、前期・後期お一人ずつゲストをお招きし4コマずつ講義を頂く。

授業の到達目標

コンサート制作に必要な知識や舞台機構、ホールスタッフの仕事についての知識を得る。

授業計画

前期集中講義期間

1～4 コンサートホールの舞台機構とホールスタッフの仕事について

後期集中講義期間

5～8 音楽マネジメントの仕事について

授業時間外の学習

授業内で指示。

教科書・参考書等

その都度配布。

成績評価

授業への取組みを重視、レポートを課す。

- S 総合点90点以上
- A 総合点80点以上
- B 総合点60点以上
- C 総合点50点以上
- D 総合点49点以下

科目名 特別演習C/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 荻野 千里

期間 通年

1

○

履修条件

Cは全専修必修。

授業の概要

公開講座、学内演奏会、定期演奏会、卒業演奏会の4つが特別演習の内容である。公開講座はプロの演奏家、および研究生による演奏会を中心とする。定期演奏会は2夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による演奏会である。

これらの演奏会を聴講することで単位認定を行う。

授業の到達目標

音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんなことだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことから得るもの大きさも是非認識してほしい。

授業計画

公開講座、学外演奏会、学内演奏会は、それぞれのジャンルに出席義務回数が定められている。

日程、演目、出席義務回数の詳細はオリエンテーション時に発表する。

また日程は変更となる場合もあり、常に掲示を確認のこと。

授業時間外の学習

ゲストの音楽家や、演奏される楽曲について調べ、理解を深める。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

各公演の開演前、終演後に行う出席チェックによる出席状況にて評価

- S 全ての公演に出席した者
- A 3つのジャンルの出席義務回数を満たし、さらにそれ以上の出席回数が認められた者
- B 3つのジャンルの出席義務回数を満たした者
- C 3つのジャンルの出席義務回数を満たさず、担当者とは相談の上、他ジャンルへの複数出席を条件とされた者
- D 出席回数不足の者

科目名 楽曲分析[編曲]

対象 専攻科音楽専攻2年

単位数

他専攻

担当教員 たかの 舞俐

期間 前期

2

/

履修条件

特になが、音楽について実践的な知識を実習を通して習得したいという、興味や意欲があること。専攻科1年生、2年生、共に履修可。

可能であれば、前期、後期とも履修することが望ましい。

授業の概要

この授業では、様々なジャンルの音楽を参考にしながら、前期は、編曲、後期は創作(作曲の基礎)を学んでいきます。前期の編曲は、まず、メロディーに合うコードをつけ、伴奏付けをしていくことから始まり、ピアノ以外の楽器を含む編曲を試みます。後期の創作では、まず簡単な作曲手法を実習を通して学んでいき、その後、各自の意向による自由作曲を個人指導していきます。編曲した作品や創作した作品は可能な限り授業で実際に音出しをして体験的に学習していきます。

前期、後期とも、初心者から、さらに知識を広げていきたい方まで受講可能です。また、最初にアンケートをとり、可能な限り受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えています。

授業の到達目標

編曲の授業では、和声法やソルフェージュの基礎を必要に応じてもう一度確認しながら、卒業後の音楽活動に直接役立つような伴奏付けや編曲などを学んで実践的な力を身につけていくことを目標の一つとしています。

授業計画

前期(編曲)

- 第1回 オリエンテーション、ポップスとクラシックのコード進行の違い
- 第2回 ポップスのコード進行(参考曲 ビートルズ)
- 第3回 歌曲のコード進行(参考曲 古典派やロマン派の音楽)
- 第4回 様々な曲のメロディーにコード付けを試みる(実習例 ポップス作品や童謡や日本歌曲など)

- 第5回 様々な伴奏パターン 実習1
 - 第6回 様々な伴奏パターン 実習2
 - 第7回 ジャズのコード進行/ジャズ・コードを用いた編曲
 - 第8回 簡単なピアノ曲を弦楽四重奏に編曲 実習1
 - 第9回 簡単なピアノ曲を弦楽四重奏に編曲 実習2
 - 第10回 簡単なピアノ曲を木管五重奏に編曲 実習1
 - 第11回 簡単なピアノ曲を木管五重奏に編曲 実習2
 - 第12回 編曲実習1(各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する)
 - 第13回 編曲実習2(各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する)
 - 第14回 編曲実習3(各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する)
 - 第15回 編曲作品発表、演奏(コンサート形式)
- 順序、及び内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性があります。

授業時間外の学習

授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもあります。

教科書・参考書等

授業で毎回プリントを配布

成績評価

- S 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート提出において卓越した評価を得ている。
- A 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート提出において高い評価を得ている。
- B 授業の欠席が少なく、まじめに授業に参加し、試験ないしレポート提出をこなしている。
- C Bに次ぐ。
- D 授業参加日数が十分ではなく、試験不参加ないしレポート未提出である。

科目名 楽曲分析[創作]

対象 専攻科音楽専攻2年

単位数

他専攻

担当教員 たかの 舞俐

期間 後期

2

/

履修条件

特になが、音楽について実践的な知識を実習を通して習得したいという、興味や意欲があること。専攻科1年生、2年生、共に履修可。

可能であれば、前期、後期とも履修することが望ましい。

授業の概要

この授業では、様々なジャンルの音楽を参考にしながら、前期は、編曲、後期は創作(作曲の基礎)を学んでいきます。前期の編曲は、まず、メロディーに合うコードをつけ、伴奏付けをしていくことから始まり、ピアノ以外の楽器を含む編曲を試みます。後期の創作では、まず簡単な作曲手法を実習を通して学んでいき、その後、各自の意向による自由作曲を個人指導していきます。編曲した作品や創作した作品は可能な限り授業で実際に音出しをして体験的に学習していきます。

前期、後期とも、初心者から、さらに知識を広げていきたい方まで受講可能です。また、最初にアンケートをとり、可能な限り受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えています。

授業の到達目標

創作の授業では、メロディー、リズム、ハーモニーという3つの要素をどのように展開していくかということを学び、各人の音楽創作能力を引き出し、伸ばしていく事を目標としています。

授業計画

後期(創作)

- 第1回 歌曲、ないし童謡の作曲(メロディーの作曲)
- 第2回 歌曲、ないし童謡の作曲(ハーモニーをつける)
- 第3回 歌曲、ないし童謡の作曲(伴奏付けをする)
- 第4回 歌曲、ないし童謡の作曲(伴奏付けの形をさらに発展させる)
- 第5回 単旋律の短い課題に1声、ないし2声を足して作曲してみる 実習1
- 第6回 単旋律の短い課題に1声、ないし2声を足して作曲してみる 実習2

- 第7回 さまざまな楽器の使い方について
 - 第8回 指定された楽器をつかって簡単な形式の作品を書いてみる 実習1
 - 第9回 指定された楽器をつかって簡単な形式の作品を書いてみる 実習2
 - 第10回 ジャズ・コードをベースにして、ジャズ系のメロディーを書く 実習1
 - 第11回 ジャズ・コードをベースにして、ジャズ系のメロディーを書く 実習2
 - 第12回 自由創作実習1
 - 第13回 自由創作実習2
 - 第14回 自由創作実習3
 - 第15回 作品発表、演奏(コンサート形式)
- 順序、及び内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性があります。

授業時間外の学習

授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもあります。

教科書・参考書等

授業で毎回プリントを配布

成績評価

- S 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート提出において卓越した評価を得ている。
- A 積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート提出において高い評価を得ている。
- B 授業の欠席が少なく、まじめに授業に参加し、試験ないしレポート提出をこなしている。
- C Bに次ぐ。
- D 授業参加日数が十分ではなく、試験不参加ないしレポート未提出である。

Toho Gakuen College of Drama and Music

専攻科演劇専攻

科目名 特別講義 A・B

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 安宅 りさ子

期間 通年

2

/

履修条件

専攻科演劇専攻の必修授業。ゲスト講師に貴重なお話を伺う機会なので、事前準備をして講義に臨むこと。

授業の概要

今年度の特別講義は、第一線で活躍する演劇人をお招きし、「演劇と社会」をテーマに自身の活動・作品について語っていただく。学生がインタビュアーを務めるので、貴重なお話を伺えるように、担当の学生は十分な準備をしてインタビューに臨んでほしい。また、そのほかの受講生も講義をより深く理解するために事前学習を行うこと。事後学習として各回の特別講義の内容をレポートにまとめていく。最後に、各自が特別講義を通じて「演劇と社会」について考えたことを発表し、ディスカッションを行う。

授業の到達目標

- 以下の2点を授業の到達目標とする。
 - 様々なゲスト講師の世界観・演劇観に触れ、芸術的視野を広げていくことができる。
 - 自らの考えをレポート、発表を通じて他者に伝えることができる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 ゲスト講師へのインタビュー（長田渚氏）
- 第3回 ゲスト講師へのインタビュー（ニコラス・バーター名誉教授）
- 第4回 ゲスト講師へのインタビュー（詩森ろば氏）
- 第5回 ゲスト講師へのインタビュー
- 第6回 ゲスト講師へのインタビュー（大橋ひろえ氏）
- 第7回 ゲスト講師へのインタビュー

- 第8回 ゲスト講師へのインタビュー（伊藤キム氏）
- 第9回 ゲスト講師へのインタビュー（西川信廣氏）
- 第10回 ゲスト講師へのインタビュー
- 第11回 ゲスト講師へのインタビュー（柳沼昭徳氏）
- 第12回 ゲスト講師へのインタビュー
- 第13回 ゲスト講師へのインタビュー
- 第14回 発表
- 第15回 発表

授業時間外の学習

特別講義までに、ゲスト講師の著書、上演作品等を調べておく。課題がある場合は、別途指示をする。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

- インタビュー（40%）、レポート（20%）、発表（20%）、授業態度（20%）を総合評価
 - S 総合点が90点以上の者（卓越したインタビュー、レポート、発表をし、授業で積極的な役割を果たすことができる）
 - A 総合点が80点以上の者（優れたインタビュー、レポート、発表をし、授業で積極的な役割を果たすことができる）
 - B 総合点が60点以上の者（インタビュー、レポート、発表をし、授業で一定の役割を果たすことができる）
 - C 総合点が50点以上の者（インタビュー、レポート、発表の内容が不十分で、授業で必要な役割を果たすことができない）
 - D 総合点が49点以下の者（インタビュー、レポート、発表ができて、授業で必要な役割を果たすことができない）

科目名 演劇学研究 A（日本演劇論）（1）

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 高橋 宏幸

期間 前期

2

/

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

・演劇を観るために、もしくは実践的に活動するために、必要な理論について考える。理論を学びながら、それをベースに実際に舞台を観に行く。舞台が理論によって鮮やかに見える場合もあれば、理論そのものをゆるがすこともあるだろう。その双方向的な視点をもって、舞台について考える。

授業の到達目標

たんに舞台をみる授業ではなく、演劇が社会とどのように接点を持ち、作品からなにを見つかるべきなのか、その可能性を問う。そこから自分自身で、ある事柄について考える力をみつけることを目標とする。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 ポストコロナル理論と演劇
- 3 ポストコロナル理論と演劇
- 4 クィア・スタディーズと演劇
- 5 クィア・スタディーズと演劇
- 6 舞台の報告
- 7 舞台の報告
- 8 実際に書く
- 9 実際に書く

- 10 ディスカッション
- 11 ディスカッション
- 12 ディスカッション
- 13 批評の講評
- 14 批評の講評
- 15 まとめ

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

- 発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算
 - S 総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる）
 - A 総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
 - B 総合点が70点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる）
 - C 総合点が60点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）

科目名 演劇学研究 A (日本演劇論) (2)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 高橋 宏幸

期間 後期

2

/

履修条件

特になし。
遅刻、居眠りをせずに、積極的に授業に参加すること。

授業の概要

演劇というアートは、社会の中でどのように成り立っているか。そこにはさまざまな関係がある。たとえば劇場について考えると、経済的なことはもちろん、都市における劇場、地域の劇場、街の中の劇場など、そこからは様々な関係を見ることができる。それは経済的な土台を反映したものというだけではない。演劇が公共圏を形作ることをはじめとして、そこについてまわる観客の位置、批評の役割など、演劇の制度について包括的に考える。もちろん、実際の舞台作品も具体例として関係するので、毎回、劇場で上演される作品なども検証して、授業を行う。

授業の到達目標

社会がどのように成り立っているのか。それを、演劇をはじめとした舞台芸術を通して考えることを目標とする。

授業計画

- 1 イントロダクション
- 2 公共圏とはなにか——アーレントを参照として
- 3 公共圏とはなにか——ハーバーマスを参照として
- 4 日本の都市と演劇——公共劇場について
- 5 日本の都市と演劇——民間劇場について
- 6 街と演劇——都市計画と演劇の位置
- 7 地域の演劇——関西圏を参照として

- 8 地域の演劇——関西圏を参照として
- 9 助成金と演劇
- 10 文化団体の役割
- 11 批評の役割
- 12 観客の位置
- 13 各国の劇場
- 14 各国の劇場システム
- 15 まとめ

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ① 授業中に話をしたことを図書館でチェックすること
- ② 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること

教科書・参考書等

教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。

成績評価

発表レポート50%、出席および授業への参加50%で100点に換算

- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない)

科目名 演劇学研究 B (西洋演劇論) (1)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 安宅 りさ子

期間 前期

2

/

履修条件

演技論に関心を持つもの。

授業の概要

スタニスラフスキー・システムは、ロシアの演出家・俳優コンスタンチン・スタニスラフスキーが俳優教育法を体系的にまとめたものである。このスタニスラフスキー・システムは演技の文法として世界中に普及し、各国で独自の発展を遂げている。本講義では、スタニスラフスキーの著書「俳優の仕事」をもとに、システムの神髄を探っていく。「俳優の仕事」は〈大部で難解な著作〉と敬遠されがちであるが、演劇学校の生徒の日記という形式で書かれており、演劇を学ぶ学生にとっては身近な話題が取り上げられている。受講生自身の体験と重ねつつ読み込み、演技に関する考察を深めていきたい。また、映像資料も使用しながら、スタニスラフスキー・システムに基づく演技を分析していきたい。

授業の到達目標

スタニスラフスキー・システムの基本的な考え方を理解し、それを他者と共有し、創造の現場で応用することができる。

授業計画

- 第1回 コンスタンチン・スタニスラフスキーとモスクワ芸術座
- 第2回 『俳優の仕事』 1 (くもしも) と (与えられた状況)
- 第3回 『俳優の仕事』 2 (舞台における注意)
- 第4回 『俳優の仕事』 3 (筋肉の開放)
- 第5回 『俳優の仕事』 4 (断片と課題)
- 第6回 『俳優の仕事』 5 (真実の感情と確信)
- 第7回 『俳優の仕事』 6 (情緒的記憶)
- 第8回 『俳優の仕事』 7 (究極課題と一貫した行動)
- 第9回 『俳優の仕事』 8 (テンポ・リズム)
- 第10回 『俳優の仕事』 9 (論理と一貫性)

- 第11回 『俳優の仕事』 10 (システムの利用法)
- 第12回 スタニスラフスキーの『オセロー』 演出ノート1
- 第13回 スタニスラフスキーの『オセロー』 演出ノート2
- 第14回 スタニスラフスキー・システムの影響
- 第15回 今日におけるスタニスラフスキー・システムの意義

授業時間外の学習

授業で扱う章を事前に読んでおくこと。

教科書・参考書等

『俳優の仕事—俳優教育システム 第一部』俳優の仕事—俳優教育システム 第二部』(スタニスラフスキー著 堀江新二他訳 未来社)
参考書：
『スタニスラフスキー・システムによる俳優教育』(グリゴリー・クリースチ著 野崎韶夫・佐藤藤子訳 白水社)
『演技—創造の実際 スタニスラフスキーと俳優』(ジーン・ベネディティ著 高山図南雄・高橋英子訳)

成績評価

レポート(30%)、発表(30%)、授業態度(40%)を総合評価

- S 総合点が90点以上の者(授業に積極的に臨み、優れたレポートをまとめ、自らの考えを発表することができる)
- A 総合点が80点以上の者(授業に積極的に臨み、レポートをまとめ、発表をすることができる)
- B 総合点が60点以上の者(授業内容を理解し、レポートをまとめ、発表をすることができる)
- C 総合点が50点以上の者(授業内容をあまり理解せず、レポート、発表の内容が不十分)
- D 総合点が49点以下の者(授業内容をまったく理解せず、レポート、発表ができない)

科目名 演劇学研究 B (西洋演劇論) (2)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 安宅 りさ子

期間 後期

2

/

履修条件

演技論に関心を持つもの。

授業の概要

ロシア・ソビエト演劇を牽引した演出家フセヴォロド・メイエルホリドの活動を追いながら、社会の変革と芸術運動の関係を概観するとともに、メイエルホリドの演劇が及ぼした影響について考察する。帝政ロシアの崩壊とそれに続く社会主義革命…激動の時代に、ロシアでは前衛的な芸術文化が生まれた。この講義では、映像資料等を使用し時代背景をとらえながら、メイエルホリドの論文を読み進め、演出作品を紹介していきたい。また、スターリン体制が確立する中で、メイエルホリドが粛清されたため、その業績の継承が途絶えていたが、1955年の名誉回復後は再評価が進み、現在ではバイオメカニカを俳優訓練に取り入れる演劇学校も少なくない。スタニスラフスキー・システムに対するメイエルホリドの考えについても触れ、両者の共通性と相違点を明確にしていきたい。

授業の到達目標

社会における演劇の存在意義を考え、自らの表現活動に反映させることができる。

授業計画

- 第1回 モスクワ芸術座とチェーホフ～「かもめ」を中心に～
- 第2回 象徴主義演劇～メーテルリンクの静劇理論～
- 第3回 演劇の約束事～ブローク作「芝居小屋」を中心に～
- 第4回 帝室アレクサンドリンスキー劇場時代の演出作品(オペラ)
- 第5回 帝室アレクサンドリンスキー劇場時代の演出作品(演劇)
- 第6回 十月革命と芸術

- 第7回 メイエルホリドとマヤコフスキー～「ミステリヤ・ブッフ」を中心に～
- 第8回 アジプロ演劇の隆盛
- 第9回 ビオメカニカ～新時代の俳優訓練法としての意義～
- 第10回 構成主義演劇～「堂々たるコキュ」を中心に～
- 第11回 古典の現代化～「検察官」を中心に～
- 第12回 風刺劇～「南京虫」「風呂」を中心に～
- 第13回 社会主義リアリズムとメイエルホリド批判
- 第14回 日本の近代演劇運動とメイエルホリド
- 第15回 メイエルホリドの再評価

授業時間外の学習

授業で扱う章を事前に読んでおくこと。

教科書・参考書等

「メイエルホリド 演劇の革命」エドワード・ブローン著 浦雅春・伊藤愉訳 水声社

成績評価

レポート(30%)、発表(30%)、授業態度(40%)を総合評価

- S 総合点が90点以上の者(授業に積極的に臨み、優れたレポートをまとめ、自らの考えを発表することができる)
- A 総合点が80点以上の者(授業に積極的に臨み、レポートをまとめ、発表をすることができる)
- B 総合点が60点以上の者(授業内容を理解し、レポートをまとめ、発表をすることができる)
- C 総合点が50点以上の者(授業内容をあまり理解せず、レポート、発表の内容が不十分)
- D 総合点が49点以下の者(授業内容をまったく理解せず、レポート、発表ができない)

科目名 演劇学研究 C (現代演劇論)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 井上 理恵

期間 前期

2

/

履修条件

職業としての〈演劇〉を選択する予定で、しかも意欲ある者。現代演劇の現状と未来を考察したいという強い意志のある者。

授業の概要

現代演劇とは、広義には今ある演劇すべてを指す。狭義には20世紀半ば過ぎから21世紀に誕生し現存している演劇であって、本講義ではこれを対象とする。

現代演劇のドラスティックな転換は、アイルランド出身のサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』(Waiting for Godot)の登場であった(1953年パリ初演)。〈筋〉がない、登場人物の〈過去〉がない。そんな戯曲は初めてであった。紀元前のギリシャ以来、ヨーロッパもそして日本も、演劇には常に〈筋〉があり、登場人物には〈過去〉があった。特にヨーロッパではイブセン流自然主義演劇が主流であったから、ベケットの登場は西欧を震撼させた。

ベケットが日本に上陸したのは1960年(安藤信也訳・演出文学座)である。その後現在までいかなる演劇が舞台にあがったのかを押さえ、社会と演劇の関係性を前提としつつ〈現代演劇の変貌〉〈演劇表現・俳優の身体とセリフ〉などについて検討した。

新たな現代演劇を生み出す演劇人の一人になれるよう積極的に学習する者の参加を希望する。そして共に新たな未来の演劇を切り開く努力をしたい。

授業の到達目標

以下を目標とする。

- ① 社会の中の現代演劇とは何かを確実に把握すること。
- ② つねに〈何故なのか…〉を抱えて考えることが出来るようになること。
- ③ 新たな演劇の可能性の一つでも見つけ出せること。

授業計画

- ① ガイダンス
- ② 1950年代に世界演劇に何が起こったのか(ベケット『ゴドーを待ちながら』を事前に読んでおくこと)
- ③ 日本演劇の50年代60年代——リアリズム演劇(新劇・商業演劇)
- ④ リアリズム演劇の隆盛と瓦解(「真田風雲録」「明治の枢」を読んでおくこと)
- ⑤ DVD視聴、習週感想レポート提出
- ⑥ 小劇場演劇の登場と変貌——70年代(鈴木忠志「劇的なものをめぐってII」を読んでおくこと)
- ⑦ 清水邦夫と別役実
- ⑧ 唐十郎と佐藤信
- ⑨ DVD視聴、習週感想レポート提出
- ⑩ 商業演劇の隆盛⇒ブロードウェイ・ミュージカルと宝塚歌劇
- ⑪ つかこうへいと野田秀樹
- ⑫ 井上ひさしと坂手洋二
- ⑬ 平田オリザと永井愛
- ⑭ 小池修一郎と上田久美子
- ⑮ これまでの学習の総括と確認(レポート提出)

授業時間外の学習

事前に指定された劇作家の戯曲を読んでくること。7回以降に就いては、授業時に指示する。レポートは資料・文献などを調査して作成する事(1200字以上)。

教科書・参考書等

参考書: 井上理恵著「ドラマ解説」、演劇の100年(『20世紀の戯曲Ⅲ』所収)

成績評価

① レポート ② 授業時の発表

- S 総合点が90点以上
- A 総合点が80点以上
- B 総合点が60点以上
- C 総合点が50点以上
- D 総合点が49点以下

科目名 劇作研究A (劇作論)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 鴻上 尚史

期間 前期

2

/

履修条件

やる気のある者。やる気のない者は受けないでほしい。

授業の概要

1本の台本を選び、俳優の視点から戯曲の構造を調べ、演じることの手掛かりを探る。そのために何役も変えながら、戯曲にアプローチする。

授業の到達目標

戯曲を構造的にとらえることができる。

授業計画

- 1 台本選定
- 2~3 ディスカッション
- 4~5 役へのアプローチ
- 6~10 立ち稽古
- 11~13 役の分析ディスカッション
- 14~15 別の役へのアプローチ

授業時間外の学習

戯曲をよく読むこと。

教科書・参考書等

選定した台本のコピーを入手すること。授業で指示。

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①~⑤のうち全てを獲得した者
A: ①~⑤のうち4つを獲得した者
B: ①~⑤のうち3つを獲得した者
C: ①~⑤のうち2つを獲得した者
D: ①~⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 劇作研究B (劇作演習)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 鴻上 尚史

期間 後期

1

/

履修条件

やる気のある者。やる気のない者は受けないでほしい。

授業の概要

前期の反省をふまえ、さらに1本の台本を選び、さまざまな役を演じることで、戯曲の構造にアプローチする。戯曲が求める役とは何かを明確にしていく。

授業の到達目標

戯曲をさらに構造的にとらえることができる。

授業計画

- 1 台本選定
- 2~3 ディスカッション
- 4~5 役へのアプローチ
- 6~10 立ち稽古
- 11~13 役の分析ディスカッション
- 14~15 別の役へのアプローチ

授業時間外の学習

戯曲をよく読むこと。

教科書・参考書等

台本はコピーして配る。

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①~⑤のうち全てを獲得した者
A: ①~⑤のうち4つを獲得した者
B: ①~⑤のうち3つを獲得した者
C: ①~⑤のうち2つを獲得した者
D: ①~⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 演出研究

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 後期

2

/

履修条件

授業の概要

- 演出についての覚え書き(フィルムアート社) イギリス演劇界の名演出家フランク・ハウザーによるアドバイスを元に、脚本への理解、キャスティング、俳優への接し方、ステージングの要素など、舞台を作る上で必要な演出家としての心得を学ぶ。
- 最終試験として、簡単なワンシーンを実際に演出し、観客の前で上演し、批評を受ける。

授業の到達目標

- 演出行為に必要な客観性及び、主体性を獲得する。
- 自身の表現したい作品と、観客のニーズとの隔たりを意識し演出を変更する努力を獲得する。
- 他人に上演してもらうことで自信の演出が生きた「舞台」になっているかどうかを耳と目で認識する能力を養う。

授業計画

- 第1回 授業ガイダンス・脚本を理解すること
- 第2～4回 演出家の役割
- 第5～7回 キャスティング
- 第8回 はじめての台本読み
- 第9～10回 稽古のルール
- 第11～12回 ブロッキングの作り方
- 第13～14回 観客を笑わせるには・ステージングの要素
- 第15回 最終試験・講評

授業時間外の学習

教科書・参考書等

- 教科書：なし
- 参考書：演出についての覚え書き～舞台に生命を吹き込むために～(フィルムアート社) フランク・ハウザー(著)、ラッセル・ライシ(著)、シカ・マッケンジー(翻訳)

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
- A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
- B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
- C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
- D: ①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 演劇教育論

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 野間 哲

期間 後期

2

/

履修条件

演劇と教育の関係を学び、将来の自分の演劇活動に生かしたいと思う者。劇団経営、組織集団を立ち上げたいと考える者。教える側、教わる側の立場を認識し、コミュニケーション能力を高めたい者。

授業の概要

本授業では、演劇と教育の関係を学び、集団実習を通して、教える姿勢と学ぶ姿勢の双方の立場を知る。自らの演劇スキルを上げるべく「人間教育」の骨子を学ぶ。教育現場にも会社組織にも、演劇が取り入れられている現状を知り、演劇と教育の関わりがいかに深いかを認識し、その実践力を身につける。組織をまとめ、導く手段を知る。また、プロの一員として、小中学生、高校生対象の「ワークショップ」を成立させるには何をすべきかなどを学び、将来のプロ活動の一助とする。

授業の到達目標

演劇教育をより具体的に実践するためのノウハウを身につける。ひいては自己啓発の手段としても活用することができる。

授業計画

- 1、ガイダンス
- 2、シュミレーションスタディ①
「自己資金80万円で劇団を立ち上げる」
- 3、シュミレーションスタディ②
「自己資金80万円で劇団を立ち上げる」

- 4、シュミレーションスタディ③
「自己資金80万円で劇団を立ち上げる」
- 5、ケーススタディ①小学生編「童話の読み聞かせ」
- 6、ケーススタディ②中高生編「小説の読み聞かせ」
- 7、ケーススタディ③社会人編「詩の読み聞かせ」
- 8、ケーススタディ④ラジオ桐朋
「ラジオドラマ番組制作」(含ジングル、予告CM)
- 9、ケーススタディ⑤ラジオ桐朋「ラジオドラマ番組制作」
- 10、ケーススタディ⑥ラジオ桐朋「ラジオドラマ番組制作」
- 11、ケーススタディ⑦「CM制作」テーマ別15秒・30秒編
- 12、ケーススタディ⑧「CM制作」テーマ別15秒・30秒編
- 13、ケーススタディ⑨「通販番組制作」
- 14、ケーススタディ⑩「通販番組制作」
- 15、まとめ

授業時間外の学習

演劇劇団、テレビ・ラジオなどのメディアの制作意図、方法など、制作側の立場を考える習慣を身につけよう。

教科書・参考書等

- 毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

主として時間内実習状況・提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 アーツマネジメント研究

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 中山 夏織

期間 前期

2

/

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

- 俳優という職業の歴史の変遷を日英の比較検証を行う。現代の社会システムの中で、創造的に生き抜いていくための様々な意味におけるコラボレーション、チーム、リーダーシップのあり方を学ぶ。
- 納税者の金で運営される公立劇場に求められる役割と使命の担い手としての仕事を検証していく。

授業の到達目標

- プロフェッショナルの俳優として生き抜く知識を得る。
- 次代のリーダーとなるための素地を獲得する。
- チームで働く人々の職能を理解する。

授業計画・授業時間外の学習

1. 演劇興行の歴史1ー日本
2. 演劇興行の歴史2ー英国
3. 俳優の社会的地位と組織
4. アーティスト・サバイバル1
5. アーティスト・サバイバル2
6. コラボレーションを探る
7. グレイトグループの構造
8. ミッションと意思決定
9. モチベーションとリーダーシップ
10. 劇場ー現代の使命
11. 工場としての劇場
12. 芸術監督の仕事
13. プロデューサーの仕事
14. 資金調達という仕事
15. マーケティングとエデュケーション活動

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 アウトリーチ研究

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 中山 夏織

期間 後期

2

/

履修条件

遅刻・欠席をしない。

授業の概要

- 演劇人の社会的使命としての「社会包摂」を目的とするエデュケーションとアウトリーチの活動の理念と実践を、英国の60年代に始まるTIE、そして、それに替わるように90年代以降、発展してきた様々なエデュケーション、アウトリーチの活動を考察していく。
- 理念と実践を自らのものにしていくために、実際に施設等を訪問して当事者たちと出会い、その人たちにふさわしいアウトリーチ型の演劇作品を作り上げ、成果をわかちあう。

授業の到達目標

- 対象者に適した目的と手法を發展させることができる。
- 公立劇場等のエデュケーション担当者として不可欠な知識を得る。
- インクルーシブシアターの次代の担い手としての知識と姿勢を得る。

授業計画・授業時間外の学習

1. エデュケーションとアウトリーチー目的と手法
2. シアターインエデュケーション(TIE)とは何か?
3. TIEを創る。
4. 事例研究1ー学校の授業をサポートする
5. 事例研究2ー問題を抱えるコミュニティに向き合う
6. 事例研究3ーティーチング・シアター
7. 事例研究4ーユースシアター
8. 事例研究5ーリラックスパフォーマンス
9. 事例研究6ー痴呆症フレンドリー
10. 事例研究7ー障がいをもつ子どもたち
11. インクルーシブシアターとは何か
12. インクルーシブシアターを創る1
13. インクルーシブシアターを創る2
14. インクルーシブシアターを創る3
15. 成果のわかちあい

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 演技研究 A (日本演劇) (1)

対象 専攻科演劇専攻 1年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 通年

2

/

履修条件

授業の概要

- 舞台俳優として必要な身体、呼吸と集中力のトレーニングを中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- 少人数で数チーム編成し、それぞれの「課題戯曲①」「課題戯曲②」を研究、稽古し、最終的に上演する。
- 日本の現・近代戯曲を利用することで見えてくる、古典戯曲とは違った今日性の高いテーマを現代にあったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考に切磋琢磨の中でこそ創造されるグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。

授業の到達目標

- 課題戯曲の研究、解釈と、稽古を通しての上演作品の完成と上演。
- 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、更なる研鑽に役立てる事。

授業計画

- 第1回
- 第2回 トレーニング・課題①発表
- 第3～5回 トレーニング・課題戯曲①の読み稽古、解釈研究
- 第6回 トレーニング・課題戯曲①チーム、キャスト発表
- 第7～11回 トレーニング・課題戯曲①立ち稽古、駄目出し修正
- 第12～13回 課題戯曲①の衣装、小道具、音響、照明のプランニング発表

- 第14～15回 各チームの課題戯曲①上演
- 第15回 各チームの総評、アンケートとディスカッション
- 第16回
- 第17回 トレーニング・課題②発表
- 第18～20回 トレーニング・課題戯曲②の読み稽古、解釈研究
- 第21回 トレーニング・課題戯曲②チーム、キャスト発表
- 第22～25回 トレーニング・課題戯曲②立ち稽古、駄目出し修正
- 第26～27回 課題戯曲②の衣装、小道具、音響、照明のプランニング発表
- 第28～29回 各チームの課題戯曲②上演
- 第30回 各チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布 (課題日本戯曲)
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
- A：①～⑤のうち4つを獲得した者
- B：①～⑤のうち3つを獲得した者
- C：①～⑤のうち2つを獲得した者
- D：①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 演技研究 A (日本演劇) (2)

対象 専攻科演劇専攻 2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 通年

2

/

履修条件

授業の概要

- 舞台俳優として必要な身体、呼吸と集中力のトレーニングを中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- 少人数で数チーム編成し、それぞれの「課題戯曲③」「課題戯曲④」を研究、稽古し、最終的に上演する。
- 日本の現・近代戯曲を利用することで見えてくる、古典戯曲とは違った今日性の高いテーマを現代にあったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考に切磋琢磨の中でこそ創造されるグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。
- 最高学年として、専攻科1年生の稽古へのアドバイスや、技術面でのアドバイスを率先して提供する事により、「演じる」だけでなく「創作」する力も養っていく。

授業の到達目標

- 課題戯曲の研究、解釈と、稽古を通しての上演作品の完成と上演。
- 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、更なる研鑽に役立てる事。
- 現代日本演劇上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得する。

授業計画

- 第1回
- 第2回 トレーニング・課題③発表
- 第3～5回 トレーニング・課題戯曲③の読み稽古、解釈研究
- 第6回 トレーニング・課題戯曲③チーム、キャスト発表
- 第7～11回 トレーニング・課題戯曲③立ち稽古、駄目出し修正

- 第12～13回 課題戯曲③の衣装、小道具、音響、照明のプランニング発表
- 第14～15回 各チームの課題戯曲③上演
- 第15回 各チームの総評、アンケートとディスカッション
- 第16回
- 第17回 トレーニング・課題④発表
- 第18～20回 トレーニング・課題戯曲④の読み稽古、解釈研究
- 第21回 トレーニング・課題戯曲④チーム、キャスト発表
- 第22～25回 トレーニング・課題戯曲④立ち稽古、駄目出し修正
- 第26～27回 課題戯曲④の衣装、小道具、音響、照明のプランニング発表
- 第28～29回 各チームの課題戯曲④上演
- 第30回 各チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布 (課題日本戯曲)
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S：①～⑤のうち全てを獲得した者
- A：①～⑤のうち4つを獲得した者
- B：①～⑤のうち3つを獲得した者
- C：①～⑤のうち2つを獲得した者
- D：①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 演技研究B(外国演劇)(1)

対象 専攻科演劇専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 通年

2

/

履修条件

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。

次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムースシアター・カルガリー)によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

[前期]

- 1 導入
- 2-4 エチュード
- 5-15 シーンワーク

[後期]

- 1 前期の復習
- 2-13 即興、シーンワーク
- 14 発表
- 15 反省

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

- 「インプロ・ゲーム」絹川友梨著
研究旅行(キース・ジョンストン ルーズムースシアター)で集めた書類
- 「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みようとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演技研究B(外国演劇)(2)

対象 専攻科演劇専攻2年

単位数

他専攻

担当教員 ペーター・ゲスナー

期間 通年

2

/

履修条件

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。

次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムースシアター・カルガリー)によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

授業計画

[前期]

- 1 導入
- 2-4 エチュード
- 5-15 シーンワーク

[後期]

- 1 前期の復習
- 2-13 即興、シーンワーク
- 14 発表
- 15 反省

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

- 「インプロ・ゲーム」絹川友梨著
研究旅行(キース・ジョンストン ルーズムースシアター)で集めた書類
- 「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みようとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- S (1)~(5)まで90%以上獲得した者
- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演技研究 C(実験劇) (1)

対象 専攻科演劇専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 宮崎 真子

期間 通年

2

/

履修条件

遅刻、欠席は厳禁。専攻科生としての自覚を持ち、責任を持って課題に取り組み、自主的に学生同士で舞台芸術家として高め合う意識があること。

授業の概要

通年で、テーマごと(例: 童話、歴史劇、怪談、古典、など、ディスカッションを積んで、決定する)にユニットをつくり、演出と俳優を分担し、ほぼ二ヶ月に一度の割合でシーンの発表を行う。発表に対しては、教員が講評を行う。芸術科1年、2年で学んだことと、自分の将来の志向を振り返らせ、より高度な発表をすることが望まれる。

どの学生も一度は必ず作品選び、上演台本作成、演出を担当することで、演出の視点で改めて演技を見つめ直し、本当に自分の作りたい舞台作品とはなんなのかをディスカッション、稽古を通じて探求する。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 演出家として、俳優とはなにか、を体得する。
- ② 演劇人として、自分が本当にどういう表現者になりたいのか、を見つめなおし、発見する。
- ③ 演出の仕事と集団創作の方法を理解し、自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス、1年間の具体的なカリキュラム作り。
- 2 作品1のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 3 作品1の稽古①
- 4 作品1の稽古②
- 5 作品1の稽古③
- 6 作品1の発表と講評
- 7 作品2のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 8 作品2の稽古①
- 9 作品2の稽古②
- 10 作品2の稽古③
- 11 作品2の発表と講評
- 12 作品3のチームわけ、ディスカッション、方針決定

- 13 作品3の稽古①
- 14 作品3の稽古②
- 15 作品3の稽古③
- 16 作品3の発表と講評
- 17 作品4のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 18 作品4の稽古①
- 19 作品4の稽古②
- 20 作品4の稽古③
- 21 作品4の発表と講評
- 22 作品5のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 23 作品5の稽古①
- 24 作品5の稽古②
- 25 作品5の稽古③
- 26 作品5の発表と講評
- 27 作品6のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 28 作品6の稽古①
- 29 作品6の稽古②
- 30 作品6の発表と講評

授業時間外の学習

上演する作品のコンセプトをまとめ、上演台本作製、キャスティングやスタッフワークを練り上げる。チームごとに稽古を自主的に進め、授業で成果を発表・準備をすること。

教科書・参考書等

テキストは学生が自分で選び、作成する。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者
- A 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者
- B 欠席が8日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者
- C 欠席が10日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者
- D 欠席が10日を超える、または、到達目標が49点以下の者

科目名 演技研究 C(実験劇) (2)

対象 専攻科演劇専攻2年

単位数

他専攻

担当教員 宮崎 真子

期間 通年

2

/

履修条件

遅刻、欠席は厳禁。専攻科生としての自覚を持ち、責任を持って課題に取り組み、自主的に学生同士で舞台芸術家として高め合う意識があること。

授業の概要

通年で、テーマごと(例: 童話、歴史劇、怪談、古典、など、ディスカッションを積んで、決定する)にユニットをつくり、演出と俳優を分担し、ほぼ二ヶ月に一度の割合でシーンの発表を行う。発表に対しては、教員が講評を行う。芸術科1年、2年で学んだことと、自分の将来の志向を振り返らせ、より高度な発表をすることが望まれる。

どの学生も一度は必ず作品選び、上演台本作成、演出を担当することで、演出の視点で改めて演技を見つめ直し、本当に自分の作りたい舞台作品とはなんなのかをディスカッション、稽古を通じて探求する。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 演出家として、俳優とはなにか、を体得する。
- ② 演劇人として、自分が本当にどういう表現者になりたいのか、を見つめなおし、発見する。
- ③ 演出の仕事と集団創作の方法を理解し、自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス、1年間の具体的なカリキュラム作り。
- 2 作品1のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 3 作品1の稽古①
- 4 作品1の稽古②
- 5 作品1の稽古③
- 6 作品1の発表と講評
- 7 作品2のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 8 作品2の稽古①
- 9 作品2の稽古②
- 10 作品2の稽古③
- 11 作品2の発表と講評
- 12 作品3のチームわけ、ディスカッション、方針決定

- 13 作品3の稽古①
- 14 作品3の稽古②
- 15 作品3の稽古③
- 16 作品3の発表と講評
- 17 作品4のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 18 作品4の稽古①
- 19 作品4の稽古②
- 20 作品4の稽古③
- 21 作品4の発表と講評
- 22 作品5のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 23 作品5の稽古①
- 24 作品5の稽古②
- 25 作品5の稽古③
- 26 作品5の発表と講評
- 27 作品6のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 28 作品6の稽古①
- 29 作品6の稽古②
- 30 作品6の発表と講評

授業時間外の学習

上演する作品のコンセプトをまとめ、上演台本作製、キャスティングやスタッフワークを練り上げる。チームごとに稽古を自主的に進め、授業で成果を発表・準備をすること。

教科書・参考書等

テキストは学生が自分で選び、作成する。

成績評価

授業への取り組みと到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- S 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が90点以上の者
- A 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者
- B 欠席が8日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者
- C 欠席が10日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者
- D 欠席が10日を超える、または、到達目標が49点以下の者

科目名 演技研究 D (フィジカルシアター) (1)

対象 専攻科演劇専攻 1 年

単位数

他専攻

担当教員 大谷 賢治郎

期間 後期

1

/

履修条件

授業時間外での自習・自主稽古に積極的に取り組むこと。アーティストとしての自立、アンサンブルとしての共同作業を両立させること。稽古着を着用すること。

授業の概要

俳優としての身体性を習得することを目標とする。
身体表現の可能性を模索し、身体表現による語彙を増やして行く。
台詞だけに頼らない、観客の想像力に働きかける伝達方法を獲得する。
専攻2年次に行った、俳優自身が作品創造を行うディバイジングを更に掘り下げて行く。
身体表現による身体行動、テキストによる言語行動の両立を図る。

授業の到達目標

1. ソロパフォーマンスの確立と発表。
2. グループワークによるパフォーマンスの確立と発表。
3. ディバイジングによる作品づくりと発表。
4. 創造過程に於ける自分自身について、そして他者についての観察とフィードバック。
5. 創造過程を記録し報告。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 身体表現による演劇的自己紹介
3. テンポ: スローモーションなど
4. 仮面①
5. 仮面②
6. 日常的ジェスチャー

7. 表現的ジェスチャー
8. ディバイジング①
9. ディバイジング②
10. ディバイジング③
11. ディバイジング④
12. 作品創造①
13. 作品創造②
14. 作品創造③
15. 総評

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

課題発表のための自習ならびに自主稽古。

教科書・参考書等

教科書: 必要に応じて授業時に配布
参考書: 必要に応じて授業時に配布

成績評価

1. 出席日数
 2. 授業への取組み
 3. 発表の内容の総合的評価
- S 全出席。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- A 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定日数に達している。各課題の発表まで達している。
- D 出席が規定日数に達していない。各課題の発表が評価できない。

科目名 演技研究 D (フィジカルシアター) (2)

対象 専攻科演劇専攻 2 年

単位数

他専攻

担当教員 大谷 賢治郎

期間 後期

1

/

履修条件

授業時間外での自習・自主稽古に積極的に取り組むこと。アーティストとしての自立、アンサンブルとしての共同作業を両立させること。稽古着を着用すること。

授業の概要

俳優としての身体性を習得することを目標とする。
身体表現の可能性を模索し、身体表現による語彙を増やして行く。
台詞だけに頼らない、観客の想像力に働きかける伝達方法を獲得する。
専攻2年次に行った、俳優自身が作品創造を行うディバイジングを更に掘り下げて行く。
身体表現による身体行動、テキストによる言語行動の両立を図る。

授業の到達目標

1. ソロパフォーマンスの確立と発表。
2. グループワークによるパフォーマンスの確立と発表。
3. ディバイジングによる作品づくりと発表。
4. 創造過程に於ける自分自身について、そして他者についての観察とフィードバック。
5. 創造過程を記録し報告。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 身体表現による演劇的自己紹介
3. テンポ: スローモーションなど
4. 仮面①
5. 仮面②
6. 日常的ジェスチャー

7. 表現的ジェスチャー
8. ディバイジング①
9. ディバイジング②
10. ディバイジング③
11. ディバイジング④
12. 作品創造①
13. 作品創造②
14. 作品創造③
15. 総評

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

課題発表のための自習ならびに自主稽古。

教科書・参考書等

教科書: 必要に応じて授業時に配布
参考書: 必要に応じて授業時に配布

成績評価

1. 出席日数
 2. 授業への取組み
 3. 発表の内容の総合的評価
- S 全出席。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- A 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定日数に達している。各課題の発表まで達している。
- D 出席が規定日数に達していない。各課題の発表が評価できない。

科目名 演技研究 E (ミュージカル) (1)

対象 専攻科演劇専攻 1 年

単位数

他専攻

担当教員 大塚 幸太

期間 前期

1

/

履修条件

授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。稽古着・稽古靴着用。

授業の概要

ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」として表現したいこと、しなければならないことを明確にして演技プランを構築していく。シーンワークでは群像、ペア、ソロパートでの演技・歌唱・振付からミュージカル特有の形だけの演技ではなく、心が動く演技表現と空間と空気を動かす身体表現を学ぶ。メインとアンサンブノレの両方を経験し、双方で必要なモノを体感する。「役として生きる」ことを怠らず、俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。

授業の到達目標

各自が新たな発見をすること。

授業計画

1. シアターゲーム・シーンワーク① (力量チェック)
※アップとしてシアターゲームは以降もあり。
2. シーンワーク② (力量チェック) 自己分析
3. 身体表現 (創造)

4. 身体表現 (楽曲を使用)
5. インプロ
6. インプロ
7. シーンワーク (演技・歌唱・振付を区分しながら進行)
8. シーンワーク
9. シーンワーク
10. シーンワーク
11. シーンワーク
12. シーンワーク
13. シーンワーク発表 (衣裳・大道具・小道具あり)
14. シーンワーク発表 (衣裳・大道具・小道具あり)
15. まとめ

授業時間外の学習

授業に向けての予習・復習。

教科書・参考書等

授業で配布されるプリント。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演技研究 E (ミュージカル) (2)

対象 専攻科演劇専攻 2 年

単位数

他専攻

担当教員 大塚 幸太

期間 前期

1

/

履修条件

授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。稽古着・稽古靴着用。

授業の概要

ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」として表現したいこと、しなければならないことを明確にして演技プランを構築していく。(2)のシーンワークは(1)よりも本格化した「作品ワーク」となる。(1)と同様に群像、ペア、ソロパートでの演技・歌唱・振付からミュージカル特有の形だけの演技ではなく、心が動く演技表現と空間と空気を動かす身体表現を学ぶ。作品ワーク中心の授業で、細部に渡る表現を研究し、心身共に「プロフェッショナル」としての在り方の第一歩を修得する。また、生徒による「クリエイティブ・チーム」を編成し、振付又は演出の立場を経験することで創造力や創意思考を伝える指導力を身につける機会を設ける場合がある。(1)と同様に俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。そして、卒業後すぐに「現場」に適應できる人材育成を目指す。

授業の到達目標

各自が新たな発見をすること。「プロフェッショナル」としての在り方の第一歩を修得する。

授業計画

1. 身体表現 (創造) ※アップとしてシアターゲームとクロスフロア。
2. 身体表現 (楽曲を使用)
3. 作品ワーク (演技・歌唱・振付を区分しながら進行)

4. 作品ワーク
5. 作品ワーク
6. 作品ワーク
7. 作品ワーク
8. 作品ワーク
9. 作品ワーク
10. 作品ワーク
11. 作品ワーク
12. 作品ワーク
13. 作品ワーク発表 (衣裳・大道具・小道具あり)
14. 作品ワーク発表 (衣裳・大道具・小道具あり)
15. まとめ

授業時間外の学習

授業に向けての予習・復習。

教科書・参考書等

授業で配布されるプリント。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
B: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇特別研究

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 鴻上 尚史

期間 通年

2

/

履修条件

やる気のある者。やる気のない者は受けないでほしい。

授業の概要

インプロビゼーションを中心に、演技に対して多様なアプローチをすることで、「俳優」であることを多角的に見つめられるようにすること。分析と応用を繰り返して演技そのものを上達させる。

授業の到達目標

より自由で多様な演技ができるようになる。

授業計画

- 1 インプロ1 (言葉について)
- 2 インプロ2 (言葉について)
- 3 インプロ3 (身体表現について)
- 4 インプロ4 (身体表現について)
- 5 インプロ5 (演技について)
- 6 インプロ6 (演技について)
- 7 テキストワーク1 (台本分析)
- 8 テキストワーク2 (キャラクター分析)
- 9 シーンスタディ1 (上演にむけて)
- 10 シーンスタディ2 (演技練習)
- 11～14 シーンスタディ3 (上演)
- 15 批評と反省 (分析)

授業時間外の学習

さまざまな演劇を見ておくことがのぞましい。

教科書・参考書等

特になし。必要があればコピーを配る。

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 海外研修

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 ベーター・ゲスナー 高橋 宏幸

期間 後期集中

1

/

履修条件

良好な体調で海外での研修を受けることができるもの。また、事前に複数回の説明会を課すが、必須でうけることができるもの。

授業の概要

海外の演劇教育機関でワークショップを受けて、俳優訓練などを勉強する。世界的なレベルで現在の自分のレベルを知り、足りないところを認識し、今後の発展の礎にする。また、それぞれの国の演劇を見たり、美術館、博物館をまわり、演劇はもちろん、異文化を理解する。また、海外のさまざまな演劇人と実際にふれあう機会があるので、臆することなく積極的に参加すること。昨今では、イタリアのテアトロ・アルセナーレ、オーストラリアの国立演劇学校であるNIDA、スイスのチューリッヒ芸術大学、カナダのブルガリアのルーズムーズシアターなどで研修している。今年度も欧米の国々での研究を予定している。意欲のあるものを歓迎する。

授業の到達目標

海外での演劇研修を通じて、国際的な知見をもって視野を広めること。また、さまざまな人とふれあうことにより、文化の多様性を知ること。そして、自分のいる国や民族、文化を翻って見つめなおすこと。単なる旅行ではなく、あくまで研修としてさまざまなものを学ぶ機会としてこの授業はある。そのためには事前の学習として、下調べが必要である。またそのためのテキストなどは用意される。

授業計画

- 第1回 準備説明会
- 第2回 準備説明会
- 第3回 説明会
- 第4回 説明会

- 第5回 事前学習会
- 第6回 事前学習会
- 第7回 結団式
- 第8回 ワークショップ
- 第9回 ワークショップ
- 第10回 ワークショップ
- 第11回 ワークショップ
- 第12回 ワークショップ
- 第13回 ワークショップ
- 第14回 鑑賞会
- 第15回 鑑賞会

授業時間外の学習

訪問する国の文化、環境、演劇などを必ず調べておくこと。それぞれの国の劇作家、演劇などを知り、ワークショップにスムーズに参加できるように準備しておくこと。また帰国後のレポートを書く際に、体験したことをふまえて、さらに調べること。

教科書・参考書等

訪問国の舞台に関する戯曲やさまざまな資料をそのつど配布するので、読んでおくこと。

成績評価

- 1) 研修の予備調べ、および事前説明会や学習会の出席、
 - 2) 研修中の態度、3) 帰国後のレポートにより評価する。
- S 上記の1・2・3、の総合点が90点以上のもの。
A 上記の1・2・3、の総合点が80点以上のもの。
B 上記の1・2・3、の総合点が70点以上のもの。
C 上記の1・2・3、の総合点が60点以上のもの。
D 上記の1・2・3、の総合点が60点以下のもの。

科目名 舞踊A (クラシックバレエ)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 中農 美保

期間 通年

2

/

履修条件

特になし。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

1. 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレースメント
2. あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
3. 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
4. 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通ず感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業の到達目標

それぞれが自分の体と向き合い、豊かな表現ができる体を作る。バレエのアカデミックなムーブメント、テクニックを学び、音楽的に踊れるように感性を磨く。

授業計画

- ① 姿勢とプレースメント、5つの足のポジション
ボール・ド・ブラ
- ②～⑤ 「バーレッスン」
ブリエ、バットマン・タンジュ、バットマン・デガジェ、ロンド・ジャンプ・ア・テール、グランバットマン
「センターレッスン」
アダージョ、バットマン・タンジュ、小さいジャンプ、シソヌ
- ⑥～⑩ 「バーレッスン」
加えてバットマン・フラッペ、バットマン・フォンジュ、デヴロッペ

「センターレッスン」

加えてグランバットマン、アッサンブレ、ピルエット、ピケアンデダン

- ⑪～⑬ ジャンプや回転のコンビネーション
- ⑭ 試験のアンシェヌマン
- ⑮ 試験、まとめ
- ⑯～⑲ ①～⑮に加えてアレグロ・グランワルツ
- ⑳～㉒ フルレッスン、バリエーション、上級者はトウ・シューズ
- ㉓～㉕ フルレッスン、簡単なバ・ド・ドウ
- ㉖ 試験のアンシェヌマン
- ㉗ 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着 (レオタード・タイツ) を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①授業への取組み ②授業の状況 ③期末試験を総合的に100点満点で評価する。

- S: 総合点が90点以上の者
A: 総合点が80点以上の者
B: 総合点が60点以上の者
C: 総合点が50点以下の者
D: 総合点が49点以下の者

科目名 舞踊B (コンテンポラリー)

対象 専攻科演劇専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 勝倉 寧子

期間 前期

1

/

履修条件

経験の有無に関わらずコンテンポラリー・ダンスに興味があり、身体表現の習得に意欲的であること。

授業の概要

同時代のダンスという意味のコンテンポラリー・ダンスは、バレエにはない動きで表現の幅を大きく広げたモダンダンスよりもさらに新しい、最先端を行くダンスである。スキルフルで洗練され、アクロバティックで重力を利用した美しい脱力が特徴的。舞台芸術の中でも心とからだの密接な関係を深く実感できる実に魅力的な身体表現である。

コンテンポラリー・ダンスの中でも、バレエ、ジャズ、ストリート、舞踏等あらゆるダンスを理解した上に成り立つ技法は、音楽、演劇における身体表現に結びつく可能性を非常に多く含んでおり、舞踊表現の質の向上にも大いに有効である。

この授業では、まずコンテンポラリー・ダンスのトレーニングを積み重ねることからだを意思どおりにコントロールできる能力を養う。その後段階を踏みながら更なる技術のスキルアップを図りつつ身体表現に最も重要かつ必要な要素を取り上げそのテーマごとに実践を積み重ね、応用へと発展させていく。

授業の到達目標

- ・コンテンポラリー・ダンスの理解を深め、その技術を習得すること。
- ・プロの俳優として通用するからだをつくること。
- ・演じる上で、身体を使った感情表現がスムーズに行えること。
- ・プロの演出家、振付家の要求に対応し得る基礎技術、応用力を身に付けること。
- ・豊かな発想を生み出す創造力を養い、説得力のある身体表現を可能にすること。
- ・自作自演を可能にする創作力、演出力を身につけることができる。

授業計画

1. 授業ガイダンス
- 2～8. 下記の内容を段階を踏みながら進め習得していく
基礎トレーニング
 - ・ストレッチ&リリーステクニック
 - ・スイング+フロアテクニック
 - ・筋力&体幹トレーニング
 - ・アライメント…姿勢の矯正、正確なポジショニング
 - ・重力のコントロール…フォール、リバウンド、リカバリー、サスペンション

移動を伴う動きのトレーニング

- ・ステップバリエーションによるスムーズな重心移動
 - ・ジャンプ、ターン、フロアワークの組み合わせによる三次元的空間使い
- 9～14. 応用
基礎トレーニングに加えて、下記の内容を単独、または他のテーマとクロスフェードしながら取り上げ習得していく
- ・フリーズを踊る…振付けされた動きを通して身体表現の実践を行う。
 - ・舞台空間の使い方、緩急の配分。
 - ・フロップ (小道具) を踊りのパートナーとして用いるダンスの実践。
 - ・感情を伴う表現…音楽を使った実践、シチュエーション設定しての実践。
 - ・内面 (こころ) と動き (からだ) の演出上有効な距離の選択法。
 - ・インプロビゼーション (即効力、新しい動きの開発) …手がかりとなる手法を用いての実践
 - ・創作 (振付力の向上、個性、独創性の発見) …課題に対して創作の実践を行う。

15. まとめ

※音楽はクラシック、現代音楽、EDM、アンビエント、ロック、ポップス、R & B、JAZZ 等々あらゆるジャンルのものを用いる。

授業時間外の学習

毎回授業で学んだテクニックは、次回のステップアップに繋がるよう最大限の復習に努めること。
日頃から創作の材料となり得る音楽やテーマの情報収集に積極的であること。

教科書・参考書等

稽古着を着用。授業は基本的にシューズを履かずに行う。

成績評価

授業に取組む姿勢、実技試験の成績、身体表現能力開発の成果を総合的に評価

- S 総合点が90点以上の者 (基本的な諸事項を十分に理解し、それらを的確に使い優れた身体表現を実現することが出来る)
- A 総合点が80点以上の者 (基本的な諸事項を十分に理解し、それらを明確に表現し応用出来る身体能力を持っている)
- B 総合点が65点以上の者 (基本的な諸事項をほぼ理解し、それらを明確に表現する身体能力を持っている)
- C 総合点が50点以上の者 (基本的な諸事項をある程度理解し、身体表現能力に向上が見られる)
- D 総合点が49点以下の者 (基本的な諸事項の理解に欠け、身体表現能力に向上が見られない)

科目名 舞踊C(日舞)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 藤間 希穂

期間 後期

1

/

履修条件

- ①※(要相談) 日舞Ⅰ・Ⅱを履修済み、同等のスキルがある、授業進行を遂行出来るのいずれかに該当する方。
- ②稽古着は浴衣を含む和服、足袋着用、舞踊扇子持参の上参加。
- ③授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。
(目安:週2~3時間程度(個人差あり))
- ④授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、肩まで届く髪の長があれば必ず結うこと。
- ⑤授業内に座学と実技があるが必ず両方参加のこと。
- ⑥遅刻・欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

・古典芸能日本舞踊(藤間流)の実技・知識の習得及び創作の作成・発表。本科で学んだ古典舞踊の基本を元に、歌舞伎所作舞踊として広く知られている「汐汲」「越後獅子」全段学習する。難解な歌詞とハイレベルな振りに加え、三段傘や手桶、一本歯の下駄、晒、竹などの多彩な小道具を使いこなし情景描写・心理描写を描く。一方創作舞踊はテーマを決定し構想、音源作成、振付等学生自ら行い発表する専攻科オリジナルメニュー。本科で古典の基礎を学び古典の実力のある方対象のチャレンジメニューでもある。座学はより現場に則した舞台行儀や日本舞踊をより深耕する知識を学ぶ。

曲目

立方(たちかた)	長唄「越後獅子」
女形(おんながた)	長唄「汐汲」
創作	テーマを決定し構想、音源作成、振付等学生自ら行い発表する

授業の到達目標

- ・座学を元にした筆記試験にて8割以上得点すること。
- ・実技は課題曲を舞台上で発表できるスキルを身に付けること。
- ・授業態度は「成果を生む」ことを前提とした行動がとれること。
- ・コミュニケーションシートでは全体課題の抽出、課題解決提案が出来る実行及び言語表現ができること。
- ・出席日数に関しては大学の規定に準ずる。

授業計画

- 第1回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマ設定
- 第2回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成1
- 第3回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成2
- 第4回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成3
- 第5回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作音源選定
- 第6回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作音源編集
- 第7回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付1
- 第8回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付2
- 第9回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付3
- 第10回 座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付4
- 第11回 長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付5
- 第12回 長唄「汐汲」「越後獅子」フォーメーション/創作フォーメーション
- 第13回 長唄「汐汲」「越後獅子」フォーメーション/創作フォーメーション
- 第14回 座学/プレテスト/長唄「汐汲」「越後獅子」リハーサル/創作リハーサル
- 第15回 座学/テスト/長唄「汐汲」「越後獅子」本番/創作本番

授業時間外の学習

- ・古典では決まった曲と振りの中でも座み字を工夫するなどお稽古しアイデンティティを確立する。
- ・創作ではテーマや振りや構成はもとより、お客様を楽しませるためエンターテインメント性を持てるようにお稽古する。
- ・個々の能力が集まることにより、一体感と説得力のある演目になるようお稽古する。

教科書・参考書等

どちらも授業時間内に配布。

成績評価

筆記試験・実技試験・授業態度(取組み)・コミュニケーションシート・出席日数を総合して満点100点にて評価。
S 100点~95点 A 94点~90点 B 89点~80点
C 79点~70点 D 69点以下
※値は絶対値ではなく相対値のため変化する場合あり。

科目名 ミュージカル唱法

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 藍澤 幸頼

期間 通年

2

/

履修条件

暗譜して授業に出席する。課題の練習に積極的に取り組む。最終段階において、衣装髪型なども含め、工夫をいとわない。遅刻厳禁(芝居の稽古同様)。

授業の概要

- ・オーディションや人々の前で、歌を披露することを前提にミュージカルナンバーを学ぶ。
- ・多数のミュージカルナンバーを聞いて、役で唱うことを意識し、解釈まで掘り下げる。
- ・自分自身のキャラクター・音域を意識し、役別オーディションにおいて適切な役を選定する知識を身につける。
- ・唱う基礎的な力(体の使い方・呼吸法・発声)を確認する。
- ・期末に発表会を実施し、実技試験とする。

授業の到達目標

自分にあった、ミュージカルのスタンダードナンバーを創り、いつでもオーディションなどに対応できるようになる。

授業計画

(前期)

- ①自分で用意した、短い台詞/歌をひとりずつ披露する。
- ②~③台詞を言うことと唱うことの違いについて考え、批評する。

- ④体の使い方・呼吸法・発声を確認する。
- ⑤~⑧各自が選んだ新曲を唱い、考え、批評する。
- ⑨~⑫各自が選んだ新曲を演技しながら唱い、考え、批評する。
- ⑬~⑮前期まとめと共にオーディション用紙の記入について学ぶ。(後期)
- ①~⑧各自が選んだ新曲(デュエット、グループを含む)を演技しながら唱い、考え、批評する。
- ⑨~⑭各自の歌をつなげてひとつのショーを創りあげることが目標に、ステージングを含めた表現を学ぶ。
- ⑮後期まとめ。
※講義内容に関しては、クラスの深度によって変更することがある。

授業時間外の学習

暗譜 映画・舞台・CD・DVDなどできるだけ音楽に触れる。

教科書・参考書等

- ・譜面は自分で用意(応相談)
- ・Richard Walters「THE SINGER'S MUSICAL THEATRE ANTHOLOGY」(HAL・LEONARD)

成績評価

授業への取組み・態度(積極性、事前準備など)50%
実技試験50%
総合点 90% S
80% A
60% B
50% C
49%以下 D

科目名 英語劇

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 ジェイスン・アーカリ

期間 通年

2

/

履修条件

プロフェッショナルとしての自覚を持ち、体調管理に気をつけ、遅刻・欠席はしない。グループワークにおける協調性と責任感を持って、意欲的に創造活動に励むこと。

授業の概要

このクラスでは、イギリスの演劇大学などで教えるヨーロッパの俳優トレーニングを紹介する。多種多様な実践的アプローチを使って、既存する戯曲にどうやって命を吹き込むのか、その演劇スキルを次の5点に絞って学んでいく。

1/身体と声のトレーニング術、2/空間意識と動きの技術、3/コミュニケーション能力と観察力、4/声と身体表現を伸ばすための想像力、5/身体を使った役作りとセリフ術。

授業では、「俳優トレーニングの「キーワード」や演出のコンセプトを提示し、「シーンやキャラクターを作り上げるためにそれらの技術をどのように活用するか」に重点を置きながら実践的に戯曲へアプローチする。また、声と身体表現の役作りをする上で、刺激としてイメージや小道具などを使うこともある。

授業の到達目標

- 1/芝居を作るための演劇専門用語のボキャブラリーを増やす。
- 2/戯曲の読解と演技の両面から、いろいろな役柄作りのアプローチを試して体系的な方法論を習得する。
- 3/声と身体表現力を広げることができる。
- 4/イギリスやヨーロッパの現代戯曲を英語で演じる経験をする。

授業計画

- 1 導入エクササイズ・パート1
- 2 導入エクササイズ・パート2
- 3 戯曲(前半)の紹介・パート1
- 4 戯曲(前半)の紹介・パート2
- 5 戯曲(前半)シーンワーク・稽古①
- 6 戯曲(前半)シーンワーク・稽古②
- 7 戯曲(前半)シーンワーク・稽古③
- 8 戯曲(前半)シーンワーク・稽古④
- 9 戯曲(前半)シーンワーク・稽古⑤
- 10 戯曲(前半)シーンワーク・稽古⑥

- 11 戯曲(前半)シーンワーク・稽古⑦
- 12 戯曲(前半)シーンワーク・稽古⑧
- 13 戯曲(前半)シーンワーク・稽古⑨
- 14 発表ファーストショーイング
- 15 まとめ

後期

- 1 導入エクササイズ・パート1
- 2 導入エクササイズ・パート2
- 3 戯曲(後半)の紹介・パート1
- 4 戯曲(後半)の紹介・パート2
- 5 戯曲(後半)シーンワーク・稽古①
- 6 戯曲(後半)シーンワーク・稽古②
- 7 戯曲(後半)シーンワーク・稽古③
- 8 戯曲(後半)シーンワーク・稽古④
- 9 戯曲(後半)シーンワーク・稽古⑤
- 10 戯曲(後半)シーンワーク・稽古⑥
- 11 戯曲(後半)シーンワーク・稽古⑦
- 12 戯曲(後半)シーンワーク・稽古⑧
- 13 戯曲(後半)シーンワーク・稽古⑨
- 14 発表
- 15 まとめ

授業時間外の学習

授業のあと、どんなことを行なったのか、各自で見直す必要がある。与えられたセリフは、次の授業までに覚えておくこと。また、指定したショートシーンをグループごとに自主稽古しておくこと。

教科書・参考書等

授業に必要な資料は、配布する。ヨーロッパの現代戯曲から短いシーンやセリフを使う事もある。

成績評価

- 1/出席日数
 - 2/意気込みが見られ
 - 3/授業に取り込む態度
 - 4/課題に取り込む積極性
 - 5/理解能力
- S:総合点が90点以上の者
 A:総合点が80点以上の者
 B:総合点が65点以上の者
 C:総合点が50点以上の者
 D:総合点が50点以下の者

科目名 修了論文

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 高橋 宏幸 他

期間 通年

4

/

履修条件

専攻科1年次より修了論文を書きたいものは受講、ないし相談すること。

授業の概要

修了論文を提出するための授業となるので、毎週一度、話し合っテーマなどを決めて、2年間の指導を受けながら論文を書き、提出するものである。平常の授業ではないので、週に一度各自の時間を決めて、個別に相談をして提出する。修了論文要綱は、後日掲示されるものによって書くこと。

授業の到達目標

4年間の成果として、一つの論文によって深く洞察された研究テーマをもととした論文を書くものである。今後の社会生活における内省や活動をする際の礎となるものとして、または演劇活動をするための試金石となるものを期待する。

授業計画

- 1 テーマについて
- 2 テーマとは何か
- 3 批評的視点としてのテーマ
- 4 書き出してみる
- 5 第一章
- 6 第一章
- 7 第一章
- 8 第二章
- 9 第三章

- 10 第三章
- 11 第三章
- 12 参考文献
- 13 注のつけ方
- 14 まとめ
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎週、少しずつ必ず書いていくことが求められる。

教科書・参考書等

とくにない。それぞれのテーマにあわせて適時推薦する文献を読む。

成績評価

論文提出と口頭試問によって決定する。

- 50%ずつで100点に換算
- S 総合点が90点以上の者
(基本的な諸事項を十分に調べて、独自の意見がある)
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ調べて、独自の意見がある)
- B 総合点が70点以上の者
(基本的な諸事項を調べて、独自の意見がある)
- C 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項を調べられておらず、独自の意見があまりしていない)

科目名 ワークショップA/B

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 鶴山 仁

期間 前期集中

1

/

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各一回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深める。修了年次であることを、意識し今後の演劇活動における社会貢献に直結する技術や思考を獲得する。

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 第1～3回 本読み
- 第4回 キャスト発表
- 第5～13回 たち稽古
- 第14回 課題発表
- 第15回 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 ワークショップC/D

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 和田 喜夫

期間 後期集中

4

/

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各一回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深める。

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 第1～3回 本読み
- 第4回 キャスト発表
- 第5～13回 たち稽古
- 第14回 課題発表
- 第15回 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題への取り組み ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤課題の成果
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち1つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 A / B

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 前期集中・後期集中

4

/

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②

- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにかが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
 A: ①～⑤のうち5つを獲得した者
 B: ①～⑤のうち4つを獲得した者
 C: ①～⑤のうち3つを獲得した者
 D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 C(専1最終公演)

対象 専攻科演劇専攻1年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 後期集中

4

○

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

なおこの公演は、調布市せんがわ劇場において調布市の指定事業として行われるものである。そのことを十分に理解し、さまざまな事情にも十分配慮した進捗に貢献することが求められる。学内での劇上演よりも尚一層の努力と意識の向上を目指す。

この実習では、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②

- 8 たち稽古③
 - 9 たち稽古④
 - 10 舞台の仮組み
 - 11 舞台稽古①
 - 12 舞台稽古②
 - 13 舞台稽古③
 - 14 本番
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- 作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにかが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持 ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
 A: ①～⑤のうち5つを獲得した者
 B: ①～⑤のうち4つを獲得した者
 C: ①～⑤のうち3つを獲得した者
 D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 D(修了公演)

対象 専攻科演劇専攻 2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 後期集中

4

/

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。専攻科修了に必要な単位数を確保した学生のみ受講することができる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、専攻科における学習成果を総合化させていく。プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。

授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。その意思が確認されたあとで出演を取り下げることは学生、スタッフ、演出家を含む座組み全体に重大な迷惑をかけることになるので、できない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

なおこの公演は、調布市せんがわ劇場において調布市の指定事業として行われるものである。そのことを十分に理解し、さまざまな事情にも十分配慮した進捗に貢献することが求められる。学内での劇上演よりも尚一層の努力と意識の向上を目指す。

この実習では、修了後演劇活動に従事することを想定し、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①

- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにかが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- ①授業態度
 - ②課題の成果
 - ③表現者としての真摯な姿勢
 - ④自らを研鑽する意欲
 - ⑤身体的、精神的健康の維持
 - ⑥共演者との協力の成否
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち5つを獲得した者
B: ①～⑤のうち4つを獲得した者
C: ①～⑤のうち3つを獲得した者
D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 E / F(学外出演)

対象 専攻科演劇専攻 1・2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 集中

4

/

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)、企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義の認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合にのみ単位認定は可能。スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を担い、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組みにも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任をもって管理すること。安易な参加はむしろ控えること。

学業を進めることが損なわれるような現場の日程、要求がされないことがないか、事前に十分確認すること。学外出演する学生の単位認定や扱いを、他の学生とは例外扱いしたり、特別優遇するようなことはない。重々どのような条件の参加になるのか事前に確認して臨むこと。

授業の到達目標

プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。さまざまな現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。座組の一員としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画

一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①

- 5 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④ 影セット内でのリハーサル
- 10 舞台の仮組み あるいは撮影セット内でのリハーサル
- 11 舞台稽古① あるいはリハーサル①
- 12 舞台稽古② あるいはリハーサル②
- 13 舞台稽古③ あるいはリハーサル③
- 14 本番 あるいは撮影
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにかが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- ①研修現場での取組み
 - ②課題の成果
 - ③表現者としての真摯な姿勢
 - ④自らを研鑽する意欲
 - ⑤身体的、精神的健康の維持
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 劇上演実習G (学内出演)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

単位数

他専攻

担当教員 三浦 剛

期間 集中

1

/

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)を提示。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)への出演者としての参加。ただし出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。

稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組みにも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任をもって管理すること。安易な参加はむしろ控えること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度をあげることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

授業の到達目標

さまざまな実習、演習に出演者として参加し、さまざまな関係者、出演者、スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)に出演者として参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①

- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめだしを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

- ①授業態度 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- S: ①～⑤のうち全てを獲得した者
- A: ①～⑤のうち4つを獲得した者
- B: ①～⑤のうち3つを獲得した者
- C: ①～⑤のうち2つを獲得した者
- D: ①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

教職科目

科目名 教師論

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 野間 哲

期間 後期

2

/

○

履修条件

将来、「教師」を目指したい者、教師ではないが「教える」ということを学びたい者、人間関係を学びたい者など。

授業の概要

教育者として知っておかなくてはならない知識、常識、感覚、ノウハウをコンパクトにまとめながら、実例を示し、実践的に指導する。音楽教室講師や演劇講師としても役立つ様々な素養も養う。生徒や保護者との接し方など、微細なノウハウを具体的に指導する。教えることの意味と実務、技術を学ぶ。

授業の到達目標

教師としての幅広い基礎知識、自覚・態度を身につけ、基本指導のためのノウハウを知り、これからの活動に応用することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 教壇に立つことだけが教師じゃない? 自主活動との両立とは? 「教える」という仕事の基礎知識。
3. 教育法規(教育基本法・学校教育法) 法律は子どもを守り、教師も守る。モンスターペアレンツとは。
4. 著作権(文化庁)・音楽著作権(JASRAC)について 無知では済まされない表現者の権利と責任
5. 学習指導要領 ガイドラインを知ってこそその教育者 オリジナリティと暴走の違いを知る。
6. 社会教育・生涯教育・同和教育 家庭教育、社会教育がなければ学校教育は成立しない。

7. 「個性と連携プレイ」職員室の中では何が行われているのか。
8. 「授業準備は命がけ」教師が学ばずして生徒は教えられない。
9. STOP! THE 「バフハラ・セクハラ」。生徒と教師の大事な一線。暴力は「しかる」ではない。
10. 「いじめを考える」人は自分は差別されたくないが、人を差別したがる動物である。
11. 「不登校を考える」みんなと同じことができなくてもいいんじゃない?の発想
12. 「現場主義」パソコンと向き合うか、生徒と向き合うか。事務屋教師にならないすすめ。
13. 「危機管理」どこに危険が潜んでいるかわからない! 予測と事前準備。ヒヤリハット予防術。
14. 「感動の仕事」かけがえのない人間体験、打ち震える感動、それが教師である。卒業という宝物。
15. まとめ

授業時間外の学習

日頃から、ニュース、新聞等メディアから得られる教育問題に、関心を持つようにする。関連図書の読書も励行すること。

教科書・参考書等

毎回、資料提供はこちらで行う。

成績評価

提出物の成果によって判断をする。レポート課題など。評価テストは行わない。

科目名 教育原理

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 木村 康彦

期間 後期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

本授業は、現代の教育につながる理念、思想及び歴史を軸として踏まえながら、現代社会で教育が果たす役割を考察するために必要な基礎的な理解を得ることを目的とするものである。「教育とは何か」、「人はなぜ学ぶのか」、「学校はどのような意味を持っているのか」といった根源的な問いに始まり、現在も進められている様々な教育改革、「不登校」や「いじめ」などの深刻な教育課題、「学校教育」以外の「家庭教育」や「社会教育」、「生涯学習」といった幅広い教育機会の方角性について、社会的・制度的・経営的側面から取り上げながら、考察を深めていく。

なお、授業は基本的に講義形式で進めていくが、コメントシートを毎回配付して小レポートを課し、授業の理解度を確認するとともに、受講者と担当教員との間で双方向的にやり取りをしながら、授業を作り上げていく。また、教育原理を効果的に学ぶため、授業中に数回程度、映像資料を活用する。

授業の到達目標

教育の専門家として必要な知識と教養を総合的に身につけ、教育に関連する事象を客観的に自らの力で判断することができるようになること。また、公教育をめぐる様々な教育課題に対する自分なりの答えを理論的に導き出せること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(教育の理念と目的)
- 第2回 人間の発達と教育(発達段階と発達課題)
- 第3回 教育思想と歴史①(近代の学校と教育)
- 第4回 教育思想と歴史②(近代公教育制度の誕生など)
- 第5回 教育思想と歴史③(綜芸種智院、寺子屋、学制など)
- 第6回 教育思想と歴史④(戦時下の学校と戦後教育改革など)
- 第7回 教育法規と教育行政(教育法規の体系、地方教育行政

の仕組みなど)

- 第8回 教育課程と教育評価
(学習指導要領の変遷や成績評価方法、学校評価など)
- 第9回 教育ガバナンスの動態
(校務分掌、チーム学校、地域連携、教育NPOなど)
- 第10回 諸外国の教育制度と教育改革
(各国の教育制度や国際学力試験など)
- 第11回 学校外の教育活動
(フリースクール、生涯学習、家庭学習など)
- 第12回 社会変動と教育(選抜と競争、子どもたちの貧困など)
- 第13回 現代社会の教育課題
(不登校、いじめ、体罰、懲戒、学校安全など)
- 第14回 生徒理解と教育支援(特別支援教育、発達障害、性的マイノリティーへの対応など)
- 第15回 これからの教育(まとめ)

授業時間外の学習

普段から、「教育」や「学校」に関する新聞記事やニュースに触れておくこと。授業内に、関心のある最新の教育動向を話題として取り上げてもらう場合がある。

教科書・参考書等

教科書: 特に指定しない。必要に応じて、資料をプリントで配付する。
参考書: 汐見稔幸・伊東毅・高田文子・東宏行・増田修治(編著)『よくわかる教育原理』ミネルヴァ書房、2011年。

成績評価

授業中の取り組み(20点)、小レポート(30点)、期末レポート(50点)で点数化し、S(90点以上)、A(80~89点)、B(60~79点)、C(50~59点)、D(50点未満)の5段階で評価する。
ただし、正当な理由なく出席日数が授業時数の3分の2に満たない場合は、評価の対象としない。

科目名 教育心理学

対象 教職2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 鈴木 敦子

期間 前期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

子ども、生徒に何かを教える際、教える側は「教えた」のだからそれが正しく相手に伝わっているはずだと思いがちになる。相手が教えたことをできないのは相手がちゃんと聞いていなかったか、理解する努力が足りなかったためだと主張したくなる。しかし、実は教える側と教えられる側の間にはそれぞれの常識では考えられないような理解がなされている。「教える」ことは教える内容が充実してさえすればいいわけではなく、相手の理解プロセスも考慮する必要がある。本授業ではこの点を踏まえ、心理学的に探究する。

- 4 発達3 (ピアジェの発達課題)
- 5 発達4 (誤信念課題)
- 6 教授1 (何が学習か)
- 7 教授2 (計算のバグ)
- 8 教授3 (文章問題のバグ)
- 9 教授4 (見ればわかるか)
- 10 教授5 (見ればできるか)
- 11 教授6 (情報処理アプローチ 地球は丸い?)
- 12 発達障害1 (読字障害)
- 13 発達障害2 (自閉症スペクトラム児の学習)
- 14 発達障害3 (自閉症スペクトラムの世界)
- 15 授業の総括

授業の到達目標

中等教育まで受けてきた授業で、自分が理解しやすかったもの、あるいは理解しにくかったもの、それがなぜなのか解明する手がかりがつかめることを目標とする。いくらかでもその「謎」がわかれば教える立場に立つとき自信が持てると思われる。

授業時間外の学習

新聞等で「授業」「学習」「心理」などの項目を注意深く読むこと。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2 発達1 (生得性と学習 赤ちゃんDVD)
- 3 発達2 (生得性と学習)

教科書・参考書等

授業時にその都度プリント等を配布する。

成績評価

授業への取り組み・受講態度50%、試験・レポート50%で点数化し、学校の定める成績評価の基準、評価の基準に則して評価する。

科目名 教育史概説

対象 教職2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宮城 哲

期間 前期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

広義には、人類の歴史とともに古いともいえる「教育」という當為について、その理念や制度などの歴史的な変化を概観し、教育について歴史的に考える上で必要な基礎的知識を得ることをめざす。
具体的には西洋と日本の近代以降の教育の流れを中心に(近代以前の教育も簡単に確認する【授業計画】2)、それらの理念や制度の変化を歴史的に概観し(【授業計画】3~9)、また、現代的な課題についても、その歴史的な経緯をふまえながら考えてもらう(【授業計画】10~14)。視聴覚資料をはじめさまざまな史・資料などにふれ、教育を具体的に考える基礎的な知識を身につける。

13. 現代の教育とその課題④: 体罰
14. 現代の教育とその課題⑤: 共生(シティズンシップ教育)
15. まとめ: 卒業式ソングの今・昔から

授業の到達目標

授業で扱った史・資料などを理解し、教育史についての基礎的な知識を習得し、その知識を活かして現代の教育の課題を考えるうえで役立てることができるようになること。

授業時間外の学習

授業で資料などを配布し、あわせて参考文献等も提示するので、それらを参考にそれぞれのテーマに関する文献を授業後に読むことを期待する。私たちは過去のことを知るためだけでなく、現代の教育の課題について深く考えるためにも教育史を学ぶ。そのため授業外の時間にも、常に教育にかかわることに関心をもってもらいたい。ニュースや新聞など時事的な話題や映画や文学作品などのなかにあられる「教育」にも普段から関心を向けること。

授業計画

1. はじめに: 教師(教職)の社会史から
2. 近代以前の教育: 西洋と日本
3. 近代の教育の理念: 子どもの発見(ルソー「エミール」など)
4. 近代学校の成立と義務教育の普及・拡大①: 西洋(産業革命から子どもの世紀へ)
5. 近代学校の成立と義務教育の普及・拡大②: 日本①(福澤諭吉『西洋事情』と学制)
6. 近代学校の成立と義務教育の普及・拡大③: 日本②(教育勅語体制の成立と展開)
7. 近代学校の成立と義務教育の普及・拡大④: 日本③(大正デモクラシー~戦時下の学校・教育)
8. 戦後の教育改革の理念と制度
9. 経済成長と教育~現代の教育へ
10. 現代の教育とその課題①: 不登校
11. 現代の教育とその課題②: 学力
12. 現代の教育とその課題③: いじめ

教科書・参考書等

[教科書] 特になし(授業でレジュメ、資料などを配布する)。

[参考書]
・森川輝紀・小玉重夫編『教育史入門』放送大学教育振興会、2012年
・斉藤利彦・佐藤学編『新版近現代教育史』学文社、2016年
・片桐芳雄・木村元編『教育から見る日本の社会と教育(第2版)』八千代出版、2017年

成績評価

成績評価については、授業への取り組み・学期末課題の結果を総合的に判断して行う。

- S 総合点が90点以上の者
(講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者)。
A 総合点が80点以上の者
(講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者)。
B 総合点が60点以上の者
(講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者)。
C 総合点が50点以上の者
(講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者)。
D 総合点が49点以下の者(講義内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者)。

科目名 音楽科教育法

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 宇佐美 博子

期間 後期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

- 1 音楽科教育の歴史や学習指導要領の内容について理解する。
- 2 教材研究の活動によって、音楽科教育の方向性や学習指導の基礎的方法について理解する。
- 3 教育者に求められる表現力、コミュニケーション力、共感性について教材研究を通して体験的に学習する。

授業の到達目標

- 1 公教育における音楽科教育についての知識と理解を得るとともに、その学習指導の基礎的な方法を、身に付けることができる。
- 2 教材研究を通して、音楽科教育のめざすべき方向性について理解できる。
- 3 教育者に求められる表現力、コミュニケーション力、共感性が身に付き、教育実習などに生かすことができる。

授業計画

- 第1回：音楽科教育の意義
- 第2回：音楽教育と音楽科教育の意義
- 第3回：我が国の音楽科教育の変遷（明治から昭和初期）
- 第4回：我が国の音楽科教育の変遷（昭和中期から現在まで）
- 第5回：中学校学習指導要領・音楽 表現領域

- 第6回：中学校学習指導要領・音楽 鑑賞領域
- 第7回：共通事項、指導と評価の一体化
- 第8回：学習指導案の書き方
- 第9回：歌唱における教材研究
- 第10回：器楽における教材研究
- 第11回：創作における教材研究
- 第12回：鑑賞における教材研究
- 第13回：我が国の伝統音楽における教材研究
- 第14回：世界の諸民族の音楽における教材研究
- 第15回：まとめ

授業時間外の学習

授業内容の予習、復習を行う。
授業で指示された教材研究を行う。
それらを活用して授業構成を進める。

教科書・参考書等

教科書：中学校学習指導要領解説音楽編 文部科学省編
教育芸術者発行 2018
教科書：最新中学校音楽教育法 改訂版 中学校音楽教育
研究会編 音楽の友社 2011

成績評価

講義中の発表、レポート、授業後のリフレクションペーパー、
模擬授業への取り組み

科目名 道德教育の研究

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 岡本 直久

期間 後期集中

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

いじめの問題に体罰が加わって、教育に於ける人間関係を考えさせられる日が絶えないことから、昨今、学校教育の中の道德教育の立場が話題にされる機会が多くなってきている。また、新指導要領でも道德の意義が強調されている。加えて、「道德」の教科化に向けた動きが活発になって来ている今だからこそ、本講義は重要な意味を持つ。道德”は、教科教育や体育と違って、人々の心の中の動きに絡む活動であることから、評価等他の学校内の活動とは異なって、慎重な扱いが必要である。加えて、身近な話題から社会問題、芸術や文芸作品等まで、教材として利用できるものに大きな幅があることから、教師の経験に負う所が大きい。このように様々な活動形態が考えられる中、道德教育の柱としてあるべきかは何かを、我が国の道德教育の歴史とも相談し、そして受講生の受けてきた道德教育の経験を集約しながら、明らかにしていく。

授業の到達目標

我が国の道德教育の歴史の流れを明確に把握し、これからあるべき道德教育の姿を明確に意識できること。

授業計画

- 1 経験としての道德教育
- 2 道德の諸相
- 3 社会と道德
- 4 我が国近世の道德教育
- 5 我が国戦前の道德教育

- 6 我が国戦後の道德教育
- 7 実践としての道德教育
- 8 道德教育のある可き姿

授業時間外の学習

道德が対象とする基を人が人間関係であることを踏まえ、所謂人間観察の機会を逃さず、事実と考察を記録すること。その成果は、講義の際の資料として集約する心算である。

教科書・参考書等

書物は特定しない。その都度プリントその他で配付するものを使用する。
関連書物・参考文献等は、授業の中で紹介する。

成績評価

- 各回の講義への取り組み
- S 以下のAの観点総てに就いて際立った成果を見せる
- A 講義内容に対する自己の立場を具体的に表明出来る
理解を示す表現力がある
各回の講義への取り組みが充実している
講義内容を正確に把握している
- B 理解を示す表現力がある
各回の講義への取り組みが充実している
講義内容を正確に把握している
- C 各回の講義への取り組みが充実している
講義内容を正確に把握している
- D 上記の条件を満たしていない

科目名 特別活動の研究

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 真野 彰

期間 後期集中

1

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

中学・高校のカリキュラムは、教科活動と教科外活動とから構成されている。ここで言う特別活動とは、主として教科外活動を指している。具体的には、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の3つで、部活動についても触れる。

教師は、多分に自分が学生時代どのような経験を積んできたか、ということがベースとなって生徒に接している。つまり特別活動を指導するに当たっては、自分が中高時代にいかに真剣に上記のような活動に取り組んだかが重要である。

43年間、中高の現場で教鞭をとってきた私の、つたない経験をともに、みなさんとともに特別活動の重要性について考えてみたいと思う。

授業の到達目標

中高生たちが「生きる力」を身につけていくために特別活動がいかに重要であるかを、これから教師を目指す短大生に認識してもらえれば幸いである。

授業計画

- 1 特別活動とは、学習指導要領の変遷
- 2 ホームルーム活動の進め方、クレーム対応
- 3 生徒会活動と校則、部活動への関わり方（体罰についても扱う）、学校行事の考え方
- 4 特別活動の評価
- 5 教師論、特別活動の位置づけ

授業時間外の学習

12月までに、教育に関する新書や新聞記事に積極的に触れて、自分の考える視点を養っておいてほしい。

教科書・参考書等

授業時にプリント資料を配付。

成績評価

出席点とレポートによる。
レポートは授業内で書いてもらう。

科目名 生徒指導 I

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安富 由美子

期間 後期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

「生徒指導 I」では、指導の主要な構成要素である、教育相談のイメージをつかむことを目標とする。

教育相談では、「聞き上手」であることが求められるが、教師として、どのような配慮が必要であるかについて、事例を通して理解してゆく。

さらに、コミュニケーションにおいて、時に言語以上に影響力を持ち得る「ノンバーバル行動」についても、知識・理解を深めたい。

講座全体を通して、生徒指導の基礎理論を把握しつつ、芸術科目の特質を活用した指導や、自分の個性を教育現場に生かす方法についても考察して欲しい。そのためには、開講時の演習(エゴグラム・チェックと交流分析の概略)も参考になるであろう。自主的な学習態度には支援を惜しまない。

授業の到達目標

生徒を受け止める姿勢を示すことができる。

授業計画

- 1 オリエンテーションとエゴグラム・チェック(エゴグラムにより自分のコミュニケーション特性について考える。)
- 2-3 交流分析(コミュニケーションの構造を分析する一方法について概略を学ぶ。)
- 4-6 聞き上手のポイント(カウンセリングについての知識とともに、教師に必要とされる「生徒の話を聞く態度」について理解する。)
- 7-8 ノンバーバル・コミュニケーション(生徒を良く理解する材料として、ノンバーバル行動について考える。)
- 9 教師の精神衛生(ビデオ教材を用いて、教師自身が抱える可能性のある問題について考える。)
- 10-11 保護者との面接(保護者とコミュニケーションを密にし、

- 協力し合える関係づくりについて考える。)
- 12-13 アサーション(講義と演習:教師と生徒それぞれの立場からのアサーションについて学び、実践について考える。)
 - 14 集団の意志決定に関する実習(グループ演習を通して、個人の意志と集団の意志の切り替えについて考えたい。)
 - 15 総括

授業時間外の学習

自分の目標とする教師像や人間像を実現することを念頭に、授業で扱ったテーマについて、自分の考えをノートなどに記してみよう。そのためには、少々の補習も必要になるかもしれない。ただ頭の中で考えるだけでなく、文章に顕わすことで、考察の曖昧な点も明らかになり、実現に向けての具体的な課題が明確になるので、是非チャレンジしてほしい。

教科書・参考書等

「教育相談—その理論と方法—」江川斑成編著(学芸図書)
「心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション」春木豊編著(川島書店)

成績評価

期末の論述試験と出席状況による。
S=100点 A=90点 B=80点 C=70点 D=50として出席率を100で乗じた数値との平均を評点とする。
S 授業で扱ったテーマについて充分理解し、課題意識を持って実践的に考察できる。(90点以上)
A 授業で扱ったテーマについて充分理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。(80点以上)
B 授業で扱ったテーマについて充分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。(70点以上)
C 授業で扱ったテーマについてある程度理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。(60点以上)
D 授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。(59点以下)

科目名 生徒指導Ⅱ

対象 教職2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 安富 由美子

期間 前期

2

/

○

履修条件

教職課程受講者必修。
「生徒指導Ⅰ」を履修し、単位を取得していること。

授業の概要

「生徒指導Ⅰ」で学んだことを実践で生かすに当たり、様々な課題が浮上すると予想される。そこで、知識と少々の体験を補うことで、現実的な問題解決力を養うことを当講座の目的とする。
講義と演習を取り混ぜて進行する予定なので、演習には、演習前に学んだ知識の概要を把握して臨むことが大切である。参考書等も予・復習に活用すると、理解と問題意識が高まると思われる。

授業の到達目標

教師としての自分を磨き、指導のための精神的なゆとりを持つ。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2-3 野外活動(体験と講義:生徒を引率して野外に出る際の留意点について考え、学ぶ。)
- 4-6 障害(講義と演習:VTRも利用しながら、生徒が先天的・後天的に抱えるかもしれない障害について学び、指導を考える。)
- 7-8 心理検査(講義と演習:学校で用いられる心理検査を中心に、特徴と利用上の注意点について理解する。動作性検査を体験し、その利用について考えてみる。)
- 9-12 学校生活の問題(グループ討論:いじめ、部活、体罰、ネット利用などの事例について検討する。)
- 13 問題提起(現場での問題・課題について意見交換し、多角的に物事を捉え、柔軟に対応する力を養いたい。)
- 14 教育環境に対する提案(ビデオ視聴し、テーマについて具体的に考えたい。)

15 総括

(注:ここでの「演習」は「体験」よりも能動的・建設的態度が要求される。)

授業時間外の学習

教育実習前は生徒たちとの交流を思い描きながら、また実習後は思い通りにできたことやできなかったことを思い出ししながら、授業で扱ったテーマに当てはめて考察してみよう。任意のレポートにまとめて提出された場合は、コメントを付けて返却する。

教科書・参考書等

必要な資料はプリント配布。
「教育相談—その理論と方法—」江川班成編著(学芸図書)
「精神医学ハンドブック」山下格著(日本評論社)
「インタープリテーション入門」レニエ他著(小学館)
「アサーション・トレーニング」平木典子著(金子書房)

成績評価

期末の論述試験と出席状況による。
S=100点 A=90点 B=80点 C=70点 D=50として出席率を100で乗じた数値との平均を評点とする。
S 授業で扱ったテーマについて充分理解し、課題意識を持って実践的に考察できる。(90点以上)
A 授業で扱ったテーマについて充分理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。(80点以上)
B 授業で扱ったテーマについて充分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。(70点以上)
C 授業で扱ったテーマについてある程度理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。(60点以上)
D 授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。(59点以下)

科目名 教育実習Ⅰ

対象 教職1年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司・永井 由比

期間 通年

Ⅱと合わせて
5

/

○

履修条件

将来、音楽教員をめざす強い希望と意志をもつ者。
「教育実習Ⅱ」必修。

授業の概要

〈教育実習〉とは、文字どおり、指導教員の指導のもと中学校で行う実習(3週間から4週間)そのものをいい、この授業はその実習をより有意義に行うための事前指導が中心となる。教職課程履修にあたっての心構え、実習までに身につけておくべきこと、実習までに必要な諸手続きなど、より具体的な内容および課題を取り上げる。

授業の到達目標

- (1) 教育実習の意義を理解する。
- (2) 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備する。

授業計画

- (1) 教職課程履修の心構え
- (2) 実習校について(1)
- (3) 実習校について(2)
- (4) 介護等体験オリエンテーション
- (5) 教育実習の実際(1)
- (6) 教育実習の実際(2)

- (7) 教育実習の実際(3)
- (8) 教育実習の実際(4)
- (9) 教育実習の実際(5)
- (10) 教育実習報告(1)
- (11) 教育実習報告(2)
- (12) 介護等体験の実際(1)
- (13) 介護等体験の実際(2)
- (14) 介護等体験報告(1)
- (15) 介護等体験報告(2)

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

資料配布。

成績評価

出席90%で評価。授業への参加姿勢10%。遅刻(−0.5)、欠席(−1)については、それぞれ減点ポイントがあり、−2.0ポイントに達した場合には教育実習を認めない。
S 授業内容を十分に理解しているもので、介護等体験に積極的に参加したもの
A 授業内容を十分に理解しているもの
B 授業内容をほぼ理解しているもの
C 授業内容をある程度理解しているもの
D 授業内容の理解が欠けているもの

科目名 教育実習Ⅱ

対象 教職2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司・永井 由比

期間 通年

1と合わせて
5

/

○

履修条件

将来、音楽教員をめざす強い希望と意志をもつ者。
「教育実習Ⅰ」必修。

- (6) 教育実習の実際 (5)
- (7) 教育実習の実際 (6)
- (8) 教育実習の実際 (7)
- (9) 教育実習の実際 (8)
- (10) 教育実習の実際 (9)
- (11) 教育実習の実際 (10)
- (12) 教育実習報告 (1)
- (13) 教育実習報告 (2)
- (14) 教育実習報告 (3)
- (15) 諸手続きについて (2)

授業の概要

〈教育実習〉とは、文字どおり、指導教員の指導のもと中学校で行う実習(3週間から4週間)そのものをいい、この授業は実習直前の具体的な準備と、さらに実習後、卒業までの具体的な課題を意識し、将来に備えるための事前および事後指導が中心となる。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

授業の到達目標

- (1) 教育実習の意義を理解する。
- (2) 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備する。
- (3) 教育実習後の課題を認識し、必要な知識および技術を身につける。

教科書・参考書等

資料配布。

授業計画

- (1) 諸手続きについて (1)
- (2) 教育実習の実際 (1)
- (3) 教育実習の実際 (2)
- (4) 教育実習の実際 (3)
- (5) 教育実習の実際 (4)

成績評価

出席90%で評価。授業への参加姿勢10%。遅刻(-0.5)、欠席(-1)については、それぞれ減点ポイントがあり、-2.0ポイントに達した場合には教育実習を認めない。

- S 実習校の評定がAのもので、且つ授業内容を十分に理解しているもの
- A 授業内容を十分に理解しているもの
- B 授業内容をほぼ理解しているもの
- C 授業内容をある程度理解しているもの
- D 授業内容の理解が欠けているもの

科目名 教職実践演習(中学校)

対象 教職2年

単位数

他専攻

キャップ制
対象外

担当教員 松井 康司・永井 由比

期間 後期

2

/

○

履修条件

なし。

授業の概要

2年間で学んだ学問としての教育に関する知識と、教育実習や介護等体験において学んだ実践力の更なる統合を目指し、これまでの学習成果をもとに、教員としての資質の構築をより深く具体化するための授業である。

授業の形態としては、講義や事例研究、ロールプレイング、現職教員をゲストスピーカーとしたフィールドワーク等を行うものとする。

授業計画

- 1 ガイダンス(本演習の目的と概要の説明、授業担当者紹介)
- 2 教育実習における実体験をもとに、事例研究・集団討議
- 3 講義「教職の意義・教師の職務や役割について」
- 4 他教職員・生徒・保護者・社会と教師との繋がりについて事例研究・ロールプレイング
- 5 教育現場で起こりうる様々な問題(家庭内の問題、学級内いじめ、不登校等)への対応について事例研究・ロールプレイング
- 6 連携先の学校の授業見学、模擬授業、現職教員との意見交換等
- 7 クラブ活動の指導体験
- 8 特別支援学級の運営や課題について事例研究・集団討議
- 9 研究発表「これからの学校教育に求められるもの」、集団討議
- 10 本演習のまとめ

授業の到達目標

教員として求められる基本的な資質として以下の4つのテーマを定め、到達目標とする。

- 1 教育に対する使命感や責任感及び児童・生徒への教育的愛情を持っている
- 2 社会性及び人とのコミュニケーション能力が身についている
- 3 児童・生徒との間に信頼関係を築き、規律ある学級経営を行うことができる
- 4 教科内容を理解し、児童・生徒の反応や学習状況に応じた指導ができる

授業時間外の学習

授業で取り上げる課題・事例について理解を深めておくこと。

教科書・参考書等

テキスト：各回で必要なプリント等を配布する。
参考書：必要に応じて紹介する。

成績評価

- S 授業に積極的に参加し、レポートの評価が90点以上のもの
- A 授業に積極的に参加し、レポートの評価が80点以上のもの
- B 授業に積極的に参加し、レポートの評価が60点以上のもの
- C 授業に積極的に参加し、レポートの評価が50点以上のもの
- D 授業への参加が消極的で、レポートも未提出のもの

課・係名		開設時間	取扱業務（主なもの）
女子部門事務局	総合受付	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40	1. 学園全体の受付・案内等のインフォメーション 2. 学園案内・募集要項・桐朋教育等の頒布
	経理窓口	8:15～15:00 (11:30～13:00を除く) 土曜日は、 8:15～12:00	1. 授業料等に関すること 2. 学生会・自治会の出納・経理に関すること
	管財課	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40	1. 学内備品の使用に関すること 2. 火気使用等の保安に関すること
*事務局で行う以外の事務は、短大教学課及び各専攻研究室で行う。			
短大教学課	窓口	8:15～16:20 土曜日は、 8:15～12:30	1. 学生証、学割等の発行に関すること 2. 証明書等の交付に関すること 3. 一般教室等の使用に関すること
	教務		1. 授業（試験を含む）・履修・成績・卒業等に関すること 2. 学籍に関すること 3. 教育職員免許状に関すること
	学生		1. 入学式・卒業式・桐朋祭等諸行事に関すること 2. 学生生活、学生生活、奨学金に関すること 3. 保安に関すること
進路相談室	水曜日 13:00～16:00 (原則予約制)	1. 就職や進学に関する支援	
本学には、音楽専攻・演劇専攻それぞれに研究室がある。			
研究室	各専攻共通の業務		1. 学生と教員間の諸連絡 2. 授業の準備、教材・教具の保管管理 3. 学生ロッカーの管理
	音楽専攻	8:30～16:30 土曜日は、 8:30～12:30	1. レッスン室使用に関すること 2. 演奏会等に関すること
	演劇専攻		1. 小劇場・実習室の使用に関すること
短大図書館	9:00～18:00 土曜日は、 9:00～14:00	P.33参照	
保健室	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40 ただし、 不在の場合もある。	1. 定期健康診断 2. 健康相談 3. 救急処置 4. 学生教育研究災害傷害保険、学研災付帯賠償責任保険の手続に関すること 5. スクールカウンセラーの面談の申込み	
桐朋教育研究所	9:15～16:45	P.33参照	

〈4月〉

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

〈5月〉

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

〈6月〉

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

〈7月〉

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

〈8月〉

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

〈9月〉

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

〈10月〉

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

〈11月〉

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

〈12月〉

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

〈1月〉

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

〈2月〉

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

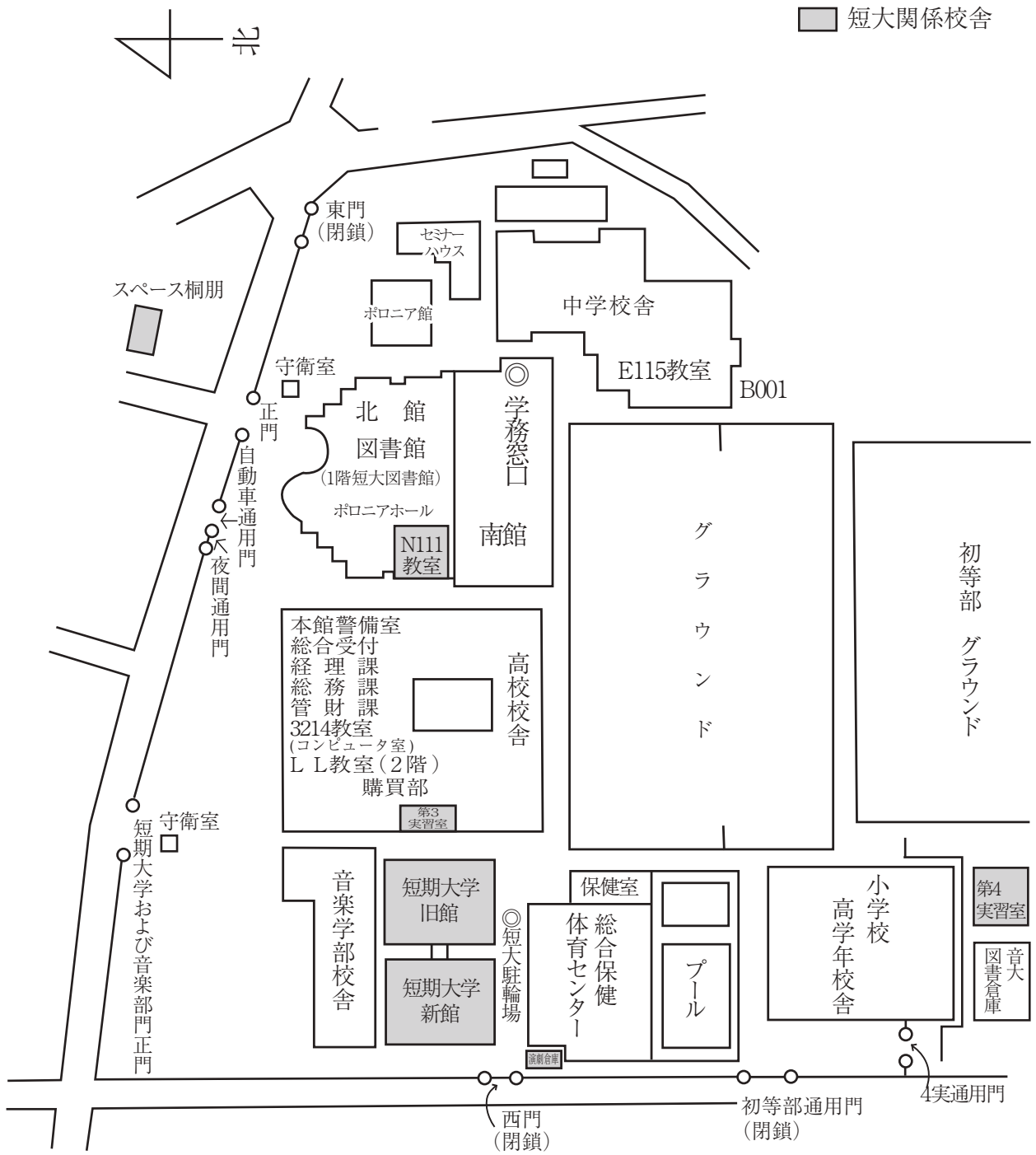
〈3月〉

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

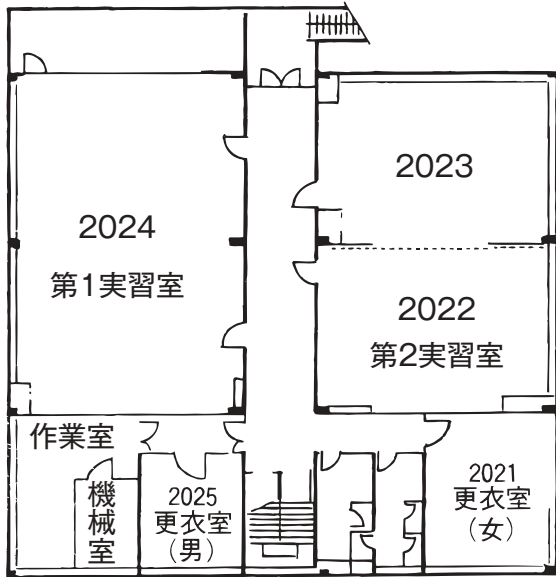
通常開館 9:00~18:00 土 14:00

休館

短縮開館 (開館時間の詳細は図書館で確認してください)



地下2階



(新館)

教室番号の読み方

4桁……建物番号を示す

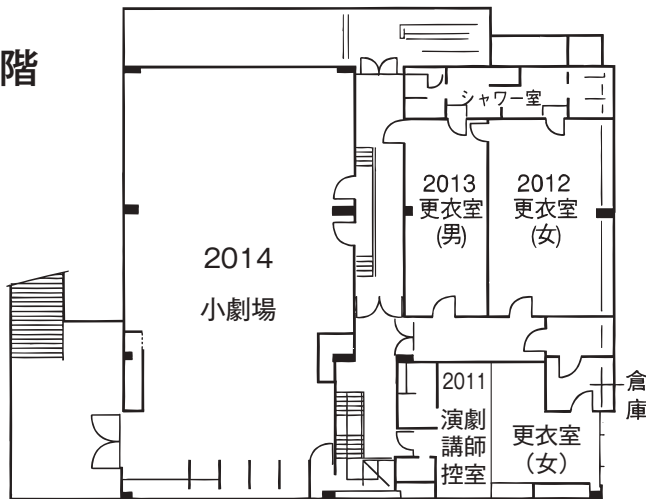
3桁……階数を示す (0は地下を示す)

1桁・2桁……教室番号を示す

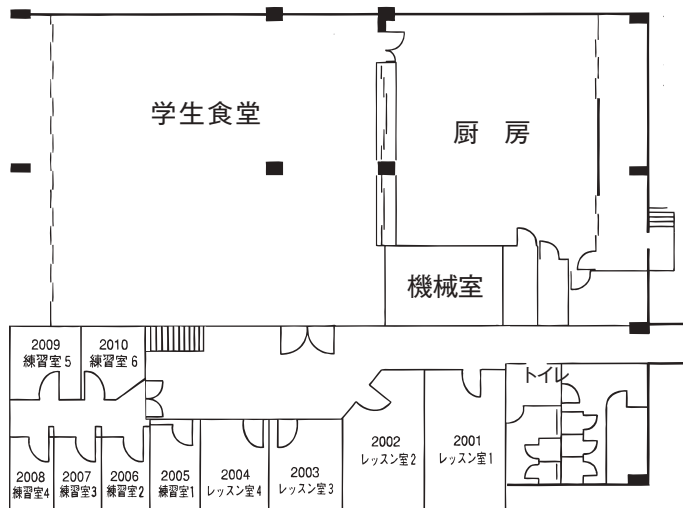
(例) 2014

2号館, 地下, 14番教室 (小劇場)

地下1階

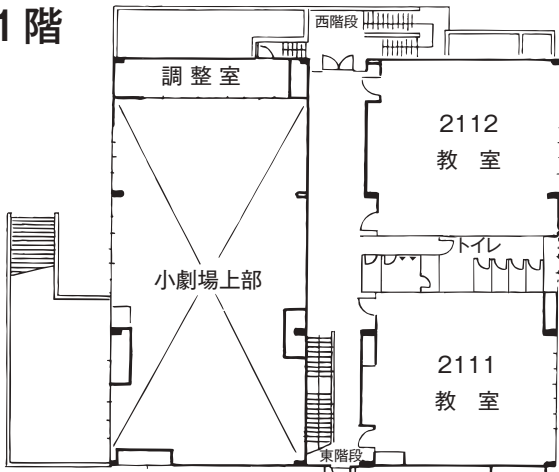


(新館)

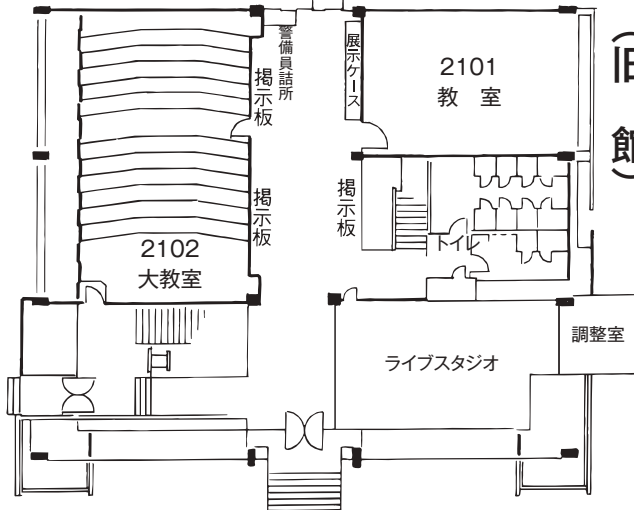


(旧館)

1階

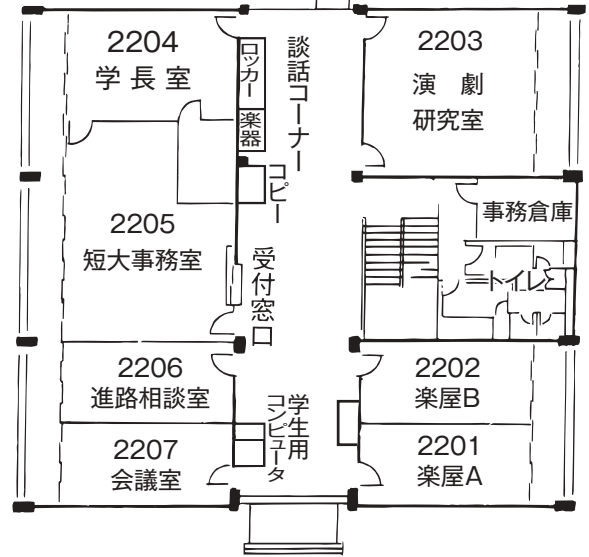
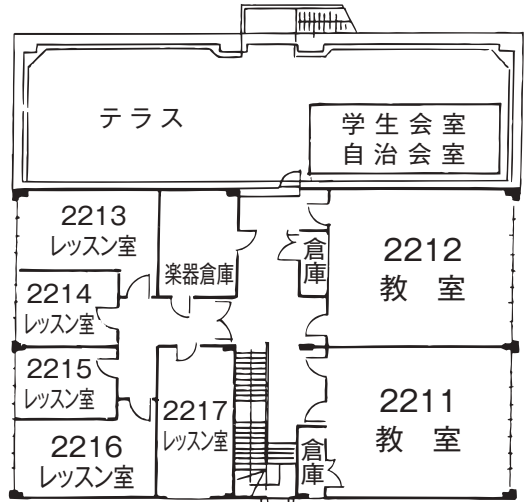


(新館)

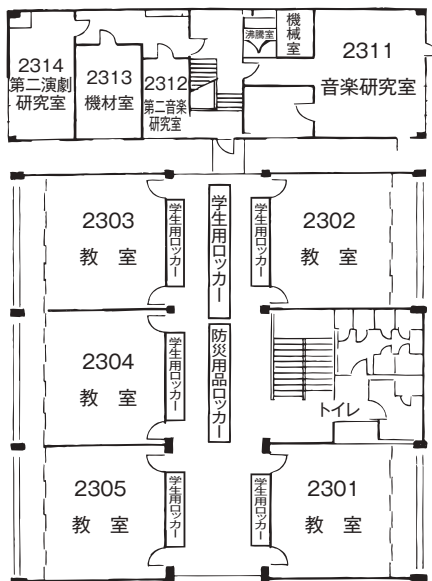


(旧館)

2階



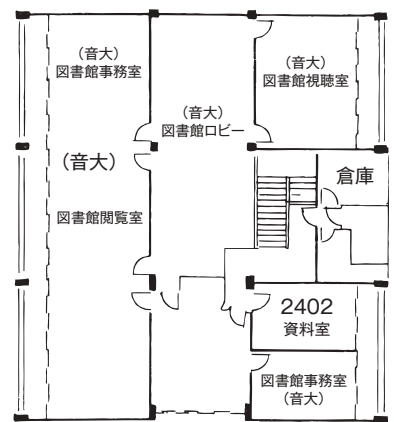
3階



(新館)

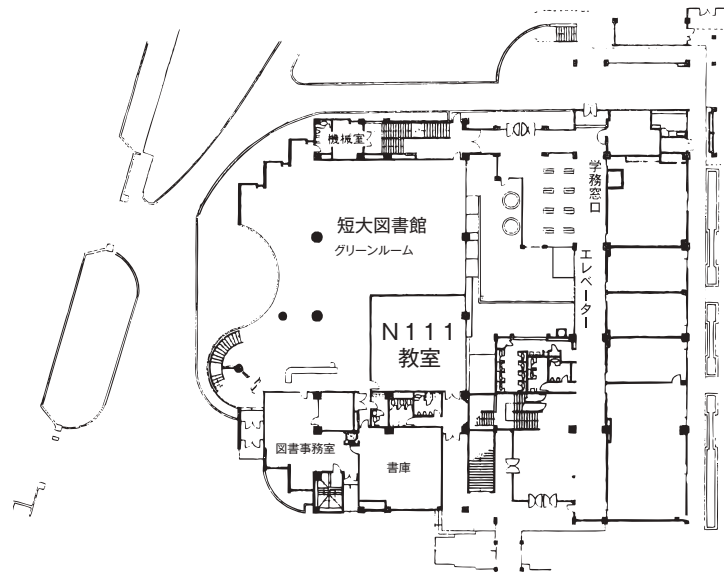
(旧館)

4階

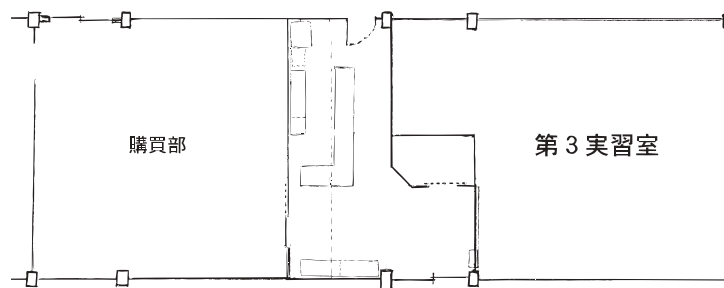


(旧館)

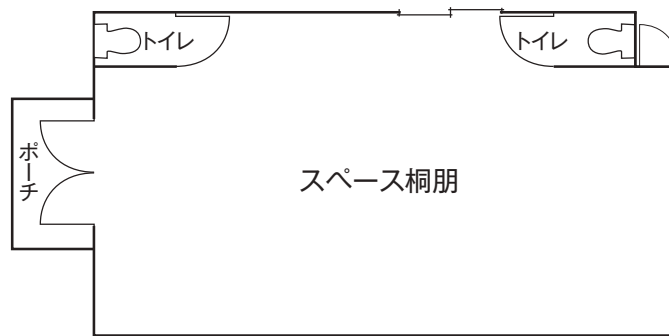
北館 1階



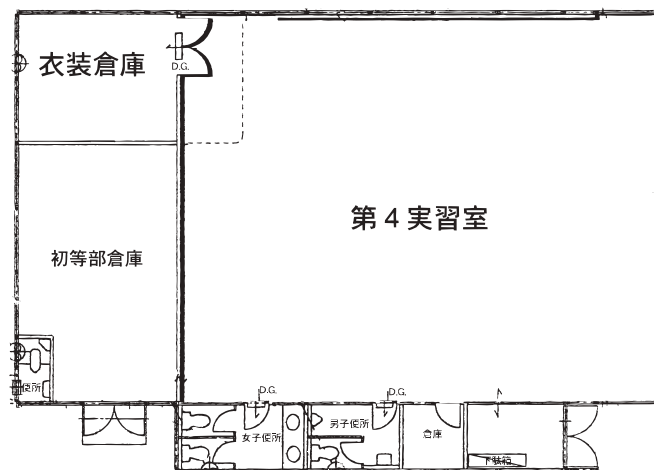
本館 1階



別棟



別棟



1 非常事態発見の時

キャンパス内で、火災、急病者等の非常事態に遭遇したり、発見した学生は、速やかに近くにいる教職員に通報し指示を受けること。また、教職員のいない夜間や休業中の時は、短大夜間警備員または本館警備員に連絡し、指示を受けること。

- (1) 急病者、けが人、不審者等を発見した時
 - 直ぐに教職員、警備員に通報し指示を受けること。
 - 急病者の搬送等の要請にはできるだけ協力すること。
- (2) 火災を発見した時
 - 直ぐに教職員、警備員に通報し、初期消火にできるだけ協力をすること。
 - 避難は、教職員等の指示に従って行動すること。なお、巡回、救出作業等、危険の及ばない限り協力すること。
- (3) 地震発生時
 - 地震が起きた時、すぐに外に飛び出すことは危険である。机の下などに身を伏せ、しばらく様子を見ること。
 - ドアや窓を開放し、非常脱出口を確保すること。
 - 火の始末をすること。もし、火が出たら、教職員、警備員に通報し、初期消火にできるだけ協力すること。
 - 緊急放送や教職員等の指示に従い、建物から離れた避難場所（グラウンド等）に集合すること。
 - 巡回、救出作業等、危険の及ばない限り協力すること。
 - 帰宅は学園の指示に従うこと。

台風・大雪等の悪天候による交通機関の乱れ、また大地震における対応

1 原則として前日の17時00分までに、翌日の対応等について安否確認システム、ホームページより連絡する。

2 大地震時における対応・連絡については状況に応じて判断し、安否確認システム、ホームページより対応を連絡する。

3 安否確認システムには、右記QRコードまたは本学ホームページからもアクセス可能。ログイン・登録方法等の詳細については、ガイダンス配付資料を参照すること。



Tempo di Marcia

石 森 延 男 作 詞
入 野 義 朗 作 曲



1. こ ころ の し る し こ む ら さ き ゆ た か に
2. と う と き い の ち ま も り つ つ し ん り の
3. つ ゆ く さ し げ る む さ し の の ひ か り に



に お う き り の は な き ぼ う は は る か お お ら か
せ か い あ こ が る る わ れ ら は わ か し す が す が
ま な こ あ ら わ れ て は る か に あ お ぐ ふ じ さ ん



に は ば た く つ ば さ た く ま し く
し う た わ ん い ざ や よ ろ こ び を く も よ
は し た し く よ べ り こ の あ さ も



な が れ よ わ が と も よ も の み な こ こ に ひ び き あ



い と う ほう が く えん さ ち あ ふ る

学 園 歌

第二章

心の象徴しるしこむらさき、
ゆたかに匂ふ桐の花、
希望ははるかおほらかに、
はばたく翼たくましく。

(くり返し)

雲よ、流れよ、わが友よ、
ものみなここに響きあひ、
桐朋学園幸あふる。

第二章

尊いのちき生命守りつつ、
真理の世界あこがるる、
われらは若しすがすがし、
歌わんいざや飲びを。

第三章

露草茂るむさしの、
光に眼洗まなこはれて、
はるかに仰ぐ富士山は
親しく呼べり、この朝も。

2018年（平成30年）4月1日 印刷
2018年（平成30年）4月1日 発行

発行者

桐朋学園芸術短期大学

東京都調布市若葉町1-41-1
tel. (3300) 2111 (代表)
fax. (3300) 4253
<http://www.toho.ac.jp>

